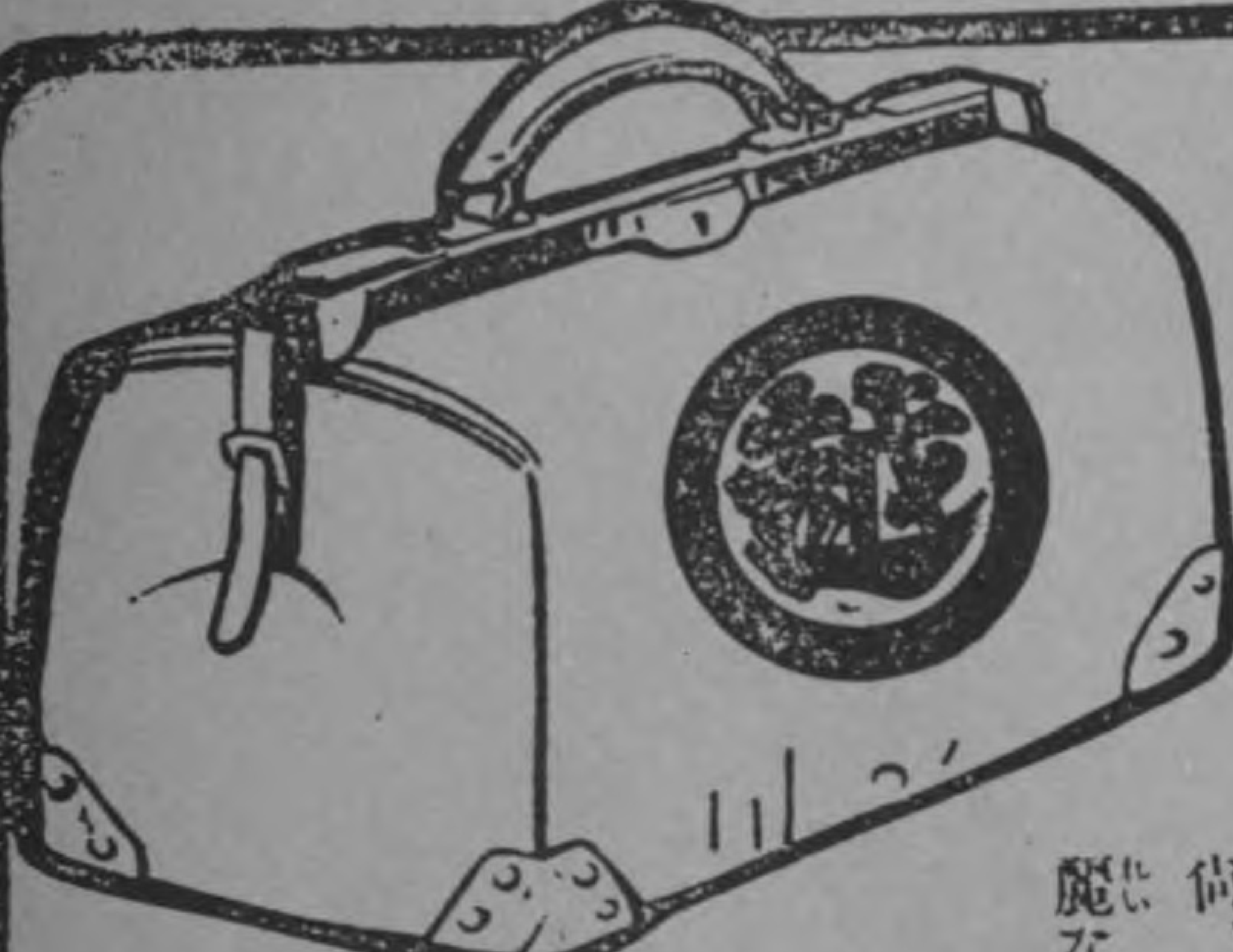


女鐸

第十七年第七號



旅行用品一式

鞄、化粧函、洋傘、ステッキ、空氣枕、毛布、羽根布團、携帯食器を始め、旅行に必要なる品々、種々取揃置申候間、御注文被下度願上候

尚、夏季流行品を圖解せる美麗なる「夏衣裳の巻」と題する、御注文案内書印刷出來候間、御一報次第御送呈可申上候

東京日本橋駿河町
（振替貯金口座番號三〇〇〇番）

三越呉服店



女鑑第十七年第七號目次


THE BEST POCKET MEDICINE
SEIKAIGAN
（犬の聲！）
何と云ふ藥が
欲しいのですか
（令孃の答）
私は高橋盛大堂の
清快丸が欲しいのです
あの藥は勉强して肩が凝たり氣が鬱いだりした
時に能く奏効ますからね
清快丸
價金十錢、廿錢、五十錢、一圓
捻布膏二十錢 藥罐廿五錢

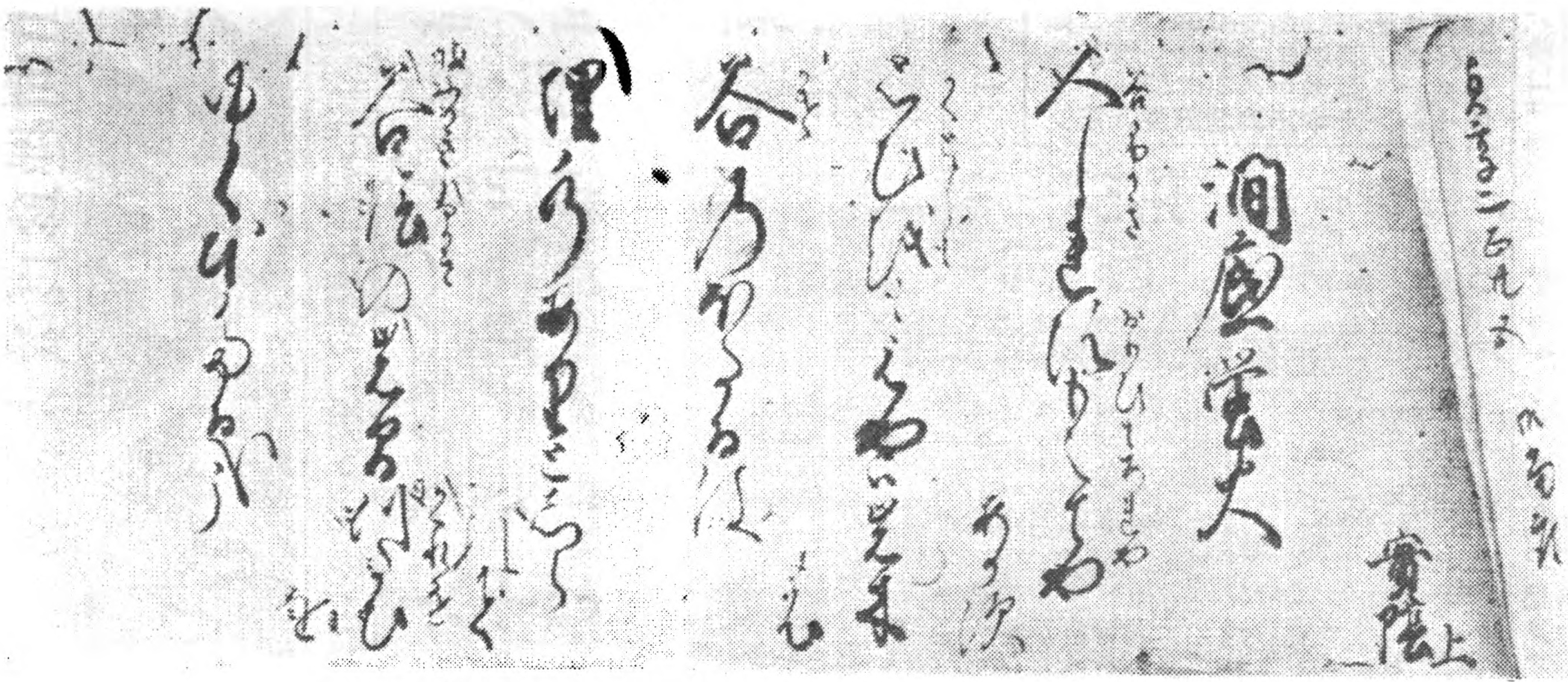
才媛百作選

其の八



鍋島侯爵令嬢 俊子君

名家の詠草



後西院天皇御朱點　武者小路實陰卿詠歌

有栖川宮實枝子女王殿下



何れも是れ婦人世界の好讀物

東京高等師範學校訓導 萬福直清著

修身教材叢書 婦女訓話

▲本書は國定修身教科書女兒用中に見えたる古今内外の賢婦烈女の事蹟を確實なる古文書記錄により婉麗の話語體を以て記述せり書中訓辭あり事實の叙述あり趣味津々盡くる所を知らず

●第壹編收むる所の人物は●瓜生岩女●野中婉子●税所篤子●湯地都尾子●の四人なり

▲高等小學校上級の女兒高等女學校女子師範學校其の他女學校生徒一般家庭の好讀物最良庭訓書なり……高等小學校修身科教師參考用としてまた教育的なる好著述なり

和裝美本全四冊 第壹編發賣 毎編讀切完結

定價金六拾錢 送料金八錢

●新刊 山崎兼子著

萬有可解人事可悟

洋裝全一冊定價金參拾錢郵税金四錢

あらゆる哲學あらゆる宗教を罵倒し盡して、著者獨特の意見を宣傳せんとす。殊に、道德の根底を、自尊心にありとせしが如きは、以て本書の如何に偉なるかを知るに足らん。この大膽なる宇宙人生觀や、これ妙齡一佳人の產なりとは、亦奇ならずや。

文學士 内海月杖作

われから

上製全一冊定價金五拾五錢郵税金六錢

近き世の西歐文學に名高き作家短篇九つ、これに加ふるに作者の創作七篇を以てす。すべてみなくるしき戀と、つらき人生とを歌へるもの。清新の想、優麗の調、こゝにこの作者のうるはしき散美文と現ぜり、今のこのうき世のさかに悶へてあのかの文藝の樂園にあくがるゝ、世の青年士女はここにこの小集の上にまこと大いなる慰籍と光明とを採り得らるべきなり。

服部躬治著

新様 女子書翰文

洋裝全一冊定價金四拾五錢郵税金六錢

新なる趣味、新なる様式、こゝにこの文の典範は立てり、通巻百六十篇、特に添へたるは書翰日記、品藻は麗はしく、辭章豊に、情致あまねく達れるを見よ。雅事俗事併せあつめて、題材皆珍しく、文語口語並び用ゐて、文體何れも風姿あり、切に、世の淑女諸君の繙談を須つ。

發兌 東京市日本橋區本石町三丁目 大阪市東區備後町四丁目 寶文館


東京砲兵工廠技手
日野清三郎君案出
新案登録
露國陸軍の刻印あり
戦利廃棄弾丸
藥莢で出来た
真に趣味ある
戰利好紀念物
ナイフ
ペン軸
東京下谷池之端仲町
電話下谷長九六五
一三四四
宮内省
御用
玉寶堂
取次御望の方には御相談に應ず

第二十三回年度報告

●貸借對照表

借方　負債ニ屬スル分

一株金	二、〇〇〇、〇〇〇・〇〇〇
一諸積立金	二四三、一九二・二〇〇
一預リ金及保管金	三二、〇六三・九三六
一支拂手形及未拂金	七三一、六〇九・三二〇
一非常特別税金	一〇六、〇七三・一五〇
一前季繰越金	二五、五一七・七八二
一當半季利益金	二〇三、四四一・一二四
合計	三、三四一、八九七・五一二

貸方　資産ニ屬スル分

一新株未拂込金	七五〇、〇〇〇・〇〇〇
一不動産機械及什器	一、一三三、三七八・一五三
一需用品及備品在高	四四、四〇四・九二四
一原料仕掛物及屑物在高	五六三、五七五・四四四
一製品及製品送荷在高	二六、八三一・七五〇
一約定濟製品在高	一一、三八六・一八〇
一得意先未收入金及假拂金	一三二、四七五・四〇五
一職工貸金	二三、五六五・〇三〇
一增設工場假拂金	八五、二二一・六九〇
一銀行當座預ヶ金現金	四七一、〇五八・九三六
合計	三、三四一、八九七・五一二

●利益金處分

一金二十萬三千四百四十一圓十二錢四厘　當半季利益金
一金二萬五千五百十七圓七十八錢二厘　前季繰越利益金
計金二十二萬八千九百五十八圓九十錢六厘
金五萬圓　建物及器械代償却金
金一萬二千圓　法定準備金
金一萬二千圓　役員賞與金
金六萬圓（舊株一株ニ付金三圓即年一割二分）　株主配當金
金二千五百圓（新株一株ニ付金十二錢五厘即年一割二分）　同上
金六萬圓（舊株一株ニ付金三圓即年一割二分）　株主特別配當金
金二千五百圓（新株一株ニ付金十二錢五厘即年一割二分）　同上
金二萬九千九百五十八圓九十錢六厘　次季へ繰越金

右之通リ候也
明治四十年六月

東京モスリン紡織株式會社

取締役會長　杉村甚兵衛
專務取締役　端善次郎
取締役　山崎作次郎

右檢査候處相違無之候也

監査役　坂本金之助
監査役　人見新助
監査役　金子良吉

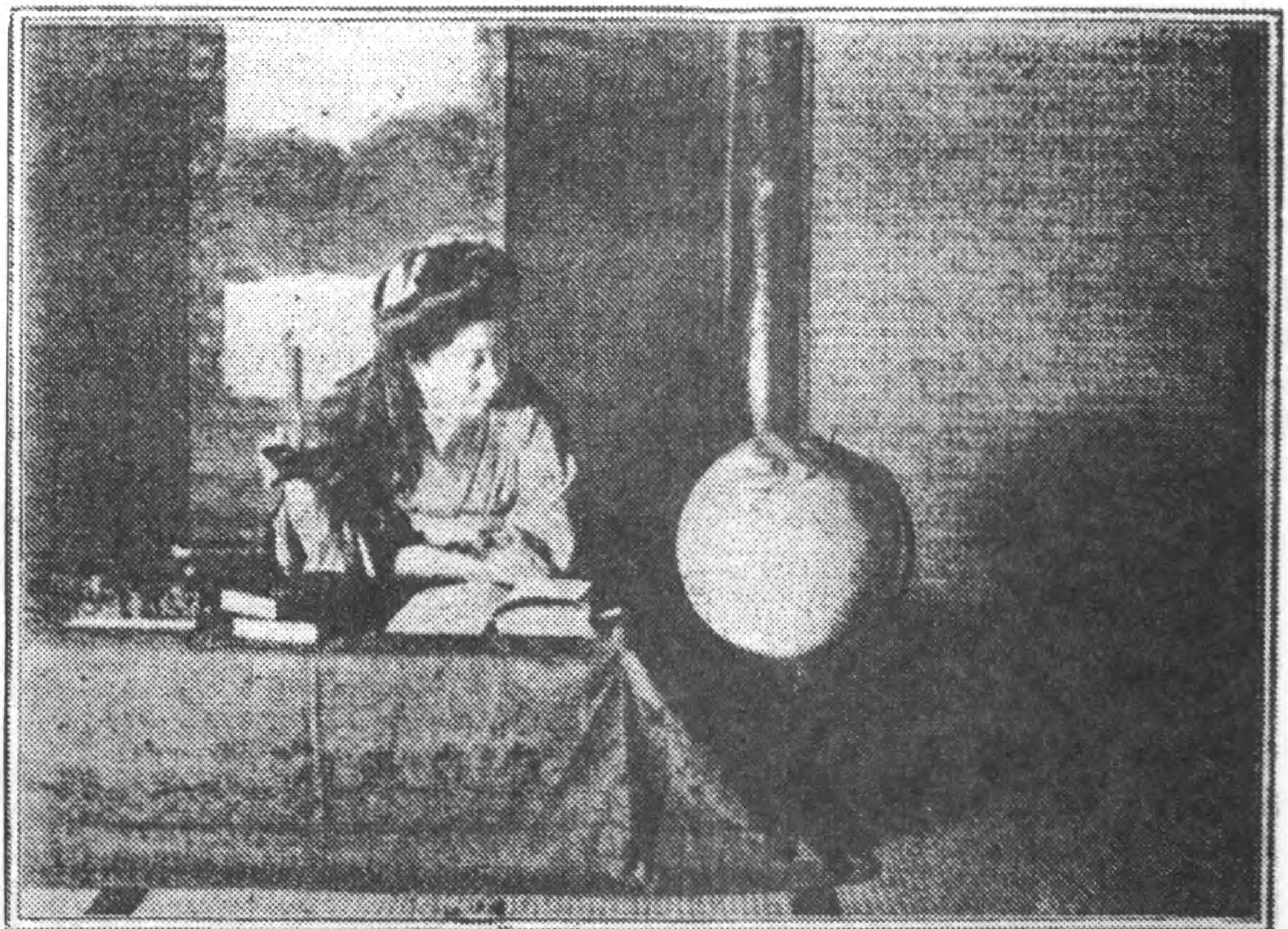
無名會の家庭



後列右ヨリ二 石井控訴院判事

同 六 西川同判事

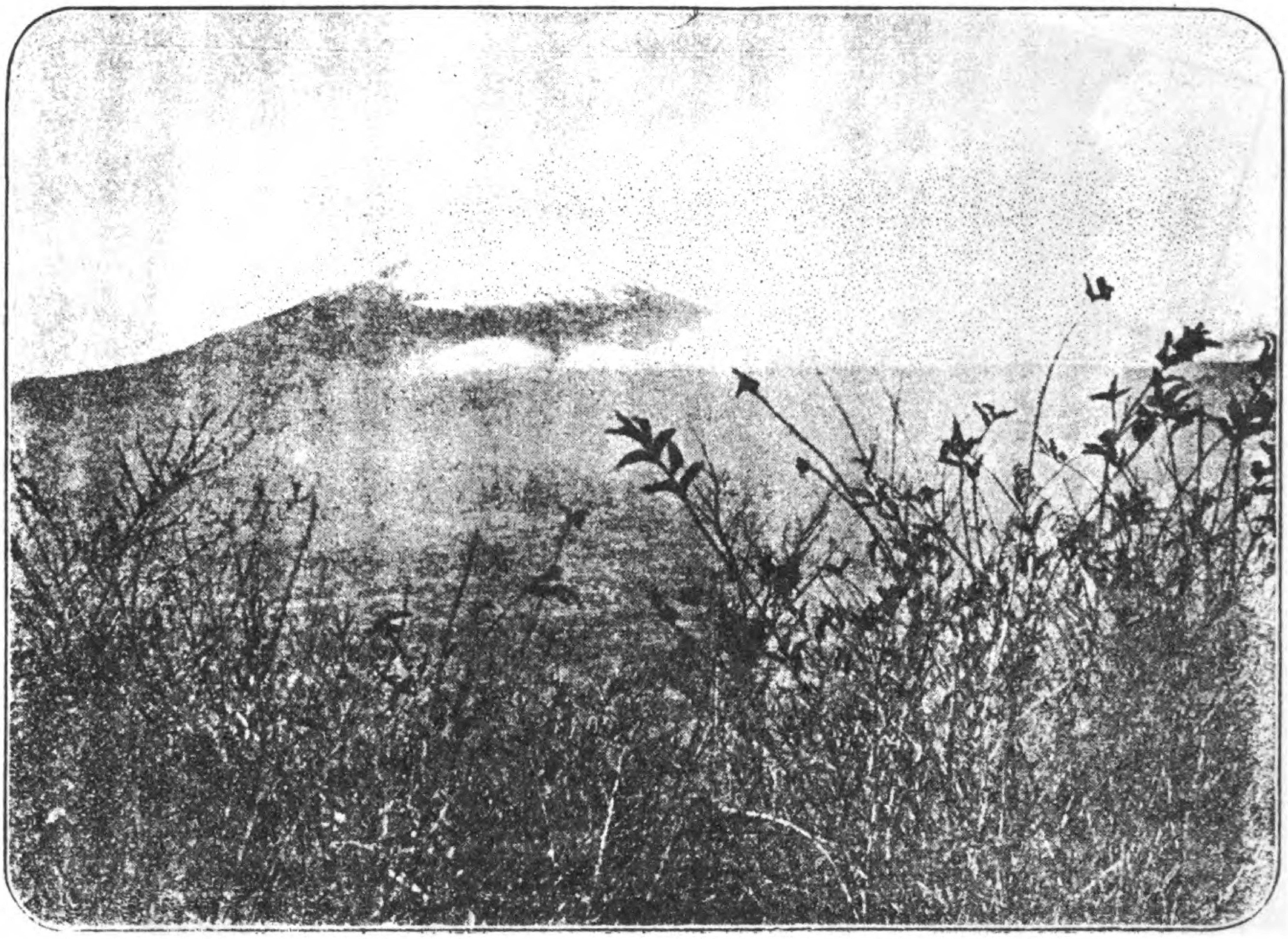
學びの窓



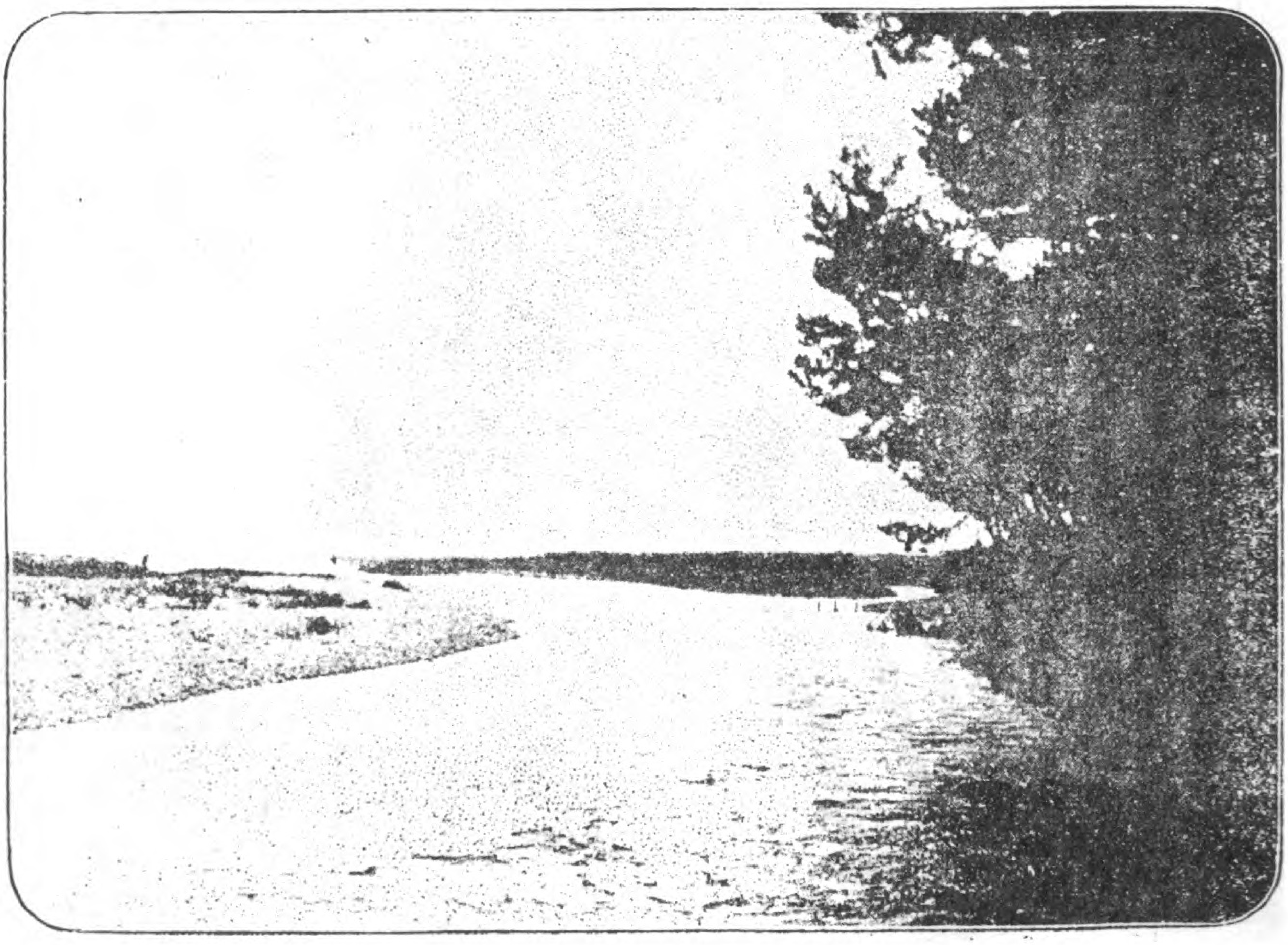


照井龍太郎君撮影

山と水



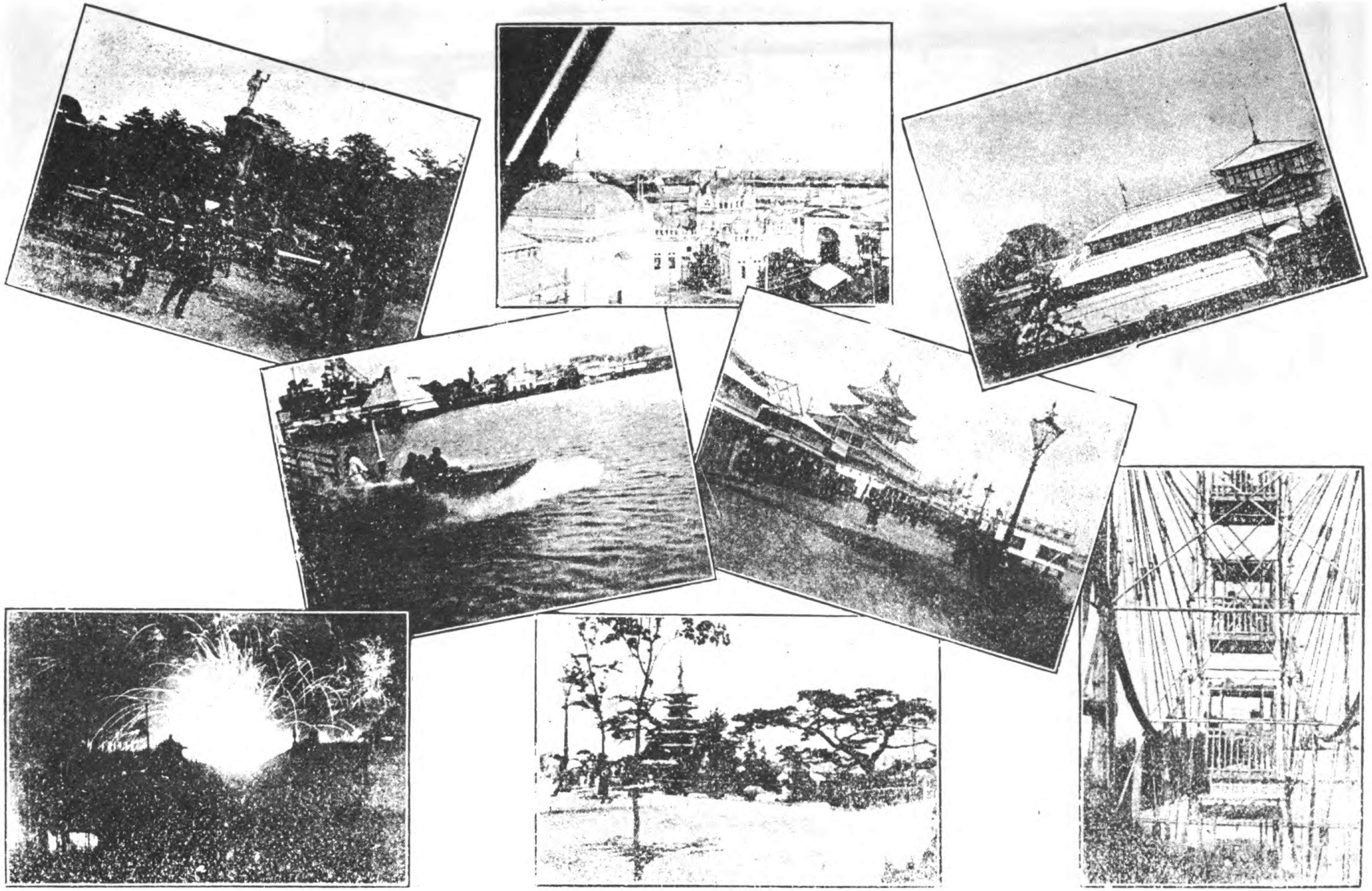
乙女峠より觀たる富士



國府津

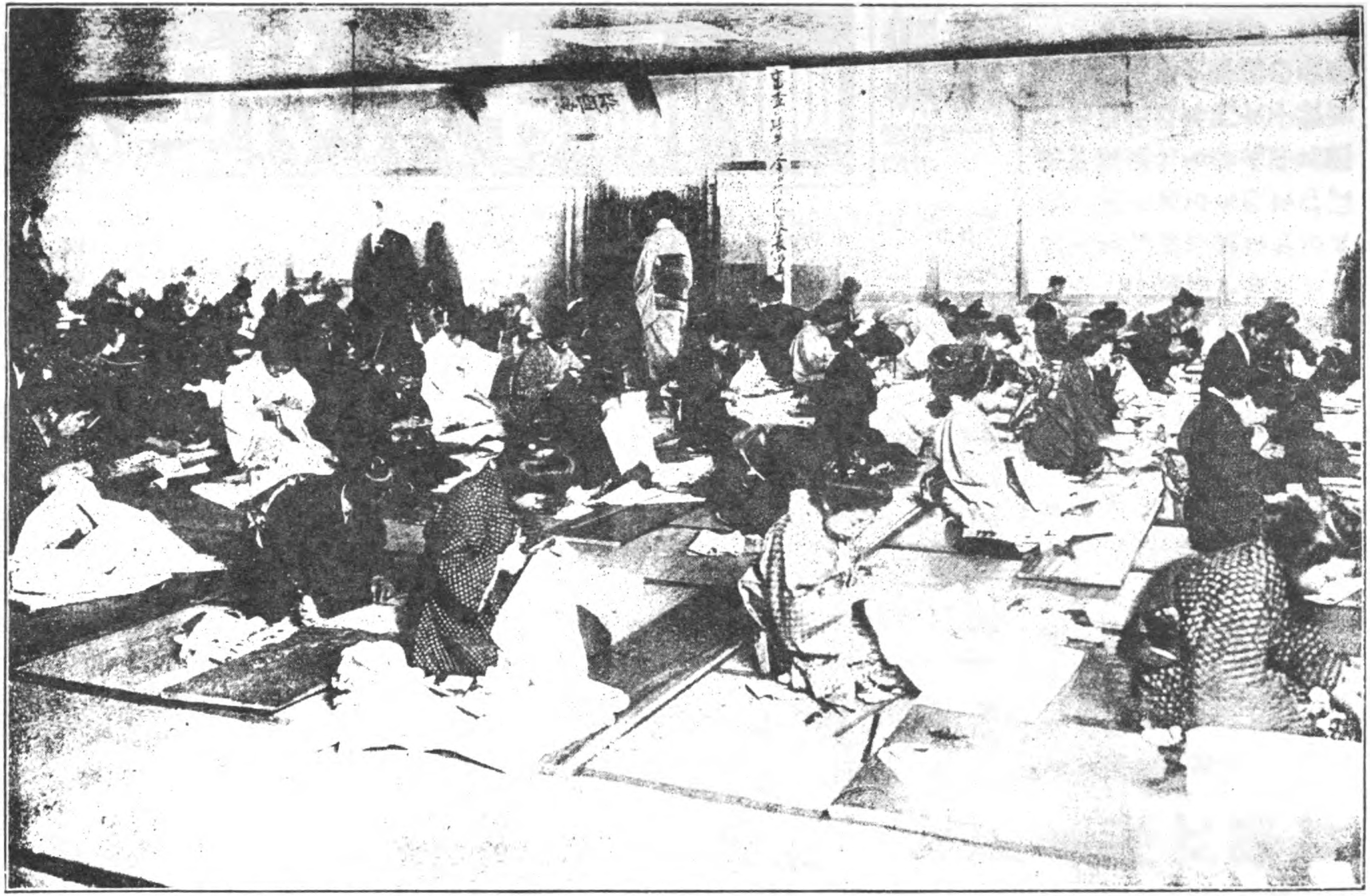
中井芳之助君撮影

東京博覽會の近狀



松平弄月君撮影

裁縫競技



六月十六日萬朝報の催しにかゝるもの

大日本淑女學會

會員募集　規則書進呈す

第四回新學期開始

本會の講義錄

- ▲大阪三百頁優麗なる冊子
- ▲講義平易にして興味多し
- ▲各科講義の程度一定せり
- ▲各科皆聯絡し組織的なり
- ▲講師は專門女子教育家也
- ▲科外講師は博士學士卅家
- ▲每號科外講話を附錄とす
- ▲純潔高雅の家庭小說あり
- ▲會員の質問は直に解答す
- ▲學期每に修業證書を與ふ
- ▲講義錄は貳ヶ年完結とす

● 博覽會開會中　入會金**全免**す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會におはいりなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の教授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り進呈す

● 東京神田南甲賀町（電話本局三千四番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子教育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也



女鑑

第十七年第七號

紫陽花

をやみなく降る梅雨の　ふるやの軒におく露も
重げに見ゆる紫陽花の　今をさかりの色ふかく、
花のむらさき葉の碧綠　目覺るばかり麗はしく
げに類なきはなぞとも　思ふばかりの咲振りや。
さあれ七たび變るてふ　色も是より褪するのみ
花のいのちの匂ひさへ　無れはきかん術をなみ、
葉末に宿るかたつむり　花のすがたに見も遣す
折るに任せる枝さへも　見返る人はなかりけり。

((中川愛計作))



女子と趣味

伯爵　徳川達孝

人として趣味を感ずることの乏しいものほど不幸なるものはあるまい、それと同時に趣味の汚卑俗惡ほど憂ふべきものはあるまい、こゝに趣味といふのは、文學技藝その他諸般の事物によつて感得する、即ち善き意味の趣味である、趣味は人の品性を高下し、又精神上の修養の一助ともなるもので、いかなる趣味を有するかを見て、ほゞ其の人格を判斷することも出來る、全然事物の趣味を解しない人は絶無であらうが、それに善惡がある、惡なる趣味をのみ喜ぶ人若くはたとへ善き趣味を有するも其應用を知らざる人の如きは、無趣味の人と見て差支ない、

日本では男女ともに、比較的趣味の少い人が多い、下層社會ではその日の生活に追はれて、趣味どころの話ではなく、されば花下を漕行く渡し守の如きは、一身を一竿に托して、美景恰も繪畫中に朝夕を送迎して居るが、傍人の見る如き風流なものではない、やうに思はれるが、樂亦其中に在りと云ふ一種の趣味があるかも知れない然るに中流以上の人にも趣味の少い人が多く、殊に女子は從來の慣習として、家庭に引込んで社會へ出ないから、自ら見聞が狹く、たゞ齷齪して居るか、また悠々として居るか、よく趣味を感じ、家庭を趣味深きものとして居るのは少い、故に女子の談柄は多くは衣服の好尚、頭髮の批評、或は

演劇の評判等で、趣味といふほどのものではない、
主婦に趣味の乏しい家庭は、極めて乾燥無味にして、更に和氣が乏しい、而して其趣味を讀書に取るもよい、雜誌などを讀むことは、識見を廣くする上に於ても必要である、されどその撰擇を誤つて、惡風俗を助長する如きものを讀まば、却つて恐るべき弊害を生ずることであるから、卑猥なる小說等を禁ずるは勿論、家族團欒の處にて聲を高くして讀まるゝほどのものでなければならぬ、又趣味を音樂より取るもよい、されど淨曲共に高雅なるもので、塵念を洗ふに足るものでなければならぬ、その他繪畫なり、園藝なりより趣味を取るもよい、斯くて趣味ある主婦が家庭に立てば、一方では勤勉を奬勵し、一方では勞苦を慰藉することが出來る、交際の上に於ても、識見あり趣味あれば、話題も新陳代謝して、頗る興味を起さしめることが出來る、又旅行をする場合にも、山水明媚の地に至れば、歌を讀み文を綴るといふ雅興もあり、その他植物を蒐集するとか、風俗上の視察をするとか、たゞ漠然と山河を送迎したと云ふやうなことはない、されば女子に對して趣味の養成は、敎育上最も必要なるものである、即ち趣味によつて直接若くは間接に世敎道德を助けるものでなければならぬ、故に華美や卑俗に流るゝやうな事をしてはならぬ、要するに高尙なる娛樂は趣味によつて得らるゝので、數日一家の事なり、慈善其他公共の事なりに盡した勞苦を慰むるには、高尙なる娛樂を以てせねばならぬ、數日といはず、その日〳〵に於ても、その時〳〵に於ても、家庭に在る間は、家庭を最も興味深く感せしむるやうにせねばならぬ、家庭に興味なき爲に、主人の足は多く家庭に止らず、子女も家庭をいふせく思うて、樂を家庭の外に貪るに至り、遂に家庭は悲風慘風の吹くに任するといふ例も、往々耳にしまた新聞などで見る事である、
趣味の養成に於ては、男女各適當なるものがあらう、されど華美に流れず卑穢に陥らずして、家庭の高

尚なる快樂を助け、延いて風紀を維持する助けともなるものであれば、種類の如何は問ふ所でない、たゞ玆には家庭調和の爲、社會風紀の爲に、女子に趣味の養成を促すもので、いかなる女子に如何なる趣味を求むべきかは、他日また述ぶる機會があらうと思ふ。

女子と手藝

工學博士　手島精一

見らるゝ如く世界は廣い、國の數は幾百となくあつて、その文明國なると野蠻國なるとを問はず、縱令國といふほどでない、所謂部落をなして居る所でも、餅屋は餅屋、酒屋は酒屋と云ふ風に、自ら其國其部落を維持して行くには、根底すなはち倒れないやうにする土臺が定まつて居つて、例へば英吉利のやうな國では、その本國の土地は狹いから、多くの人々が樂に生計を立てゝ行くことが出來ないから、他の國々へ殖民をして、其處で稼がせるといふ手段を執つて居ると共に、國內では盛んに諸種の工業を起し、その成績品なる貨物を諸國に向つて交易をする。と箇樣に標準を立てゝ居る、即ち商業本位で、國を維持するには、商業を基礎とせねばならぬとして居る、

尙卑近な例を擧ぐれば、或田舍の家數のない、人通りの少い土地では、迚も東京などとは違うて、商賈一方で生計を立てゝ行くことは出來ないから、何うしても傍ら百姓をせねばならぬ、斯ういふのは、言はゞ百姓七分に商賈が三分といふ有樣であるから、農業本位とでも云はねばならないので、それと同じく、國々によつて、各自その趣が異つて居る。

我國では、太古より維新前までは、農は國の大本なりと云うて、百姓となるのを重しとして來たので

ある、所が一たび西洋各國と條約を結び、互ひに往來して貿易することゝなつてからは、最早以前のやうに、武士は喰はねど高楊枝の、算盤をはじくのは町人の爲すべきことであるのと、さう暢氣な事を言つて居られなくなつた、若しそんな事を云うて居れば、飢死をしなければならぬやうに立至るから、昔とは違つて何事にも振合が變つて來て、是迄のやうに百姓獨り骨折つて働き、武士は扶持を貰つて居ればよいと云ふ譯に行かず、如何なる人でも手足を動かして、働くと云ふことをしなければならぬ、今に殘つて居る諺の如く、士族の商法で失敗したものが多かつたのである、併し失敗は成功の基で、實力を其間に得ねばならぬ、而して世間を渡るといふことに就ては、段々むつかしくなつて、一方には世界の工業と云ふものが日一日と進み、その工業も蒸氣や電氣の力を應用して、是迄百人の人を要した仕事が、五人か十人で間に合ふやうになつた、實に重寶な世界になつたが、それが爲に職を失ふ、換言すれば生計の途に離るゝといふ悲劇も起る譯である、併しそれは問題外であるから且く措いて、何は兎もあれ、今日の狀態では、勞力と時間とを省けるだけ省いて、それで工合よく出來る事なら、何うしてもさうせねばならぬ、

それに就て日本の裁縫と云ふものにしても、一通り覺えるには非常に多くの時日を要する、何か早く覺える捷徑はないものであらうか、若しそれが出來るならば、どれ程日本の女子に取つて、家政を整理して行く上に於て、便利なばかりでなく、時間の經濟から云つても幸福である、がこれぞと云ふよい考案も浮ばない、畢竟これは機械の十分揃つて居ないのと、世間の人が之に對して時間の經濟、斯うこれに時間がかゝつてはならぬ、何うかそれを省きたいと云ふ思想が薄いからであらうと思ふ、それで私は歐米へ渡航する都度、彼地の著名なる工場の主人や、又はそれ等の事に關して熱心なる學者や技師などに就いて、其說を聞いたり、自分の思想も述べて、密針のやうな重寶な物の考がついたら、是非製作して貰ひたい

と頼んだやうな事であるか、未だによい考案も無いのか何らの報道もない、併し他人の手ばかりを待つて居るのも能でない、又自分の家の仕事を他人の厄介になるといふのも、あまり褒めた話でないのみならず、これ迄のやうに、それが爲に消却る時間のことを考へたならば、國家の損耗は實に莫大なものであるから、一日も早く其工夫をしたいものである、

殊に近年になつて、生活の度が俄かに高まり、裝飾の第一たる衣服のやうなものも、中等以下の生計を立つるものでも、一枚より二枚、二枚より三枚といふ風に、いさゝか奢侈に流るゝ傾があつて、甚だ厭ふべきことであるが、自然の成行は止むを得ず、隨つて衣服の裁縫に多くの時間を要することになつた、その證據には、市中の仕立屋がいづれも多忙を極めて居るのでも解る、されば女子職業學校などでも、裁縫の志願者が頗る多くなつた、そこで女子が裁縫ばかりを覺えて、もう外に用がないかと云へば、小供も育てゝ行かねばならぬ、煮焼も爲なければならぬ、又少し地位の高い人になると、世間の交際にも出なければならぬ、それ慈善事業ぢや、やれ慰問會ぢやと云ふ場所にも顔を出さねばならず、到底裁縫にばかり時間を費して居る譯には行かぬ、それにつけて前述の如く、日本服を仕立てるに適した、裁縫機械の發明を望むのである、

裁縫に限らず現時女子の職業に就いて、餘程世間の注意を惹起し、一にも職業、二にも職業と唱へらるゝやうになり、私も女子に適當なる職業を授くることに就ては、頗る喜ばしく思ふ所であるが、家庭にあつて良妻賢母たる者の極めて少數なる今日では、克く家を治め得る、精神的の婦女を養成することが必要で、即ち着實なる女子の本分を盡すことの出來得る婦女を養成することは、教育者の最も注意を要することで、手藝はそれからである、

されば如何に職業流行の今日であればとて、彼も此も一概に女子に職業を授けやうとするのはよくない、

人には能あり不能ありで、甲に適した職業でも、乙には不適當なことがあり、丙に出來ない事でも、丁に爲し得らるゝ業がある、と云ふ場合がいくらもあるから、須らく女子には、一家を治むるに適したる職業を授けねばならぬと云ふことを忘れてはならぬ、換言すれば、實用に値する職業を執らしむることが必要である、故に烹割を學ぶにつけても、來客に供する献立の事をいかほどよく知つて居ても、日常自分の家で、三度の膳につける惣菜の事に暗ければ、何の効もないことである、來客に出す物は仕出屋から取寄せて間に合はしてもよいが、三度々々の食事は、料理屋のやうなことをしてはよくないが、これは自分の家で出來るやうにせねばならぬ、所が滋養の有無にも關らず、價の廉不廉をも顧みないで、一片の肉を調理するにも、或は灸り過ぎたり、或は煮やうが足らなかつたりして、折角の滋養品をして、身體に不爲な物に仕てしまふなどゝいふやうなのが實際には少くない、それと云ふのも、畢竟あまり詰込み過ぎて、實用を忘れて形式に走るからの罪であらうと思ふ、故に世の教育者たるものは、宜しく此點に注意して、一家を整へ内を治め得る、所謂着實なる婦女を養成することに努められんことを望むと同時に、之を習ひ修むるものも、實用と云ふことを忘れないやうにして貰ひたい、（文責在記者）

今の女學生

文學士 下田次郎

近頃東京の外觀を著しくかへたのは、電車と女學生とである、而して電車の通らぬ所はあるが、女學生の通らぬ所はない、であるから見た所では、女子教育の萬歳を唱へざるを得ない、然るにこの大多數の女學生は、何ういふつもりで勉强して居るかゞ根本的問題である、

これは、私の誤解かも知らぬが、今の女學生は、多くはうかうかと、唯表面的學問をなし、何の爲にす

ると云ふやうな確な思慮なしに、人真似をして、リボンであるとか、其他粧飾、流行の言葉などに心を砕いて、肝腎の學問の目的を忘れて居るやうに思ふ、

昔の女子教育は、今日のやうに物識にはしないが、確な思想を與へて、確な人間を造つた、それで今日の新日本を造出した人間も出來た譯である、然るに今のやうな教育を受けた人が、確なスハリのある人間を造出せるか何うか、それは問題である、

兎に角婦人問題は賑やかになつて、新聞でも雑誌でも、婦人問題に力を入れるやうであるが、兎角表面的で、將來の日本國民を造出す婦人には、何ういふ覺悟がなければならぬかと云ふやうな立場から書くのは少くて、唯洗濯の仕方とか、着物のシミの抜やうとか、子宮病の療治法とか云ふことをよく書き、婦人の精神頭腦をつくるといふやうなことは、後廻しになつて居るやうである、

日本の婦人は、日本の思想を有つて居らねばならぬ、さうでないと一代の後の國民は外國人となつて終ふ、故に婦人に國家的觀念を注入して、日本國民の思想感情を充分つけて置くことが必要で、外の智識技藝は枝葉である、その根本を忘れられては、女子教育は失敗であると思ふ、

過日巡遊から歸つた人の話を聞き、寫眞も見た、皇后の立てられた女學校の如きは、洋式の立派な建築で、日本では女學校はさて措いて、この位な建物は少ない、慈善市の陳列室などの宏麗なことは、學校としては、兎ても日本では見る事の出來ぬほど善美を盡したものである、それから市中へ出れば、馬車は頻繁に往來し、上流社會では自動車が流行して、英語佛語等で談話ができる、外形としては全く西洋風で、兎ても日本は遠く及ばぬやうに見える、それが西洋のよい所をとつて、思想はその國の精神を以てするのなれば結構であるが、もし外形が純粋の西洋風であると同時に、思想も國を忘れて西洋となり、外國人的

になつたならば、暹邏に取つては國の大事である、日本でももし、只西洋を有難がる結果外形の摸倣は勿論、外國語を使ふを得意とし、西洋人等の間に立つて會話の出來るを譽れとする、其外には何等の取柄のないものが續出すると、國は危くなると思ふ、

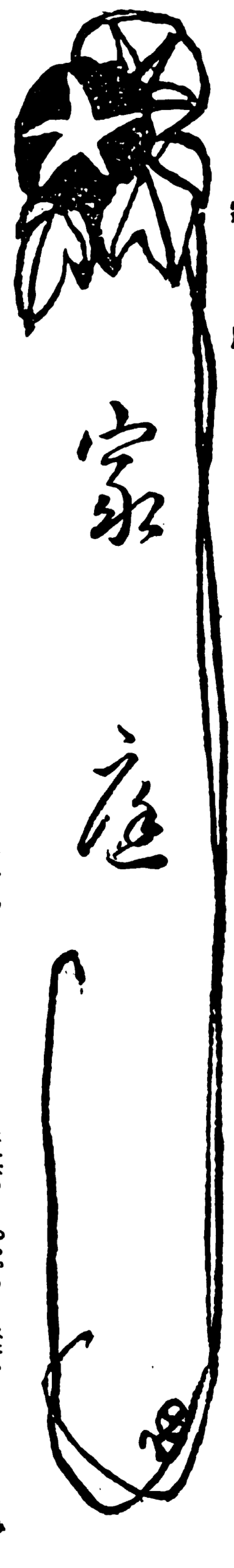
今日の日本の校舍は麁末で、この暹邏のに比べて見ると、到底比較にも何もなつたものではない　併し日本の取柄は、校舍でなくて精神である、この精神がどこまでも日本的で、外國化せられぬ所にある、

今日の女學生のやうに、フハ〳〵した考を以て、ハイカラがつて居るやうであると、どんな國民を養成し得るか、實に不安に思はるゝ次第である、私は一體人間の、地味に、忍耐力の強い、苦勞も厭はない、而して健全旺盛なる國家的觀念を抱いて、將來の大なる日本を脊負つて立つ人間をつくるものとして、毛頭遺憾のないと云ふ敎育を女子に施したいと思ふ、今見る所によれば、女學生のみならず、敎へるものも書くものも浮調子になつて居るやうに思ふ、

愛國婦人會主唱者たる故奧村女史十七歲の時に、野袴に朱鞘の大小を手挾んで、長州に使した事がある、此は非常の塲合であつて、それを眞似よとは云はぬが、平生でも確な精神を有つて居る事は必要である、人間は何うしても苦勞せねばならぬ、唯愉快ばかりを思うて、苦勞を厭ふやうな者が多くなると、國は立行くものではない、何處までも苦勞を仕抜いた、確な意志を以て働くと云ふ人間がほしいものである、然るに今の女學生は、ランプがなければ便所へも行かれぬといふ有様で、意志は極めて弱く、唯何となく學校に行つて居るといふ風である、それでは困つたものである。

もとより婦人の事であるから、一通り身を飾る必要もあるが、それは餘興で、本當の婦人となるには、精神の鍛練が大切で、これからは大にこの精神敎育に力を入れたいと思ふ、

（前號豫告には下田文學士の論題を「父母の敎育」とせしが都合ありて本題に變更せり）



胃腸の養生法

醫學博士 長與稱吉

●人は何故に食はねばならぬか

抑も人間が飢渇の感を發して、飲食物を要求するのは、自然の感覺――生理學者は是れを人間最終の目的だといつて居る――所謂本能性ともいふべきものであるが、さて其の感覺を起すのに就いては、中々複雑な關係があるのである。簡畧に言へば吾々が生息て居る間は、斷えず手足を動かして居るからして、時々刻々に肉體の成分は消耗てゆくのだ。即ち心臟が運轉するのにも、肺が呼吸するのにも、血液が循環するのにも、又腦や胃腸の運營のにも、咸なそれぞれ、原動力の供給を體内から仰がねばならぬのであるから、恰も吾々の身體は、蒸氣機關の石炭に於けるが如く、寸時の間といへども成分消費の絶え間がない、だから其の消費に對して相當の補給をしなければならぬ、所謂蒸氣機關の石炭たるべき物質を輸らねばならぬのである。是れ即ち「食はねばならぬ」所以で、吾人はこれを「榮養の補給」と名づけて居る。

榮養の補給に就いては、消化の器官が唯一の責任者である。即ち食べた所の食品は、口や、胃や、腸や、各部固有の官能によつて、種々様々の變化を受け、一部必要の成分は體内に留まつて、活動の源泉をつくつてゆく、之れを再び蒸氣機關に譬へて見る

と、石炭が燃燒して、水を熱し、蒸氣を發し、器械の運轉をさせるのと同樣、凡ての働作となり、一方に於ては不要の成分の悉く、大小便や炭酸瓦斯となつて、體外に排出される、恰かも石炭の燃えくさりが、殘るのと一般である。

之れを要するに、消耗と補給とは常に相一致平衡して、過不及なく、身體各部も亦、之れによつて些の損失を來さしめず、以て完全に生命を維持してゆく。之れを『營養の出納――新陳代謝の平均』とは言ふのである。

以上の說明によつて、諸君は大抵「食はねばならぬ」理由がお了解りになつた事と思ふ。同時に又消化の器官は吾々にとつて、最も大切なものである事も、お知悉になつたと思ふ。即ち胃腸は食物を消化して身體各部に營養を輸送する幹部であるのだから、所謂人間最終の目的の一つたる『生命保續』といふ事を達する上に於て、實に缺くべからざるものと言はねばならぬのである。

斯く消化の器官は、重要なるものなるにも拘らず、世の中には往々手足を勞するのよりも一層、過激な使ひ方をして自ら苦めて居られる人がある。不心得も亦極まれりといふべしだ。

貝原益軒の『養生訓』に

……慾を恣にし身をうしなふは、たとへば刀を以て自害するに同じ、早きとをそきとの、かはりあれど、身を害する事は同じ………

といつてあるが、最もな訓戒である。如何に物を消化すのが胃腸の役目であるからといつて、不規則な喰ひ方――むら喰ひをしたり、鯨飲にしたり、未熟の菓實や、腐敗に傾いた物や、凡て衞生上不適當ものを詰めこんでは、終に胃腸は其負擔に堪えなくなつて、疲勞、衰弱、弛緩を來たし、延いて種々なる障害を他の器官に及ぼすのも、無理はないのである。「人の命は我にあり天にあらず」と老子は言つて居るが、實に養生さへ良げれば、人はいくらでも百歲の壽を保ち得るものである。然るに不養生な事をし

て、胃腸を傷めたり、疲勞させたりすると、凡ての病氣を起し易くなる。是れ其の抗抵力が減弱するからである。例之ば食物と共に或る恐ろしい黴菌が入るにしても、胃腸が健全であれば、其の毒に犯される事が少ない。之れに反して不健全であると、忽ち感染して、大病を醸すのである。ヨシ病毒に犯されぬまでも、衰弱に陷ると、折角營養物を攝つても、自分の任務を果すことが不能くなるのだ。だから、消化器の健全でない人は、必ず精神が鬱抑する、頭腦が不透明になる、遲鈍になる、引き込み思案になつて、社會に立つて活動する勇氣が失くなる。世界の大舞台に踏み出した大和民族が、怎麽ことで何の役に立たう。たとへ輕度の障礙でも、自分で病いと思つた時は、直ちに相當の治療をして、充分に養生をするのは勿論、平素健康な時にも、尙ほ其の上に健康を高めるやうに心懸けねばならぬ、即ち一方に於て病の發生を防遏すると共に、營養の增進を計るのが肝腎である。

茲に『營養の増進』といふ事を言たが、是は大に注意すべき事柄である。成程胃腸の養生といふ事も大切には違ひがない、又益軒の言ふ如く控へ目にするのも宜いが、餘り大事にし過て、營養の增進——喰て肥すといふ事を忘れてはならないのである。

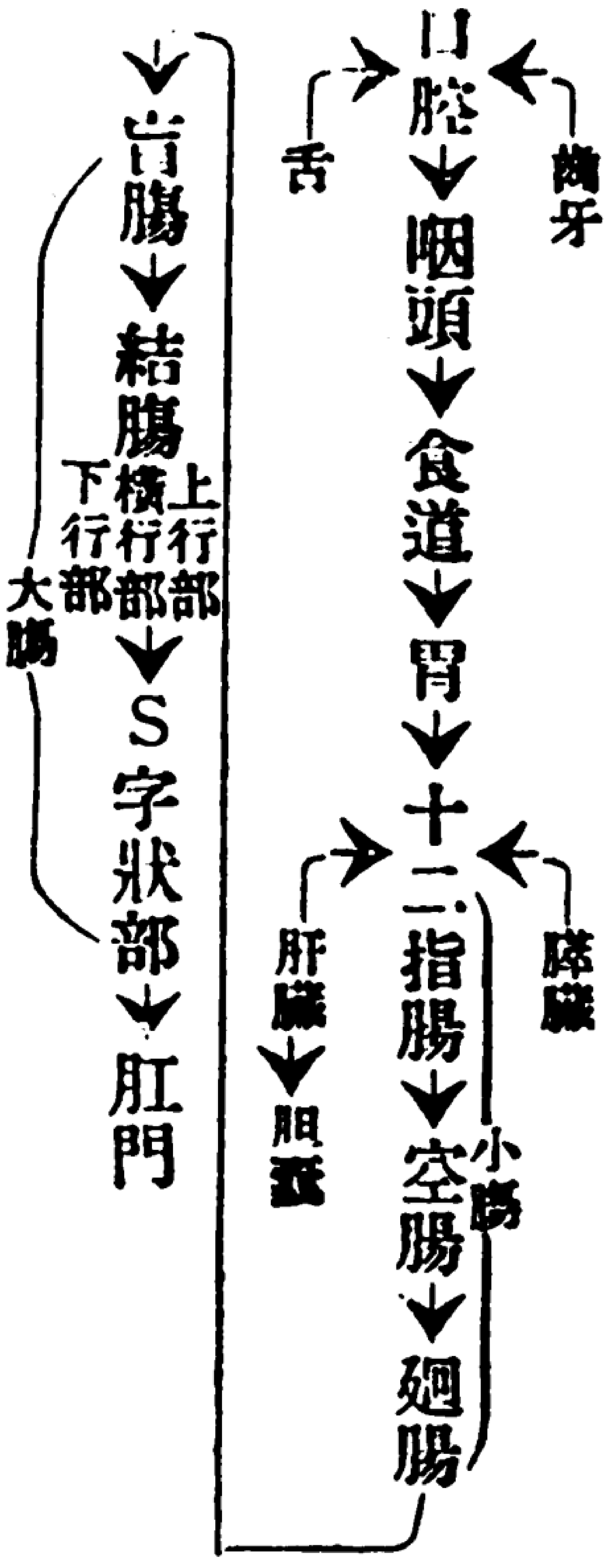
●大食は必ずしも胃病の原因にならぬ

私は寧ろ諸君に大食を勸める、大に喰つて而して身體を肥やす様にせられん事を奬勵るのである。然し斯く大食をせよといつたからとて、決して惡い物を喰つたり、不規則に食事をしたりして、宜いといふのではない、胃腸が消化に堪え得る範圍に於てならば、いくら喰つても差支はないといふのである。尙此の事に就いては後章に詳しく說く積りである。

㊀消化機各部の官能

之れを說く前に、是非お話して置かなければならぬのは、消化機の組立、即ち消化機とは如何なる機

器から成立つて居るかといふ事である。
今これを解剖上の位置に從つて、順に上の方から數へてゆくと、先づ次のやうな配列になる。



右の如き諸種の器官が集まつて、初めて消化機の運轉が、完全に營爲されるのである。是等の器官は身體の中央を縱貫して居て、而して口腔から肛門に至るまでの長徑は、どれだけあるかといふに、大凡身長の五倍——尤も體格の如何、人種の相違等によつて差はあるけれども——五尺の身體ならば二丈五尺といふのが普通としてある。

さて、これから各部の官能に移るのであるが、それには食物の運命、即ち食べたものは如何に變化さるゝか、といふ事を主にして述べた方が、早わかりであらうと信ずる。

●食物は口内で如何に變化さるゝか

⦿齒牙の話

吾々が食物を攝つて口の中に入れると、舌はまづこれを受容して、齒の方へ送つてやる。

齒牙には種々あつて、各其の役目も違つて居るのであるが、消化の官能に與つて最も力のあるのは、門齒と臼齒とである。門齒は物を嚙み切る役目、だからこれを切齒とも名づけらるゝ。臼齒は其の名の如く、恰も挽臼が豆のやうなものを粉碎すると同樣に、食品を細かく嚙み碎く役目を有つて居る。

斯の如く、齒牙は物を嚙み切り、押し碎き、磨り潰して、食物を消化し易く、溶け易い形にするのであるが、若し齒が脫落たり、齲齒が出來たりすると、此の役目を完うすることが不能くなる。すると、食物の味も充分に味はふ事が不能いのみならず、胃の

中で完全に消化されない事になるのだ。だから歯牙は最も大切に保護する様勗めなければならぬ。然らば

◉歯牙は如何に保護すべきや、といふに先づ第一に、非常に硬いものは喰はぬがよい。尤も歯牙の上層には、琺瑯質といふ、石のやうな硬い部分があるから、大抵のものは嚼み砕く力を有つて居るのであるが、天性歯質の薄弱な人などは、どうかすると、毀けたり、罅裂が生じたりする。琺瑯質に缺損が出來ると、そこから直ちに齲歯を生ずることが多い、其他、口内を常に不潔にしておくと——即ち口内の清淨を忽諸にする人は、往々齲歯に惱まされるのである。何故なれば、食物の殘片が口内で腐敗醱酵を起し、一種有害なものが釀成て、これが爲めに歯牙の表層が、漸次侵蝕せられるからである。

◉齲歯の害——之れが豫防法　齲歯は大抵不注意、不養生から起るものである。さて、これが發生ると、其の缺陷へ食物の殘片が嵌入つて、腐敗を起し、種々な有害産物を生ずるからして、歯質は日に〳〵侵蝕され、凹窩は益々大きくなる。すると歯中の神經——即ち歯髓——が露出して、水や湯を飲むにさへ顔を顰めなければならぬ事になる。加之、歯髓が露れる迄に空洞が大くなると、そこから畏るべき腐敗黴菌が遠慮なく侵入して、往々歯齦骨膜炎とか歯齦膿瘍とか云ふ病氣を續發するのである。殊に今一層恐るべきは、燐寸職工が齲歯から燐蒸氣の毒を受けて骨疽といふ命に關はる大病を發する事である。

以上は齲歯による直接の障害であるが、間接には咀嚼の不完全から胃病發生の原因ともなるのである。故に歯牙の狀況を見て、單に其の人の健否を察せらるゝ場合がある。

其他歯牙缺損に伴ふ直接の害を擧げると

(一)發音障害　かの歯音と名づける、カキクケコ、サシスセソの如きは門歯が無ければ、完全に發せられぬ音であるから、門歯が脱落ると、忽ち談話に不便を來たすのである。

(二)外觀上の不體裁　門齒がぬけた者の不體裁なのは言ふまでもないが、外から見えぬ臼齒が脱落ても亦、外觀上醜くなる、それは臼齒がない老人の頬が、恰も乾らびた蠶豆のやうに、中央が落ち凹んで居るのを見ても分るであらう。

さて以上の如く、齒牙脱落又は齲齒發生によつて、生ずる障害は澤山にあるが、これを豫防するには如何したら良いか、といふに先づ

◎口内の淸淨　が第一である。即ち毎食後には必ず微温の湯を以て、能く口内を含嗽し、朝起きた時は勿論、就寐まへにも亦必ず、齒楊子を使はなければならぬ。毎食後に行へば一層好いのであるが、これは中々行はれるものでない。

◎齒楊子と齒磨粉と　には特に注意して撰擇する必要がある。楊子の毛は硬いのは不可ない、成るべく柔軟なのを撰び、齒の上から内外をば丁寧に磨き、強度に摩擦せぬやう心懸けねばならぬ。楊子の使用後は、日光に曝して乾燥せしめ、少しでも濕氣を殘しては不可ない。齒磨粉は口内を刺戟せぬのを用ひ、火中に投て剝々と燃えるのは避けるが良い。

若し不幸にして齒牙が脱けたり、齲齒が出來たりしたらば、直ちに齒科醫に塡充させ、又は義齒をして、少しでも咀嚼に不都合のないやうにして置かなければならぬ。

(此項未完)

家事經濟に就て

文學博士 男爵　細川潤次郎

家政を執行ふには、先づ豫算を立てゝ置いて、不足のないやうにせねばならぬものであるが、兎角豫算通りには行かず、不足勝になるものである、その時に至つて俄に狼狽しても致方がない、平生金錢を濫りに費さぬやうに心掛けて置かねばならぬ、

國家の經濟は、議會の協贊を經て不足を補塡する道もありませうが、一家の經濟は一家のうちで融通せねば、他人の助力を頼む譯には行かぬ、それ故兼

てより一年の豫算を立てゝ、年の暮になつても不足のないやうにせねばならぬ、簡樸にするには、平素の質素倹約が第一である

高島秋帆先生は高島流の開祖で、江川太郎左衛門即ち世に坦菴先生と稱するは、その門人であつた、ある時秋帆先生江川の韮山の宅へ參つた處が、丁度食事の時刻で膳が出た、客の膳椀は相當のものであつたが、主人の器は如何にも粗末で、見苦しいものであつた、秋帆先生は大に訝いて其次第を尋ねたら、坦菴先生の答ふるに、此の膳椀は余が二十三歳にて初めて妻を迎ふる時新調したもので、今に數十年用いて居る、それ故古くなつた、とかやうに申された、秋帆先生之を聞いて、非常に感歎せられた、此秋帆先生は長崎の豪族であつて、殆んど大名のやうな暮し向で、少壯の頃には随分豪奢を極めたが、無實の罪を蒙り、入牢して其後は十二ヶ年も大名預となつて、十分に艱苦を嘗めたのみならず、讀書などして勤倹の徳あるを知つた人故、此次第を聞いて感服さ

れた結果、どうか此のやうなものを我々の子孫に見せて、勤倹の手本とし、永く傳家寶とも致したいとて、其膳部の一つを乞うたが、坦菴先生も快く承知されて、其の中の椀を贈られた、扨てその椀は汁椀で、外が黒くて内が朱であるが、外の漆は剝げて木地を現はし、蓋は割れて居る故繕うてある、繕うてある所は色が變つて居る、椀の方は糸底はあつたものであらうが、磨りへらしてないやうになつたり、婚姻の時新調した時分には紋が付いてあつたらうと思はれるが、今は剝げて居てわからなくなつて居る、此の如き品は乞食でも持つまいと思ふものを、坦菴先生はそれで飲食せられた、さりとて坦菴先生は貧困かと云へば、決して左様でない、伊豆韮山にて代々代官を勤める人で、其管轄地大凡十萬石位であつた、管轄が廣かつたから、多分の收入があつた事であらう、それにかやうなる器を用ひたと云ふのは、つまり節倹を重んずるより外はない、誠に貴いことである、然らば誰に向つても、かやうな器で飲食し

て貰ひたいと云ふのではない、そのやうなる心持を以て、萬事を儉約せねばならぬと思うて、私は秋帆先生の遺志を繼ぐ考であります、

儉約の必用なるは、人生必要の費用の項目が繁多なるからで、獨逸のチ、ウス氏が家政にとつて支出の項目を大別したのを見ても左の如きものとなつて居る、

第一、生養の費。第二、身裝の費。第三、住家の費。第四、温暖及光明に必要なる費。第五、衞生の費。第六、智惠の養、家庭教育、學校教育、智識交換の費。第七、靈魂安養神佛信心の費。第八、外防及內安の費。第九、豫備用心の費。第十、鬱散、遊獵、娛樂、旅行の費。第十一、家事手傳費。第十二、交通及臨時の費。

これを細別すると、其項目の繁多なる事態くばかりで、その費用を支辨するに、それ〳〵の支出をせねばならぬ、支出の多いことは論を俟たぬことで、その支出に應ずる金額は家々の收入よりせねばならぬ、然るに收入はいつも單純なもので、役人であればその俸給、農工商なれば農商物、製造品、商品の代價等の利得である、その外有價證劵の利子、預金の利子、貸地貸家の上り高等に過ぎない、此の單純なる收入を以て、複雜なる支出に應ぜんとするのであるから、極めて綿密なる注意を要するのである、

予が蘭學の師匠長崎の名村八右衞門と曰へる人は、年々の收入と支出額とを紙片に錄し、負債高をも記入し、其年負債を償却すべき金額をも記入し、殘り高幾何とまで記入して、之を座右の壁に貼付したが、これも一種の豫算で、家事經濟の要點である、

一家の經濟は、主として其家の主人の責任であるが、婦人がこの責任を分ちて、家政を掌る以上は、主婦たるものは、此等の事に付て、兼て研究し置かねばならぬ、又少年の女子たりとも、他日は必ず一家の主婦となるべきを以て、能く〳〵其家の經濟に意を留め、主婦となる時の用意をせねばならぬ、即ち前述の如く、一家の收入を一家の支出に應じて差

支なく、猶其餘裕を殘して、不時の需に應ずべき豫算を立てんとするには、是非とも儉約せねばならぬは數理上當然の事である、

料理實驗談

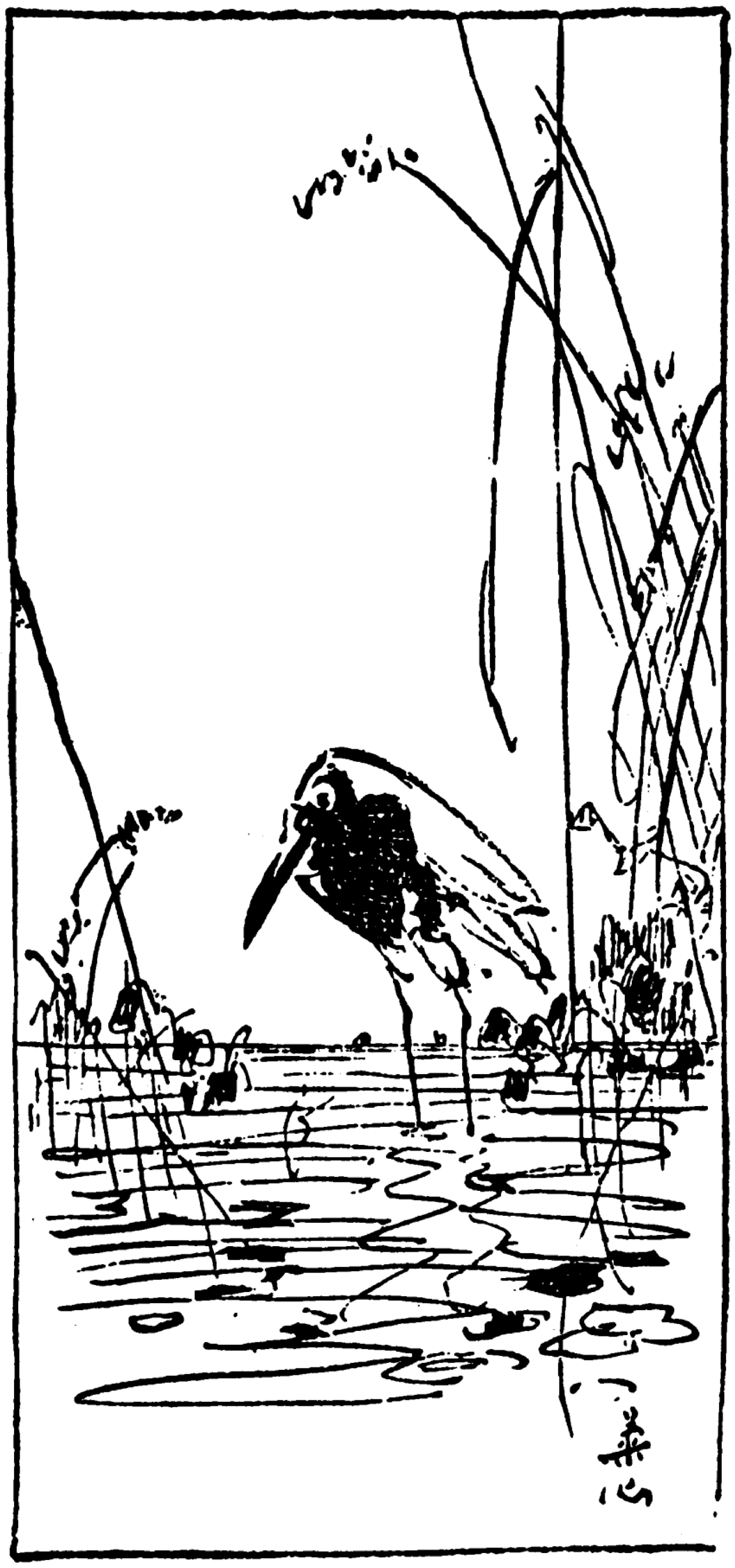
村井弦齋

單に料理と云へば、極めて無造作なものゝやうに考へて居るものが多いやうであるが、研究をすればするほどむづかしくなつて、巾はます〳〵廣くなる、奥はます〳〵深くなる、こゝらでもう宜からうといふ工合には行かぬ、米の料理といへば四五十種位しかないが、外國では却つて四百何十種と云ふ料理法があつて、それが單行本として發行されて居る有樣である、と云ふのは研究の仕方が違ふ、澱粉質のものへは油を加へると食味の調和がよいといふ工合に、學理の上からも考へて、單に形をかへて味に大差なき餅をつくるとか、思ひ付の食品を交せて、松茸飯筍飯の如きものを拵へて、米の料理の行止りとせず、覆盆子とか牛乳とか牛酪とか云ふやうなものをも加味して、種々の米料理が出來るのである、故に限りなき多數の料理法がある譯である、猶一例を云へば、たゞ

卵の半熟

をこしらへるにも、色々の仕方がある、世間一般に半熟として料理されて居るのは、黄味と白味とが同じやうに半熟になつて居らぬが、鈴木孝之助と云ふ人が、攝氏七十度の温湯に卵を三十分入れて置けば、それで黄味も白味も同じやうに半熟になるといふことを思付かれて、それが卵の半熟の一發明の如くになつた、所が西洋では十年も前から、この半熟の仕方が發明されて居る、それにモー一つ西洋で發見したのは煮立つた湯をかけて卵を十分間置いてその湯を外の熱湯と取かへて又十分間置くのである、して見ると西洋の方が卵の半熟法の元祖かと云ふと、京都邊では百年も前から、この半熟法が工夫さ

れて居る、京都ばかりではなく、熱海でも修禪寺でも、卵の半熟をこしらへるが、誠によい鹽梅に出來る、それは礦泉で茹でるからである、所が箱根の小湧谷へ行つた時に、卵の半熟を誂へると、例の白味だけ固まつて、黄味は流れ出しさうなのを出したから、主人を呼んで礦泉で茹でることを敎へると、主人は早速それを試むる、案外の上出來であるから非常に喜んで、この料理を小湧谷の名物にしたいなど、云つたことがあつた、それから礦泉には限るまい、硫黄花を湯に入れたのでもよからうと、それを試めして見ると、幾分か工合のよい半熟が出來る、



卵をたゞ半熟にするといふことだけでも、以上の如く三四種の仕方がある、で今更發明の何のと云ふほど珍らしいことではないが、世間に廣く知られて居ないから、兎角白味が固くなつて、黄味の流れ出すやうな半熟に出逢ふことが多い、これは前述の仕方によつて、眞の半熟になつたものでなければ病人などの食料には適せぬ、病人に限らず眞の半熟であれば味も數等よく、少しも胸につかへるやうなことがない、而して手數も別段面倒なこともないのである、

料理と栽培

それから野菜の料理をしても、其の料理はよく撰擇せねばならぬ、買出しも下婢などに任し放しにする譯には行かぬ、魚肉獸肉など丶違ひ、多寡が野菜である、誰の目で見ても違ひはあるまいと思ふが、出生地によつても違へば栽培法によつても違ふ、それには地所の餘白でもあれば、野菜の栽培を試ると、よくその味が解る。

たとへば胡瓜をつくると、まだ胡瓜の盛んに生る最中に、葉が枯れて黄紅色になるのが多い、それを多くの人は、胡瓜の葉の異狀あるものとしては居らぬ、そこが多少注意して栽培すると、早く枯れるのは天性でなくて、黴菌に犯されるので、除虫剤の如き、如何なる虫も辟易する植物にも黴菌はつく、併しそれを防ぐ方法はある、自分はそれを實行して、専門の農夫に不思議がらせたこともある、既に川崎邊ではそれを行うて居るのがある、葉が早く枯れるやうでは、幾分實に影響あるを免れない、であるから胡瓜一本買ふにも多少の智識を要する、

是から茄子の旬になつて來る、茄子は旬はづれによく料理に用ひられるが、いつでも苗をおろし、風雨を覆うて、馬の寢藁などで醱酵さすれば、いつでも促成が出來る、この促成の仕方は往年福羽子爵が歸朝土産から起つたので、近年は盛んに行はれて居る、そこでこの促成は物の旬を避けた方が珍らしくてよいに違ひない、人によると促成のはその味を劣るものとして居るが、實はさうでない、促成は栽培の仕方が、植物の生育を容易ならしむるやう入念であるから、實が軟かで味もよろしい、故に西洋では旬に出てぬ促成のは價が三倍高く買はれるとの事である、故に少しの地所でもあれば、この促成なども料理に伴うて、覺えて置く必要がある、又手づから栽培して、野菜にしろその物の貴いことが解る、即ち料理に工夫を用うる考も起るのである。



家庭に於ける心理學の應用

高島平三郎

はしがき

今まで心理學といへば哲學の一部分で專門の學者でなければわからぬほどのむづかしいものと見做されて居ました。勿論今日でも心理學はむづかしい學問にちがひありませぬが、そのむづかしいといふ意味は物理學や化學や衛生學や生物學などがむづかしいといふのと別に變つたことはありません。何の學問でも一寸した智識は誰でも持つて居るものですが、その奥にすゝむに從つて、だん／＼むづかしくなり、終には哲學にはいり、それでもわからぬことがたくさんあるのです。それにもかゝはらず、理化學や衛生學や、生物學や、すべておひ／＼通俗化して來て日常のことにもいろ／＼應用せられて居るのであります。然るに心理學だけは、やはり昔の考へで、哲學的のむづかしい學問としてあるものですから、まだ他の科學のやうに、一般に應用せられません。たゞ僅かに師範學校などで、少しく研究せられて、教育に應用せられて居るだけのことです。併し心理學は、其の關係する所の極めて廣い學問でありますから、其の應用は決して教育にばかりとゞめる可きものではありません。苟も人の心に關係したことなら、心理學の應用せられぬことはないのであります。政治でも商賣でも、軍事でも、皆心理學の應用によつて、それ／＼の働きが出來て居るわけであります。たゞ農業家が、農學を知らずに、農業を營んで居るやうに、以上の業務に從事して居る人も、特別に心理學として學んだのでないけれども、自然の經驗から心理學の事實法則を應用して居るのであります。

女子が家庭を治めるのもその通りでありまして、よく家庭の齋つて居る所では、主人なり主婦なりが、おのづから心理學の法則に從つて巧に人を扱ひ、自ら働きますから、一家がよく和合するのです。それ

ゆゑに一家がよく治まりさへすれば、別に心理學とか、家政學とか、經濟學とか、改めて學ぶ必要はないわけであります。倂しながら、學問の値うちは、特別の人が偶然に成功したといふことを、立派に分解說明して、一定の秩序法則を見出だし、誰がいつ行つても、立派に好き結果を得ることの出來るやうにする點にあるのです。世の中が今日のやうに進んで來たのも、全く此の理由でありまして、昔は一子相傳などといふやうに、えらい人が何か良い方法を見出すと、之を秘して人に傳へぬ、況して其の理法を研究するなどいふことは、決してなかつたのが、學問の進步と共に、誰でも秩序正しく學問さへすれば、あらゆる事業の原理原則といふものを捕へることが出來ますから、之を十分にさとつて、偖て後に實地いろ／＼の事を經驗して、おひ／＼其の事業に熟し、其の進步をはかつてゆくことも出來るのです。

私が一般に家庭を治める女子に心理學の知識の必要なることを說くのも、此の爲めでありまして、家庭は夫婦、親子、兄弟、姉妹、婢僕など、すべて關係の深い人々の集まつて生活する所でありますから、互の心のいろ／＼複雜に影響し合つて居ることはいふまでもないことです。家庭を圓く治めるといふのは、つまり是等いろ／＼の人の心が互に融和して、樂しく働き、面白ろく暮し、安心して休むことが出來ればよいのであります。

是等のことを敎へる學問には、家政學といふ複雜な學問がありますが、たゞ其の方法ばかりを習つたのでは足りません。もう一步進んで、かうすればよいといふことの起つて來る根本の事實を知らなければなりません。それにはどうしても人の心のことを知らなければならず、人の心のことを知るには、どうしても心理學に依るの外はありません。それですから家政を治める人々は、其の學問の程度如何にかゝはらず、必ず人の心の知識を得ねばなりません。前にも述べたやうに專門の學問としてはいざ知ら

ず、たゞ常識としては、誰でも心の知識を幾分か持つて居ないものはないのです。心理學はたゞ之を系統立て秩序を正し、精密に確實に研究して、一科の學に整頓したまでのことです。それゆゑこれまでの心理學は兎も角も、今後の心理學は、普通の知識のある人なら、誰にでも分る筈です。女子として家政の治め方を根本的に研究しやうとおもふ人は、必ず其の一つの大切なる務として、心理學を研究せられんことをおすゝめします。

　私がこれからこゝにお話することは、何れも心理學の事實に基いて居ることでありますが、併し科學としての心理學の順序によつてお話してゆきましては、たゞ長くなるばかりでなく、讀者の爲めにも適當でないとおもひますから、家を治める上に必要なことを、いろ〳〵取りませてあらゆる方面からお話しやうとおもひます。それゆゑ、順序は必ずしも心理學の次第に依らず、隨筆體におもひ出づるまゝにいろ〳〵と書き記すつもりであります。之れによつて、幾分でも讀者が心理學の興味を覺えられて、ます〳〵研究するの心をおこされ、且つ家を治める上に根本的の注意をせられるやうになれば、私の望は滿たされるのであります。なほ何事によらず、讀者から質問を寄せられんことを希望いたします。(續出)

米と病人

醫學士　久保林杏

米の飯は大概の病人が食べて宜しい、米の飯を禁ずるやうなことはまづないけれども、如何にせん病人の方から普通の飯は厭になることがある、さういふ場合には、飯を小く握飯にして、金網の上に載せ、兩面から燒いて、香ばしく燒握飯をお茶漬にして食べさせると、唯の飯では嫌ふやうな人でも、喜んで食べることがある、

　それから同じ米でも、昔は陳倉米といふものを珍重した、此陳倉米といふのは、古廠に貯へ置いた米

で、粘り氣がなく、脂氣がなくなつた米で、消化が宜しいと云ふことを云うて居つた、病人には新米の味のよろしいのでなく、古米で質のよいのを食べさせる事になつて居た、併し玄米にして永く俵の中に貯へて置くと、段々味が惡くなつて、滋養も無くなつて來る、それから麥飯は消化が善いといふことを、高木博士を始め多く人に唱へられるやうであるが、麥飯を食べて惡い病氣がある、糖尿病の如きはそれである。

日本では病人が出來ると、飯は廢して粥の方にするやうで、誰でも病人に粥は附物のやうになつた、近頃陸軍の病院で研究した試驗によると、粥の極軟いのと、極く薄い粥湯と、それから少し軟いのと云ふやうに、段々軟くして、つまり四通りの粥をこしらへて試驗したのであるが、粥湯は滋養の効能がない、それからその上が五分粥、七分粥、全粥と云うて、つまり五分粥と云ふのは、米が五勺に水が半リットル、七分粥は米七勺に水が〇、七リットルの割合なのである、で陸軍で調べた所の結果によると、一番消化がよくて、身體の養生になるものは七分粥で、其次は五分粥と云ふことである、總て粥は、あまり硬いのと薄いのとはよくないのである、

次に粥の煮方であるが、粥は矢張米から炊く方がよろしい、所謂煮返しにしたのでは、何うしても滋養分が少くなるから、米から炊かねばならぬ、それから注意すべきは、いくら軟い粥であるからと云うて、あまり食べ過ぎては、又それが爲に腹を壞すやうなことになるから、傍の人はよく〳〵その度を見計つて食べさせるやうにせねばならぬ、

支那料理

嘉悅孝子

炸丸子

二百匁の豚肉（十五人前）をよくたゝき、醬油を小杓に一杯ほど入れ、ミジン生姜（五厘位）を加へ、う

き粉のときたる(二錢位)を加へ、よくかき交せ、豚い油の煮立ちたる處に丸めて入れ揚げる、

乾烹鷄

鷄をよく毛焼をし、よく洗ひ、骨とゝもに小さく切り、外に葱二本を輪切にし、生姜を微塵に切る、さて鷄は雛二羽位を醤油に浸し、それを豚の油にて揚げ、揚がりたれは油よりすくひ上げ、新らしき油を少し鍋に引き、先に揚げたる鷄と、葱及生姜を一つにいり、それを酢醤油に入れて、ざッと煮るなり、酢醤油は酢二勺に醤油一勺位にて三羽の雛鷄を煮るによし、

溜魚片

平目をそぎ身にして筍も同じ形に切り、椎茸も同じ形に切り、葱も細かに切り、さてうき粉を水にてとき、鹽少し加へ、平目を入れて衣をなし、油にて揚げ、鍋の油をしため、新しき油を少し入れ、前の各品を入れて一しよにいびり、後スープにうき粉を少し入れ、鹽も少し酢も少し加へたるものを入れてざッと煮上げる、

炸裡脊

うき粉を茶呑茶碗に五杯、醤油一勺位をかき交せたるに、豚肉の薄く切りたるを交せて、油の煮たちたる處にてあげる、

燒溜魚

うき粉五錢位を、醤油五勺位でゆるめ、魚の賽の目に切りたるを揚げ、後油を少しにし、筍、椎茸、ミジン生姜をいびり、前の魚も一しよにし、醤油酢少許に、スープ小杓に四杯位入れて煮上げる、

溜鷄片

うき粉少許、醤油少許、玉子白味二つ位をよくかきまぜ、鷄のそぎ身を入れて、油少しで揚げ、箸にてよくかき交せ、煮え通りたる時、油をしためて、筍、葱、生姜を一しよに入れていびり、鹽少許とスープを入れて煮上げる、



料理及菓子製造の實驗

富田豊春

煮蓮根

極く太き蓮根の眞中の處、左右の節を付て切り、烈火の上で、曲轉ながら皮の黒焦に成るまで燒き、夫を水にて洗ひ、皮を剝ぎ、小口から丸く二三分位に庖丁し、食鹽か、ソースを付て食す、晩酌或は客などある時には頗る妙である、支那の蓮根なら一層よろしい、

豊春式ソース

白砂糖大匙二杯を鍋に入れ、强火に懸て、攪廻しながら煮る、周圍が焦て狐色になつたれば、酢を三勺入れると、岩の如く堅く成る、夫を漫火にて煮ていると、だん〳〵ゆるんでくる、赤唐芥子を五本入れて暫く煮詰め、どろ〳〵になつたら、食鹽と醤油とを入れて加減をなし、是にて出來上り、普通洋食に用ゆべし、

うどん煮込(一名煮ぼうと)

うどん粉或は(メリケン粉にてもよし)凡五合を醤油にて、普通より堅く煉り、うどんに打ち、別に鷄ソップにても、牛肉又は、豚にてもよし、ソップ一升を製し、其中へ前に打ちしうどんを入れて煮て食す、ソップは、肉百目葱、にんじん、大根か、小かぶ椎茸、靑味に、芹か、小松菜、或はほうれん草、時期の野菜を入れるべし、水二升を一升に煮詰る、

豊春好そばがき

蕎麥粉凡二合、牛乳五勺程入れ、能く煉り、普通より堅く、そばがきを製し、出來上りたれば、生玉子を掛け、適宜に切り、椀に盛り、ソップを白砂糖醤油にて加減をなし、夫れにて前のそばがきを食す加役味、乾海苔をもみて用ゆ、

濃茶薄茶乾燥法

入梅の時期に、抹茶を碾くに、茶に濕氣が有ては碾ぬから、塗物椀の蓋に凡茶五匁位入れ、同じ蓋をかぶせ、鐵瓶の湯を極く能沸湯し、鐵瓶の蓋を取除

て、前の椀の蓋を乗せ、暫くして上にかぶせた蓋を取り、生紙を以て露氣をぬぐひ、又かぶせ、五分時間過ぎたら、如前ぬぐふ事三四度にて、全く乾燥す、夫を常の如く茶臼にて碾くべし、

そばめし

蕎麥の挽抜（上皮を剝ぎ實が二ツ三ツに割れし物麥の挽割の如く）三合に、米七合を交せ、普通のめしに炊き、別に鮑に鹽を付て能摩擦ると、堅くなるから、貝より剝し、正身ばかり大根卸にておろし、擂鉢にて能くすり、普通とろゝの如くに成る、食鹽にて味を付け、焚立の麥蕎めしを、碗に盛り、其上へ懸て食す、

栗めし

栗の皮を剝ぎ、米一升に、栗凡三四十個の割、食鹽を少量に入、水加減は、普通より水を多くして、焚べし、

竹の子めし

竹の子の、やわらかき處を細に切り、味淋酒、白砂糖、醤油にて煮上、別に生から茶めしを焚き（四月號にあり見合すべし）煮置たる、竹の子を交ぜるべし、

芋めし

さつま芋の皮を剝ぎ、凡五六分角に切り、米と交ぜ、食鹽少し入れ、普通のめしに焚く、

大根めし

大根ノ皮を剝ぎ、千六本に切り、茹でる（ソップ）其水へ醤油にて味を付、ゆでた大根も少し入れて焚く、是はめしと云ふより、寧ろ雜吸である、

小兒と對話に就て

文學士　伊藤南陽

偖て此頃は新聞や雜誌に大隈伯との談話だとか、新渡戸先生との對話だとか、または實業家であるの文學者であるのといふ、名高い人と談し合つた事柄が度々見えてあるが、さういふえらい方と、拔目のない、落のない、興のある話しをするのは、また中々にえらい人であるに相違ない、何でも一事一物に

通じ、其道に達してをる人と面白う話をして見やうといふには、こちらが、先方より澤山とは劣らない丈に、知つて居り、達してをらないと、御話しが陳分漢で解らぬ、何を承はつても、ハー左樣ですかな、ヘーと分らずやの頓馬な張り合ひのない返事をせねばならぬことが多い、だから、やさしい樣で六ケ敷いものは人と話しをすることである、さて其中でも六ケ敷いは、五つや六つの小兒を相手にする時の話である。

小兒との話がなぜ六ケ敷いか、これが即ち小兒を敎育する上に、尤も肝要な種の一つであるから六ケ敷い。小兒の智慧い開けて行くには、父親、母親、兄姉などとの話が、大きに預つて力のあるものである。小供は一體の話好きなもので『ヨーお話して頂戴な』とはまあ小兒が口癖位に云ふことである、桃太郎の話、猿蟹合戰の話などのやうな、眞やら詐やら、取りとめのない話が、何程小兒の智慧の開けてゆくのを助けるか、それが疑はしければ、皆さん御自分達の小兒の時の事を考へて御覧あれ、御互に幼ない時分に、この樣な話を聞くのが、何ぼう嬉しかつたか、そして下手に話して呉れると、つまらない、面白くも何ともない、然るに此樣な平々凡々な話を上手にやさしく小兒が面白がる樣に、話して聞かせることは中々の事ではない、どうして話家で有名な圓朝でさへ、山岡鐵舟先生に『桃太郎の話が至極面白いから、話して聞かせい。』といはれたら、これには一番閉口したといふことである、斯樣に話して聞かしたら、小兒の徳性を導く爲めになるの、小兒の智慧が開けるのと、こちらが自分承知に、小やかましい理窟をつけて、折角考へた話などは、なにが扨て小兒には、猫に小判、豆腐に鎹で一向に役に立たぬのである、『あの犬はいふことをきかなかつたから打たれたの、さうだから坊やも、いふことをきかなければなりませんよ』といふと『さうそんなら猫だとどうなの』位な頓陳漢な問が起つて、こちらが恐れ入る『さうだから』なんどいふて、理窟に推して來ること

が何で幼ない小兒に解るものか、それを解らさうと思ふ丈が野暮で、昔からある、よく出來た話を見ても知れる、昔話の小兒の面白がるものには、『さうだから』がなくつて丸で雲抓むやうな事ばかり云ふてある、そこが小兒には面白いので、小兒は其話を本當の事だと思はなけりや、又詐だとも思はない、なんだか分らいで、たゞ聞くのが嬉しい嬉しくつて此方には推量が出來ぬが、矢張小兒には多少の益をなしつゝあるものらしい、兎に角、小兒に解る話の區域はこれであるから、此間で導いてゆかなければならぬから六ヶ敷い、然し實際の處、談話の中に小兒に



道德を敎へ、智慧をつけるなど、思ふのが無理で間違つてゐて、それだから、つまりは猫に小判的の話をして聞かせることになるのである、小兒には譯も理窟もない、雲抓むやうな話しをきかせておくがよいので、それより上の事は、話しても駄目。扨て其雲抓むやうな話といふものは、隨分の巧者がないと出來ない、そこで之を話して聞かす時の辛抱が、並大抵ではない、小兒といふものは根限り葉掘り問ひ返し聞きかへすものである、先づこゝで桃太郎さんの話を一通り聞かすと、あの桃太郎さんがどうしたの、あの桃は

どうしたの、その雉は、お團子はどうしたのと、どうしたのが續々出て來、あの桃太郎さんがどうしたのが幾邊でも繰り返へされる、それでウンザリして了ふ、氣の短いものは、辛抱し切れないで『シッコイ兒だ』位の小言でも出す、然しこの質問好きな處が、面白い處で之をよきに導いて行くと、小兒の將來學問をする上に、何程のためになるか知れない、大製造家の大發明でも、大學者の大發見でも、煎じ詰めて見れば、全くこのどうしたのから來たものである、小兒のどうしたのは、たゞに話を聞く時ばかりではない、何の時何を見ても何を聞いても急度發して、それで小兒は我々に話しを仕掛ける、其仕掛ける話しといひ、其どうしたのと云ひ、極めて五月蠅いに相違ないが、小兒の敎育の上には辛抱せねばならぬ。

扨て予の『一小兒との對話と』いふは大隈伯や新渡戸先生との談話などのやうな、高尚なものでなくつて、先日であつた、今年六つになる或内の小兒を膝に載せて、車で番町から銀座へ、半藏御門の傍から、參謀本部の前へ出で、數寄屋橋を拔けて行く途中、其小兒と予との談話の筋である、この小兒は至つて質問好きな性質であつて、殊に道でも歩く時のやうに、新しいものが樣々目に入ると、例のどうしたのが出るとも出るとも、續け樣にやみなしに出て來る、當日車での對話即ちどうしたのによつて出來た兩人の間の話は、勿論なんでもないことだが多くの人は、箇樣な話しに氣をとめないから、予は態々仰々しく、書き並べる、それもかう書き付けてあると、成程左樣かと氣が付いて、小兒相手の折の心得を考へ出すことになるかも知れぬと思ふので。

『アラ妙な色に塗つてあるね――、どうしてなの、

車が衛戍病院の横手に來ると、其小兒は

『こゝはどこなの。』

『こゝはね――、兵隊さんの病院。』

『兵隊さん病氣になると、どうするの。』

『此處へ來るの。』

裏門の内に三人程の患者が立つて居て、其冠つてゐる饅頭笠がみへるから予は

『あれ御覧、あれはキーキの悪い兵隊さんよ。』

『車屋だ。』

『さう車屋のやうね。』

御壕に鴨や鷗が、群集して、飛んだり泳いだりして水をバサ〳〵いはしてをると

『ア、澤山をるね、あの鴨どうしてゐるの、あの白いのどうしたの。』

『水の上でお遊びしてゐるの、あの白いのは鷗。』

『鷗、ア、〳〵飛んでら、どうして背が黒いの、黒い皮張り付けたのだらうね。アノ鷗どうしてあつちへ飛んで行くの。』

『あれは遊びに行くの。』

『どうして遊びにゆくの、あの飛んでゐるの、なに。』

『あれば鳶ね。』

『烏はどうして居らんの。』

『烏はをらんね。』

『烏どうして水の中にをらんの。鴨はどうして水の中にゐるの。』

この質問では、なんと答へたら分かるか、ちと困つて鴨は水鳥だから位にしておいたが、後で考へて見りや、『鴨は水の中にをるから、水にをるの、烏は水の中にをらんから、水の中にゐないの』と答へれば、澤山で、小児は満足するので、其以外の事いつて聞かしたつて何が解からうぞ。

近衛三聯隊兵舎の傍に來り。

『こゝはなに。』

『兵隊さんの居る所、今に兵隊さんが見えるよ。』

櫻田門外に出で、折柄空に鴨の大群の飛び行くのを見付けて、

『あれはお遊びにいつて、水の上へ歸つて來るの。』

櫻田門より右手の壕には鴨も鷗も稀れなり。

『こちらにはどうして鴨がをらんの。』

『をらないね、あそこにはをるわね。』

壕縁の板塀を見て

『こゝなに。』
『御家建てゝゐるの。』
『どうして御家建てゝゐるの、御家なかつたの。』
『なかたつの。』
『どうしてなかつたの。』
『なかつたから、なかつたの。』
『さう。』

三四羽の鴨が、水に游いでゐるのを見て、
『あれどうして大きく見えるの。』
『あれは大きいから、大きいの。』
『さう、先から大きいから大きいのね、先から小ちやいのは小ちいのね。』
『あの馬どうして歩かずに首ふつてゐるの、アヽアヽあのお馬よう走るね、ありや憲兵さんだ。』

何でも目に觸れ次第、この小兒にはどうしたのになる、そのどうしたのは、辛抱し切れない程澤山である、まだ〳〵是れどころではない、こちらもあまり澤山だつたから忘れて仕舞つたのが多い、以上にはまた往きと返りとの話が、混合してあるが、どうしたのゝ出かたは概略、かやうであつた、この對話で一つ學んだのは、小兒のどうしたのとの質問に答へるのには、なにも考へる事はない、考へたら却つて、小兒に解らない、何でも直覺的に、『大きいから大きい小さいから小さい有つたから有つた無かつたから無かつた。』として置けばよろしい、是れで澤山であるといふ事である、これはなにも今更始めて知れた事ではないが、此時いよ〳〵深くかやうに覺つた、讀者もこんな事は百も承知であらう、されど知つた上にもなほ〳〵注意して置くが肝要ゆゑ、こゝに書き並べた。

これと前にいつたことに併せて、幾分か讀者が小兒と談話をする事の心得にもなれば、記者の本望はこれに過ぎない、それに又一つは、小兒が質問のしかた、話の仕鹽梅をよく注意するは、此頃の學者が骨折つてゐる、小兒の性質の研究の足になつて、學問の道に少からず益を與へることが出來るのである。

百日咳の話

在郷軍醫　高橋房次

玉の様なお子供さん達や、愛くるしい弟妹をお持ち遊さる讀者諸姉の爲に、百日咳の事を一寸お話し致します、此の百日咳は充分昔から人に知られて居りました病氣であるにも關らず、至つてまだ研究が幼稚であります、病原につきましても色々な說がありまして、病原を發見したと云ふ大先生が六七人もありますけれど、一ッとして百尺竿頭の感がしませんが、何れ其の中に確定する事でありませう、よし病原が尚ほ混沌の域にあるとしても、一種の幺微生體によりて、人より人に感染する事は動かすべからざる眞理でありますから、能く一家の全小兒を犯すを實見する機會があります、百日咳の研究に就ては日本で大阪の長濱先生、東京の豐田先生などであッたと記臆して居ります、私も過去二年の間に百六十六人の患者を得まして、小實驗を爲し、一二の專門雜誌に述べた事もありました。

百日咳は如何なる方法によりて感染するかと云ふに、病毒に觸接するに起因するものにて、傳染毒の製造一手販賣と見做すべきは患者であります、故に患者に接近せしめず、且つ患者の衣服玩具等にも觸れせしめざるを要す、殊に恐るべきは咳嗽の咯痰であります、假初にも患者の手を觸れしものは含毒物として取扱ふ樣にしないと危險で、食器なども混合しないが必要であります、百日咳の感染は小兒に限られて居まして、偶々大人で罹患した異例を耳にしますが、夫は夜明の星よりも稀れな事で、先づ生れた時より拾二三才迄での小兒期に感染するもので、同じ小兒期でも年齡によりまして相違します、西洋では一歲が少なく、二歲三歲と多く、四歲五歲と漸次少なくなる樣であるが、日本では一歲兒に最も多い樣で、二歲三歲と漸次に減少します、私の調查では滿一年未滿の罹患兒は、實に全數の二十三％弱でありました、豐山先生長濱先生の調查も私のと略

一致したかの樣に覺えます、故に生れました當時より十二三才までは油斷がなりません、又罹患が男女性によりまして少しく相違します、西洋では女兒の多く罹患する樣に書てありますが、私の調査によりますと、反つて男兒に多いので、これは東洋と西洋との風俗の相違によりて、男兒の女兒に對して傳染せらる、機會が多いのではあらぬかと思はれます、豐田先生の統計も男兒に多くありました、男女兩性に就ては深き關係のある樣に思はれません、尙ほ本病は季節によりまして流行します、一番多く流行しますのが初夏より初秋迄でありますが、二六時中消滅せずに絕へず流行して居ます。

百日咳とは如何なる病氣かと云ふに、呼吸器を犯す、換言すれば空氣の流通する道路に、加答兒と云ふ變化を起す病氣であります、其の特徵とすべきは痙攣性の咳嗽でありまして、深い吸氣をなし、續て衝突狀に數多の咳嗽を見る病にて、老人に尋ねますと、何により早く分る事です、獨り痙攣性の咳嗽のみでなく、衄血と云ふ鼻腔より血液が出たり肺炎などゝ云ふ恐ろしい病を惹起したり、又は咳嗽と共に嘔吐などする事があります、稀に淋痺或は腦膜炎肺結核等に罹るを見たり、實に寒心すべきものです、本症は大抵一ヶ月半にて治療します。

百日咳を如何に處置するか云ふと、醫療を受くる事が最大要件で、動もすると、何に百日咳か、醫師の藥を呑んでも駄目だ、放ッて置ても百日を經ば療るなどゝ頑冥な事を云ふ人もある、大なる誤解で、前に述べた恐るべき病氣を惹起す事を知らない人達で、母たり姉たる人が注意すべきは、此の點であると思ひます、流行時にて近隣に患者が出來たら、病毒に觸れしめない樣に注意するは勿論、感冒に犯されない樣にするが肝要である、一度感染した後に殊に感冒を注意しないと、治癒にかたむいたものが再焰する恐れがある、患者は天氣晴朗の場合には庭園などを散歩せしむるか、或は春にして出で光線に浴せしむると、新鮮の空氣を攝取する事に奬勵すべきものである、患者の唾液咯痰等をふきたる巾類は度々新品と交換し、使用したるものは煮沸して再び

使用するか、或は焼却し、病毒の傳搬を極力豫防するは、患者を有する家人の義務であります、もし患兒が假然發熱不安等を呈したなら、何事を措ても醫師の玄關に走るべきもので、患者用の夜具は、毎日日光消毒をなし、襯衣を度々交換し病室（患兒常居室）の清潔換氣に注意、滋養食餌の供給、嚴重監視の下に、入浴等をなさしめるやうにしたいものであります、また他の病を惹起したる時は、夫れ夫れまた注意を要するのでありますが、藥療は本記の目的に非らざるを以て省略します、

飲食上の一注意

黄華女史

富を得んがためには如何なる困難にも堪ゆる人多き世の中に、富を得るの最大條件たる胃腑の健全を度外に置くは不思議の至なり、たゞに富を得るの一事のみにはあらず、およそ何事にまれ、その成効の要訣は隨つて健全なるべく、全身自ら病なきに至らん、健康の身體には自ら健康の精神の宿る道理なれば、其事業に成効するも更に怪しむに足らず、世には精神の身體に及ぼす影響の大なるを知りて、胃腑の精神に及ぼす影響の大なるには全く氣付かざる輩多し、甚嘆ずべきの至にあらずや

胃腑の健全を謀るには主として飲食及運動の注意を怠るべからず、

今世の人は其飲食に關して六種に分たるべし、曰くヒステリー家、好事家、節儉家、大食家、火夫、用心家是也、ヒステリ家は病人なれば別に論ずるの要なし、好事家の中には今は稀なる美食家をも含みて、すべて口腹の慾に徇ひて全身の健康などには少しも注意せざる人をいふ、

節儉家は其數頗る多し頗る肝要の階級たり、もし彼等にして肉體上の要求を精神上の要求と平等の位地に置かば、社會の最好人物は多くはこの階級に屬すべきも、彼等は往々精神のために肉體を犧牲として其結果は精神肉體を併せ害す、

大食家は其の自己を害すること節儉家よりも甚し、

こは何人も其知人間に有する世間有りがちの人物なり、茲に之が極端の例二件を引くべし、

ヨークシャイアの或士方は某家丁年の祝宴に招かれて食卓に就きしに、佳肴珍羞山なす計に盛られたり、彼は日ごろの食慾を滿足せしむるは此時なりと考へけん、詰め込み／＼て戶外に出て、指を喉中にさし入れて、胃腑に入りたる食物を吐き、更に卓に就きて他の珍味を貪るの余地を爲したりといふ、またラプーセーヤ氏は或貴人の饗宴に招かれしとき、貴婦人だちの大食に驚き、其記事を認めたるうちに下の如き一節なり、曰く一の貴婦人は先づ鹽漬の鮭をたべ、次に牛肉の大切、鳩のパイ、鰕の膾、鷄の一脚など、したゝかにものして、さてイチゴ、乳酪を喫し一休みす、少頃にして余は再びかの婦人の茶を飲み菓子を喫し居るを見、最早看飽きて散步に出掛けしが、歸りて見れば件の婦人はまたもや鹽漬の鮭をたべつゝ更に余念なかりき、余はその後の手際を見ずして立ち去りぬ、云々、かゝる大食の結果として起る病症は不消化、痛風、リウマチズム中風等なり、

火夫とは少し、ヲルター、ベサントの命名せし所にして、詮ずるところ大食家の一種なり、この名ある所以はその食物を口內に詰め込むこと、恰も火夫が石炭を爐中にさし入るゝが如きによる、火夫は火勢少しく衰へば直ちに石炭を入れる、大食家の火夫もまづ其の如く、口中空しければ直ちに食物をさし入る、食物の性質、如何其多寡如何は問ふ所にあらずかくて多量の食物をば急遽に胃腑に投入するの結果は、腦中の血管の一部に充血を來たし、ために思睡病、舌もつれ、口吃等の病を釀すべし、チャーレスチッケンスも其のマルチン、チャヅルウイットの中にポーキン夫人の下宿屋の樣を記し、大食家の事に及べり、されどサー、ヲルター、ベサントモチッケンスもたゞ觀察の筆に止まり、曾て其大事件たるを認めざりしが如し。

睡眠中に於て胃腑の精神に及ぼす影響は、晩食に對

食する夜は、惡夢に魘はるゝによりて何人も知了すべし、されど覺醒の時にありて胃腑の精神に及ぼす影響に至りてはこれを承認するもの殆ど稀なり。
何人にても一生涯の中には必ず憂欝に陷ることあるべし、これ多くは胃腑の狀態に本づくものなれど、曾てそを承認するものなし、吾人は時に物に懼るゝ病、物に激し易き病、憂欝病、物事を決斷する能はざる病を生ず、憂欝病の甚しきに至りては、自殺を爲すの外、殆んど救はるべき方法なしと思はしむ、是等の病は心の

女子教育講演會所見（其一）



擾亂に本づくにて、其第一原因は胃腑の不健全に在り、通例肺病として內々取扱はれたる病も多くは胃加答兒に過ぎず、その患者の瘦せ衰へたるを以て肺病と看做すも、實は大なる間違にして、食物をだに注意せば病氣の平癒疑なし。
飮食の用心家はその食物の性質分量及び之を食する時間をば、一に其身神をして共に十分健全の態にあらしむるに必要なるものたらしむ。
吾人は別に制限を設けざるべし、所謂用心家は食

を擇ばざる人たるべし、菜食家たるべし、禁酒家たるべし、適宜の飲酒家たるべし、喫烟家たるべし、何にてもよし、たゞ吾人が今定めたる原則にだに合すれば、皆用心家たるを得べし、この原則を十分に守りたらむには、彼がために享受する所の幸福いかばかりぞ

飲食の選擇分量及び時間に關しては、其の人の嗜好體質等によりて異るべく、一概には定めがたし、所詮は各人自ら自己を支配すべき法則たらざるべからず、されど吾人が心付きたる注意を述ぶるも決して無用の業にはあらじ、先づ食事は四時間乃至五時間を隔つべく、非常に骨の折るゝ働を爲したる場合に限り、少許の間食を爲すべし、朝餐は成るべく質のある食事たらむことを要す、茶及び珈琲は蛋白質の消化を妨ぐること多し、殊に歐洲にて用ゐらるゝものは品質疎惡なり、之に代ふるに苦味の麥酒一碗を傾くるを可とす、小晝飯には牛肉茶の一杯に焼麵麭の一塊、或は捩麵麭とバタ、之に牛乳の一杯など善

かるべし、晝飯は徐に喫するを可とす、且つ一日の重なる食事として心意上並びに肉體上の滿足を來たすべきものたらざるべからず、消化一方よりいはゞ幾品もの食物よりは一品のかた宜しかるべけれど、吾人は幾種も品換りたる食事を喜ぶ、ソップは一匙ほどにて善し、魚肉はバタソースを掛けずして食すべし、流行社會には習慣となり居れど、消化に意を用ふる人の避くべきは、晝餐の間に氷を喫することなり、晝飯に已に幾品の皿を盡したるときは一塊の氷を喫すれば一寸心地善く感ずれど、これ大なる心得違なり、胃中に氷を投ずれば、直ちに胃の消化を中止して再び働かざらしむ、氷は口中を爽かにする好品なり、適當の時に喫するを妨げず、午後五時の茶の代用を爲さば尤も妙なり、米國人が晩餐の間にアイスクリームを喫するも、晝餐後にアイスクリームを喫すると其有害なるや同じ。

飲料は各人嗜好を異にすれば吾人の助言を容すべくもあらず、吾人の嗜好よりいはゞ、晝餐間の飲料は

普通の香竄葡萄酒の一ピント（我二合六勺餘）にて十分なり、アルコールは食慾を刺激するの効あり、また過多の食慾に對しては之を減殺するの効あれば少量を飲用するを妨げず、

就寝前に飲料を要する人は牛肉茶の一杯を啜るを可とす、

之を要するに學術工藝商業等に成功し、また精神的修養を謀らむとするには、先づ胃腑の健全を謀らざるべからず、已に疾病を醸せば醫師に就くべきこと勿論なれど、單に加減の不快なるが如き場合には患者自ら之を治療すべし、食事に注意し、身體を清潔にし、適宜の運動を爲さば、多くは快癒の効を見るべし、胃腑の健全は實に萬事の本たり。

以上ナサン氏の說く所、歐洲人のために立論せるものなれば、其飲食に關する注意の如き、之を一々我國に適用し難しとするも、其大意は頗る參考に供すべきものあり、胃の健全豈疎略にすべけんや、飲食の注意豈忽諸に付すべけんや。

衞生雜話

島野達三郎

アルコールはこれを外用する時防腐劑たり、亦除毒劑たり、又アルコールの蒸發氣を肉中に透入せしめ、亦はこれを肉中に擦り込む時は、能く肉を硬からしめ、褥瘡その他之に類したるものを防ぐ効あり。

アルコールを內用する時は大に胃腑を刺激し、焮衝的徵候を呈せしむ、之を食物と共に用ふる時は胃中に下りて溶解し、この融解したるアルコール亦胃液を融解し、之が爲め骨の活動不活潑となり、大に消化を妨ぐべしされば、食事の際、補精藥を服するの利を唱ふる人もあれど、其効あると同時に又消化を

妨ぐるが如き大害もこれありとせば、アルコールの益たる僅かに斷し難しといふべきなり、

アルコールは其形を變せずして血液に混入す、斯くて身體の諸機關・諸部分に行き渡り、其所々にて吸收せらるべし、而してアルコールの此の所々に於ける作用は、彼の胃中に於けると殆んど相同じ、尤も此に誤解を惹き起し易き筋あれば聊か辯じ置かざるべからず、元來身體の機關健康にして異常なき限りは、アルコールは別に毒をなすものにあらず、又身體の諸機關、其の運動を全うせんとするには食物を要し、この食物は他の干渉なき限り、身體に吸收せられて滋養分となることとなるが、アルコールはこの作用を妨ぐ、故に此點より見る時は決して無害とは言ひ難し

現今學術の應用大に進み、料理の方法亦頗る改りたれば、只補精、興奮の爲めならば、他に何程も其方法あるべし、無害とは言ひ難きアルコールにのみ其力を假るは要なき業ならむかし。

自轉車

自轉車は「フート、ボール」、競走、短艇競漕等に比し、穩和の運動なれば、男女共に用ゐ得らるゝ運動の良機械なり、

自轉車の種々なる疾病に特効あるは、世人の已に洽く研究したる所なり、而して其特効といふは車行それ自らにはあらで、其一定なる徐動が、他の穩和なる諸運動に優れる効能あるに相違なし、

自轉車乘用の結果として肥大の人は痩せ、痩せたる人は肥大となること、世に其例多し、これ餘分の脂肪、不當の羸痩は共に不健康の徴にして、此の徴候は自轉車の肝臟を刺激するより癒ゆるなるべし

又自轉車の運動は、心配過勞より發する腦病に甚だ効あり、腦病より發する不眠症の如き、種々手をつくして其効なかりしものが、自轉車によりて効を奏せしこと其例に乏しからず、

頑固なる轉筋は規律を定めて自轉車に乘ることにより、全く根絕し得らるべし、神經痛、歇私的里亞病

頭痛、心臓動悸、その他脳髓に原因する一切の病氣は、日々自轉車を用ゐて、一定の運動をなせば、大抵療治し得らるべし

健康強壮なる人は自轉車を用ゐて餘り疾走し、餘り遠行し、之が爲め疾病を起すことあり、青年の人に於て殊に然りとす、是れ自轉車の罪にはあらず、



自轉車によりて遠行をなさんと欲せば、能く衛生の規則に注意せざる可らず、即ち固形體の食物は朝夕兩度之を用ゐ、晝餐は成るべく輕きものたるべし、又甘き飲料アルコール質の飲料は疲勞を多からしむるが故に之を禁ずるを好しとす、又食後直ちに之に乗用すべからず。

病室の注意

看護人の注意すべき一要件は、病者の口中果して清潔なりや否やといふこと是なり、されば食後には病者をして嗽がしむることをを忘るべからず、

口中不潔なるか若くは酸敗したる時は、病者は之が爲め得て食慾を減ずるものなり、特に牛乳は其口中にあること久しければ、酸酵して食慾を損じ、亦消化を妨害する黴菌を發生せしむべし、故に是等の害を來さゞる前、豫め口中を掃除することを忘るべからず、

病者唇乾く時は冷たき乳皮、若くは『パスリン』を用ゐて之を濕すべし、『リスリン』を用ふるは不可なり、病者に食事をなさしめ、亦は服藥せしむる時に頭を擡げしむる必要あらば、枕の下に手を差入れ靜かに枕と共に其頭を擡ぐべし、斯くすれば病者大に愉快なるを得べし。

病者は一口を嚥み下して後ち、更に一口を啣む樣にすべし、これは激烈なる咳を防ぐ秘傳なり、食事服藥共に此に心すべし。

飲器は小さきもの可なり、亦此中には三分の二以上を盛るべからず、凡て渴ける病者は大なる飲器に水を滿たして之を飲み干すべからずといふよりは、小さき飲器の水を悉く飲み盡さしむれば却て滿足するものなり、

食器と服藥器とは必ず之を別にするを要す、然らざれば思想の關聯により、食慾を減ずべし、甚だしきに至りては嘔氣を催さしむべし。

凡て食物は不時に之を與ふべからず、又看護者何事をかなして手の汚るゝが如きことあらば、力めて病者に見ゆる樣にして其手を洗ふべし。

重病者は食事と服藥との外は、隨意に之をして安眠せしむべし。

夜間には、何等かの食物を供へ置き、病者の之を求むる時、必らず狼狽せざる樣準備し置くべし。

思付きたること

工學士　草野公羽

紙發火器

普通の紙をもて紙火器を製せんとするには、左の諸液に浸したる後、之を乾かし、さて燥きたる場所に貯ふるものとす

第一、醋酸化鉛四百グラムと硝石五十グラムと一リットルの水に溶解したるもの

第二、硝酸化鉛四百グラムと鹽酸ポッタース五十グラムを水一リットルに溶解したる液

第三、鹽酸ストロンチウム二百五十グラムと硝酸鉛二百グラムとを水一リットルに溶解したる液

第四、鹽酸ポツターース二百五十グラムと硝石百グラムを水一リットルに溶解したる液

(記者曰、一リットルは凡そ我が五合五勺に當り、一グラムの目方は我が二分六厘余に當れり)

大理石の碎けたるとき

大理石の碎粉二分に、蠟二分、樹脂一分の割合を以て混合し、火にかけて少しく柔軟にし、之を煉りて缺けたる處を補ふべし

井水消毒法

多くの病、殊にチブスの如きは水に因て傳はること、人々の能く知る處なるが、げに人家稠き市中の井は、恐るべき病毒を擴むるための黴菌養成所ともいひつべし、さてその毒を撲滅せんには、一の容器に五十乃至百グラムの臭素を盛りて、これを井中に釣るすを要す、臭素は誰れも知れる如く、いと力ある消毒劑なるが、その瓦斯は空氣より重きがゆゑに漸次に下降して水中に入り、よりて黴菌を殺すものなり、かく水中に溜つて溶液となりたる臭素は、その量亦水より重ければ、遂には水底に沈澱すべし、但し臭素の入りたる水は、當座の間は厭はしき味を有すれども、その沈み了ると、ともに、臭味は全く消へ去るものなり

かな物磨き方

すべて金屬器の久しく用ゐて鏽び汚れたるには、椰子石鹼(椰子實の油にて製したる石鹼)に硝子粉または金剛砂を混じて磨けば、容易に落つるなり、是れ石鹼は化學作用により、硝子粉もしくは金剛砂は器械的作用によりて、金屬に附着せる鏽と汚垢とを奪ひ去るに依れり

銅の上ぬり

磨きたる銅に上塗するは、アルコール半リトルに雞冠石五十六グラムと松脂十四グラムを溶かし、之にグリスリン五滴を加へて、よく混和したるものを塗抹するものなり

鋼鐵鈑に物をかく法

木片を硫酸に浸し、これを筆として鋼鐵鈑に物を書けば、文字なり模様なりは、その明晃々たる上に純白に現はるゝなり、若し最と明白に現はさんには幾度もなどるを宜しとす

水を彈く麻布

普通の明礬水中に卵子の蛋白を溶かし、さて麻布を之を浸すべし、水をはぢくこと妙なり

消防彈

左の諸品を溶したる水を混ぜて瓶中に蓄へ置き、スハ火事よといふとき之を取て投げつくれば火は忽ち消ゆるなり

水二十リットル中にコロール化礬素二百グラムを溶したる液

水十リットル中に粉末にしたる燒明礬三百五十グラムを溶したる液

水五リットル中にアムモニア化硫酸鹽の粉末三千キログラムを溶したる液

水四十リットル中にコロール化曹達二キログラムを溶かしたる液

硝子溶液（硅化ポッタース）の二キログラム五、以上の混液更に二十リットルの水にて解きゆるめるなり。

簡便毛ぬき法

生石灰粉十グラム、硫化水素曹達三グラム、澱粉十グラム、以上三種を少許の水にて解き、これを毛を拔かんと欲する部分に塗抹し、半時間の後拭ひ去るべし、即ち毛拔け落ちて復た生へず

硝子器を青く染める法

丁寧に細末にしたる雲母と普魯西青とを、薄き護謨水に溶かし、これを硝子器に塗るべし、塗り方の多少は色の濃淡の好みに因るべし

爪の化粧

重酸化錫を以て爪を摩擦すれば、好き香を發し、美くしき紅色となる、指又は獸皮にて摩擦すること鼈甲などを磨くが如くすべし

玻璃を青く染める法

アルコールもてアニリン青を溶かして、無光澤玻璃に塗るのみなるが、これは寫眞術に必要なるものなり何となればこの青玻璃に映ずる形象は皆一色に見え且つ光面の强さを明白にし、從つて種板を鮮明にすればなり

薫ゆかしき文字

書きたる文字より、馥郁たる香氣を發せしめんには、通例の香料にては不可なり、通例の香料にてはいづれも油氣を存して紙を汚し、且墨をはぢきて字を書き難し、西班牙革を用ふるを宜しとす

西洋料理と製菓談

上野精養軒菓子料理主任　野村龜一

一口に西洋料理と云へば、一皿五錢八錢の「ビフステーキ」も一圓乃至二圓の物も別に大した違ひは無いのである、が、併し同じ品でも其樣に相違のあるのは何故かといふに、畢竟材料が異ふのである、尤も私は現今精養軒の西洋菓子料理の主任である、左れば私の外には、牛肉燒肉または「スープ」と云ふ、が如く、すべて十何人といふ者が各自に分擔して居る、それにも關はらず、菓子料理の私が他の範圍に立入つてお話を爲ると云ふのは少しく見當違ひのやうに思はるゝか知らんが、一體精養軒の料理人は如何しても初め一旦下の方より順々に一應は修業させらるゝのであるから、縦へば牛肉主任の者であるからと云つても、決して燒肉が出來ないと云ふやうな不便は無いのである、況して小生は若い時分から精養軒のお世話になり、その後船舶にも乘り、又は外國へも行つて來て、今また此所に居るのであれば、之がお話を爲たとて敢て僭越でもあるまいと思ふのである、依つて道具立や獻立法などゝ云ふ六づかしい事は除外と致して、チョット家庭に於て最も簡單に出來て、且つ味の美い物を一つ二つ述べて見やう、

コロッケー

これは粉を用うるのが通常であるが、その粉の代りに馬鈴薯を使うのも妙です、それは所要に應じて適度の分量を湯茹て、之を裏漉にかけて漉すのである、次に鷄肉は小さく角に切つて茹であげ、之を前の馬鈴薯と鹽胡椒等の藥味、之は各人の嗜好に應じて加減鹽梅するのである、是等數種の物を混合して爲らば、鷄卵をつけ、パン粉を附けて最も十分に煮沸せる所のヘットにて揚げるのである、こゝに注意すべき事は、よく世間で之を造つて出すのを見ると兎角外皮が剝けて中身が飛出すが、之は餘り多く中身を包むからである、それでは折角の御馳走も不味く見えるものであるから、面倒でも成るべく少しづゝにして製しさへすれば決して其樣見づらの惡いもの、出來るものでは無い、依つて此點を注意して貰ひたい、なほ一つ云ふべきことは外でも無い、ヘットを十分に熱することで、若しこのヘットの煮立方が不十分であると、謂ゆる外皮が剝げるのである、

牡蠣のフライ

牡蠣の大小に關はらず、すべて一旦清淨な布帛類の上に列べて濕り氣を取り去り、之に鹽胡椒等を適宜に加味して、餘り澤山に握るときは、揚げて後外皮の落る憂ひがあるものなれば、其所は手加減に程好き大きさに握つて、之に鷄卵を附け、パン粉を附加して揚げるのである、これも揚げるときには十分ヘットを煮沸せなければ爲らぬ、その理由は前項と同樣である、

犢のシチウ

犢を一寸角程に切つて、凡そ二十分乃至三十分時間湯茹、之を掬ひあげ、その茹で湯の中へ温飩粉を入れ、マヽコの出來ないやうにドロ〳〵と爲し、此の中へ前に引上げ置きし犢を入れ、別に長さ約八分丸さ約五分程に切りて茹でたる人參馬鈴薯その他好みのものを同樣の手續になしたるものと共に混入し之を釜中に入れて煮るなり、但し味は各人の嗜好に從つて鹽梅せらるべきものである、

以上は最も簡易なる料理法であるが、こゝに菓子

の製法を一つお話し致さう

英語にはカスタドー、プリンと云ひ佛語にてプウーテング、アラビヤセーと名くる所の菓子は、一個およそ三錢位の鷄卵七個を鉢の中に碎き、更に杉箸數本を以て克く黄身と白身とを攪き交ぜおき、次に上等の牛乳四合を鍋にて熱く煮立て、その中へ舶來砂糖なれば凡そ半斤、若し之れ無きときは上等の三盆砂糖を七分五厘程を投じ、次に前の鷄卵を混じ、之を蛇の目形と稱する器に入れて火の上にて凡そ四十分間位蒸すのである、けれども器は必らず蛇の目形に限つたことは無いので、かの罐詰の空罐の格好なるものを見計らつて應用すれば宜いのである、而して員數は一つに作らうが三つ乃至五つに製しやうとも、それは製作者の隨意である、たゞ數を多く作るにはそれだけ空罐を要するのみである、これは此くの如く簡單なる製菓法であれば、時としてはお客が見えてからでも直ちに作り得るのであれば、皆樣も一つ試して見らるゝが宜い、

開鱈の料理

氷見の里人

電車に乘るたびに目につくのは開鱈の廣告であるそれは日頃あまり嗜まぬ鱈の、如何に料理すればとて食はれるものではない、と思うて居るに、この鱈一式の料理が上野觀月橋畔で味はれるとの事である併し右の次第であるから未だ一度も箸にするの機會を得なかつた、所が燈臺下暗しで、近所に日本漁業會社といふのがあつて、この會社の營業はこの開鱈販賣の專門である、來客に鱈を好む人があつて、近所を買ひ歩いたが無い、そこで今まで漁業會社と云ふので氣付かざつたが、鱈の見本が出て居た所からそれを買ふ事にして、客にその風味はと聞くと、普通の鱈とは違うて、風味も立まさつて居る上に、料理法に就ても研究を經たとの事であるから、その料理法を紹介するは、臺所には兎角苦心の多い折柄不

必要なことであるまいと、こゝに開鱈料理法を聞いて、受賣をする次第である、

此開鱈はオコック海にて捕り、直ちに放血法を行うて、頭、脊骨、臓腑等すべて色澤風味を變化せしむるものを取除き、それを洗滌して鹽漬にしたものである、風味は蛋白質に富み、他の生魚と比較することは出來ぬが、多くの人の口に適し．滋養の上から云つても、牛肉鯨肉など〻伯仲の間にある．殊に鹽漬にしたものであるから、貯藏の便もあり、その價の廉なる所より、割烹稽古の材料、又他の生魚の代用などには最も適して居る、

この開鱈を料理するには、鹽を抜くことが大切で、まづ水に浸し置き、タワシにてよく外部を擦り淨め適宜の太さに切り、通常の鹹水位にしたる鹽水の中に浸し．十分間乃至五十分を經て料理するので、鹽抜の時間の長短は、時候の寒暖、及び鹽の種類によつて加減し、又鹽の抜加減を見るには、肉の小片を切取り、それを炙つて風味すれば確かである、

うま煮

十五時間乃至一晝夜ほど水に浸し、鹽出したる鱈を細かく切り、鰹節を入れて、獨活、里芋、胡蘿蔔などを附合せ糖砂醬油にて煮る、蕪と煮れば尤もよろしい、

膾

まづ鹽出しをし、刺身のやうな形狀に厚く作り、更に湯煮をし、小皿に盛り、辛子酢をかけて出す、取合せは何でもよいが、獨活は一番結構である、

酢のもの

能く鹽出したる鱈を茹でこぼし、細かに切り生酢に三十分ばかり浸し、能くほぐして、針生姜、粉山椒を添へて、甘酢をかけて出す、

燒き物

皮を剝ぎ薄く四角に切り、凡一時間計り水に浸し鹽氣をぬき、串に刺して、日に乾したる後燒きて味淋をかけて用ふ、

吸ひ物

鹽鱈の切身を水に浸し、鹽氣をぬき、青昆布などゝしらひうしほ煮す

田麩

鱈の皮を剝ぎ水に浸して鹽氣をぬき、之を乾わげて能く骨を去り、細く裂き擂鉢にて擂り、纖維の如くなし、味淋と砂糖とにていりあげる

フライ

皮を剝ぎ骨を去りたる鱈を水に浸して、鹽氣を拔くこと約十五六時間の後、水より出し、能く水を切り、三分位の厚さに切りて、普通の魚のフライの樣に取扱ふ

女子教育講演會所見（其の二）



バターソース掛

皮を剝ぎ骨を去りたる鱈を水に浸すこと、前のフライの時の如くし、之を細く裂きて、豫め煮立て置ける湯の中に投じ、沸騰するを待ちて火より卸し水を切り、更に火に掛けて殘餘の水分を蒸散せしめ之をあたゝめたる皿に盛り、とかしたるバターをかけて食す

フイシユボールス

冷水をたつぷり盛れる鍋の中に、細に刻みたる鹽鱈の肉を約三合計りも容るゝ皿一杯と、又厚く切りたる生の馬鈴薯を同

じ大さの皿に二杯と共に入れて、煮立て馬鈴薯の全く煮熟するを度として、火よりおろし、水を切り摺粉木樣のものにて能く搗きまぜ、之に凡そ雞卵位の大さのバター一塊を能く攪拌したる雞卵一個と、及びクリームか、又は濃き牛乳三茶匙を加へて尚ほよく搗きまぜる、然る後手に饂飩粉をつけて、之を適宜の大きさの團子となす、次にフライ鍋に凡八匁許りのバターとラードとを、融かし之にて右の團子を美麗なる褐色になる迄揚げる、それから鱈肉と馬鈴薯と與に煮る前に鹽氣を拔いてはならぬ、又多くの料理人は普通バターの代りにラードを用ひて居る

コッドフィシュ、ア、ラ、モード

細かく裂き且つ鹽氣を去りたる鱈肉を、コーヒー碗一杯能く搗きまぜたる馬鈴薯同じく二杯、クリーム又はミルク約三合、能く攪拌したる鷄卵二個バター半杯、鹽及胡椒適宜、以上の品々を能く混合したる後、土製の燒き皿に盛り、ストーブに入れて燒くこと二十分時乃至二十五分時間の後、其儘取り出し少く盆に載せてナプキンにて被ひて出す

スチュード、ゴッド、フィッシュ

鱈の白くして厚き肉を取り、少時の間水に浸し、容易に細く裂き得るやうになりたれば、細く碎き、水と共にスチュー鍋に入れ、火にかけ、沸騰するを待ちて徐々に水を切り、これに牛乳三合計りを加ふ、斯くて之を再び火に掛け、凡そ三分時間徐々に煮沸せしめたる後、相應に大なるバターの一塊を加へ胡椒を撒りかけ、冷きミルクにてクリーム位の濃さに饂飩粉を溶したるものを加へ尚ほ蒸すこと五分時間の後之を食膳に供せんとする前に當り、能く攪伴したる卵二個を入れて攪きまぜる、卵はなきも風味は十分なれば省きても宜しいこの料理は朝餐には殊に賞用せらる、

エスカラップドコッドフィシュ

約半ポンドの鱈を三分時間計り水に浸して鹽氣を拔き、之にソーダビスケットを粉末になしたるもの約三合、バター一茶匙、及び少し攪拌したる鷄卵四

個を加へ、適宜に鹽梅したる後狐色になる迄燒き冷えざるやうにして出す、

クリームド鱈

極めて細かに碎きたる鹽鱈の肉をザッと水にとうしたる後、木綿片にて絞り、之を茶碗一杯にミルク二杯バター一茶匙を加へ之を沸騰するまで煮て、之にコーンスターチ一茶匙及び能く攪拌したる卵一個を加ふ、これはトウストにつけて、食すれば極めて美味である。

ホワイトクリームソースかけ

鹽氣をぬきたる鱈をゆでゝ之に牛乳を煮たて、バターを適宜に加味し饂飩粉をとかしたるものを加へて製したる、ホワイトクリームソースをかけて出すのである。



裁縫の話

村上匿子

先づ自分の耻からお話し申さねばなりませぬ、元來私は幼少の頃から針を持つとが嫌ひでありましたから、小學時代の成績中、他の學科とても差して好い筈はありませぬが、わけて裁縫は劣つて居りましたそれでも自分はあまり殘念とも思ひませんでしたが、常に母より後に困るぞよと訓誡されながらも、如何いふものか裁縫は勉强する氣になりません、その後丁度十二才の暑中休暇の折、母がこれを一人で心してお解なさいと申されました、今考へますと本裁女物單衣でした、その一人で心してと云ふ語に大層力を籠めて二度まで繰返されましたから、少し變だとは思ひましたが、もと〳〵面白くないのが半分ですから、まるで無我夢中で解てしまひました、所がその翌日になりますと、本裁女物單衣の裁つたまゝの物を渡され、且つ云はるゝには、私が生立つ頃

には十才位から立派に綿入を縫ひました、それと比ぶれば、最早御身は十二才にもなり、殊には昨日これと同じものを解たのであれば、よもや縫へぬともあるまいと申され、初めて左樣であつたかと氣がついても跡の祭り、大に途方に暮ましたが、何分この時分はまだ學校では單衣の袖の部分縫ばかりを敎はつて他の事は知りませんから、從つて身頃等の箆の附方さへも分らず、ほと／＼困りましたが、やうやく他の單衣を手本として覺束なくも形ばかりは作りましたが、それよりして後は、不思議にも他の學科と成蹟はやゝ平均してまゐりましたので、初めて成程といふ念は起りましたが、まだ／＼興味と云ふまでには至りませんでした、その後高等三年まで進みまして、それまでは是と申すとも有りませんでしたが、此の級に進むと同時に退學せねばならぬとに立至りました、と云ふものは如何なる譯かと云ふに、如何にも裁縫が出來んと云ふのが第一の理由でありましたこゝに至つては私も甚だ殘念にも思ひ、また

先生方も言を添へて下さいましたが、いつかな母が承知いたしませんで遂に退學させられました、それよりは私も大いに前非を後悔いたして、毎日母の膝下で解き物をいたし、または參考の書類等を友として、一向に裁方縫方等を研究いたし、いよ／＼分らぬ場合には母に尋ねますと親切に敎へて下さいました、兎角する中に、此く何日まで家庭のみでは爲にならぬと云ふ所より、維新前島津侯の呉服の間を長らく勤められた某と云ふ老女の許に托せられ、此所にて二年間ほど裁縫の敎授やら、または女今川風の訓育を受けましたが、不圖陰鬱性の症に陷りましたので三十八年に東京に出て某校に入り、また／＼裁縫の敎育を受けました、何うにか斯うにか裁ち縫の出來るやうになりました。

今日になつて過し昔しを顧りみますれば、誠に幸福なる身であると思ひます、私は幼少の頃から偏窟と云ふ方で、お友達と飯事や人形の着物を縫ひなどして遊ぶとが嫌でダヾ一人で自分の嗜好な遊びを致

して居りましたので、親戚や知己の人々は、この子は女子として育てるよりも、寧ろ自分の好める道を學ばしむるが善いと頻りに勸めましたが、母はナカナカ聞入れませず、且つ云はるゝやう、それは確かに天才であると云ふならば格別です、けれども僅の事の爲に一生不具の女子を造らねばなりませぬ、私は此の子を普通の女子に仕立てたいと思つて日夜心を勞して居りますと答へましたが、その當時は皆無母の言葉の意味を解するヿが出來ませんでしたが、今考へますと、私は迚も特殊の技藝を以て身を立るとは出來ぬと覺りますと同時に、平生着物の仕立にはいたく不自由を感じませず、一つの打擊を以て改過の念を起させたり、また方便のため一時放任されましたのでアーカウと幾度となく縫ひ直しましたので知らず〳〵その呼吸も知れ、また衣服仕立の巧拙にも注目して其方法の如何を考へ、いつとはなしに夫に對する忍耐力を養ふやうになりましたのは、これ全く母の賜物であると思つて居ります。

況して斯道に發達すべき天禀の才を有つて居らるる方々は御勉強次第で必らず立派なる技藝家にならるゝことゝ深く信じて居ります。

尙ほ他の方々は知らず、私がまだ十五六才の頃から思ひ當りました利害に就て今一言申し述べたいのです、それは裁縫を爲る時に自然に前屈みになることであります或醫師の談に裁縫師には兎角心臟を患ふ者が多い、此頃も一人あまり心臟が妙に歪んで居るから、よく〳〵聞糺した所が二十年前に仕立屋を爲て居た者だと申したさうです、乃で私の考へますには、仕立屋職人といふ者は、一種特別なる腰附をして朝から晩までその姿勢ですから、自然足の運動が不足なのと血液の循環が惡い爲では無からうかと察します、なほ一つには陰鬱になりますと、之は自分も覺えがありますが、去とて常に氣が散じて鼻歌を唄つたり傍目をするのは無論不可ませぬ、必らず常に氣を落付けて心を高尙に且快活にして、その仕立上りの樂しみを豫期して致さねばなりません。

其他最初は豫知して居るとでも指導者の言によく從ひ、若し不審の個所あらば心に納得するまで質問するが宜いです、また稍進んでは、人の仕立てたる物に注目して、若し事情が許さるゝとならば其局部を解て確めることが必要です。

元來研究としては一通の方法を修得しますれば、その他は餘り師にのみ拘泥せずとも、或は自身に工夫し又は參考品に注意し、若し新たに得たる所は師に就て其利害を問ひ、更に彌が上にも研究するが宜い、縱んば自分の流儀と異つて居る事でも確に良い方法であつたならば必らず其を採り用ふるやうに爲べきである、併し初歩の内から餘り彼の此のと迷ふてはならぬから、稍上達の後でなければ取捨の應用のと云ふことは愼しむべきことである。

裁方に就きましては、舊式に依れば直ちに其布の總尺を計つて袖身頃と順々に取つて行きますが、それも普通の裁方ならば宜いが、中巾大巾もの丶變則裁になると、是非一度は掛引と運算とを要します、また雛尺について種々のお説もありますが、此は全然廢さねばならぬといふ程でもあるまいかと思ふのである、尤も人形衣のやうな物のみを作つて居られぬから、吾師は雛尺に合せました裁紙と云ふものを常に備へ付けさせられました、これは凡て尺によつて掛引を致しますと、全體の比較もよく取れます、左れば節約裁合せ等には必要であります、斯樣にして其布を裁たうとする時は、掛引と積方の運算をして、兩面物片面物の別を考へ、汚點糸斑等の個所を檢べた上、疵所はそれ〳〵見えぬやうに注意するのである。

云ふまでも無く裁方は縫方とは異つて、一たび誤りますと最早二度と取返しのつかぬ疵物にせねばならぬから、よく〳〵心を用ゐねばならぬ、さりとて裁方や積方に一日を費すやうでは困る、依つて心を落付けて迅速に爲ることが肝要である、私が先年のことですが中巾物友禪染の布で二枚の三身裁の被布を裁合せやうと致しました時、節約裁に爲さねば布

が足らぬので、いろ〱と割出しに苦心をして、掛引したり運算を爲したり、それが爲め非常に時間を費して大層老人に笑はれました、成程いかに方法なりとも、熟練を經ねばならぬものである、斯樣の事から多く新舊の衝突が起るのではあるまいかと思はれ、少しく話が傍途へ外れたが、何にいたせ斯樣の譯ですから、裁方には格別に應用の知識を要し、運算殊に暗算を鋭敏に致さねばならぬ、サテ鋏を持つてイヨ〱裁つ時には成るべく布目の歪まぬやうに注意を要するのである、之も舊式の方は、糊氣が其部分だけ落ちても又は少々無理でも布目通り一枚一枚に裁ちます、成る程これは後日の爲には宜いのです、が、更紗や金巾の類などに至りては到底布目通りにはまゐりません、之と反對に板の上へ平に何枚も重ねて篦通りに衿肩等を明けますと、縫直しの際に糸が解れて、殊に浴衣等形のまゝ水に入りますと忽ち狂ひを生じて來ます、此く眞直に裁ちましたものと斜に歪んで裁つたものとは、後日經濟上に大層な差を生じて來ます、けれども之は何うも一得一失で、布目の眞直なるものは宜いけれども、弓形または斜形になりました物は、それも地質の厚いと薄いにも由るが、出來得る限りは矯め直して、その後は双方共に宜い工合に斟酌を加へねばならぬのである。

嬰兒に對する注意

霞袖女史

人の初めて生るゝ唯啼くのみ、乳房を口に含ましむれば僅に之を吸ふことを知るの外、眼を見開けども見えたりとは覺えず、手を觸るれども感ぜるとは覺えざるなり、然れども人生教育の初歩は實に此時よりぞ初まる、此時に於ける最初の感化は、洵に終生中最大の感化なるを見るべし、故に人の母たるもの、及び嬰兒の介抱に當るものは、須らく此時よりして、已に充分知覺あるものに對する覺悟を以て之を取扱ふを要す。

即ち第一に充分の從容和樂を以て之に對する事肝要也、例之ば嬰兒の最も幼きもの丶如き、乳房を含ましむる時は、容易に飲みつゝかずしてうるさく啼くことあるものなり、而して之も晝間よりは寧ろ夜深くして、産後の疲勞したる母が、極めて睡き時などに往々あり勝の事なれど、斯の如き際、母たるもののいらだちあせる事あらんには、兒子の軟かき神經に感ずること極めて強く、其泣聲の著しく甚烈を添ふるを見るべし、母の心狀は常に其子の心狀と相渉り、兒子異日の氣象に關ること大なるものなれば、人の母たるものは、特に心の和樂從容を保たざるべからず。

是れ獨り其精神上に於ける現象のみならず、母が喜怒哀樂の劇しき情緒を動かすに當り、其兒に乳して忽ち其死亡を來したりと云ふ如き、古來稀有の例にあらざるなり、

第二には先づ秩序の慣習を付すること肝要なり、一例を擧ぐれば、嬰兒の啼くが爲に時間を一定せずして乳を與ふる如きは、遂に兒子を我儘者にして、少しく食慾の動くことあれば、直ちに泣號し、以て其母に暫らくも手を放すこと能はざらしめ、甚しきは爲に其腸胃を害して、不釣合に其腹部を膨大ならしむることあるが如し、善き慣習も惡しき慣習も、數日ならずして付せらるゝものなれば、世の嬰兒を有するものは大に注意すべきことなり。

第三には嬰兒の獨立心を養ふ事肝要也。嬰兒は其初開きたる空氣の中を恐るゝものなれば、宜しく之を産衣に包みて暖かにし、而して成るべく一定の時間を獨り臥さしむべし、若し之を愛するの餘に、其母若くは祖母等にして始終之れを抱居る事あらば、忽ち獨臥を嫌ふの習癖を生じ、遂には夜中も之を抱居るにあらざれば、眠らざるに至る事あり、而して嬰兒の獨臥は實に其獨立自治の最始なるを知らずや。

要之以上は其極て手近き者の一端に過ぎざれども此日に於ける感化は、實に其人一生の模型の定まる所なれば、微細の事迄も大に注意する所なかる可らず



男女交際と歐米の風俗

文學博士　井上哲次郎

たゞ男女交際と云うても、漠然交際と云ふたのでいろ〳〵な意味に取らるゝか分からないが、交際は讀んで字の如く、即ち品格ある社交を爲すことである、夫に外の秘密の關係は私の問題の關する所ではない、夫で社會に於て男女兩性の交際の必要があると云ふことは、云ふ迄もないことであるが唯一言丈述べて置かう。男女兩性は餘程違つた所があるから、此の兩性の交際は自然に相互に補つて行く所があるのである、相互に補つて行くのみならず、餘程是迄の日本の社會の弊風を矯めることが出來るだらう、其の弊風なるものはいろ〳〵あるが、要するに是迄の社會の極めて大いなる弊風を矯めることが出來るだらう、其の弊風を矯むるの結果たるや、男女兩性の品格を次第に高尚に爲して行くことが出來るに相違ない、兎に角吾々は我國現在の男女の交際に滿足することが出來ないのである、其中に多少我國に固有なる良風俗があるにしても、大體に於ては滿足が出來ない、何とか改良をして行かなければならぬ、さう云ふ事は確かな事實である、今日の男女交際の狀態と云ふものは餘程索寞たる有様である、西洋の社會の狀態に較べると此交際上から起る愉快なる現象が缺乏して居ると、思ふ之は男子の罪である、男子が餘程女子に對して粗暴なる事をやつた結果、女子が兎角引込思案になつて、男女の交際が圓滿に行はれないやうになつたのであらう、乍併女子の

方も多少の罪は免れぬと思ふ、男子の方は元來女子より力が勝つて居るから、男子の方を深く罪せんければならぬのであるが、女子も亦罪を遁るゝ譯にいかぬ、男子ばかりに罪を負はせる譯にいかぬ、女子も夫に應じて來たと云ふ事があるに相違ない、乍併過去の男女の罪を今更鳴らした所が還らぬことで、之は愚痴である、今日過去の日本社會の罪を左樣に述立つても之を如何ともすることが出來ぬ、夫は最早過去つたことである、夫を何時迄、クョ〳〵考へて居れば、唯病氣になるばかりであつて、何の役にも立たぬ、夫よりは今後社會を改良して段々愉快なる結構なる有樣に爲して行くに如くはないと思ふ、過去のことはモウ已に過去つて致し方がないが、將來はどうでもなる譯で、生て居る人が段々計畫して斯う云ふ工合に社會を仕向けて行つたら善いぢやないかと相談し、さうして互に承知をしてさう云ふ風に社會を仕向けて行けば、社會が段々良くなつて行くことが出來る、自然に社會が良くなれば善いと云つて、打棄て置て社會が良くなると云ふことはない、進んで斯うやつたら善いと云ふことを實行して行くに如くはないのである、ソコで男女の交際を改良すると云ふことに就いては最早異論はないと思ふ、

そこで直に改良の方法に就て平生思ふて居る所を述べやうと思ふ、男女交際の改良法を直ちに日本に取て來てはどうであらうか、之も一案である、西洋の交際法は餘程善いところがあるから、夫を日本に一日も早く引入て來ると云ふことはどうであらうか、乍併西洋の交際法は如何に善良なる所があつても、輕卒にそれを日本に引入れて來ることは危ない、何分日本は舊國であつて二千何百年と云ふ歴史を持て居る所であるから、なか〳〵堅くなつて居る古來の習慣がある、其中には又日本固有の良風俗もあるから一概に西洋の風俗が善いと云つて輕卒に狼狽へ出すことは宜くない、又西洋の風俗と云つても漠然たる事で、國に依つて多少風俗が違ひまして善い所もあれば善くない所もある、だから決して西洋

の風俗が斯うであると云つて狼狽へて夫を入れると云ふやうなことは全くハイカラ流の仕事である、それで西洋の風俗と云うても、ちよつと序に參考迄に言つて置くが、西洋では何處が一番風俗が良いかと云ふと、私の見る所では歐羅巴では英國に勝つた所はないと思ふ、殊に男女の交際に就ては英國が最も學ぶべきもの丶多い處であらう、夫から其次は獨逸であらうが、獨逸は餘程質朴な所がある、少し佛蘭西に較べると田舎じみて居つて、兎角田夫野人の模様がある、けれども其代りに質朴であつて、又なかなか堅い所がある、所が佛蘭西はどうも英國に較べると男女の交際の道がズッと劣つて居る、先づ英國が第一であつて、獨逸が夫に次ぎ、佛蘭西は又其次である、夫から米國は之は必ずしも惡いと云ふのではないが、どうも女子の風が――餘程女子の權力が强い爲に、獨逸や英吉利よりはモッとお轉婆と云ふやうな所があるやうである、夫で日本の如きは是等長所短所の存する處を見て、段々折衷して其善い所を取て來たら宜からうと思ふ、西洋の交際法を日本に引入れるに就て用心しなければならぬことは、是迄の風俗に能く合はないやうなことを急いでやると失敗を免れない、例へば舞踏會を



一時やつて大に失敗したことがある、さう云ふやうなことも此社會の狀態が段々改良されて、舞踏會をやつても差支のないやうになつてやつたらば決してさう云ふ失敗はないのであらうが、何分あまり急いて周圍の狀況いかんに拘らず、舞踏會をやらうとしたが爲に失敗した譯である、夫で此交際と云ふことを誤解して、徒に西洋の自由なる風俗をのみ學んで來ると、非常な間違を來たすのである、西洋の交際は日本のそれに較べては、モウ少し自由であるけれども、決して制限のない譯ではない、ナカ／＼制度が設けてあるが、殊に男女の交際に至りては、社會に自ら一種の制限法が出來て居る、それで西洋では男女の交際が日本より自由であると云つて何等の制限もないやうに考へて眞似つたならば非常な間違が起る、西洋の風俗と日本の風俗と大に違つて居ると云ふのは、斯う云ふ所から來るのである、之は殊に男女の交際に於て言ふのであるが、西洋では自由結婚が行はれて、此自由結婚と云ふもの丶爲に、男

女の交際の上に大なる異同を來して居るのである、自由結婚が行はれて居る所からして、女子も男子と同様に結婚期に達した者は、何だか其處に交際法が立て居らぬと自由結婚と云ふことが行はれない、夫で此男女の見知り合が必要である、其爲に舞踏會など丶云ふものが行はれて居る譯である、舞踏會には決して老人などは出掛けぬことになつて居る、夫から又極若い者即ち學校の生徒であるやうな者は出ない、高等女學校の生徒などは決して公の舞踏會には出ない、元より自分の内で親類などを喚んで舞踏するやうな時は別である、固より結婚した者も出るけれども、マア爺イ婆アは除かれる、其一つの大いなる目的は自由結婚の爲に便宜を與ふることにある、若い娘は自分の氣に入つたお婿さんを擇ぶ爲にさう云ふ所へ出て大勢未婚の男子を見る、男子に取つても之は由々敷大事である、さう云ふ機會に乘じて未婚の女子を見なければならぬ、即ち女子に取つても晴の場所である、衣服も出來るだけ飾つて髮に

は油やコスメチックを塗付けて、舞踏會に出る譯である、其間に此結婚の準備が何時となく爲し遂げられることになつて居る、西洋では未婚の男女の爲にさう云ふ交際法が出來て居るが、まだ日本ではさう云ふ交際法が出來て居ない、それに男子も交際には餘り上手でないのである、日本の男子は西洋の男子に較べると禮儀になれて居ない、けれどもさう云ふ交際に少し注意したら立派に往けるだらうと思ふ、唯女子の男子に對する交際は餘程改良して行かなければならぬ、

△次號には　男女交際と敎育　井上文學博士

神經質の婦人

醫學博士　呉　秀　三

◎外部の刺戟

婦人の神經と云ふものは、何ういふ風なものであるかと云ふに、第一婦人の神經が外から來る刺戟に對して異常なる反應を呈することがある、此の如き人は外から刺戟がある時分に、之に反應することが尋常でない、或は刺戟に對して感じが大變に劇しい、眼に光がさし、耳に音がし、物が觸れることがある時に、普通の人はちよつと僅かしか感じが起らぬのが、神經質の女になると、大變に痛く感ずる、即ち物が觸れた時その反應が酷い、又それを精神上から云へば、ちよッとした話を聞いても、普通の人が何と云ふ感じも起さぬのに、神經質の婦人は非常に喜んだり、或は顏色をかへて驚いたりする、さうかと思ふと神經質の婦人によくある事は、其の反對に亦感じが大層鈍く、其感受性が減つて居ることである、ひどい時には物が茫として見えない、又耳が遠くなり、或は物が當つても、小刀などが當つても、感じない事がある、又人によつて一方に感じが强くて一方に感じが鈍い事がある、是は身體上にもさうであるが、精神の上から言つてもさうであつて、何か或

事柄に就ては、大したことでないことに驚いたり、又甚く悲んだりする代り、又他の事柄を聞いた時は、如何なる慘酷の場合があつても、何も聞かないやうに、一向平氣で居ることがある、

又神經質の婦人に於ては、何か刺戟の外から來た場合に、それに對する反應が互違になる場合がある、又普通の人が嫌がるものを大變に喜んで食することがある、男でもあるが、蠅を食ふ、炭の破片を食ふと大層旨いと云ふ人がある、神經質の婦人ばかりでない、妊娠した人でもさう云ふことがある、又臭でも通常の人が嗅いで堪へられぬものを、好んで嗅くやうな人は神經質の人にある、人の好むものを嫌ふといふ感情の間違つて居るものがある、

◎病症の變化

又是等の病症が色々變化するもので、例へば物の感じが高まつて、殊に感じ易い場合でも、直ちに疲れるといふ事がある、大變鋭敏にして總ての五官に來る所の刺戟を受けて、さうしてそれに對して一々應接し、又處置をするやうな、一寸敏捷活潑に見えても、それは一時間とか二時間の間。乃至は十數分間であつて。それが過ぎると大變に疲れ果て、、もう何も出來ず、何事があつても何物が來ても、言葉でも仕事でも之に應ずることが出來なくなる、業務に就てもさういふことがあつて、初め少しの間よく人に優つて働くが、一時間も經ぬに、ぐたりとして何も出來なくなる、男にも神經衰弱と云ふ事がある、斯う云ふ風なことは色々の疾病のある人に起る、神經病の人とか、精神病の人とかは、固より其他の疾病の在る人にもあるが、唯極簡單な障礙を起した場合、例へば即ち神經質と云うたやうな場合にも起るのである、其神經病の中では、どんな者が多いかと云へば、ヒステリー、或は神經衰弱である、それから神經病質の人には、精神の影響に依つて身體の方に變化を起して來ることがある、甚しい場合は、熱が起ると思ふと熱が起る、血の氣がないと思ふと

血の氣がなくなると云ふやうに、精神的の障礙に依つて、身體に障礙が起つて來ることがある、それもその場合に依つては、精神的に色々の作用が大變長い間、身體の中に起つて居つて、それを一向除くことの出來ない場合がある、

◎精神上の故障

神經質の人には、身體的の故障があるばかりでなくして、精神の上にも故障があつて、例へば何か一つの考が心の中に起ると、其考が何うしても心から外に取除くことが出來ない事がある、奇麗好即ち潔癖と云ふやうなものが婦人にあつて、手拭が穢いと思ふから洗ふ、一度洗へばよいものを、二回も三回も洗ふ、何か付いて落ちないうちは洗ふのもよいが煮たり洗濯をしても尙穢いと思うて、それが氣にかゝつて仕方がないと云ふやうになつて來る、即ち其考がこびり付くといふやうなことがある、さういふやうな事物を、度々繰返すことが神經質の人にある、往來を歩いても氣にかゝることがあると、立止つたり、又行過ぎる、又戾つて來る、一つ店の先を何うしても行くことが出來ぬといふやうな病症がある、一體かういふ事は感情と一しよに起ることがある、蛇か何か出て非常に驚いたといふ時に、何か音がしても蛇のやうに思ふ、飯を食はうとしても飯の中に蛇が居ると云ふやうに始終考へに付いて怖い、或は猫に驚かされた事がある、それからは猫が自分の行く所に付いて居る、猫が居るでないと思つても、天井で鼠の騷ぐ音が猫のやうに思はれるといふやうに考が粘着して、精神から離れない事がある、

神經質の人には其他精神上から色々の病が起つて來ることがある、實際何ともないのに腦が何うした、心臟が何うした、何處がいけないとか此處がいけないとか云うて、幾ら醫者が證明しても病氣があるやうに思うて居ることがある、そんなものゝ段々ひどいのは、精神變質の狀態にある、又精神病の狀態にある精神變質と云ふのは、別に今其人が發狂に罹つて居ると云ふではないが、生れながら其人の精神性質

が尋常でない、どうも當り前になつて居らぬと云ふ狀態、それが一層酷くなつて精神病となる、

◎種々の病症

それで神經病質の婦人には色々の病症がある、其神經病質の如何によつて、婦人を色々の具合に區別することが出來る、何でも出しやばつて綺麗なものを着飾つて、交際場裡に這入つて働くと云ふ西洋流の女、或は言葉少くして引込んで居つて、人が來ても滅多に逢はないで、落付いて居ると云ふ日本流の女もあると云ふやうに、種々の區別が出來るが、先づ神經病質に何ういふ徴候があるかと云ふと、身體の狀況が始終變つて、晨と夕、今日と明日と云ふやうにして、大變心持が快いことがあつたり惡い事がある、身體が肥えて行く時期があるかと思ふと痩せて衰へたりすると云ふやうなことがある、或は色が眞赤になつて元氣がよいやうな事があるかと思ふと、又別の時に會つて見ると、譯なしに眞蒼になつてしほ〲として元氣のないやうになつて居るといふやうな事がある、身體の有樣が原因なくして變化すると云ふのは一つの徴候である、さういふ婦人は身體に相當の徴候として、變質と云ふものを備へて居る、或は顏の形、或は頭の形、齒の具合、或は手足の具合、胸や腹の具合や、身の內に於て尋常の形或は尋常の狀態にあると云ふやうな身體の上の尋常を離れて居るやうなことがある、或は醜い場合に於ては婦人には婦人たる所の體格を備へて居らぬと云ふやうな場合がある、女にして男と同じ體質を備へて居る人がある、髯が生へたり骨組がゴツ〱して居る人がある、或は毛髮の發生の具合が變つて居る、乳房の發育の具合が女でなくして男の狀態に變つて來ると云ふことがある、さういふ事が一つあつたと云うて、身體の具合が惡いと云ふのではない、毛髮が多くても障りがないから餘り心配するには及ばぬ、

◎神經病者の特質

又身體の狀況の上に就て、人々の特質と云ふもの

がある、例へば人によつて或物が食はれない人がある、蟹を食ふと腹を下す、或は牛肉を食ふと腫物が出來ていかぬと云ふのが神經質の人に澤山ある、或は藥を飲むと極少量でも直ぐ中毒症を起して仕舞ふ人がある、さういふ風なことが神經的にも在ることがある、動物は色々あるがたゞ猫だけが怖い、犬を見ても虎を見ても怖くない、猫は一寸見ても身の毛が立つ、或は鼠が出ると非常に怖い、芋虫とか毛虫とか一定のものが怖い、雷がすると非常に怖い、歩くことも止つて居ることも出來ないと云ふほど怺へられない、或は蜘蛛のやうな小さなものでも怖い、蜘蛛といふ話をされても堪らぬと云うて逃出すといふやうなものがある、五官の事に就ても、こんな風に感じの劇しいことがある、ちよいとした光でも堪へられない、ちよつとした音がしても非常に妨になつて驚くとか、落付いて居ることが出來ぬ人などがある、夫で身體に就ては色々の感覺が病症であつて、先づどこかに痛い部分が出來る、其痛い部分が身體の一箇所にあることもあるし、身體の方々の部分にあることもある、神經質の婦人の身體の或部分を押すと痛い、ちよつと皮膚に觸つても非常に痛みを覺える、或は脊中とか貝殻骨とか、頭の上とか、そこが一定して痛むことがある、皮膚の感覺としては、或は身體中痛む人もある、何處を觸つても痛い〱と云ふ人がある、殊に頭の上、下腹、脊骨の近所に痛みがよくある、或は關節痛などが肉體的に、形質的病氣はなしに痛むことがある、

神經の影響

身體の運轉についても、神經病質の人は筋肉が弱る、手足を動かしたりすることや、話をすることも出來なくなつたり、又聲が少しも出なくなつたりするやうなことが神經質の婦人にある、或は麻痺と云うて身體がフラ〱になつて仕舞ふことがある、それは物に驚いた時などに、神經質の婦人などがフラ〱になつて、腰が拔けて仕舞ふ、驚いた爲に神經の影響に依つて身體が利かなくなる、驚いたばかり

でなしに外の精神作用に依つて起ることがある、身體の麻痺の中には奇妙な風のもある、立つて居ることも出來ず、坐ることも出來ないけれども、床に寐かすと、そこでは飯を食ふし煙草を飲む、菓子も食ふ。手足は勝手に動かせるが。ヒョッと立たうとして立つことも出來ない、又坐ることも出來ない、歩くことも出來ない、無理に引張つて歩かせやうとすれば體が落ちて仕舞ふといふやうに身體が利かない、然しこんな病氣にしても神經質の婦人だから寐て居ればよいと云うてやつて居るのではない、即ち故意でやつて居るのではない、又身體が神經質で何處が惡いと云ふことなしに關節が伸びないことがある、又身體に痙攣が起ることがある、ヒステリーに本統の盛んな痙攣の起ることは誰も知つて居るが、さうでなくて、場合によつて悲しいことに接した、驚いた事に接した時は身體が顫へて來て、癲癇が起つたやうに痙攣が起ることがある、身體が引張つて釣るやうなことがある、攣縮と唱へる手足、目瞼などに細くヒョイ〳〵とふるへつるやうな事がある、疲れた晩に寐やうとすれば足が突張つたり、或は筋が突張つたりすることがある、身體がオッポリ出されるやうな感じのすることなどがある、それは矢張神經病質の婦人に能く見ることがある、カンと云うてちよつと癖のやうに口を片方にヒョイ〳〵釣つたり、鼻を妙な具合に動かしたり、身體を時々動かしたりする人がある、さういふ風なことが神經質の人にある、爪を無暗に嚙む人もある、振戰も神經質の婦人によくあることで、是は細い顫ひのある事もあり、又驚いたり、恐れたりする時は、寒い時に身體が顫ひあがるやうに身體が搖ぶられ、脣が搖ぶれる、殊にさういふ振戰が何か一定の事業を初めやうとすると起る人がある、それから大變に吃る人がある、それから何うかすると劇しい反對運動を起すことがあつたりする、誰でも針か何かで指の先でも刺されると、知らず識らず手を引込ますもので、之が反對運動で、其運動が神經病質の人には劇しい、當前な

らば何でもなき事も、ちよつとしたことでも怒いて飛上るとか、知らず識らず妙な擧動をすることがある、此反動が非常に著しいことがあり、又其起り方が馬鹿に早い事もある、

血液循環の異狀

それから血液の循環も、神經質の人には變つて居る、動悸などの度に起る人がある、事によりて心臓の鼓動が劇しくなつたり、緩やかになつたりする、動悸が劇しい時分には苦悶を起して來る、胸内苦悶と云ふて非常な苦痛が起ることがある、又衝逆が度々起る事がある、血が頭に一杯に集つて來て、ポツポツとして夢中になつて仕舞ふことがある、それは物に耻ぢたる時にある、耻ぢた時は誰でも赤くなるが神經病質の者は左程耻かしくないことに眞赤になる、氣に入らぬことを聞くと眞赤になる、酒を强いられてちよつと一口飲んだ、血が頭へ上つて怺へられないやうに頭が痛くなることがある、些細なることで卒倒することがある、是は脳に貧血が起るのである、其他些細なることから血の循環が變つて來る、或は顔の色が變つたり、手足が眞蒼に冷くなる、又其所は少しも感じないことがある、

それから腺の働きが尋常の程度を失つて大變に汗をかく、或は全く原因なしに鼻の上や身體中に汗をかく、或は唾の分泌が變つて來る、例へばちよつと腹を立てると唾の分泌が足りなくなり、口が乾いて何も後を饒舌ることが出來なくなる、重に感動の時にさういふ事がある、それから熱が起つて來ることもある、或塲合には熱が實際昇つてもゐないけれども、熱が起つたやうな感じがする、熱が起つたから早く藥を貰ひたいと云ふことを言つて神經病質の婦人が騒ぐ、けれども噓の熱ばかりでなくして、本統の熱が起る事もある、他の熱病に罹つて居るのでなくして隨分高い熱が起つて來ることがある、まだまだひどい異狀がある、身體の血量が變つて來ることもある、或は神經病質の人は色が眞蒼で、顔面も蒼白なことが多くある、その血を調べて見れば、血色

素といふものが大變に減つて居ることがある、榮養も大變わるく、皮膚なども乾燥して滑澤がなくなる、

神經上の障碍

それから消化器にも、色々の障碍が起つて來る、胃が惡い時は腦の働きも亦惡くなる　神經が惡いと胃の働きも惡くなり、胃が痛んだり或は物を吐くやうな事があつたりする、或は無暗にゲップをするやうな事がある、男ならばゲップをしてもよいけれども、女が他の前でゲップをしては品が惡い、さういふから無暗に飲込むやうな運動ばかりして居ることがある、或は消化不良を起して、何も惡い物を食はす、氣候にも中らずして消化することが出來ず、或は便秘をしたり或は腹が下ると云ふやうな事がある、便秘の方は精神上の影響はないけれど、腹の下ると云ふことは大變婦人の精神に影響を來して、其婦人が刺戟性になることがある、神經質の婦人が感情感動の如何によつて、下痢を起すことがあるのは屢々見る所である、腹が立つて、又心配をして下痢

することもある、或は神經上の障碍から睡眠不良となり、安眠することと長眠することが出來ぬ、眠つても夢ばかり見て、翌朝起きてから精神の狀態が回復しない、身體の狀態も回復しないと云ふのがある。

千家男の名譽

先ごろ山陰道を廻りたまひし東宮殿下には、出雲なる大社にまうで給ひての御歸るさ、御車を其の過りなる男爵千家尊福氏の邸に駐めたまひつるに、家のつくり庭のたゝずまひの、殊の外御心にや愜ひけん、難有き御言をさへ賜はり、尚ほ往昔より同邸に秘藏する後醍醐天皇の綸旨六通の複寫、庭園の撮影をも御下命あり、還御の砌りには、銀製花瓶、菊花御紋章附三組銀盃、紅白縮緬各一疋なんど、數々の尊き品を賜はりしとなん、さるほどに年頃ねがひつる行啓のやうやく愜ひし嬉しさとにて、男の詠める國ぶりは、

願ふことなるうれしさの何はあれとこの出ましはいかにまちけん

又大社にまうでたまひつるを讀める、

諸神をひきゐて常に守れとも　なほちはへませけふのまうでに

さゝけます榊につけしゆふしての　なひくや神のこゝろなるらん

同じく、大社の寫眞を撮しまつる折に、

うつし得ぬ神のみいつも宮柱　たかきにそへてみそなはすらん

女囚談

典獄　藤澤正路

女子が監獄へ來るやうになるのは、敎育のないといふことからも起つて居る、されど普通敎育が十分行渡つたからと云うて、それで犯罪者がなくなるといふ譯には行かぬ、併し罪を犯すものは、云ふまでもなく下層社會に成長したものに多く、女子犯罪の動機は多く痴情と虚榮心より出て居るが、その經路はたゞ物が欲しかつたから盗つたといふやうな單純なものでなく、恐ろしき罪を無造作に犯すのであるから、彼等の心事は到底常識を以て判斷することは出來ぬ、

そこで女囚といふものが出來る、女子と男子とは監房を異にするばかりでなく、同一構内に置くこともよくない、それで去る三十六年東京監獄八王子分監を以て、東京に於ける女監と定めらるゝやうになつたやうな次第である、と云ふのは、異性の男女を同一構内に置く時は、いかに障壁を以て隔離しても、時には異性者を目睹し、或は耳に其聲を聞くこともあるから、其感化に及ぼす弊害も少くない、それが爲資性柔弱なる女囚も、往々男囚の如く傲岸粗暴の人となるやうになる、殊に女囚に對しては、周到の注意と細密の用意を要するは、男囚處遇の比でなく故に力めて婦女の機微を穿ち、隱密を探ね、其宜しきに處せんとするも、其猜疑深きと、其感情もろきとは、常に當事者をして、感化難を長大息せしむ所である、

比年我國に於ける女囚の增加は、男囚より著しきものがある、現行刑法の發布せられたる明治十五年に於ては、男子の新受刑者七七、二〇四人に對して、女子は五、八四一人、即ち男子千人に對して、女七五人五であつた、それが三十五年になると、男一六一、二七一人、女一九、三〇八人の多きに上り、即ち男千に對して女一一九人七といふ數になり、漸次其率に於て上騰するのは、一般社會經濟狀態の變遷と

女子の處世狀態の男子に比して急劇なる變化に伴ふ自然の結果であらうが、實に寒心すべきことである、殊に女子の不德と惡性とは、その一身に止まらず、遠く子孫に牽連して其禍を遺すことは、男子に比して一層劇甚であつて、更に深刻なるを憶はゞ、實に戰慄すべきものがある、

囚狀は、低能者があつて繩規を脫し、歇私的里患者があつて、狂躁的動作を演じ、又は一生を悲觀し、自暴自棄に陷るものもあるが、概して女囚も容易に感情に制せらるゝは、一般の婦女と異る處なく、且前述の如く猜疑の心深く、男性に比して情に強いので、一度其感情を害しては、その回復の困難は一通りでない、逃走等は男囚に比して絕對的ではないが、女監設置以來其計謀をなしたものはない、但し精神沈鬱にして一生を悲觀し、縊死を企てたるものが一人、犯則行爲により處罰せられ、憤怒の結果縊死を企てたものが三人あつた、併しいづれも未遂に防いだ、また女囚と雖も、男囚の如く免役日罷役後、蔭語雜談甚しく、その結果として房內の和合を缺ぐのみならず、盜罪犯等にあつては、これより受くる惡感化の多大なるは、常に此職にあるもの、憂慮せる所である、それが爲一は其防遏手段として夜學を起し、簡易なる教授法を用ひ、又は女德修養の書籍の觀讀を奬勵し、努めて彼等の心中に間隙を與へないやうにしたるが、その効果空しからず、房內の樂書、種々の玩具を製するが如き、又器物の保存に就ても注意をするやうになつた、

猜疑の深い女囚は嫉妬い情も亦深く、殊に感情に驅らるゝ事最速かで、溫顏を以て之に接すれば、我意を伸べやうとし、峻嚴にして之に當れば、忽ち憤怒する、その操縱の難きことは男子の比でない、故に賞罰又は訓戒の如き、其違犯の大なるものは勿論極めて輕微の過誤で僅に注意を與ふる如き塲合でも細心の用意を要するのであるが、競爭的性情に富んで居るから、うまく籠蓋し誘導すれば、良好の結果を得ることは、男子に比して容易である、

情願にあつては、男囚間に往々見るべき自己の爲に謀る如き事項、又は所遇に對する不平等の事なく、多くは轉役親屬の年忌に際し、賜金の情願等で、概して其數は少い、又疾病に罹り醫療を請ふものがあつても、故意に詐病を構へて、休役を企圖するが如きことは絶無で、反つて身體に變調があつても、醫療を請ふを憚り、遂に疾患に陷るが如きことは往々見る處である、

女性の頭髪は、生命に次ぐ處の貴重すべきものとするは、其特質であるから、其保存に留意し、所遇するは、女性を遇する感化の一方便で、殊に從來結束せるイボジリと稱するもの非常に容裝を殺伐に觀せしめ、且つ頭髪を損ずる所より、銀杏返しに改め、一ヶ月四回燈油を以て梳理せしめる、果して一同感喜の狀を認め得らるるので、その方法によつて各自結髪せしめて居る、

彼等が富める感情は、之を利用して道念を發起せしむる捷徑たらしむることが出來る、故に宗教の念を注入し、信仰に導き、心眼を啓發せしせむるは男子に比し感應信念の發起は容易である、

在囚中教育の思想を受けざるもの多き彼等に向つて教誨し、教育して、善に導き智を啓くは、健全なる精神を養ふ上に必要なるは勿論で、三十七年四月より、罷役後夜學を開始することにした、就學の模樣は概して精神的で、師の恩に感ずること深く、其熱心なる、男囚に比して優るものがあり、始めて信書を自案し、自書するに至りたる喜悅は肺肝より發し、非常の滿足は其容貌に著しく現はるるのである、其進步成績を罪質の上より觀察すれば、好成績を呈するもの竊盜犯者に多く、謀殺故殺放火犯者之に次ぎ、年齡に於ては、高年に及び漸次劣つて居る、而して常に意外とする所は、女性で尺度の測定を知らず、運針及布針の術を知らぬのみならず、甚しきは帶の結び方、米の炊き方を知らぬものも珍らしくないことである、

發信は成るべく自案自書せしむる方針を執り、發

信に付ては、兩親又は夫に對するものを先にし、罪過の身上を謝せしむることに注意して居る、で往々文中に肺肝を吐露し、同情を寄するに足るの言句を見ることがある、受信は在監囚人の何人も待焦るゝ所であるが、女性は殊に然りて、この機を利用し教誨をして感化を助くるに注意せしめて居る、

受信の方面に於ても、父母夫子又は他の親屬を有する在囚で、相當刑期に至る間、一度も受信しないものは、警察署を經・又は直接親屬に對し、時々書信を以て訪問慰藉を與へるやうにすゝめて居る、

また接見を利用して、彼等に見る事の稀なる社交的感情を修養せしめ、併せて人に接する態度禮節を辨へしむる事に力めて居る、然し女囚にあつても、窃盜犯中萬引と稱する部類は、東京市内の如き場所にあつては、所在に割居横行し、一人收監せらるれば、僚輩之が救濟に努め、接見者の中にも、其共犯者多く、女性と輕視すると、彼等に欺瞞せらるゝことがある、

食量は男子に比して概して少く、減量を願ひ出づるものも亦少くない、副食物の調理配合は、女監取締の下に炊事婦をして献立を案出せしめ、材料の利用を講ずると、細心注意を拂ふとは、女性の巧みなる處で、材料は成るべく監内生産の方針を採り、試みに豆腐、油揚、蒟蒻等を製作せしめたるに頗る好成蹟である、

豆腐は大豆七升六合六勺弱、苦鹽三合、粉糠三勺、石炭五十斤で三十六挺を製し得られ、現今市中にて賣價一挺六錢のものが、三錢二厘强にて製作し得られる、

又蒟蒻は、蒟蒻粉二十八匁、石灰一勺、石炭八十匁で二個を製し得られ、現今市中賣價一個（量目六百五十匁）五錢七厘弱なるものが、二錢七厘にて製作し得らるゝのである、

被服は概して女性の風采に注意するより、自然保存取扱に留意し、夏期の洗衣及び少許の繕ひ等の如きは、服役の餘暇を以て自辨せしめて居る、

臥具は夏期夏蒲團を貸與したが、腰部を冷すの憂があり、醫員の意見によつて、外に五布蒲團を貸與し、枕は普通の小枕を木枕とし、寢臥用蓙に就ては、女囚として衛生上普通の物品にては適せざるより、裏付蓙普通一枚のを二枚として給し、又試に外部の掃除耕耘には脚胖と半掛とを貸與して居る、

社會雜觀

中川愛氷

豫診室

昨年來婦人の犯罪に就て研究の爲に、司法記者として裁判所に入込むの便利を得、豫審の極めて大切なることを感じた、豫審の如何は公判の進行に大關係あるは素より、豫審に於ける失敗は、公判に於て回復すべからざる事がある、それに聯想して面白く感じたのは、婦人科專門楠田病院である、同院を參觀すると豫診室と云ふのがある、これは何うするのかと云へば、婦人の患者が來れば、內外科婦人科いづれに屬すべきかと豫診し、主なる病狀が他の專門醫の治療を受くべきものであれば、それ〴〵方向を示し、いよ〳〵自家專門に屬する病人と確定して、初めて入院せしめる、何でも病人であれば引受けて藥價にするといふことをしない、恰も裁判所に於て告發があつても容易に起訴しないのと、又起訴してもよく審問して免訴することがある如く、豫診を大切にして、自身の病を判斷する能はざる多くの患者に、一日も方角違ひの治療を受けしめぬやうにして居るのは、利己本能の今日に於ては珍とせねばならぬ、豫審と豫診、國音相通ずるも亦妙である、

橋一つ

橋の勢力と云ふものは大したものである、名所圖繪のうちより橋を差引けば、爲に景の大部分は殺がるべく、都會の繁昌も、殊に橋上の雜閙に於て感ずるのである、我住める家は佃島とは一葦帶水の所にあり、價五厘の渡船にて、恰も漁村の感ある佃島

行くことが出來、この七月の中旬になれば、都めづらしき盆踊りを見ることも出來る、然もし五厘の渡船に代ふるに橋を以てせば何うであらう、半年ならずして一小都區をつくり出すであらう、されば橋一つにて、幾百年來の風俗をも、忽ち追拂ふことが出來るのである、この夜頃月を吹く風の涼しくて、用もなき渡船に、ふとかゝる感想が浮んだのである。

牝雞の晨

ひと朝和田垣博士を訪問した、博士は曰く、君はその專門であるから聞くが、牝鷄すゝめて雄鷄時をつぐると云ふは、婦人内助の事を云ふたものであらう、婦人博覽會の繪葉書の意匠が、この俗話から出たので、これを英譯して書入れることになつて居る、牝鷄の晨と云へば論はないが、それと一つに解釋すべきものではあるまい、予答へて曰く、御說の如く、善意に解釋する方が面白い、しかし貴會には、兩樣に通ずる賢夫人が居らるかゝら、寧そ解釋のない方が妙ではありませぬか、博士はたゞ苦笑するのみであつた、

夫の留守番

六月の婦人記者倶樂部例會に、婦人に職業を授くるの可否と云ふのが問題になつた、余はこの解決の前に一例を擧げた、婦人が家政學といふものを學ぶは何の爲であるか、もしこの家政學を以て奏任教授となつた婦人が、判任官の夫を持つた場合に、その夫に子供の傅をさせる、客の取次をさせる、宛然食客扱である、と云ふのがあつたら何うであらう、先づ自分の立場から云へば、婦人に職業を與へたくない、職員錄を見るたびに、遠からぬ所にその實例のあるのを思出して、慄然とするのである、この會の翌日井上巽軒博士を訪ふたが、偶然にも博士は、近頃女の判任官が澤山出來るが、夫の留守番をするのも出來るであらう、その家庭が見たいものであると云はれた、何うも夫が子供を負うて、妻を門に待つなどは問題にもならぬやうに思ふ、

空前の競技會

近ごろ最も興味を感じたのは、六月十六日錦輝館にて萬朝報の催した裁縫競技會である、百人の婦人が一室に技を競ふさますのさまじさ、早きは浴衣一枚の裁縫、反物より疊みあげ迄一時間と五十五分、次は二時間前後のが大分であつた、催主の豫定では、時間を三時間より四時間迄と見積り、四時間後のは審査に入れぬことにした、故に三時間位の出來は早い方である、然るに三時間といふ時には大分出來上りとなり、五等までの懸賞には、覺束なくも居殘つて居るのを見ると又罪な事であると思うた、併し一枚も縫損ひのなかつたのと終を全うしなかつたもののなかつたのとは、流石敗をとつても選手に志願した勇氣があるものと感じた、就中足に仕事を手傳はせる選手を見受けたが、これは感服しない、

生花の方式

生花と云ふものは習ふほどのものではない、見ても覺えるものである、されど見て覺えた丈のことでは少しも妙味のあるものではない、他の池といひ、未生流といひ、或は遠州流と云ひ、凡て生花についての趣向は一律のやうであるから、その應用が大切である、故に同じ方式にのみよると、極めて不自然なものになつてしまふ、されば自分は未だこれがその活けた人の品格を思ふに足ると云ふのを見たことがない、或は目が低いからと云ふでもあらうが、少も區々たる、方式範圍を脱し得られる位の目は有つて居るつもりである、唯一定の形のみを墨守してよしとするならば、葬儀社の小僧にも出來る話である、然るにこの頃渡邊雨山君を訪問して、其床の間の生花を見た、無法より初まつて法に入つて居る、何流と名は付けられぬが、生花たるに批難する所のない否生花はかくてこそ妙がある、生けた草花に渡邊雨山君と書いてある、即ち初めて生けた人の品格を見得る花を見たのであつた、決して生花は何流など、枝振を制限せられた小區域内に樂むべきものではない、何流といふその長所々々をとつて、自分の趣向のその間に現はれるやうに、草花自然の美を思ひ存

分に發揮せねばならぬものである、

臺所の注意

六月二十日東京監獄に藤澤典獄を訪ひ、獄内を隈なく參觀し、そのうち第一に感じたるは炊事場である、現時千二百餘人を收容せる同監獄にしてはあまり廣からず、しかも之に炊事するは、赤衣を着けたるもの僅に八人である、飯は大きな桶にて蒸氣でむし、一桶何斗といふのが幾つか並べられ、其他副食物の料理も多人數の事故、いかに單純なるものにしても容易なことではない、然るに自分のこの炊事場を觀たのは十一時過で、最も雜鬧を極むる時なるにも拘らず、中々整理の行屆いて居るには感服せざるを得ない、千二百餘人の賄を八人にてし得らるゝ事と、一人一日副食物の賄費は一錢六厘で、左の如きものを食し得らるゝのである、これは六月下旬のもの即ち女鑑七月號前日迄ので、極めて新しい材料である、

朝は味噌汁で、味噌は十匁に肝油四匁、澤庵三切が一人の分量で、汁の實が廿一日より順に記せば、紫蘇、芋莖、小松菜、葱、大根、紫蘇、馬鈴薯、若布、午蒡、切干で、同じものは廿一日と廿六日の紫蘇のみである、晝は景日は略して、新蠶豆、生魚、蘿蔔に馬鈴薯、白大豆に切若布、豚肉に葱、菜に切干の酢漬、田作に午蒡、蒟蒻、牛肉、紫蘇に揚豆腐、夕は午蒡、若布、黑胡麻、根芋、路、白大豆に午蒡、豆腐、葱、黑胡麻、小松菜、と斯ういふ工合で目先が毎日朝夕變つて居る、而して如何なる買出し方をするにしても副食物一日一錢六厘の賄であるもとより分量に於ても味にしても、家庭に於て食し得らるゝほどのものではなからうか、この獻立を注意して見れば、經濟の立て方に就ても愧入らねばならぬ妻君が少からぬであらうと思ふ、此歸路石非控訴院判事を訪問して、談この炊事に及んだが、石非君は曰く、なか〳〵監獄の御馳走は食へる、飯などの上出來に至つては、到底自宅では眞似は出來ない、して見るとます〳〵監獄賄方の敏腕に致服せざるを得ない譯である、



美術に於ける婦人の勢力

岩村透

△美術に於ける婦人の勢力と云へば、直ちに、實技家としての婦人の勢力を想像さるゝ人が多數であらうが、實は實技家としての婦人の勢力は、決して、有力なものでない。これは、技術專門家の間に一般に認められて居る事實であつて、其原因に立至れば或は從來の習慣もあらう、又敎育方法の不適當にもあらう、婦人の社會的地位にもあらう婦人として個人性の薄弱に歸する處があるかも知れず、或は社會一般の偏見も助けて居るかも解らん。是非の理由は兎に角、美術の上には實技家としての婦人の勢力は微々たるものであることは、東西の歴史が證明して居る、現在の事實が證明しつゝある。

△婦人は概して、美術心の強烈な者と思はれて居る實際強いには相違ない。平均すれば確かに男子よりは強いに違ない。併しながら大衆を平均した力と、個人の技倆才能とは別問題である。殊に美術の如き個人性の優健に依賴するものに於ては、平均力は愈々賴みにならぬ。婦人に裁縫の力、絶無と云ふ例は、殆どあるまい。併し仕立屋として婦人が最良の職工であると思ふは大なる誤である。

△之と同じく、概して天性、美術心強き婦人も、個人としては、必らずしも有力な實技家でない。否な之と反對なのが通例である。單に「たしなみ」の遊技としてゝなく、自營自活の方法として盛に美

術を學ぶ、歐米の如き國に於てさへも、婦人の美術的技能は概して甚だ劣等な程度に居る。

△斯の如く、美術上專門技術家としての婦人の勢力は極めて微々たるものであるが、美術鑑賞家、若し實技家を以て、供給者とすれば、其需用者としての勢力は、實に偉大なるものである。美術に於ける恐るべき婦人の勢力は此需用者として、藝術の上に與ふる、間接、直接の影響である。

△社會生活狀態の移動に伴れて、常に變遷するは藝術の本性である。宗教全能の時代に於ては、美術は宗教の侍婢となり、君主專制の時代に於ては宮廷、君主の榮光を謳ひ、民主共和の時に於ては四民の歡心を得ん事を努める。時代の最も切實なる、最も普遍的なる要求を充す美術を、其時代の活美術と云ふ。古來觀るに足る藝術の作品は、何れも、此活美術の製作である。

△昔し希臘の活美術は裸體の人體彫刻であつた。宗敎が人間生存の唯一の理由と信じて居つた、時代の活美術は、宗教美術である。日常生活の必要のみに追はるゝ、南洋土人の活美術は、日用の家具什器である。プルーターク流の英雄、豪傑の時代は、羅馬時代の肖像彫刻を出し、宮廷の華美贅澤に全力を捧げたルイ時代はワトー。ブーシエー。フラゴナールの如き畫家を出し、共和主義の和蘭土は、十七世紀に於て有力にして、興味深き風俗畫派を興し、大和魂の化身として、日本武士の尊重した刀劍は、世界無比の金工、鍛工を出した。羅馬時代の肖像彫刻、ルイ時代の艶麗なる油畫、和蘭土の風俗畫土人の什器、日本の刀劍、孰れも其時代の藝術家が、時代の最も切實なる、最も普遍的なる要求に應じた結果である。

△然れば、藝術の中心、即ち活美術の現はるゝ動機は、時代に依て種々變遷する。之に連れて、時代の要求を滿足さする美術も亦特に一方に偏する場合もある、ある時には、其時代の慾望を滿足さするに、彫刻最も適し、ある時に於ては、繪畫、あ

る時には建築、時によつては、凡ての藝術、擧つて立つ場合もあらう、又同じ建築の中にも、寺院建築に偏する時期もあり、宮殿、別莊の奬勵を受くる時もあり、公共、住家或は商館の如き建築の起る時もある。同じ繪畫の中にも、歴史宗教畫の歡迎さるゝ時期あり、裝飾畫の榮える時代もあり、肖像畫の勢を得る場合もある。彫刻にても、彫像に傾く時、紀念的性質の製作の行はるゝ時代、或は置物風の彫刻物の愛せらるゝ時代、建築裝飾に重きを置かるゝ時など種々ある。

△此の變遷を支配する、外部からの重なる原因は、大にしては、社會組織と、生活方法の變動、小にしては新奇を好み、慣れたるものに倦怠する人情であらう、個人主義の歐米は、外國に於ける、生活の中心を、愈々家庭に集めつゝある、之が自然の結果として外國の藝術は益々、家庭の藝術となり、又此方面に最も觀るべき傑作を出しつゝある。前の時代迄、寺院、公共の建築のみに忙はしかつた、外國の建築家は、今は住家の設計、意匠に全力を捧げ、事實と、眞の外かを觀ぬ恐ろしき科學的の今の人々に宗教、歴史畫の需用あるべき筈なく、さもなくとも、寫眞術の進歩に



仕事の大半を奪はれた、憐れなる畫家は、今は、家庭に懸けられ、室内の裝飾に供せらるゝ小畫と同じ、家庭の娛樂に供せらるゝ小說、雜誌の挿畫に、漸く、命脈を繋で居る、彫刻家も亦、寺院宮殿の裝飾するものなく、家庭、裝飾、置物などに意匠を凝らしつゝある。現代の活美術は家庭美術である。裝飾美術と云ひ、工藝美術と云ひ、應用美術と云ふは、何れも、同じ事を謂ふた、別名に過ぎない。

△婦人は家庭の王である。此事實は幾千年の昔から今と異らぬ事であつたであらう。殊に一般、生活程度の高きに於て、殆ど歷史に前例なく、且つ家庭の體面を作る上に於て、其要求の多端、複雜したる事に於ても亦前例のない、現代に於ては、主人は愈々、外に勞苦せねばならず、家庭始末の重任は益々婦人の肩に落來る譯である。

△家庭の王として斯く重任の加はりつゝあると同時に、家庭的美術は現代唯一の活美術となりつゝある。昔宗教全能時代に於て、僧侶が、美術を左右する全權を握つた如く、現今の美術は、大部分、婦人の爲に支配されつゝあると觀て誤るまい。婦人の美術に於ける勢力は、此需用者としての勢力である。殊に外國現代の美術に於る婦人の勢力は實に偉大なるものである。

△古來、特殊の家族制度の上に立つ、我國の藝術が初から、此方面に於て、最も秀て居つた事は當然の事である。又此方面に於て最も幼稚なる外國が頻りに我國に學びつゝあることも、些しも怪しむに足らない。家族制度は、家庭的美術を生じた。此美術は婦人の爲に如何ばかり感化せられたか、斯の如き美術は、女性的性質を帶び來るであらうか。我國に應用美術が女性的傾向の強きは如何。國民の好尙は婦人の嗜好の爲に、如何ばかり支配さるゝか、婦人が美術敎育を輕視し、政府が、婦人の美育を疎んずる結果は、國民の手工力と、美術的意匠、如何なる影響を與ふるか、美感の輕減

は厭世思想を増進せしめぬか。などの問題は、具眼の政治家、教育家、實業家、殊に一般愛國者の思慮を要する問題であらう。

ちぎれ雲

鹽井雨江

一

此處ぞ、此處ぞや、此處なれや
君と初めて　あひ見しは。
病んで一年　風月の
情けを伴れの　此處なりし。

二

此の岩がねぞ、岩が根ぞ、
かう身をよせて、悄然と、
あの夕月の　此の流れ、
ながめて、君は、つくぐ\と。

三

なにとはなさに、過ぎかねて、
近よる岩ね、君は知らず、
かう身を投げて、よくく\の、
涙か、君は　よゝとばかり。

四

知らぬ涙と　すぎもせば、
ちぎれし雲の　空に迷ふ
思ひに斯くは　かきくるる
今日の我が身は　知らざるを。

五

「問はるる程の　身に侍らず、
語たるにつらき、且つは、涙、
よそにすてて」と　言はれたる
君が言葉に　やみもせば。

六

人の涙に、　知る知らぬ、
我れには、袖の　けぢめなし。

語たるにつらき　涙とは、
殊更よそには　やみかねつ。

七

小さき君が　袖にあまる、
げにや、悲しの　其の涙、
聞きては、更に　更に〳〵
よそにはとても　やみかねぬ。

八

君が涙の　片袖に、
弱くはあれど、この身をば、
心を強くと　いさめしは、
此の岸なりし、此處なりし。

九

去なじといなむ　君が手を、
強ひても取りて、君が家路、
露に涙に　送りしは、
あの夕月の　此の夜なりし。

十

君が涙の　片袖と。
など契らざりし、もろ袖と。
さらば、泣くとも、諸共の、
もしは、今日にも　わりけむを。

十一

にくや、夕月、今日は唯だ、
はかなき定めを　示し顔の。
ちぎれし雲の　そらに迷ふ
思ひを、唯だに　いさめ顔の。

十二

君が日毎の　いとなみは、
薪をこりの　山かせぎ、
眞草を刈りの　野べの業、
日にさらされつ、露にまみれ。

十三

小さき君が　鎌の手に
あまるま草の　幾束か、
なれねど君が　片腕と

なりて、助けて、我れ刈りぬ。

十四

さまでは、すまぬ　み情けと、
君が強ひての　いなみをば、
まげてと伴れて、山路にも、
助けてこりぬ、幾薪。

十五

細き肩には　堪へられぬ、
日毎重荷の　君が家路、
此の岩が根ぞ、此處までは、
分けし、つらさを、此の肩に。

十六

動かぬ色に　今日は唯だ、
憎くや、岩が根、其の折りは、
二人が身をば、やさしげに
迎へて、勞れを　いとひしを。

十七

「君が恙に　若し障り

おはせば、すまぬ　我が身なり、
明日はうちおき　給はん」と
此處の別れに、君毎時。

十八

君が言葉に　やみもせば、
ちぎれし雲の　空に迷ふ
思ひに斯くは　かきくるる
今日は、知らずて　やみけむを。

十九

「よしや病ひに　障るとも、
君ゆゑ立たぬ　身にあらば。」
いつしか我れは　斯くまでに、
ゆかしくて、君、やさしくて。

二十

「いやしき身ぞと　君は言へど、
神の郷にも　薪こる
子もあるべしと」。いつしかに
ゆかしくて、君、かくまでに。

二十一

「君がやさしの　口もとに、
兄とよばれて　我れ見たし、
添ふる力は　弱けれど、
君ゆるして」と　我れ言ひし。

二十二

「とても涙の　我が身には、
兄とは、共に、いかにせん、
泣かせまつるの　名のみぞ」と、
君はやさしく　ほゝゑみぬ。

二十三

「君が兄にて　泣くべくば、
我が世の限り　我れ泣かむ、
共に泣かむの　同胞」と
我れはちぎりぬ、うれしくて。

二十四

共に泣かむと　唯だ言うて、
など、離れでと　添へざりし。

さらば、離れて　共に泣く
うれしき今日にも　ありけむを。

二十五

など離れずと　ちぎらずに、
など歸りたる　我が都。
癒えし病ひの　恨みなる。
癒えずば歸へらぬ　身なりしを。

二十六

これを命に　なれとのみ、
君が別れに　泣きし時、
我れもと、などか、泣きゝて、
それを限りに　死なざりし。

二十七

何處に泣きて、君、今宵、
さばかりまゝしの　人兒か
追ひやりしときく　今日の君は、
さぞや死にます　つらさをば。

二十八

分けたや、君が　其の涙。
それ思ひやれば、思ひやれば、
ちぎれし雲の　空に迷ふ
今日の思ひは、此の思ひは。

萬葉集中の時鳥

佐々木信綱

野も山も緑に更衣をして、時鳥の期節が來た。東京の市中の我住居などでは、一聲をも聞く事は出來ぬが、昨日越後刈羽郡の社友からの書狀に、「此頃は夜晝の別ちなく時鳥鳴しきり候。稀にそれかともきこゆるはゆかしきものから、あまりなるはうとましう」など書いてあつた。で、今日は時鳥の歌の御話をいたしませう、併し時鳥は夏季の題目の中で、最も多く歌はれてゐるから、古へ今の歌をすべて御話する事は出來がたい。まづ我國で杜宇の最も古く歌はれた萬葉集についてお話し申しませう。

萬葉以前、古事記日本紀にも多くの歌が載つて居ますが、其中には、專ら花鳥風月を歌つた歌は殆んど無くて、花も鳥も形容に用ゐてあるに過ぎぬ。萬葉に至つて漢詩の影響をうけて、專ら花鳥を歌ふやうになつた。で、萬葉には、杜宇をよんだ短歌が百二十三首、杜宇を詠じ又杜宇といふ句のある長歌が十九首ある。それらの歌をよみ味つてみると、或は時鳥の聲をきいてそれに我思をよせ、或は時鳥の鳴くを待ち、或は藤、卯花、橘、棟などを配合した歌が多い。時代の最も古いと思はれたるのは卷二にある額田女王の、

古に戀ふらむ鳥は時鳥蓋や鳴きし吾が戀ふる如し

といふ歌である。これは持統天皇が吉野に行幸遊ばされた時。御供せられし弓削皇子が、「古へに戀ふる鳥かもゆづる葉のみ井の上より鳴渡りゆく」とよんで、女王に贈られた歌に答へられた歌である。それで百四十首もある割合に、時鳥の歌ですぐれたのは少い。今其中でよいと思を擧てお話し致しませう

うれたきやしこ時鳥今こそは聲のかるがに來鳴とよまめ

これは十の卷にあつて、今こそ鳴くべき折なれば聲のかるゝばかりに、來鳴きとよもすべきを、來鳴かぬは、慨たくにくき醜杜宇なるよの意で、表は時鳥を罵つたやうであるが、實は時鳥を愛でゝ、待ち待つてゐる餘りの歌で。業平の『世中に絶えて櫻のなかりせば春の心は長閑からまし』といふのは異曲同工の歌です。

木高くはかつて木植ゑじ時鳥來鳴とよめて戀まさらしむ

是も十の卷にある木高く木を植る事は決してすまい。如何となれば、木高く木を植る時は、時鳥が其木に來り棲んで、常に鳴響かして、人を戀しくおもふ心を益らしめるから、の意である。古今集に『宿近く梅の花うゑじあぢきなく待つ人の香にあやまたれけり』といふのがある。『木高くは』の歌から脫化したのであるが、此二首を讀み双べると、萬葉の調と古今の調との相違がよく分るであらうと思ふ。

過所なしに關とびこゆる時鳥わが身にもがもやまずかよはむ

心なき鳥にぞありける時鳥もの思ふときになくべきものか

時鳥間暫しおけ汝がなけば吾が思ふ心いたもすべなし

この三首は十五の卷にある。中臣宅守が罪あつて越前に流されたが、配所から、奈良の都なる妻の許へ送つた歌の中である、第一の歌の、過所は、萬葉略解にはフミ、萬葉古義にはフダと訓んでゐるが、自分はカソと字音に訓んだ方がよいと思ふ。過所は關所通行の切手をいふので、京へ歸つて妻に逢見たく思へど、關所があつて、切手なくては通行がかなはぬ。彼の關をとびこゆる時鳥が、我身にてあれかし。さらば止まず通ひゆきて相見べきものをの意である。第二の結句は、いかにも切なる情が籠つた調である。第三の結句はまことにせんすべがないの意

いづれも、配所に居つて時鳥の鳴頻るをきいた感じが、あはれによくあらはれてゐる。

時鳥こよ鳴きわたれ燈火を月夜になぞへそのかげも見む

これは十八卷にあつて、大伴家持が宴會の席でよんだ歌である。時鳥此方に近く鳴きわたれ、闇の夜であるから、燈火のかげの明らかなるを月になぞらへて、其とび渡る影をも見たいからの意。

時鳥鳴く羽ぶりにもちりにけり盛りすぐらし藤浪の花

これは十九の卷に出て、家持の作である。家持及大伴氏の一族が詠んだ時鳥の歌は、時鳥の歌の過半を占めてゐる。此歌の意味は明瞭であるが、其調から考へると、三句切で、四の句でも切れてゐて、奈良朝の歌の末期に近づいたのがよく分る歌である。

長歌の中では左の二首がすぐれてゐる。一は九の卷にあつて、高橋虫麿集中の歌。

鶯の生卵の中に、時鳥獨り生れて、己が父に似ては鳴かず、己が母に似ては鳴かず、卯の花の咲きたる野邊ゆ、飛び翻り來鳴き響もし、橘の花を居ちらし終日になけどきゝよし、幣はせむ遠くな行きそ、わが宿の花橘に、住みわたりなけ、

一は十八の卷にあつて、越中なる家持が、越前なる大伴池主を懐うて、詠んで贈つた歌である。

我背子と手携さはりて、明けくれば出立向ひ、夕されば振さけ見つゝ、思暢べ見なぎし山に、八峰には霞たなびき、谷邊には椿花咲き、うらがなし春の過ぐれば、時鳥彌頻き鳴きぬ、獨のみ聞けば寂しも、君と吾隔てて戀ふる、となみ山飛び越え行きて、明けたれば松のさ枝に、夕されば月に向ひて、菖蒲草玉ぬく迄に、鳴とよめ安眠しなさす君をなやませ、

新しほ

石榑千亦

新潮のひゞきゆたけきあさ明に、新船おろすうた

いさましき。

　書のごとく、ねりかゞめる並松の、いづこなるらむ浪のよる音。

　波もなく船もうごかぬ鳥の海に、糸垂れし人の影もうごかぬ。

　船板を橋にわたせる汐入の、川みづきよし小魚さばしる。

　白妙のいさごをふみてさみどりの、松原こえて浪を見るかな。

　ふく風を山によけたる溪合に、かたま〳〵あひぬ草ぶきの家。

　くだけちる波のしぶきにぬれてたちし、濱鴉さわぐ里の松ばら。

　わりそべの岩もくだけとよる波の、音うたひやる船歌のこゑ。

　船の右に船のひだりに島はちぎれ、島はちぎれてあらはれわたる。

　浦波をこがねになして島山に、松はやしたて、月ひでにけり。

折にふれて

中山幸子

かきちらす筆のすさびの言の葉の
　いとまある身ぞたのしかりける

わけくれにすなどる人も國のため
　つきぬ千ひろの網をたのみぬ

こし方を思ひいだせばなか〳〵に
　うき事のみの多くもあるかな

孤婦涙

雨山　渡邊輝

遺書一封猶在茲。堪思港頭分手時。馬革裡屍固
離分。人間合離何數奇。山盟水約今仍昨。訃問
到手眞僞疑。雲髻從此爲誰結。銀刀忽見裁烏絲。
忠孝之家生節婦。泣不公默亦自欺。老親心緒寸
寸斷。忍見二八如花姿。靑山一抔埋雄骨。入雲
鐵笛餘音悲。環堵老幼呑聲哭。墓前春寒梅一枝。
空閨更深雨蕭寂。幾拜木主寄相思。殘燈不語檢
遺篋。紅涙潸々滴艶脂。妾薄命似花薄命。花欲
開處風雨吹。春雨春風十六歳。色即是空是我師。

コロノハナ

第十一巻第七 ◉ 七月一日發行

編輯主幹 佐々木信綱

貫之論

見よ藤岡文學博士が該博なる識見を以て貫之を論じ其古今集を撰ぶの態度を論評して餘蘊なきを

イプセン脚本

ヘダ、ガブラーは千葉掬香新井雨泉兩氏が苦心の譯原書の面影を寫して宛も名手の演劇を見るが如し

晩餐會

橘糸重子女史の筆に成る見よ主人なる大塚博士及び夫人を又見よ來賓なる夏目漱石氏を始め十餘人の畫伯及び彫刻家哲學者等の面目がいかに躍如たるかを

選古今十首

古今集中の透逸十首を選ぶ十人十色しかも名歌なり加ふるに佐々木主幹の意見を以てす歌學に關係なき人も一讀せば全班を窺ひ得む

◉歌學を始め有ゆる文藝に關する投書を歡迎す◉毎月短歌課題あり
◉定價一冊金十三錢郵税一錢半年前金郵税共七十五錢一年一圓四錢

日本橋區本石町一ノ一 竹柏會出版部 振替貯金口座四三〇〇番

第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領



五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
ヴワイオレツト煉製
錫蓋附乳白硝子器入
壽美禮おしろい

◉壽美禮おしろい◉

ねり製定價（大壜二十錢 小壜十二錢）

水製定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）



ヴワイオレツト水製

錫栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素新成績液體等を以て配劑しあるを以て肌を艷麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの性わり『壽美禮白粉』は常に用て御顏肌へを清々しく天然の色白きに至るべし菫『おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨んで衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京橫濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

◉西洋洗滌劑 壽美禮あらひ粉の特性

綠、藍、紅彩蝶番ひ 大袋入 二錢

罐詰 六錢五厘 袋入 一錢

◉弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞贊する香料及弊舖新製の原料を用ひて製せしものなれば朝夕此洗粉を用ひ給へば能くあかを落し御肌を美くしくなす

◉常に髮洗ひに用ひ給へば髮のねばりを取り油あか等を生ぜず又半えりハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

◉使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は溫湯に溶し又はぬかに混ぜ入浴の際用ふるを良とす

登錄商標

西洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE

Washing Powder

壽美禮あらひ粉



製造本舖

東京東兩國

元町兩國橋際

壽美禮堂謹製

販賣所は全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

東京美術學校長　正木直彦先生序文

同　校教授　島田佳矣

同校卒業生　野口駿尾　兩先生共著

女子技藝 編物模様圖按

全五冊　石版極彩色　大和綴美本

正價　●松の巻　金四拾錢　櫻の巻　▲藤巻各金五拾錢

●菊の巻　●梅の巻　各金五拾五錢　送料各金四錢

本書は毛糸、絹糸、木綿糸等にて編模様を編み或は刺繍するに必要なる圖案即ち下繪を集めたるものなり　從來此種の書籍歐米各國にて出版されしものなれども其意匠圖案の様式風味は直ちに之を我が工藝に適應する事能はざるのみならず價格の點に於て不廉にして一般に普及すること能はず●本書は著者が專門獨特の意匠を以て多年歐米の圖案を研究參考し前項の欠點を補ひしものなり●編物は貴賤都鄙の別なく本邦女子適當の手藝にして漸次發展しつゝありて將來大に海外輸出の望ありと雖も從來の意匠圖案は幼稚拙劣を免かれず

●本書著作の順序は片假名、平假名、歐文字等の簡易なるものに始まり横模様、連續模様、角模様、圓模様、隅模様、單獨模様等の順序を經て漸次高尚優美なる繪畫的下繪に進み花卉、虫、魚、風景、人物を蒐集したり●本書は獨り斯道修學者の好教科書なるのみならず技藝家の好參考書にして亦た麥稈細工、織物等各種技藝の參考書たるの價値を有す


御用諸學校
體操器械
S.A TRADE MARK
ANDO-SHOTEN
No.5. Urajimbo-cho. KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
ピンポン室内テニス
一號一箱 一、二二〇
二號同 一、五〇〇
三號同 一、六八〇
四號同 一、八三〇
號外同 〇、九六〇
其他各種御注文に應じ製造可仕候
御用 體操器械
体育用品
東京神田裏神保町五 S.A. 安藤商店
本 484
確實 製造販賣
ピンポン改良室内テニス(旅行用)
一號一箱 二、〇三〇
二號同 二、三三〇
三號同 二、三五〇
四號同 二、五一〇
同用テーブル 上等一臺 拾參圓四拾錢 並等一臺 十二圓
テニス用ラケット一組四本
一號大人用 二、二〇〇
二號同 二、〇〇〇
三號同 八、八〇〇
四號同 七、四〇〇
五號同 六、七〇〇
六號同(小學用) 五、七〇〇
七號同 四、七〇〇
婦人用(一號) 七圓
同二號 六圓
改良櫻二重枠ラケット一組
一號 拾參圓參拾錢
二號 拾壹圓七拾錢
三號 九圓五拾錢
四號 八圓貳拾錢
五號 七圓貳拾錢
六號 六圓貳拾錢
七號 五圓貳拾錢
テニス組一張 一、八八〇ヨリ三、一一五
○迄各種あり升
東京市神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

壁畫に就ての苦心

小林萬吾

壁畫として、我國で最も名高いものは、彼の法隆寺の壁畫であつて、西洋のフレスコといふやうなものであらう、その他一幅の畫を壁に貼付けたのは所々にあるが、いづれも模樣風であつて、天井ならば龍とか天人とか、或は草花とか、壁畫ならば瀑布であるとか、昔から云ふ松竹梅の類で、畫題が大抵定つて居るやうで、無論是等の畫には奥行を示さぬのである、そこで一工夫して見たいと思付いたが、實際やつて見ると、思ふたやうには出來ぬものである

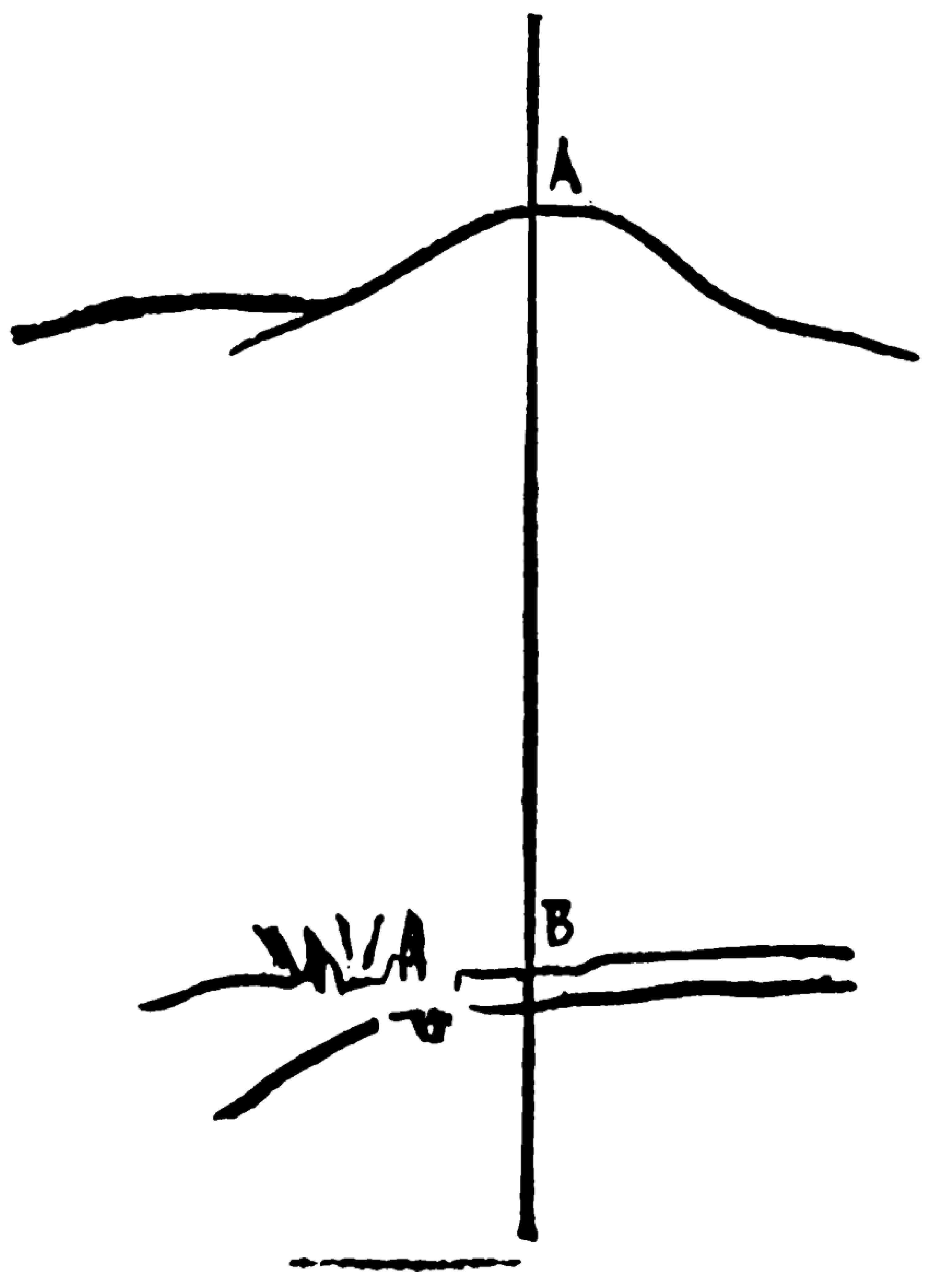
私は數年前から、油畫で是等の裝飾畫をやつて見たいと思うて、天井畫も壁畫も、屏風も、すべて出來上つて居る塲所に向つて、相當に釣合のつく苦心をして書いて見たが、中々むづかしい、が何うやら斯うやら物にした經驗談を述べやう、

その第一着に筆を染めたのは、四間に六間と云ふ某家の賓客室で、天井も壁も殘らず畫にしたいと思うて、初め先づ窓や戸棚等の位置、天井の高さ等をしらべて、下畫に取かゝつた、

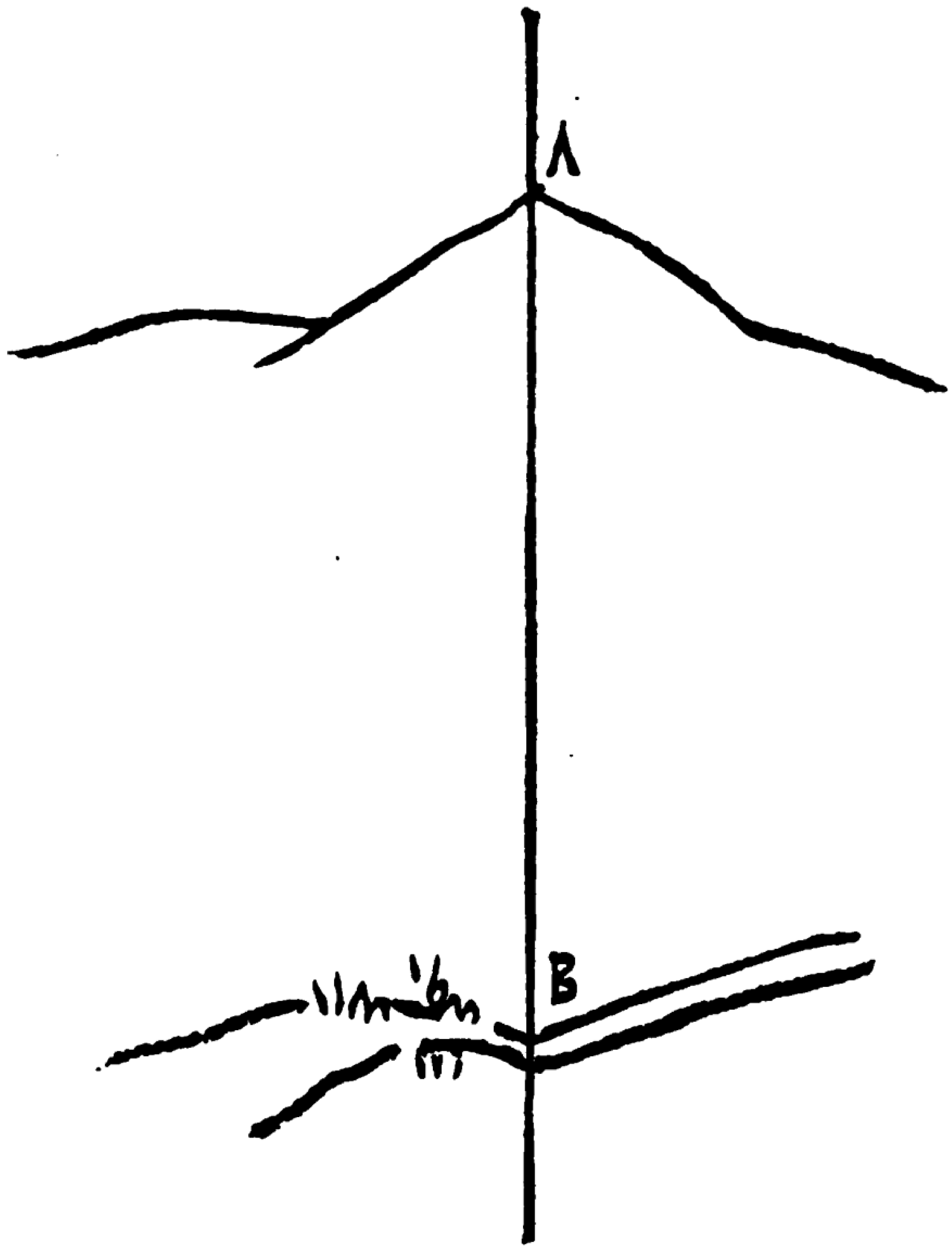
畫の組立はパノラマ的で、その室に入れば、何方から見ても景色で、また何方から見ても畫が聯關するやうにした、室に入つて取付には雜木林があり、右に目を轉ずると、林は絶えて草花の咲ける徑に出る、その草花は秋とか野菊とか姫百合とかで、いづれも所得がほに咲いて居る、段々右に見て行くと谷がある、谷を下りると藁葺の山家があつて、何か焚たきをすると見えて、薄煙りが立昇つて居る、家の手前の崖つゞきを右に見ながら、室の角を曲ると、淸水のたまりがある、そこにはまた枝もたはゝに萩の花が咲亂れて居る、そのあたりは坂になつて、それをのぼると、やゝ廣き草原に出る、松の木があるその下には野菊が咲いて居る、なほ右に見て行くと二抱も三抱もある松の木がある、これが正面の反對の側なる眞中である、それから右に曲つてもとの雜

木林になるといふ順序である、
　天井には二尺三寸巾の回枠がある、その枠を葡萄棚に見立てゝ、それに蔓をからませ、房々と實を下らせた、即ち天井の周圍二尺三寸内は葡萄棚になり天井に取付の壁の上部は簾を下げ、簾の下から葡萄棚の外なる天井へ蔓を纏けるのである、その隙間には十數羽の鳩が飛んで居る、或は葡萄棚にとまつて悠長な顔をして居るのもある、要するに此室に入れば大樹あり、草花あり潺々と流るゝ水あり、秋の露のこぼれんとするあり、宛然天地の美と親む如き思ひあらしめんとする仕組である、
　さて下畫は出來た、いよ〳〵壁に向つて割出しをなし、大體の形を描いて、色を入れて見ると、だん〳〵間の抜けた所が出てくる、
　大きなつもりの木が小く見えたり、小く描かうと思うた森が大きかつたり、遠く見せる山が近く見えたり、なか〳〵初誂へた通りには行かぬので、壁に向つて下書からやり直すことにした、大抵辻褄の合ふやうな所まで漕付けて描いて見ると、續々と難關が起るのである、
　壁の隅の所で、視線より上に見る山を描くと、上に向つて角をなし、視線より下にある道などを描くと下に向つて角をなす、そこで折れて廻る角を描く時には、繪がつゞいて見えるやうに描かねばならぬ即ち左に圖解する如くである、

第一圖



第二圖

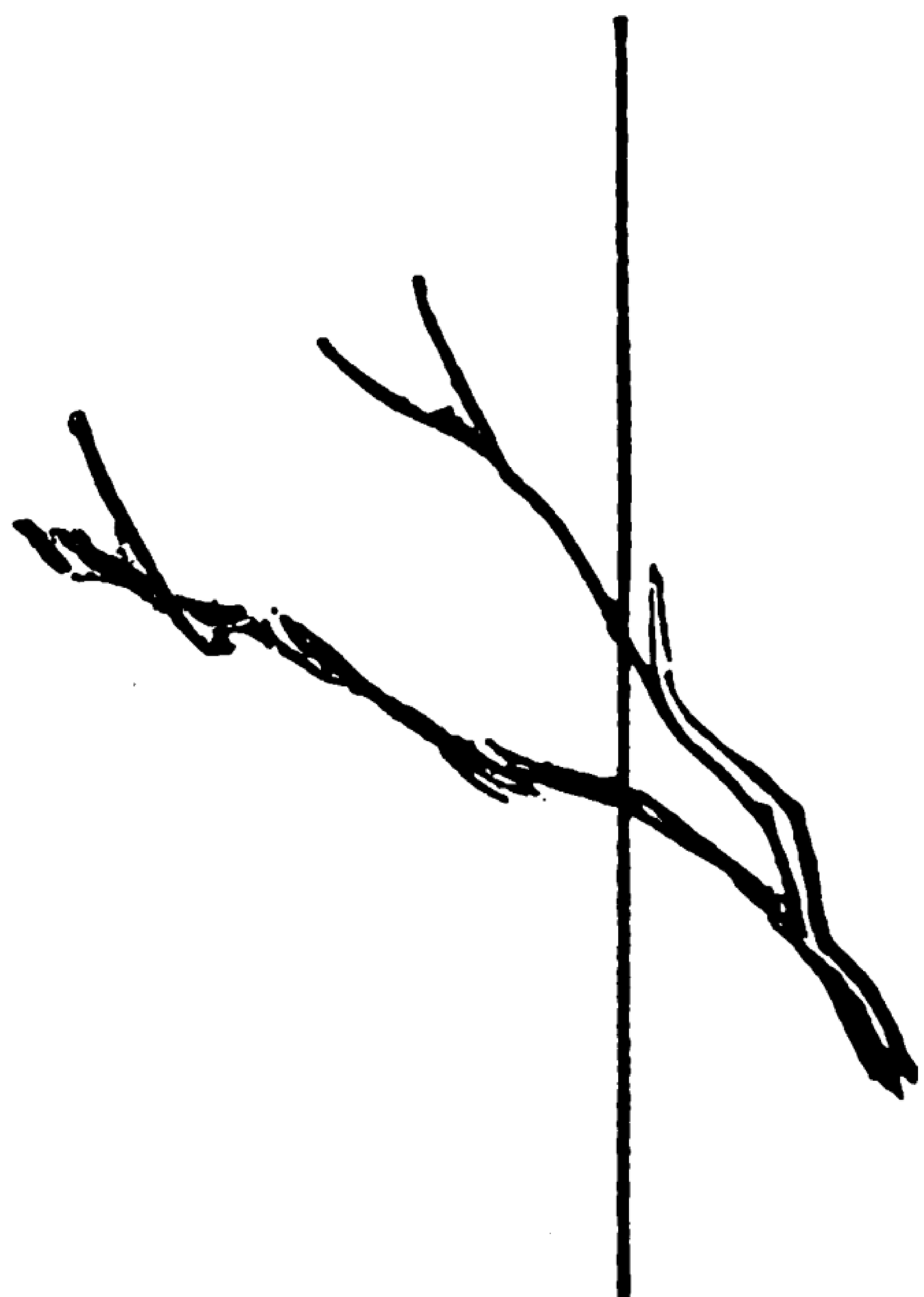


第一圖ＡＢの如く作りたる下圖のまゝ、實際にあてはめて見ると、第二圖ＡＢの如く角をなすのである、即ち丸くなるべき山が尖るやうに見え、平らなる道が凹んで見ゆるのである、

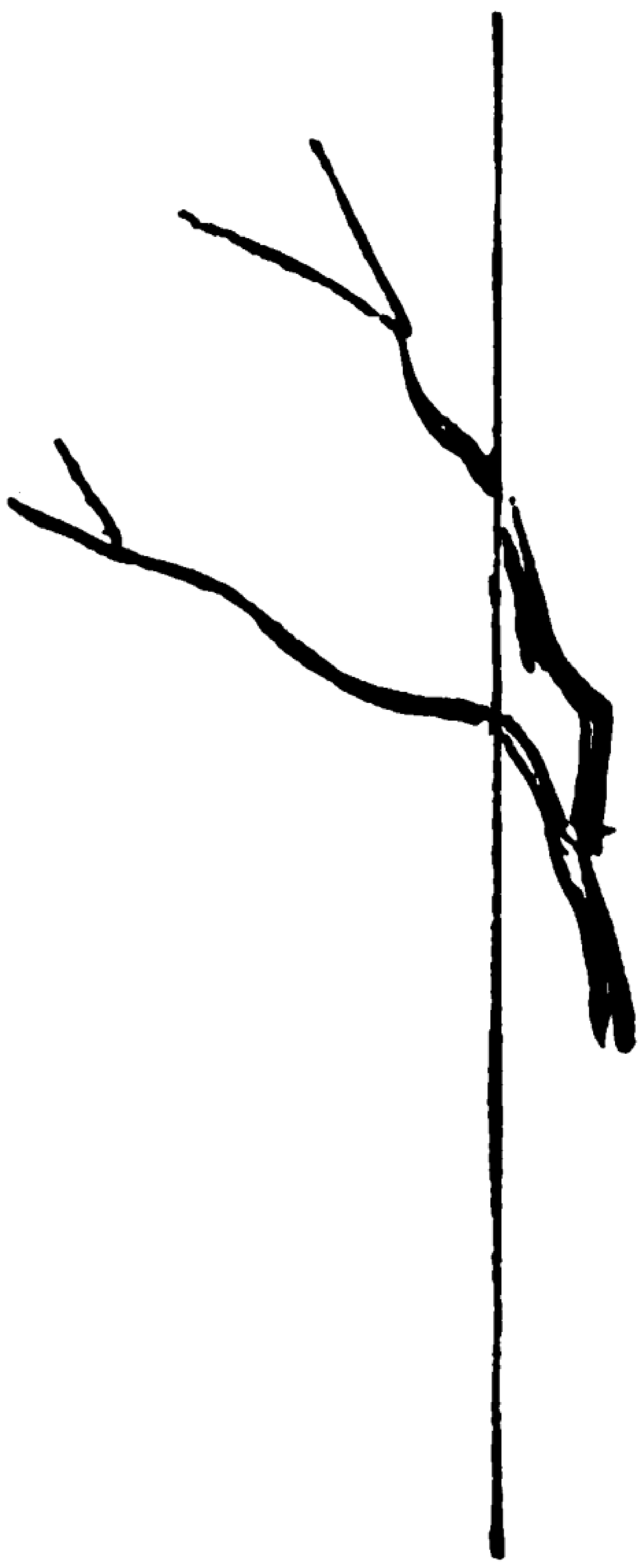
第三圖の枝は、第四圖の如く見ゆる、

そこで第一圖ＡＢは、第五圖のＥＧ、第三圖は第五圖下の如く、下書をつくり置かねばならぬ、

第三圖

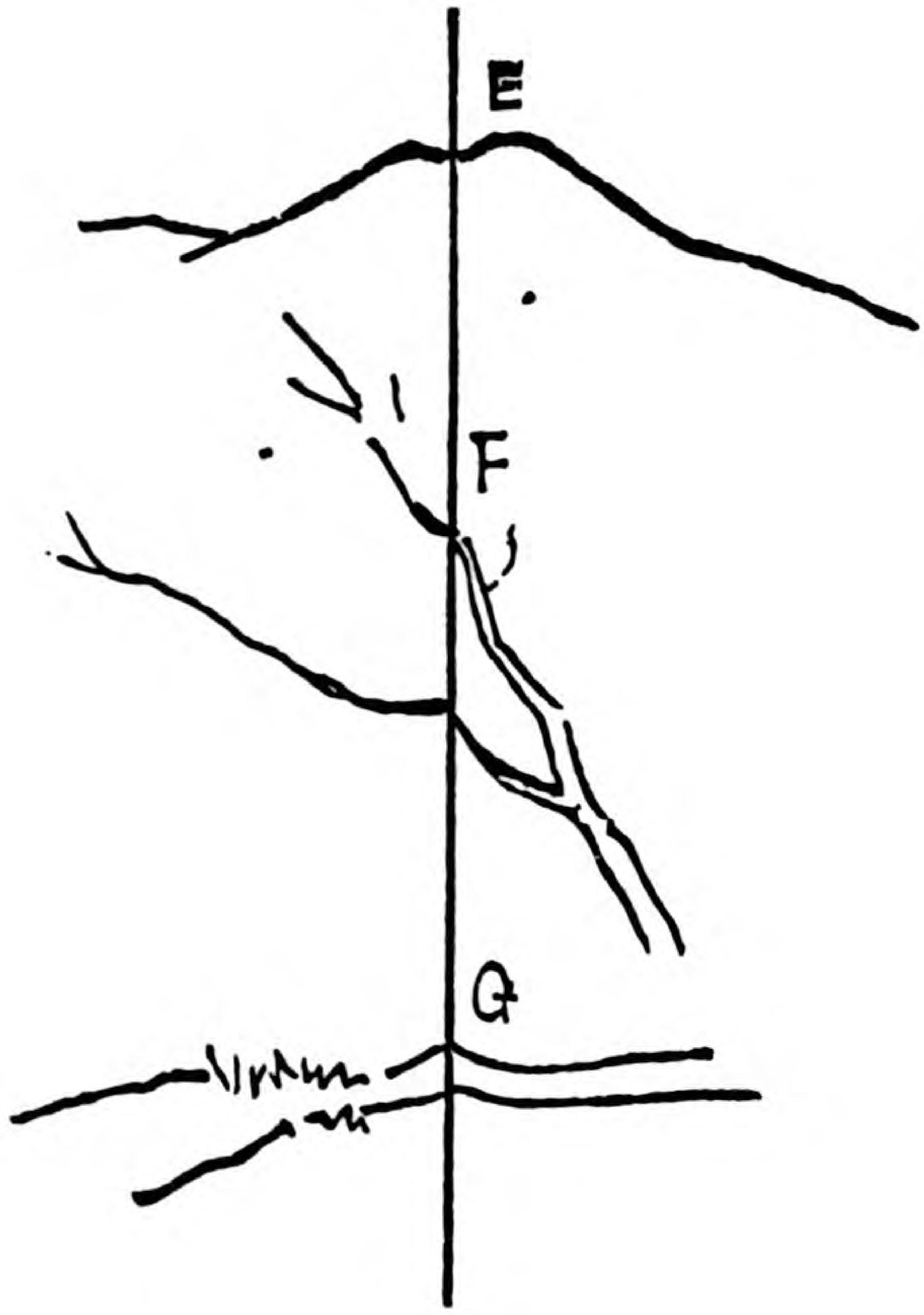


第四圖



天井に就ては、第六圖及第七圖の如き問題が現はれて來る

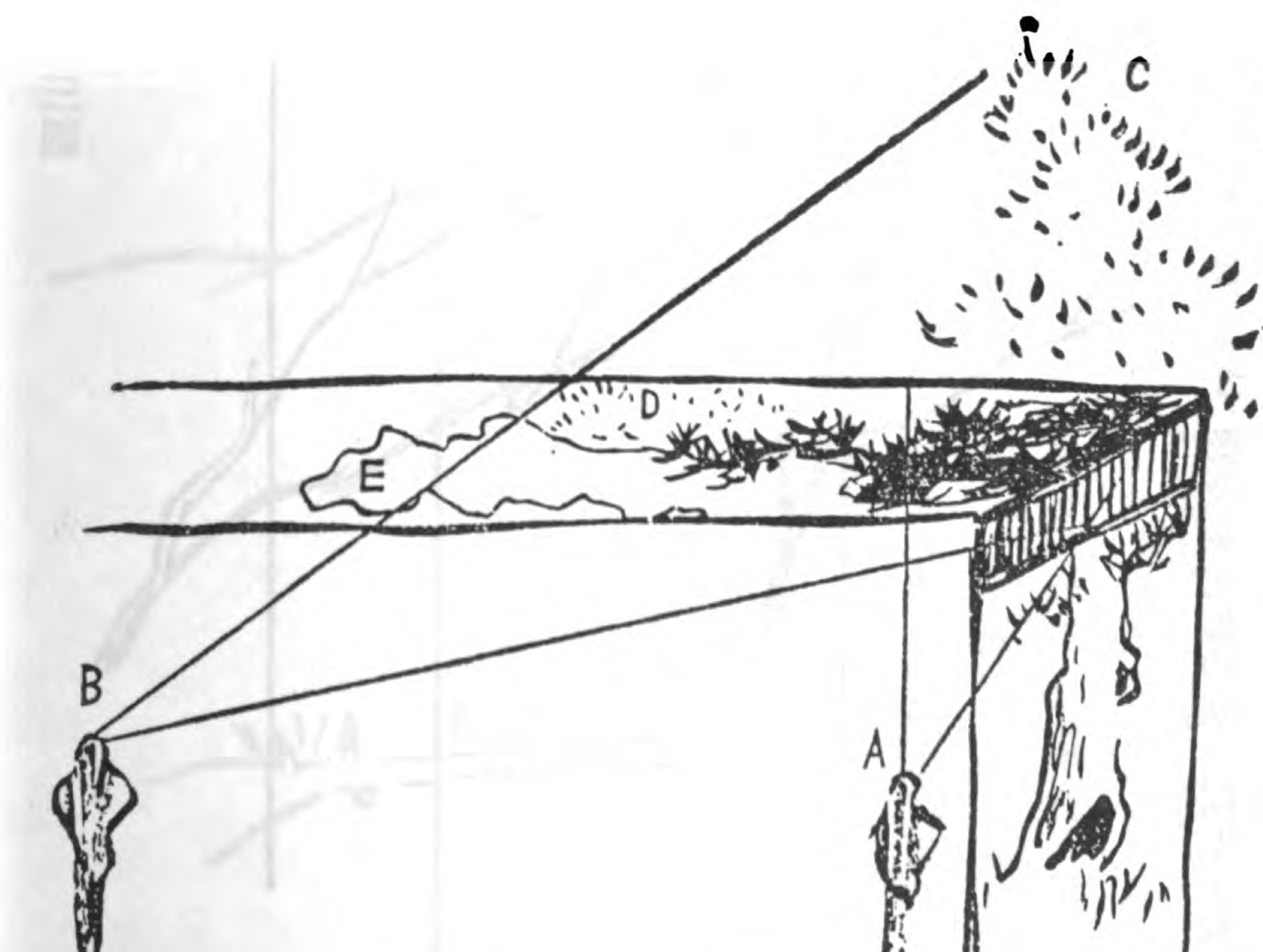
第五圖

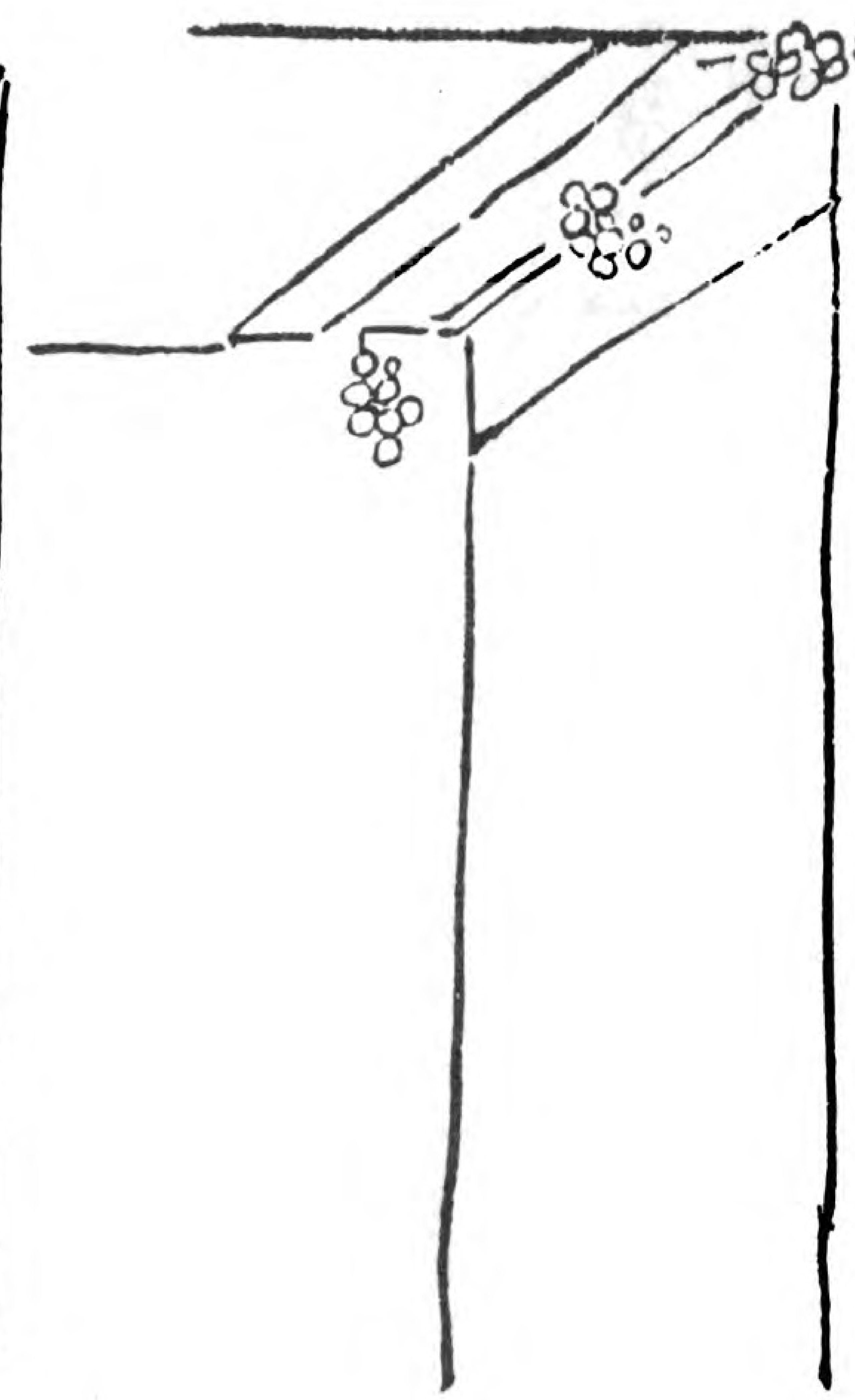


側面に見れば、Aの人には、如何にも枝の下に居るやうに見えるが、Bの人には何うしても天井廻椽の處で折れて居るやうに見える譯である、

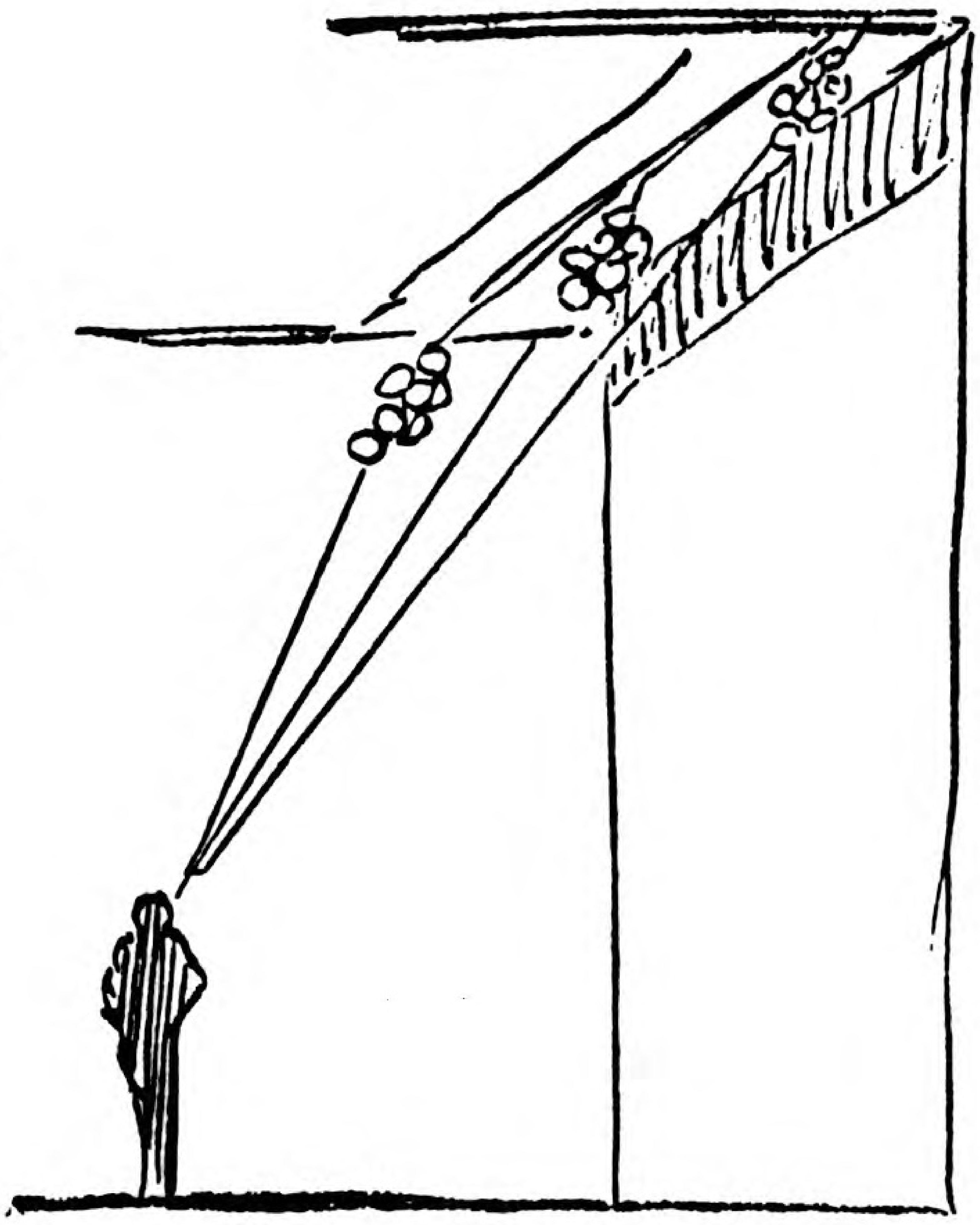
そこで天井の畫面に、松の頂上の部分をDの如く示して置くか、又はEの如く一層枝を延長して、最も廣く空を掩うて居るやうに描くかの二手段である

第六圖





第七圖



第八圖

葡萄棚に就ては、直下するやうに描いた葡萄の實が、左右と後の方にハタキ飛ばされた様に見えるのである、

故に第七圖の葡萄は、第八圖の如く描いて置けばいづれから見てもをかしくはない、

寫眞術實驗談

井伊直方

現像液

凡そ現像液は左の三種より成る、

一、現像藥　メトール、ハイドロキノン、アイコノゲン等

二、保護藥　亞硫酸曹達、異性重亞硫酸曹達等

三、アルカリー劑　炭酸曹達、苛性曹達等

現像藥の種類は極めて多く、從て現像液として市販するところのもの又少からず、故に素人寫眞家、殊に其初學者に在ては、大に其選擇に苦み、或は甲液を用ゐ、其結果面白からざれば、直に乙液に更め

常に一定の薬液を使用せざると、其例に乏しからず然れども凡そ現像薬と名くるものにして不可なるものなく、唯多少の特質はあれども、現像上大なる差異あるを認めず、其結果の良否は一に取扱者の巧拙に依るものにして、決して罪を現像薬に歸すべからず、故に一定の薬液を使用し、其性質を知ること肝要なり、凡そ現像液として、市販するところのものは、極めて簡便なるが如しと雖、現像に際し、寫度の如何に由り、適當の分量に其成分を變更することを得ず、極めて應用の狭きものなり、故に場合に由り、不得止無理の現像を行ひ、失敗に終ること少からず、反之一定の處法に依り、自ら現像液を調成したるものにありては、此不便なく、加ふるに價格に於ても極めて廉に、且つ新鮮なるものを常に用ふることを得、其結果として良好なる原板を得るに難からず、故に可成現像液は自製するを以て得策なりとす、

保護薬たる亞硫酸曹達に就て一言せば、本劑は絶えず空氣中の酸素と化合し、硫酸曹達に變ずるものなり、而て現像薬も亦酸素を吸收すれども、亞硫酸曹達の方遙に化合し易きため、現像薬の酸素と化合するの遑なく、従て現像薬は保存せられ、其効力に害を及ぼさず、然れども亞硫酸曹達の酸素と化合し盡す時は、初めて現像薬に酸素化合し、漸次其保存力を減じ、従て現像力を害するに至る、加之未に現像薬に酸素化合せざるも、硫酸曹達の含量多分となれば、現像を妨害しかぶりを生ずること少からず、故に古き現像液は、新液に比し、其結果不良なり、尚ほ亞硫酸曹達は臭素を吸收するを以て、現像力は亞硫酸曹達を含みたる方強大なり例之ばデアミドヘノルの如き現像薬に於ては、亞硫酸曹達の量を増加するに従ひ、其力を増加するものなり、

アルカリー劑は、現像を強くする力あるを以て、アルカリーを増加せばかぶり易きも、現像は速く、之を減ずればかぶらざる代り、現像は遲し、然れどもアルカリー劑は一定の極度以上入るべからざるも

のにして、其極度は現像藥に由り異なるなり、右の外制止劑たる臭素加里は、現像の作用を強め、現像を永續するもかぶりを生ぜず、從て板は硬調となる傾きあり、故に現像中寫度の過たるを知らば臭素加里を多く加へて現像せば、其欠點を救濟することを得るなり、之より各種現像藥の性質及處法に就て其概略を述べん、

(一)沒食酸　　沒食酸は古くより廣く用られたる現像藥にして、還元力非常に強く、之に由り現像したる板は、濃度深く且つかぶりを生ぜず、軟調の原板を作り、人物等に最も適當せる唯一の現像藥なり然れども其調劑の方法如何に依り、極めて保存の力弱く、且つ手指を汚染するの缺點あり、加之沒食酸は、人體に有害にして、其二グラムは能く人を殺すに足るを以て、其取扱に注意を要す、其處法左の如し、

甲
- 蒸溜水　一〇〇、センチメートル
- 異性重亞硫酸加里　二、グラム
- 沒食酸　一〇、グラム

乙
- 蒸溜水　一〇〇、センチメートル
- 結晶炭酸曹達　一〇、グラム
- 亞硫酸曹達　二〇、グラム

使用に際し、甲液一〇、センチメートル、乙液三〇、乃至四〇、センチメートルを混じ、之に水を加へて、全量を一〇〇、センチメートルとなすべし、甲液の定量を減すれば、軟調の原板を得、増せば硬調の板を得るなり、故に人物には甲液を半減し、複寫には其量を増す方結果佳良なり、

右の處法に依れば、手指又は乾板を汚染する憂なく、且つ現像藥も永く保存に耐ゆるの利益あり、

(二)ハイドロキノン　ハイドロキノンハ力ある原板を作り、且つかぶらざる點其長處なり、故に複寫の現像に適す、然れども華氏六十六度以下の温度に於ては、畫像現はれず、故に冬季は温めて用ゆべし、此藥にあるかり性の強きものを加ふれば、非常に強き現像液になること、「クリスタロース」現像液の如し、ハイドロキノンの處法左の如し、

甲
蒸溜水　一〇〇〇、センチメートル
亞硫酸曹達　一〇〇、グラム
ハイドロキノン　二〇、グラム

乙
蒸溜水　一〇〇〇、センチメートル
炭酸加里　一〇〇、グラム

使用に際し甲液三〇、センチメートル乙液三〇、センチメートル水一五、センチメートルを加へ用ふべし

（三）アジユロール　アジユロールはハイドロキノンの一種にして、其缺點を除きたるものなり、即ち其作用速にしてカプラズ、アルカリー剤を多く要せず、温度の高低に關係せず、且つ永き保存に耐へ出來上りたる原板は濃度強く力あり、然れども本剤は臭素作用惡しき故、多量に用ざるべからず、故に露出過度の板には、古液を用ゆるか臭素を多量に加ふべし、反之寫度不足の板には、液を稀薄にして用ゆべし、其處法左の如し

甲
蒸溜水　一五〇〇、センチメートル
亞硫酸曹達　二〇〇、グラム
アジユロール　二五、グラム

乙
蒸溜水　一〇〇〇、センチメートル
臭素加里　二、五グラム
炭酸加里　一〇〇、〇グラム

使用法は、人物板には甲液三〇、乙液二〇、を混用し、景色板には甲液三〇、乙液二〇、水二〇、を加へ用ふべし、

（四）パイロカテヒン　パイロカテヒンは、其性質略前者と同一なれども、尚ほ一の特質は、灰ポール入るも毫も現像力に關係を及さゞるとなり、故に混合現像液として用ゆることを得るなり、其處法左の如し、

甲
蒸溜水　二五〇、センチメートル
亞硫酸曹達　二五、グラム
パイロカテヒン　五、グラム

乙
蒸溜水　二五〇、センチメートル
燐酸曹達　四七、グラム
苛性曹達　五、グラム

使用に際し、甲液一、乙液一、水一の割合に混和

すべし、

（五）ロジナル　ロジナルは「パラミドヘノル」と苛性リシユームとの合劑にして、現像力は強く、温度に關係せず、極めて軟調の原板を作る、其用法は適度の板には十乃至十五倍に稀め、過度の板には五乃至十倍に稀め、臭素加里を多く加ふ、瞬間撮影即ち概して寫度不足の板には、三十倍に稀薄して用ふべし、以上の稀液は保存力なし、

蒲田の菖蒲

小川直子

折しも夏の半ころ、樹々の木末はみづ枝さしつゝあしたの露もみどりを含むかと見えて涼しく、吹わたる風の心ろよく覺ゆるまゝに、いづくにかせうえうせばやと語らうほどに、姪なる河島梅子が、蒲田といふ所の菖蒲こそ此ほどより咲出たれと、人々のいへるを聞きしなり、いざや數子達を打連れて、見にやゆき給ふべからんと言ひ出でたるに、さはとて思ひたちぬるは、明治四十とせ六月九日といふ日なりけり、此日はあしたより空のけしきも晴れわりたれば、近きわたりより電車に乘りてゆく、道の程も遠からねば、また、くひまに至り着きぬ、所のさまは、里ばなれたる野中なれば、おのづから流るゝ野川を右にひだりにひき分けて、せき入れたる水などのおもかしさたとへむかたなくて、それに渡せる橋どもゝ、只假初なる板橋にて、所々虫ばみたる、中く々をかしう見ゆ、あふぎ見れば、藤棚あり、花はとくちり過にけれど、日影をおほひていとすゞしければ、おのれ

　せきいれし水の音さへ涼しくて
　　實をむすびたる藤のしたかげ

此下をあゆみつゝ見渡すに、廣らかなる沼田幾所となくありて、咲みちたる花あやめの盛なるさま眞白にて、ひとへなるが大きやかに咲出でたるも、又むらさきよしぼりよと、八重に一重に數しらず見つ

くしがたきまで匂へるは、實に世の人のめではやすもうべなりと見ゆ、されば教子たち打喜びつゝよめる

○　稲田幸子

さそはれて蒲田のさとを尋ぬれば
人まちがほに菖蒲さくなり

○　片山三輪子

菖蒲田のわせづたひするうなゐふが
鯉を見つけて友よばふなり

○　太田たま子

花あやめ咲みだれたる園のうちを
おもふともどち遊ぶたのしさ

など口すさびつゝゆき行けば、水うまやも假そめなれど、爰かしこにあまたあれば、見に來しよそ人も數しらぬが、皆思ひ〳〵に入りて休らふ、さればおのれらも兎わる庵にいりて休らひつゝ見わたすほどに

○　河島梅子

花あやめながめて暮す心こそ
うき世の外の思ひなりけれ

○　おのれ

見る人の心のいろもとり〳〵に
咲にほひたる花あやめかな

と口すさびつゝかなたを見れば、外國の女ふたり打連つれて來れば

○　草鹿砥直子

やすらひて見わたす園の花あやめ
とつ國びとも來てめづるかな

などいひて樂しめるに、

○　片山三輪子

色きそふ菖蒲の數は多けれど
すが〳〵しきは白にぞありける

○　稲田幸子

うるはしく咲揃ひたる花あやめ
こきむらさきの色ぞゆかしき

○　小林ちか子

名におへる蒲田の菖蒲八重ひとへ
　咲けるさかりを見るぞ樂しき

などおもひ〳〵にいひ出づるも、まだ初學びの事にしあれば、歌の中に數まふべくもあらねど、斯くおもしろう樂める氣色を、古里なるうからにも友にもいひやらむとてしるせるなりけり、斯くて割籠やうの物打開き、あるはくだ物などたうべつゝ、靜けき御代のかしこさを、かへす〳〵も喜びて、またさらに園の中を行かひつゝ遊ぶに、猶盆栽又は花畑などもありて、さま〲なる花どもの中を分行くに、

○　　　　　太田たま子

花園のそゞろありきに思はずも
　罌粟ぞひとはな手につまれける

かくいひ〳〵てめぐりありくに、廣らかともいはねど、池なども心あるさまにて、緋鯉のゆた〳〵とひれふるもいとのどけし、岸の岩根にさつき躑躅の色花やかなるが盛にて、汀の水にうつろふもすてがたくて、

咲にほふ岩根のつゝじうつろひて
　くれなゐふかき波のあやをる

思ふまゝなるえた歌なれば、かたるもをこなれど、少女達をなぐさめむとてこそ、かゝるほどにひとりがいふ、穴守稲荷は程遠からねば、歸さに立よらむはいかにとあれば、爰をたち出で、かしこをさしてゆきけり、風流たる所にもあらねば、しるしもとゞめずしてやみぬ、

日曜日の遊

河島梅子

梅雨の頃なれば、昨日までは折々小雨ふりつゝ、空のけしき心もとなかりしに、思ひの外今朝晴わたる空のいろいひしらずぞありける、豫て叔母君より今日は蒲田へとのたまひし日なれば、一しほ心もうき立つばかり嬉くて、朝ぎよめさへそこ〳〵に、先づ身じたくとゝのへて、教子達もろ共、叔母君にし

たがひて庵を出でつゝ、足にまかせて札の辻にとたどり着きぬ、これより電車にて行く程に、窓より見れば品川の海原遠くなぎ渡りていと面白し、沖は眞帆片帆追手を受けゆくもあまた見え、又釣する小舟も遠近にうかびたり、これらを眺むる程に、いつとなく八山といふ所に至りぬれば、これより電車をのりかへたるに、此中は人多くていたう込あひたり、されど程なく蒲田に至りぬればおりて行く、二丁余りの所なれば、遠近をながめながらあゆみ行くに、麥畑などありて、古里の事などそゞろに思ひ出でつゝ袂つゆけし、かゝるにはや蒲田なりけり、門を入りてひだりみぎりを見渡せば、見渡すかぎり咲匂ひたる花あやめ、目も及ばぬばかりなり、しばしたゝずみ居て、それよりあぜ道をつたひつゝ、そこはかとなくそゞろありきせしに、蝶ならぬ身も、花にあくがれうさを忘れける程に、淸らかなる水うまやあれば、しばしとて皆々入りてやすらふ、木の芽よ菓子よともてはやしつゝ、爰にて時をうつしぬ、つくつくと眺めやりて、

見る限り白むらさきの花あやめ
　咲きまじりたる園のなかゝな

花あやめ眺めて暮す心こそ
　うき世の外のおもひなりけれ

など口すさひながらながむるに、はや歸るべき頃なれば、今ひと度見ばやとてめぐるほどに、小川ありて菖蒲田へせき入るゝ水のゆたけさえもいはず、此小川には緋色なるも、黒きも、まだらなるも打まじりたる鯉どもの、ひれふりたのしげに遊ぶも、又一きはのながめなりければ、我しらず足をとゞめつるに、いざ／＼と教子たちにそゝのかされて、惜める心をあとにのこしつゝたち出けり、是より羽田なる穴守稲荷にまうでつるに、道すがらの氣色は海原を見渡していと面白けれど、はぶきていひのこせるも、中々に奥ゆかしからんとて筆をとゞめけり。


瀧をおほふ
瑞枝木立をもろゝ日に
ぬれ羽光りて鶺鴒飛ぶも
佐々木信綱

女子教育講演會　第一回景況



本誌編輯局の催にかゝる、第一回女子教育講演會は、去る六月廿二日午後一時より、神田美土代町青年會館に於て開會したり、今其景況を記さんに、

この催の大に時期に適したるものありと見え、殊に諸名家の講演せらるゝことゝて、豫定時間前既に立錐の餘地なき迄に盛況を呈し、來賓席には早くより、侯爵徳川賴倫、伯爵徳川達孝、同松平直亮、同柳原義光、松平忠威の諸氏をはじめ、貴紳の臨場せらるゝを見受けたり、やがて時刻ともなれば、本社とは極めて縁故深き高島平三郎氏壇上に現はれ、本誌の本領より、この催に付て一場の口演あり、簡にして女子教育の要を盡され、而も期せずして、當日各講演者の所說の、氏の說に一致したるは當然なるも、亦奇妙と云はざるを得ず、次に山田源一郎氏のピヤノ『昨夕の夢』の奏樂あり、頗る喝采を博したり、

坪井理學博士の諸人種男女の分業、これは氏の專攻にて、今更其博識に感服せんより、恰も砂利の中より金剛石を拾ひ出す如く、殆んと乾燥無味とも云ふべき人類學も、一度氏の口より出づる時は、極めて興味深きものとなり、一時間餘の長きに亘つて、ます／＼聽者の感興を禁ぜざらしめ廣き世界に浮れ出でたる如き思ひあらしめたり、終つて加藤柔子氏の箏曲『千手』下田歌子氏の傑作にて其文の

面白きに、氏の美聲妙曲と相俟つて、實に梁の塵を舞はさしむるもの、號外として雲井六段の打合せ、是亦得も云はれぬ上出來なりき、

和田垣博士の折にふれたる感想　氏が特意の身振假聲入にて、所謂折にふれたる感想を、約二時間演述せらる、聽衆の膞をよらせつゝ現今女子の弊風を説き、女子に戒むる所ありしは、恰も藥を饅頭に包みて小兒に食はせる如く、さまで耳を痛めずして、精神の滋養となるべきものなり、氏が女學校、婦人博覽會に就ての提灯も、折にふれての感想の中に入れられたるなどは、頗る手際なるものならずや、次に富田寛氏の一絃琴『姫小松』、ピヤノとの合奏は、如何あらんと思ひしに、流石は一流の宗家だけありて、合奏權衡を失はず、その間に自然一絃琴の特色を發揮せられたるは敬服の外なし、其調の上品なる、かゝる催の餘興として、は此上なかるべし、



井上文學博士の日本女子の將來　氏は明治六年以來、女子教育の進歩を、先づ正確なる統計によつて叙述せられ、今後の女子は如何に世に處すべきかに就て、適切なる例證を擧げて、懇々女子の將來に向つて訓諭せらるゝ所あり、實に花も實もある講演にてありき、最後の壇上を賑はすべく、北村秀晴氏令閨はつ子と、一はピヤノ、一はヴァイオリンにて、長唄『秋の色草』を演奏せられたるが、頗る好評を博したりき。



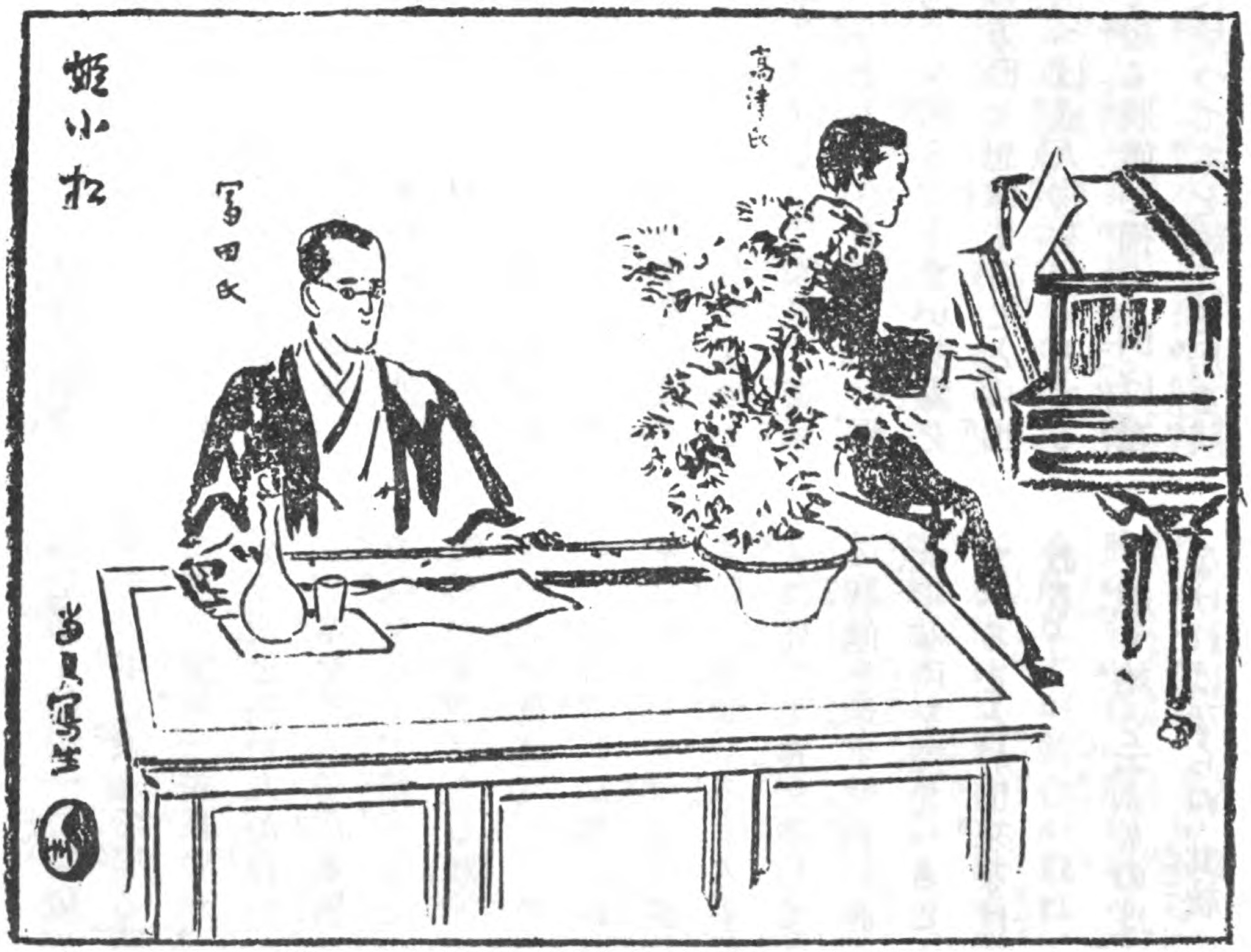
繪畫の話

園田墨川

繪畫は筆の先で、或生活物の有様を示すもので、人間ならば、人間の直打、動物ならば動物の直打、それを全體として示さうと云ふのである、それであるから意味が非常に大きい、即ち繪畫の現はす意味精神的の直打の非常に大きい、其意味の大きいと云ふ點に於ては繪畫は詩歌に近い、つまり繪畫といふものは實際にある物を描くことは描くが、其實際にある物を摸出する自分の美の理想に依つて變化して摸出す、であるから繪に描いてあるやうな物が實際にあるかの如く思ふけれど、繪に描いてある通りの物が實際にあるものではない、成程繪に描いた物は實物にあるかの如く思へる物でも、繪に描いてその通りの物が世の中に存在するものでない、繪畫は實際ある物を理想化するので、理想化すると云ふはそれが有つて居るもの、例へば身體までは身體、山水ならば山水の景色を描くに、自分で見た實際の妙義山とか函根山とか、實際見た山を自分でそれに無い物を添加して、それより綺麗に描くといふのではない、唯だ綺麗な物を付けると云ふのが理想化と云ふことではない、理想化と云ふは、山水ならば山水の畫には、是非ともなければならぬ所のもの、附屬物として是非ともなければならぬものを描出するのがそれが理想化すると云ふことである、即ち其附屬物其物なしには山水と云ふことが了解出來ないと云ふやうなもの、山水には何が一番大事かと云ふと、山と水がなければならぬ、從つて岩も要れば樹も要る是等のものがなければ山水畫とは言へない、であるから理想化すると云ふことは山水畫ならば山水畫、歴史畫ならば歴史畫の性質に當嵌つたものでなければならぬ、性質の不適當なものではいかぬ、其他に理想化と云ふことは意味のないことである、例へば乞食を描くに、奇麗な紳士か令嬢の着るやうな着物を描いて見せた所が、人が乞食とは思はぬ、乞食は

大概破れた着物を着け、何時櫛を通したか分らぬ頭髪をして、物を貰つて歩くのが乞食である、それに營養が良くないからヨボ／＼して居る、さう云ふ所を描かなければならぬ、立派な體格、麗はしい着物、丈夫な容貌をしたものを描いて、これが乞食であると云つて示した所が、人が承知しない、汚い破れた着物に、頭髪には櫛が通してないと云ふことは乞食といふ繪の問題に對し目的に對して能く當嵌つたものであり大事な條件である、

女子教育講演會所見（其三）



是に反して着物が破れて居るのみならず、脚の一端が怪我をして血がダラ／＼流れて居る、肉が破裂した居ると云ふことは、乞食に必要はない、惡い着物を着せて足を怪我して圖を描いて是が乞食であると云つてもいけない、乞食は必ずしも傷を負つて居らなければ乞食でないとは云へない、故に怪我をして居るは意味のないことである、破れた着物、汚い頭髪、衰弱して居ると云ふことが乞食の大事なものである、傷を負うて居ると云ふことは乞食を現はすべき必要なる條件でな

い、さう云ふものが描いてあつては繪の目的に相當しない即ち理想化しないものである、

繪畫に於て一番必要なものは、契點と云ふものを見出すのが大事である、例へば其物を摸出して行く間に、眞物の一番能く發達した所、最も能く發達した或時期を選んで其物の性質を現はすのが一番能いのである、例へば犬を描くならば犬のどう云ふ所を描いたが一番良いか、寢てゐる所もあり、起きて居る所もあり、或は駈けて居る所もある、いろ〳〵の狀態があらうけれども、其中で犬と云ふものを現はすに、一番適當のものを現はすは、どこであらうかと云ふことが大事である、最も發達した技術家、畫家は其契點を見出すことが一番上手である、又之を現はす技術に於ても、最も秀でゝ居る、うまい契點を見出せば、一の點で各種の方面を想像することの出來る樣な點を攫まへる、例へば或人物を描くとするならば、其人物の讀書して居る狀態を描く、例ば私を描くとすれば、私が机に凭つて本を讀んで居る狀態を描くのが一番良いか、私なれば私の性格を摸出するに本を讀んで居る所が、一番良いか又は車に乘て居る所が一番良いか、椅子に凭つて莨でも喫して居る所を描いたが良いか、摸出する時間が幾らもある、本を讀んで居る所は其人が深い考に沈んで居る意味を示す、椅子に凭つて莨を喫んで居れば其人の精神が安逸にある狀態である、深い理想であるとか深い考に沈んで居る時期であるとか、どちらにしても一の時期しか現はれぬ、是に反して敎へて居る所を書くとして其人は或考を以て居りつゝ椅子に凭つて居る狀態を示すとすれば、本を讀んで居る狀態椅子に凭つて莨を喫して居る狀態を描くよりは、澤山の狀態を示す便利がある、それが契點である、物の大事な所を攫まへることが一番大事である、之を攫まへることが出來なければ幾ら繪を描いても駄目である。

總て繪と云ふものは全體の幅の統一と云ふものがなければならぬ、其統一と云ふことは、契點と云ふも

のに基いて來るのである、例へば山水畫を描く時分遠くの樹でも、近い樹でも、同じ樹の葉に描いては畫にならない、成程樹其物の葉或は枝と云ふものは、良く現はされて居ても全體は幅としての統一がない山水畫ならば山水畫が是だけの幅に描いてあるなれば、向ふに山があつて此所に水が流れて居る、されど此處等の近い樹と遠くの樹と同じ仕方で現はすと云ふやうな塲合には、全く直打がない、其樹其物としては精密に出來て居つても、幅全躰の直打がない山水畫としての直打がなくなつてしまふのであるから、展覽會などの繪畫の批評は繪畫としての統一がないとかあるとか、統一はあるが繪畫の細かい一部分が直打がないとか云ふ批評がよく出て居る、繪畫の批評と云ふものはそれが大事である。

のみならず、すべて美術品の批評はさうである、彫刻にしても、例へば人間の身躰を彫れば、全體の釣合から統一が付いて居なければならぬ、手は手顔は顔で良く出來て居つても、顔と手の釣合が惡ければいかぬ、手の長さ、指の長さ、股の肉の張具合胸の張具合、腹の引つ込んで居る所、臀部の出て居る所などが釣合が取れて居らなければならぬ。

繪畫には西洋では水彩畫と油畫、其他鉛筆畫とか彫刻畫とか種々あるが、最も用ひられて居るのは水彩畫と油繪である、水彩畫の中にいろ／＼種類がある乾いた壁に描くのと濕つた壁に描くのと名が違ふ、それもいろ／＼に區別がある

水彩畫は古くから發明され、油繪の發明は近代で極く新しい、油繪は耶蘇紀元十一世紀の初めに於ける或寺の僧の發明で水彩畫は繪具を水で溶くのであるがその時代から繪具を油で溶いたのである、けれども眞實の油繪としての基礎の出來たのは、ズット後のことである、併し繪具を油で溶くことは十一世紀にあつたのである、それから油繪として成立つたのは十五世紀、今から僅か四百五十年ばかり前であつて、それ以來長足の進歩を爲して今日に至つた、一番初めは地方に油繪が擴がつて、それから伊太利

に這入つて、こゝで大に發達したのである、それ故明治の初年に、油繪の研究には大概伊太利に行つたのである。

繪畫の種類は、建築的繪畫、歴史畫、景色畫、肖像畫、風俗畫等である

建築的繪畫と云ふは、建築に使ふ畫であつて、小壁或は欄間などに畫が描いてある、或は寺院などに天人が笛を吹いて居るやうな所が描いてある、或は釋迦三尊、或は曼陀羅など描いてある、さう云ふものが建築的繪畫である

歴史畫といふは日本にもあるが、元寇の繪卷物とか佐々木高綱の宇治川先陣であるとか、楠公の櫻井驛の訣別であるとか云ふものがそれである

景色畫は即ち山水畫である、肖像畫は人の似顔を描くもの、日本では人の似顔を描く中に、役者の似顔を描くものが一派別になつてゐる、鼻が高くて口と目が非常に大きいものを描く、あんなものが實際あるものぢやない、口の大きいのは美人ではないが、肖像畫も役者の似顔を描くものは、余り面白くないが、兎に角、あゝ云ふ一派がある。

風俗畫は例へば肴屋で魚類を買つて居る所、肴屋の妻君が魚を賣つてゐる所など、それがジャンル、ペインチングである、それ故に、日本にもないことはないが、日本では魚を描くと死んだ所を描かぬ、例へば金魚の遊いでゐる所とか、鯉の瀧登りとかを描いて、死んだ所を描かぬが、西洋にはそれが非常に多い、又ジャンルも盛んに行はれて居るので、ジャンルは市民の有樣、町の有樣、兵隊の有樣、農夫の有樣等を描いたのである、妻君を描いても裏店の妻君を寫すので、例へば井戸端會議を開いて金棒を曳いて居る、惡口を言つて居る、向ふの娘さんがどうして居るとか、餘計なことを心配して話して居る所などは、ジャンルの好題目になる、其人一人を描いてはいかぬ、何でも全體の意味を現はすやうなものがジャンル、ペインチングである、或は職人の氣風を寫して居るもの、或は上棟式で職人が手打をして居

る所を示すとか、さう云ふものであるが日本では是等は一種の風俗畫である

そゞろごと

醫學博士　弘田　長

打めぐる高ね靜けく海淸く
　船ところ〲謌けるがごと

月さゆる磯の松原ゆきゆけば
　富士ましろなり賤が屋の上に

島山の岩根老松見れどあかず
　海士よ知らずやかの島の名を

世に出でゝまだ程なきをあはれにも
　つみとられゆくつく〲し哉

關こゆる菅の小笠に雪ちりて
　春まだわかき足がらの峯

さらでしも旅のねざめのわびしきを
　夜はの秋雨いやふりしきる

日かげかづら

醫學博士　久保猪之吉

谿のみなもと松の風
　風は浮世のちりならで、
岩に年ふる老松の
　高き調をつたへ來て、
折々夢をおどろかす。

○

神代ながらの石床は
　靑き苔わりおのづから。
朝夕に白露の
　おりゐる見れば天つ神
狹霧の中に立ちまして
　玉ちる乳のたりて〲。
湧くよ泉の期を知らず。

○

「蘭のかをりを羨むな、

小百合の色を思ふ勿れ。
盡きぬ泉の甘き吸ひて、
松の調べの崇き聞きて
此樹によぢて岩にいねて
全きいのちを終るべし。
熊野山中谷十里
いましが爲に狹からじ。」

籠の里に花ひさぐ
　翁の籠に移されて、
蘭は此春山を出でぬ。

○

かの鉾杉の堂守の
　童の鋤に起されて
百合は此夏世を去りぬ。

○

顧られぬうれしさは
　神の給ひし石床に
神の給ひし乳吸ひて

　ときじく此所を守る身を。
まことの知己を得たる身よ。

○

檜の笠に檜杖
　都のちりをのがれ來て
いこふよしばし熊野山。

○

歌の袋にいたはりて、百里の路は歸りしも
われ果てにたる我園生、小瓶は昨日碎けたり
今更罪を悔ゆるかな
さなれ君、君が園生に移されて
すみれ、茫苅、撫子とはかなき色を競はんや

○

更にまた、黄金白金ちりばめし
螺鈿の瓶に活けられて
　しばし生命を望まばや

○

君がかたへに跪き
千卷の書を枕して、
低きみ聲の歌さへて
神の給ひし壽を
樂しむべくば樂しまば
何を思はむあはれ君
乳の滴の溪川も
嵐にもるゝ松風も
照る日仰がず星も見ず
終へむと思ひし哀れなる
『日かげかづら』と君おはさずや

うつせみ

鈴木其星

大空にいわたす虹を指さして、ノイの故事かたる翁あり。

稚兒が折る岸の小百合の手をもりて、下す筏におちにけるかも

蚊やりたく料さへつきて若き妻の、むせぶは何の涙あるらむ。

衣あらふたらひの上にこぼれり、軒端にちかき蒼梧の花。

歌ならず文また成らずいたづらに、今日もくれぬと蜩の鳴く。

牛を逐うて牛を牧ふ人はかへりけり、秋たつ空の夕ぐれのみち。

秋はきぬ早も秋きぬわきものは、つゞれ縫ふべく夜をふかしつゝ。

少女子が洗ひてさげし黒髪の、末うちみだし秋風の吹く。

ふくる夜をひとり書よむ窓の外、芭蕉葉ゆりて秋風のふく。

刈り敷ける小草のうへにうなゐらが、球なげあそぶ秋の夕ぐれ。

蘆の穂の白き汀に舟止て、笛吹居れば月さし昇る。

背戸川に家鴨あそべるまひる時、小雨そぼふり萩の花ちる。

つき琴の音をなつかしみ訪ひよれば、小草の露に裳の裾ぬれぬ。

小庭邊にいつしか降りてをさな兒が、むしり捨てたる朝がほの花。

なく稚兒を背におはへて小女子が、こうもり呼ばふ秋のくれかな。

卒塔婆をれ石碑たをれし墓原に、一本すゝき何まねくらむ。

ぬかるみの泥をけつけて去りにけり、黒塗馬車のやごとなき人。

車ひく老のあしもとおぼつかな、雨ふりそゝぐ夕暮のみち。

ふりつゞく雨の夜頃の夜あさびと、如何なるさまに世をはおくれる。

いたづらに明日をたのみて人みなの、しらでいそぐやおくつきの道。

女子教育講演會の開催を祝す

下田歌子

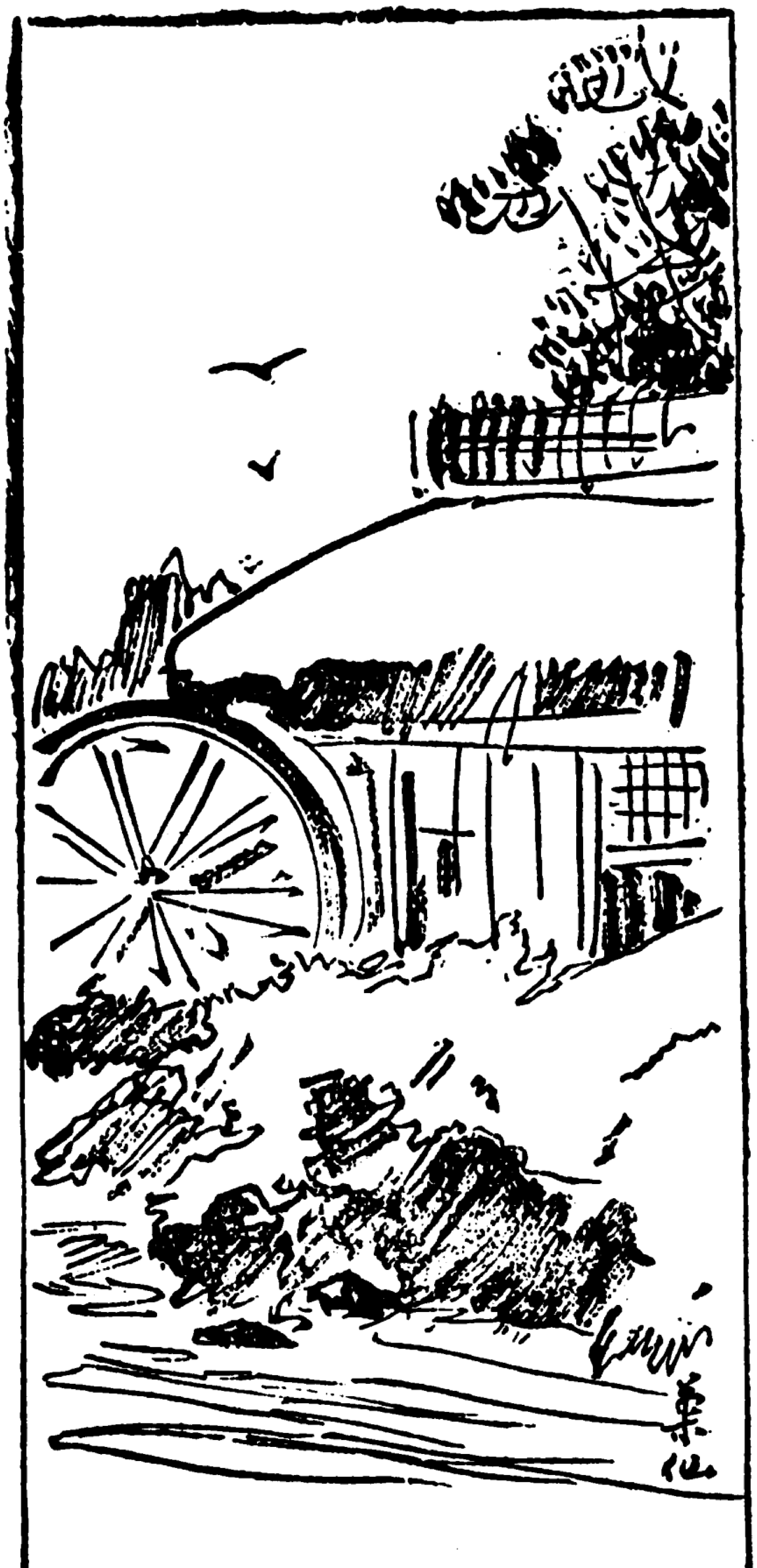
幾多の歳月を積み、幾多の困難を凌ぎて、遂に今日の隆盛を來したる、女子教育も、其實猶未だ全く彼岸に達し得たる者とは云ふ可からす、或者は當局者の希望目的に背きたる不結果を呈することもあるべく、或者は甚だ不結果なりと云ふにあらざるも、却て社會に歡迎せられずして、寧ろ其不可を毀せらるゝこともあるべし、

況んや今や未曾有なる戰捷の餘光を受け、國運の隆盛に促されたる社會の潮流は、稍もすれば青年の子女を誘ひて、浮華遊惰に流れしめざれば、悲觀厭世に傾かしめんとす、これ恰も少年より大人に進化し行く所の身体の、時に或は不秩序不調理なる局部の發育に促されて、却て其不健康を來すが如く、新舊過度時代に於ける社會各般の進歩が、其歩調を整ふるに至らざる徑路の狀況としては、また已むことを得ざる趨勢なるべし、故に今の教育界は、其教ふる者も教へらるゝ者も、殊に深き注意と精勵とを以て、孜々として倦まず怠らす、其短きを足し欠けるを補ひ、互ひに相依り相助け、益々奮って目的の彼岸に達せんことを期せざる可らず、此間幾多の障碍もあるべく、將た蹉跌も無きを保せず、是時に當り、女子教育に裨益すべき講演會を設置せられたるは、己れの喜び禁ずる能はざるものあり、聊か所感の一端を述べて祝詞に代ふ。

漁火

浦柳山人

哀れをなきし夕からす、
杜の塒に歸り來て
今は騒げる聲もなし
あたり淋しき浦げしき
聞ゆるものは泡立て
寄來る波の音ばかり
行交ふ人の跡絶えて
星影きらめく夕闇の
一しほすごく見ゆるかな
見渡す極は海の沖



見えず見えずみいさり火の
唯一つらにきら〳〵と
折しも一人海人の女が
いとをしの子にや脊負ひつゝ
漁火見つゝひとりごと
我も昔は月花を
心の儘にたのしみて
憂き思ひとてなかりしが
塵の浮世のさだめなく
昨日の富も夢なれや
覺むればけふの賤のさま
夫たる人は世の人を
無情ものと観じけん

漁るわざに身をまかせ
月の出汐の影のこと
かたむく賤が蘆の屋に
住馴れにしも早や六とせ
唯夢の間に打すぎて
賤の業さへ今はしも
うしとおもはずなりにけり
云ひつゝまたも沖の邊を
轉視もふらず見るきはみ
燃ゆるいさり火きら／＼と
波のまに／＼見えかくる
いづれか夫のいさり火か
夫ある人やそもいづこ

外人の見たる日本の美術

米國ヒラデルヒア州ペンシルヴェニア大學の建築學教授ウアレン、パワース、レエアード氏は、紐育コルネル大學にて建築學を研究し、後建築局に在勤すること六年、次で一年間欧州を漫遊して、建築上の調査を爲したるが、今回日本に渡米したるは、日本の古美術殊に建築美術を研究するが爲なりと云ふ、氏は去五日上野に開催せられたる美術家大會に臨みて、所見を演說したるが、其の大要左の如し、余の日本に漫遊し來りたるは、日本を見んが爲に來しなり余の職は學生に敎ゆるものなるが爲に、先學ばざる可からず、余の研究せんと欲する處のものは、美術殊に美術建築なり、而して建築は美術、美術中に在つても最大なるもの丶一なり、欧米に於ては日本を以て大なる美術國と爲せり、故に余の日本に來りしは其の多くのものを見んが爲なり、概して外國人は新しき目を以てはるものなるが、余は日本に來りて美術の最大なるものを見たり、故に余は諸君の前に二個の問題を語る可し「第一」日本の美術は世界に於て最大なるもの丶一にして、千二百年の歷史を有し、其の間に於て間斷なく繪畫、彫刻、建築の立

派なるものを產出せり、歐洲に於て此等の大作を出したるは、僅に四五百年の間に過ぎず、故に日本の美術なる者は、歐洲の其の物と比して、決して遜らざるなり「第二」今日日本にては歐米に於ける百般の事物を研究す、是れ固より異論なき處なり、何となれば歐米は日本に與ふべき或物を有し居ることは明なり、即ち科學、商業、製造、戰術等は吾等の最も研究したるものなれば、諸君が之を學ばんとするは最も可なり、然れども美術に至りては、日本は歐米よりも大なる研究を爲せり、故に歐米を學ばんよりは美術の方法を採りて、之れを應用するに若くはなし、尙ほ一層明瞭に言はゞ、成り上りたる美術品を採りて、比較研究を爲すを以て足れりとす、余は奈良、法隆寺、法林寺、藥師寺宇治に平等院等を見て、世界の何處にも見得ざる美麗の建築を發見し、日光、芝、西本願寺、智恩院等に於て、世界無比の裝飾を發見したり、又小美術としては、狩野派の繪畫、七寶、薩摩燒等歐洲に於ても、是れ以上は見能はざるなり、而して到る處に庭園の美術的なる恰も伊太利に類するを發見せり、日本美術の斯く美にして驚くべきは、要するに日本人が美を愛好するの深きに因由するものならん、余は諸君に望む、諸君にして歐米に學ばんと欲せば、宜しく他の方面に於てすべし、唯美術に至りては、既に歐米に優るものを有せり、之れを學ぶ勿れ、之れを學ぶも日本美術に應用するを以て足れりとすべし、日本の美術は決して閑却すべからず、

廢園

杜外

缺久し音をたえ　荒れたる庭のこち〳〵
かゝるや細きさゝがにの　ゐこそふりたれ枝と枝
風は葉かげにこもりてぞ　彼方に遠きひぐらしや
まともに落つる夏の日に　たゆげや白き草の花
灯のあやめ質となりてさ　ながら靜に入れるごと
白雲うごく大空を　仰きて立つや寂しげに

　夜ごとしのびの瀬に　　うろくづもなき水の中
物に音もなく廢園の　眞ひるをせまる寂寞や
たま〳〵枝を放れてぞ　ひるがへり散る病葉の
秘かにおちて苔の上　音もなくしてうづくまる

　一人しあればさらでだに　胸のいたみを覺ゆるに
かゝる境をたゞひとり　ふみゆきつゝもなげくかな



鹹加減

幸田露伴

子を持つて親の恩を知りしは二十年のむかし今又女を嫁入らせて、事新しく亡母の有難さをぞ思ひ悟るなる。幾干の苦勞して育て上げし子を、他人ばかりの中へ手放して出したる親となつては、婿の所思、舅姑の機嫌、吾娘に取つて惡きこととの露も無かれかしとのみ祈り暮し、思ひ明かして、日も夜も心づかひの休む間無し女一ト通りの事は何暗からず敎へ置きたる積りなれども、たゞ氣がゝりなは年若く經驗少ければ、何のやうな幼い事を爲て居やうも知らずと、朝夕に見廻りたきほどには思ひながらも、實家の者の足の近過ぎるも遠慮無きに似たりと自分から扣へて居しが、此前訪ねしより餘程日數も經たり、無沙汰過ぎるも高ぶつて居るやうに取られては、矢張彼女の不利益なり、又然無くても久しく見ぬ顏も見たし、と陰で氣を揉む親心の細く、鬼三疋の小姑共に悅ばれさうなリボン花簪など見繕ひて手土産に丸髷小く、腰も小屈みの、古風に謹まやかなる五十餘りの女、若葉を流るゝ風に勇みある袷時の晝過ぎ此の春の花も蕾の頃縁に付けし娘の許を訪へば、折も折とて舅姑は親類が方に法事ありとて打揃ひて不在なり、主人は同窓の新歸朝者歡迎會の幹事とやらにて今少しばかり、小姑は修學旅行に近縣へ出掛けし由にて、目ざす吾が娘のみが奥樣然と家を守り

居れるに、久しぶりにて水入らずの談話際限無く、問ひもし問はれもする中、時は忽ち過ぎたり。食事の厄介になるも婢僕へ氣の毒と、母は歸らんとするをまア御母樣と扯留めて、勝手の方に一寸立ちて、何やら婦に耳語けるは、其の支度をば命じたるなるべし。心ざしを無にも爲難くて、又二つ三つ談話する間に、婢は恭しく膳を薦めて給仕す、二種三種の肴奢らず見榮張らず、眞の家內料理と見えて、取出でゝ褒むべき見たても無く、特さら如何にして加減を仕損ねしにや椀盛の汁の鹹はゆきに過ぎて、車海老の紅に靑味の取り合はせの美しきも甲斐無く、不手際此上も無くして、色をも味をも言ふに暇無き程なれば、如何に若き人ばかりの臺所の行屆かぬ勝なるが常とは云へ、餘りなる事と一度は愕きしが、他の馳走になりて可否を思ふも拙しと、其處は世に老いたる人の何氣無く粧ひて、鹹き顏もせずに嚥下しけるが、鹹きが中に後口廿たるく、慥に甘味をば點したるものとは知られたり。同じ汁、同じ人間、此に鹹ければ、彼にも鹹き道理、娘は一ト口吸ひけるが忽ちに眉を顰め椀を措きて、給仕せる女を見やりつゝ不興なる顏して、ま、何といふ鹽梅なのだらう、お春、汝が御仕のかへ、あゝ、お秋が仕たのだとへ、誰が爲たにしろ、此のまあ鹽鹹い事、咽喉へも何も通るものぢや有りません、吾家の御母樣なればこそですが、他家の御方にでも此樣なものを獻げた日には、御謝罪の爲やうも何も有つたものぢや有りません、御母樣御免なすつて下さいまし、たまの御來臨に此樣な不調法を爲ましてと、初は婢を叱りつ、末は身を責めて詫びければ、お春は面上に火を散らして眞紅になり、疊の目の中へでも消えて仕舞ひたきやうに肩を小くし身を細めて詞なし、左のみ廣くはあらぬ家の中此の樣子を聞きて知りしお秋といへる、齡は二十三四なるべし、團栗肥りに丸々と肥つて、鼻低の赤い顏、金太郎のやうに丈夫さうな手つき足つき、毒氣の露無きは樣子にも知らるゝ田舍丸出しの女、障子の外に來つて僅々細目に明けしまゝ奥樣、何樣か御免なさつて下さいまし、それ程鹹いつもりで仕たではございましね

えが、と正直なり。それは汝には鹹くは無いか知らないが妾等には咽喉がヒリつきます、お春に聞いてすれば宜いものを、我勢に働き過ぎるので……そしてまた何を御入れだか、妙に甘つたるいところがわつて、と日比に似ず不機嫌なれば、女は濕つぽい聲になつて、ハイハイ、お春さんに聞かないで仕て惡うございました、甘いのは旨く仕てわげべいと思つて味淋のう少し點したで、と地金の田舍言葉まで出したるに虚飾無き眞情は見えたり。何え、味淋



を點したとへ、と呆れて猶も叱らんとする娘に目まぜして母は靜に、いえ、汝さんは知つて御坐で無いか知らないけれども其は爲る事で、田舍では得てお汁物に味淋を點したりお砂糖を一寸見せたりする事がわります、もう宜うござんす、彼方へ行つて御用をなさい、ナアニ其程甚く鹹いといふでも有りません、ほんの少し御加減が東京風で無かつたといふだけの事で、と老人の同情深く双方を取りなせば、お春もお秋も漸と息を吐きて、甘いも鹹いも咽



喉三寸の間の事、小言は其處に盡きてやがて兎も角も食事は済みたり。三十目のお茶の、香はもとより深からねども出花の色よきを賞し、有り觸れたる甘味なりとも女は之を悦ぶ御膳後の御菓子に、此處では母子睦まじく猶物語り仕合ふ、彼處にはお春お秋の食事するなるべし。其時母は聲を低くしてお前、今のやうな時にも氣を付けなくてはいけませんよ、あれでは何樣もよくありませんよと然も心配相に云へば娘は合點行かず、何故、御母樣、餘り鹽鹹かつたので叱つたばかりぢやありませんか、と若い光に充ちた、美しい眼を丸くす、さあ其所です、丁度今思出した談がありますが、西郷さんと云ふ方に、左樣々々、人が大西郷さんと云ふ其方がね弟御の從道さんのところへ御出になつた時、時分になつたので、從道さんが御食事を御獻げになつたのです左樣すると丁度今のやうな譯で、大層不加減な鹹い御汁が出たのですつて、そこで弟御さんが御膳拵へを仕た婆さんか何ぞを散々に御叱りになると、大西郷さんが其を御制止になつて、汁の鹹い甘い位の事で左樣人を叱るには及ぶまい、と仰やつたさうで、從道さんは其後始終其の事を仰やつては、自分は何樣も兄には及ばんと愧ぢ入つたと御云ひださうです下手に出來たものを責めるのですから今の汝のやうに仕たからと云つて、少しも道理に違つた事は有りませんが、妾から云ふと汝の上が心配で、今のやうな調子で行つては下が懷きません、下に懷かれぬやうでは何程正しくつても道理に違は無くつても何にもなりません能く工夫して、此家の良い奥樣と云はれるやうに仕て下さい、あけても暮れても汝の上ばかりを、始終心配して居るので此樣な事も云ひます、何樣か今の大西郷さんの談を能く味つて下さいと噛んで含めるやうに教ふる處世の道の、胸に入り腹の通りしや、娘は深く會得したるらしく、思ひ入つて色を正うし頭を下げて母の恩を謝したり。



春日局の誠忠

文學博士 小杉榲邨

寛永五年、德川家光公年二十五痘瘡にかゝる、頗る難症にして、典藥遂に匙を投ず、局沐浴しつゝ、東照宮の神前に詣で奉り、ひれ伏して告げ申さく、神君の嫡孫家光公は、典藥術盡きて、命旦夕に究まらせ給ひぬ、公は天下の將軍の御身なり、妾が身は賤しくて且つ穢らはしけれども、しかしながら公の御身は妾が乳味を奉りしによりて生長し給ひければ氣血の淺きにあらず、是れによりて妾御身代りに立ちまゐらせん、神君此願を容れさせられて、公の御惱みを癒し給はゞ、妾が身煩ひて死すとも更に殘す心なし、其時誓ひて藥餌針灸の療治を加へず、敢て神明を欺き奉らずとぞ誓願したりける、此の誠忠に神感おはしけん、公の痘色にはかに立直りて、順々快復せらる、しかのみならず局の身も亦別條ある事なかりき、つねに局が身にかへて、公を補護し奉ること概ね此の如しと知るべし、

或日の朝、御飯公の意に叶はぬ事ありて、他に御飯をもとめらるゝに、用意なきが故に、朝御膳を上らざりければ、局奥にて承り、松平伊豆守參れよと呼よせて、申渡されけるは、貴賤上下ともに、二時の飯は腹ふくるゝを度として、身體を養ひ、命數を保つ事いはでもしるべきものなるに、公方と仰がれさせ給ふ君の御命をつながせらるゝ御飯の、上意に叶はせられぬ時、他に用意のなきは勿體なき御事ならずや、御汁以下は數もあれば、其中にて御意にめ

したるを召上りて濟むべけれど、御飯は一色のみなれば、是は他に用意なくては叶ふまじ、それに氣附ぬとは、各の疎略、御賄の者の無念いふばかりなきぞ、向後は焚干、湯取、菜飯、粟飯、麥飯、赤豆飯挽割飯の七種を、毎朝申付けられよ、公はその內の一種ならで召上らざるも、各は費なりと思はるべけれども、決してさにはあらず、其の御殘をば、みな〳〵へおろしいたゞかすべければ、更に費にはなり申さず、御次、御小性中以下、坊主まで晝夜の勤勞怠らざるに、二時の食のみにては、丈夫なる身の何とて堪忍せらるべき、それ等に配りつかはさば、辛勞の慰問となりて、大いなる公の御爲なり、されば以後は七種の御飯をたかせらるゝ事、將軍家の御佳例なるぞと、春日局が申渡せしと、役人中へ申されよ、公へは妾がゝく申付たり申上べしとぞ申付けられける、されば四代家綱將軍家の代までは、公方家の七竈とて、おの〳〵丁寧にこしらへけるを、儉約になりて後には、三色づゝたきけるとかや、局の注意おもふべし、

また總て諸大名の參勤交代の節に、總女中へ金銀を贈りものとせらるゝが例なりしも、酒井讃岐守忠勝執權うけたまはるところ、上へ申立て、女中のうちに限りを立て、贈り物する事と定め、總女中へ配りかたは停止せらるゝ、此時局讃岐守を始め、諸老臣列座のをり、見計ひて申されけるは、冬は諸大名の爲のみを思はれて、女中の難義をかへりみ給はねば片手うちの計らひなるべし、聊かの給料にて召仕はるゝ女中衆はれ着の小袖一枚を調製へることは、各が具足一領成さるゝ程の思ひなるぞ、されば以前より諸大名の參勤交代の祝儀は、總女中が衣服の料に配付られし事なるを、此度停止せられ候ては、總女中は今よりいかゞ致すべけん、妾等御祝儀を受領る度ごとに、いよ〳〵氣味わしくこそ存ずれ、妾は三千石を拜領すといへども、君の御陰にて三萬石ばかりの暮しをし侍る故、總女中へ何程づゝかを配付んこと心安き譯なれども、此度の事は、將軍家代々の

法式と定まれる手始めなる故に、かくは申談ずるなり、諸大名の參勤交代の祝儀、積役の義に就き、一人前何程と書附を以て、總女中へいたゞかせし故に是は御合力金と號して、上より下さるゝ樣に相談せられよかし、公へは妾申上ぐべし、さらば大名中へ用捨もたち、總女中もいたみ申すまじとぞ談じける其後毎年霜月師走の兩月中に、御合力金といふもの女中の格式に應じて、百兩、七十兩、五十兩づゝ、其下御中居はしたものにいたるまで、それ相應に下さるゝ事となりて、後々までも相續せしは、全く此時局が慈悲心より始まりしなり、

又或時女中どもの小袖をひきあるくを、いつも見咎めて戒められけるは、女の衣服は下直にては出來ぬものぞ、白小袖などの色うるみたるは見苦しく、殊に御目通りへ出づる者が汚れたる處をひきたる裾をそのまゝにて、御座敷へ出でなんは、其身の冥加も宜しからず、されば成るたけ引擧げて、いかにも甲斐々々しくこそ取廻はるべけれ、妾が夫は浪人にてありければ、足袋など吾みづからさして、しつけてはかせしぞ、女は何といひても、物縫ふ事を知らず、糸つむぐことを辨へざるは、手づゝといひて嫌ふことぞ、又化粧し髮結ふことも、夜明けてするものにあらず、寢顏はすまじきものなるを、朝寐して人に見られんこと耻かしき事なり、勤め奉公する身に限らず、夫を持ちて家に居ても、女は必ず夜のあけぬうち、形づくるものぞと、平生にいひきかせり

寬永二十年八月の初、局病を得てければ、退きて代官町の邸に保養す、同月八日、公は駕を枉げて病氣を問はる、これより先寬永五年公難症ありし時局は誓つて藥餌針灸等を生涯身に施さじと神明に願ひし事のあるが故に、よしや病ありとも、敢て巫醫にゆだねず、只從容として天命に任せおく外なしと云ふを、台聽に達しければ、公いたく驚かれて、同月十三日又駕を枉げて、親しく容體を看られて後、翌十四日上使として酒井讃岐守忠勝、松平伊豆守信綱、板倉周防守重宗の三名に、深く申含められ、藥餌

治療を加ふべき旨をあつく諭され、同廿七日家光公また成らせられ慰問あり、同廿九日台命を以て、玄冶法印、大草主膳正、堀田加賀守の三名を其家へ附けられ、同晦中根壹岐守を上使として病狀を訪問せらる、九月二日公また成らせらる、同五日竹千代君成らせらる、尾張侯、紀伊侯、水戸侯も數度來問あり、翌六日千代姫君成らせらるついでに、貴女の訪問しば／＼あり、同十日酒井讃岐守、松平伊豆守を上使として容體を問はせらる、京都より東福門院の御所よりは、右衛門佐局を上使として書を下し賜はりて慰問し給ふ、又公親筆の書を下して、懇に服藥施療の事を諭さる、されども此一事は、局急度思ふ旨ありとて、決して台命に隨はざりき、同十四日公又成らせられ、みづから煎藥を持ちて、局の枕頭に臨みてのたまはく、此藥は余が取らするなり、余が手づから取らするものを否みはすまじ、快く服してよと與へらる、時に局かたじけなさの餘りに、苦惱をも打忘れて御前にひれ伏し、兩眼より淚をはら／＼と

流しつゝ言上しけるは、君御機嫌能くおはしまし、天下穩かに、御代繁榮に、四海の草木まで、今は御威光になびき從へり、妾が身も此御威光をいたゞき奉り、位は從二位に叙せられ、子丹後守まで級高く召仕はせ給ふこと、實に過分の至りなり、今生にありて何の思殘す事かあるべき、いまは少しも惜からぬ身なるからに、今日まで醫藥も加へざりしを、勿體なくも御手づから下し賜ふ所の良藥、いかでか拜授せざらんとて、藥碗をおしいたゞきつゝ、舌をもて咽を塞ぎ、頤より懷に流し入れて、終に一滴も腹中には收めざりける、是れ曩に神に誓ひし、この精神を破らず、君に禮を失はざらんとする眞情、死にいたるまで確乎として渝らざる所爲とぞ見えける、公この體をつく／＼見とめられつゝ、淚をおし拭はれ、かさねて今生の望み何事によらず言上すべし、叶へとらすべしと述べ給ふ、局は糸の如き聲にて、たゞ有がたしかたじけなしとのみ申して、何の辭もなかりしかば、公また述べられて、此方より汝にた

のみ入るべき事あり、汝之を許してよ、汝日ごろ稲葉内膳(局の二男)に勘當したる故に、吾等の前に召さずして年を經たること不本意なれ、今は心底も直りつらん、彼は吾と乳を分けたるものなれば、吾に免じて彼の勘氣を許してよかし、されば召仕ひてくれなんと仰せらる、今は限とも見えつる局、首をもたげ聲をはげまして申さく、内膳は不覺もの、不忠者と見きはめ候故に、勘當は申付け侍り、これも君の御爲よからぬものと思ひての義なり、妾女性といへども、末期に臨んで子の愛に溺れ、君に忠を忘るゝ者には侍らず、天下の將軍たらん御身は、かゝる最負の御沙汰はいさゝかもしたまはぬこそ目出たけれ我身果候後とても彼を免して召仕はせ給はゞ、吾は御恨みに存じ奉るべしとて、潔くいひ切りて、重き枕に伏しければ、公もかゝる金鐵の如き忠誠には、ほと〳〵感じ入りながら、今は詮方なしとて立還らる、間もなく局の息絶えぬ、時に年六十五、實に寛永二十年九月十四日なり、それより後事をいとなみて、法號を麟祥院殿仁淵了義尼大姉とぞ稱しける。

男女の特性

學習院女學部長　下田歌子

女子の天職は如何、子孫繁殖は禽獸も亦よく之を爲す、女子が人類として、一家に對し、社會に對し將た一國に對する天職は如何、家庭の王といひ、勢化の源と云ふ、抑も如何なる事を意味するにか、それ人は理と情との動物より、爾も理性は情と離れて存在すること能はず、情性も亦理に附隨せざれば、其道に適する事能はざるなり、故に血あり肉あるものは情なき能はず、然れども男女の相異なる、自ら特性あり、乃ち男子は理性に明らかにして、情性に暗く、女子は情性に富みて理性に乏し、若し男子の理性いよ〳〵明らかに、女子の情性ます〳〵正しく男子の理性、其情に過られず、女子の情性、理の範

國を越えざらん乎、是れ即ち立派なる男子といふべく、立派なる女子といふべし、されど人間の缺點多き往々しかる事あり、男子の理や其理たるを知りてこれを活動せしむべき情に乏しく、女子の情や其情に富めるも、これを支配すべき理に乏し、抑も理は不活動にして、情は活動なり、故に理は銃丸の如く情は火藥の如し、理性を刺激し、鞭撻し、活動し、以て能く其効を収めしむるものは情なり、されば情の附隨せざる理は活動なきの理なり、情も亦斯の如し、能く情をして常規の外に逸せしめず、常に一定の軌道に進ましむるものは理なり、

男は理に明らかにして情に暗く、女子は情に淨くして理に濁れり、故に理を知りながら、情を以て之を實行し能はざるものは男にして、理を知れば即ち實行するに容易なるも、容易に理を了解し能はざるものは女子なり、知りて行はざるものは男子にして知らざるが故に行はざるものは女子なり、是れ男子は理想に富みて情想に乏しく、女子は情想に富みて理想に乏しきが故なり、されば男子は心身の發達に從ひ、理想の進歩するとゝもに、其理想と相容れざる劣等の情想が、これに隨伴するを免れず、女子に於ては乃ち然らず、其心身の發達とゝもに、情想はます〳〵高く、且つ淸きに至るも、理想は割合に高處に進まざる也、

然れども其情想いよ〳〵高潔に赴けるが故に、善を認め得れば、即ち直ちに之れを實行するに躊躇せざるの力、いよ〳〵益々其強きを加ふるものなり、是故に男子は其理を以て女子が情を制し、常規の外に逸せざらしめ、女子は其情を以て男子が理を活動せしめつゝ、人間社會の幸福を圓滿ならしむるにこそあれ、人類の他の動物に異る所以のものは、蓋し斯の如き高尙なる狀態あるがためならずや、

彼の英邁なる男子が、女子の諫によつて翻然直ちに能く其過を改めたる如きは、女子に始めて理を敎へられしにはあらずして、女子が情の力によりて、男子の胸中に沈澱せる理性を刺激し、活動せしめら

れしなるべし、
又彼の善良なる女子が、男子の助けによりて、漸く其實行の能く中正を得るに至れるもの、蓋し其情性に驅られて、理を解すること能はざりしものが、男子の明斷なる道理の指導によりて、遂に過なきに及べる、即ち其情を話すべき理を知らしめられしなるべし
雄略の皇后、帝が逆怒を宥め給ひて、能く舍人が死を救ひ給へるのみならず、『人は獸を獲て悅び朕は善言を得て歡ぶ』と言はしめ給ひしは、帝の英邁なる、もとより濫りに人命を斷つの不可なるを知り給はざらんや、偶ま后の至情、能く帝の胸裡に潜める理性を發揮活動せしめ給ひしにほかならざるなり、



英の宰相メルボルン、嘗てヴヰクドリヤ女皇が仇敵の感あるピールに對するの情を冷まして、漸次その信賴の意を固うせしもの蓋し皇が高潔なる情性の一たび能く其道理に近づくを得ば、必ず私怨舊憤を捨て以てピール其人を用ひ給はんことを知ればなるべし、
是を以て、女子の過は多く知らざるに起因し、男子の不善は大概、俗に所謂横着、即ち知るも之を行ふの情乏しきに起因す、

故に男子は進歩して其理ます〳〵高く、女子は進歩して其情いよ〳〵清し、女子が高潔なる愛情は、男子が劣等なる慾情を壓して、能く其理性を進ましむるなりけり、而して女子は其間、男子が理想の活動に反對して、女子が情想ます〳〵清く且高きに至る、斯の如くにして止まざらん乎、長短相補ひ、强弱相助け、遂に圓滿なる境域に達することを得べし之を以て造化の玄妙、自然の大道に歸す、若し人この道に從へば榮え、この道に逆はゞ亡びん、一家斯の如く、一國斯の如し、豈つとめずして可ならんや

男女の特性既に斯の如し、然らば即ち女子の天職如何を知る、豈難からんや、女子が高潔なる情想を以て、男子の劣等なる情想を抑壓し、其沈澱せる理性を興奮せしめて、能く其活動の効を全うせしむるをこそ、女子の天職とは云はめ、換言すれば、男子發達する時は、其理性の進歩に伴ひて、而も之と相容れざる劣等なる情想も亦隨つて增加するを常とす、故に之を箝束して放逸ならしめず、以て其理性

に十分の活動を與ふるの任に當るものは女子なり、更に細言すれば、男子は其智識の發達と共に必ず高まり行くを免れざるものは劣情なり、其劣情は往々男子をして道德上の危險に陷らしむるの恐れあり、されば發達せる女子は、其高潔なる情想を以て、斯の如き男子の劣情を制御壓抑して、男子の知能を淸く正しき方向に活動せしむるこそ、女子が最大の天職なれ、之を極言すれば、女子は男子が道德上の監督者たる地位に立つべき者たるなり、道德の監督、是れ即ち女子が天職にあらずして何ぞや、

されば女子は男子が言行の支配主にして、其德義上の監督者たるものなり、故に男子が理性を鞭撻して、其劣等なる情想を壓するところの、女子てふ監督ありてこそ、男子が下劣なる情想の奴隷たるを免るゝなれ、ビスマーク公の夫人、其良人が他邦に在る程、殆んど日每に書を遣るを以て例とせり、人あり夫人に問ひて曰く、何ぞ言を寄するの多きと、夫人答へて曰く、希くば良人の我音信によつて、我傍

にあるい感わらしめんことを、蓋しビ公の豪邁の意氣、時に或は不德に陥る恐ありしかば、それをして能く過なからしめしは、單に夫人が高潔なる情の力によれるなるべし、まことに若し夫人其人なかりせば、ビ公亦敗德の人たりしやも知る可らず、是れ豈ひとりビスマークのみならんや、世に偉人と云はれ、英雄と言はれたる人にして、内助否寧ろ其道德の監督者、即ち劣情を驅逐して、其理性を十分に活動せしむるものなかりせば、彼等亦惡德の人たりしやも量るべからず、故に余は我が東洋に高潔なる英雄なきを憂へず、高潔純白にして、情想の發達せる婦人少きを難ずるものなり、若し希望の如き婦人ありて、絶えず男子の理性に鞭撻を加へたらんには、東洋なりとて、高潔偉大なる英雄豈輩出せざるなきを得んや、豈に是れ偉人と呼ばれ、英雄と云はるゝ人のみならんや、一國民に於ても亦然り、一家族に於ても亦然り、斯の如くにして、一家族の秩序は整理し、一國民の安寧は維持せらるゝなれ、

茲に進歩せる國民にありては、女子は必ず其家庭に於ては道德の監督者たり、其社會に於ては公德の維持者たり、家庭の完美を以て誇り、社會制裁力の强きを以て名ある英國の美も、單に女子が勢化に起因せざるものあらず、若し試に美なる英國の社會より、高潔なる情想の婦人を除き、之に代ふるに賤劣なる婦人を以てせば如何、社會道德の腐敗、我東洋の社會に勝るものあるや必せり、之を以て之を見れば、情想高潔なる婦人ありて後、始めて國民の發達を期すべきなり、さるを若し女子にして其程度低く情想賤劣、柔能く剛を制するの能なきに於ては、男子の理想は如何に發達するも、其理想は毫も活動せず、法律あれども執行者なきに均しく、却つて賤陋なる劣情は、其勢を逞うして、遂に制止する所を知らず、女子も亦進歩せる男子が理性に反對して、其情想を高潔ならしむること能はず、寧ろ互に相害して、社會の腐敗の極に陥らしむるなるべし、

今や我邦德育の衰へたるを喋々すと雖、其原因は

女子が發達の遲々するに在ることを思はず、男子が理想の進み大なると丶もに、其劣情の進みも甚大いに、爾も之を制御抑壓して、其天眞の美を發揮せしむる女子に少きが爲なるべきを知らざるなり、男子若し獨り發達して、女子能く發達することあらざらんには、世は烏羽玉の闇とこそなりゆくらめ、

見よ我國今日のありさまにては、男子いかほど不德を行ふも、女子は之を制裁することを得ず、我同胞姉妹は、又女子の本分の何たるを知らざるもの多く、却つてや丶其常世に通ずるものは、女子が男子に對する愛情を以て、之を勢化すべきものとは思はず、徒らに理論を以て之に對せんとし、却つて男子が冷笑を招くぞ笑止なる、其他はみな大方、男子が不德を甘受するを以て、女德の正しきを得たるものとし、其不德の行に盲從するが故に、現時物質的文明日々に進みて、男子が女子に對するの不德は、毫も昔日に異らず、或點に於ては、寧ろ却つて昔日より甚しきかの觀あるに似たり、吾人の天職茲に至りて全く空しと言はざるを得ず、嗚呼女子が天職を全うすべきの道を講ずる、まことに是れ刻下の急務にあらずや、

産婆養成の苦心

楠田病院長　楠田謙藏

私は十餘年來産科婦養成に就て、毎日幾時間かを費やし、殆んど自分が手を取らんばかりにして敎へ何うなり斯うなり看版をかけられるやうになつたものは、何百何十人といふものになつた、一昨年の一月のことであつたが、一二時間ばかり頭の休まる暇が出來たので、不圖自分が養成したる産科婦の事に及び、もし自分が産科婦を要する場合に、どの婦人を賴めば安心せらるべきかと云ふ問題が浮んだのである、

さて首を傾けた揚句が、これを賴まうと云ふのがない、と云ふのは手數のかゝらぬ産婦にでも逢へば

普通だけの心得はあつて、消毒其他の事も辨じられるが、機に望んで活動すると云ふことは、一年や二年習つた位では兎ても出來るものではない、して見るとうか／＼産婆を賴むことは危險である、

この危險を如何にして防ぐか、自分が養成したものじやからと云うて、政府が免狀を渡したものを取かへしに行く譯にも行かず、それに大分年限を經たことであるから、何處に何うして居るやら解らぬのも少くはない、過ぎたるは及ばずと云ふこともあれば、以後は如何にすればよいかと云ふことになつた

産婆が變に應じて活動するには、智識の發達したものでなければならぬ、普通の産婆學だけの事では到底右の場合の役には立たぬ、そこで私の考は産婆にも醫師の心得べき一通の事は辨へさせねばならぬ、さうするには是非高等女學校位を卒業させねばならぬが、實際は高等女學校を卒業して、それから産婆にならうなどゝ云ふのは少い、否今の所絶無である、

そこで色々考へて見たが、大勢の生徒が體操を習へば、唱歌も習ふ、極めて氣永な教育をして居るから、高等女學校も四五年はかゝるが、機轉の才能を養ふ目的で、少數の生徒を骨折つて教授すれば、二年位で高等女學校卒業位の學力はつけられるであらう、それから醫學を一通り教へ、産科を學ばせると云ふことにすれば、チト産婆らしい産婆が出來るであらう、これは産婆養成の方針をかへねばならぬ、即ち産婆學を教へる迄に醫學を、醫學の前に普通學を學ばせねばならぬ、

何にしろ僅かの年限で相當の學力を付けねばならぬのであるから、教師も立派な人を選ばねばならぬと云ふので、文學博士三上參次氏、其他の大家にも相談して、倫理、歷史、地理、數學、讀書等、それ／＼專門家を賴み、その教育方を一任した、ところが教師はよし、その割合に生徒の數が少いから、教育が充分に行屆くと見えて、どの受持の教師に成績を聞いて見ても、いづれも上出來で、他校に類のない進

歩であると云ふ話であるから、私は世話甲斐のあることを喜んで、大に前途を樂んだのであつた、

かゝるうちに、歳月は流れ行いて、早くも一年餘を閲し、昨年の四月となつた、如何なる成績を呈したかと云ふと、生徒がいつの間にか我儘を云出した私等は看護學なり産婆學を修めるものであるから、病人の看護はするが、病人に膳を運んでやることは出來ぬ、赤兒の小便は取つてやるが、それを洗ふことは出來ぬ、つまり膳を運んだり、便器を洗ふことは、學問はしなくても出來る、即ち下女にも出來ることであるから、自分等がするに及ばぬと云ふ話である、

これ迄自分が養成したのには、學問の少いものが多かつた爲に、機轉の才能には乏しかつたが、こんな我儘を云ひ、自分等の天職を無視したものはなかつた、これは一年餘の學問の中毒である、佛蘭西あたりでは貴夫人令孃方が慈善の爲に看護婦や産婆になるのが多いので、白い服を着て、物品の買出しから、患者やら妊婦の世話をする、決して他人に手を掛けさせない、自ら甲斐々々しく面倒を見て居る、日本の看護婦や産婆もさう行きたいもので、私がまづ倫理から敎へてかゝるのは、決して氣位を高くして、大切なる天職を忘れしめんが爲ではない、然るに事實に於ては前述の如き我儘を云ふものが出るやうになつた、これでは考へ直さねばならぬ、と一先づ普通學敎師を斷つた、

斷つて終へば元の默阿彌で、機轉の才能に乏しい産婆をこしらへるより外はない、そこで考へたのは唯文字をつめ込むばかりでは仕方がない、一方からは絶えず鞭撻して、右で敎へた事は左で應用させるやうに、すべて實踐躬行主義でなければならぬ、學問をしたから膳が運べぬ、器物が洗へぬ、と云ふやうな不自由なものになつては困る、これは一層倫理は自分が責任を以て敎へ、他の學科も自ら監督して怠らず研究するやうにと云ふことで、敎授の方針をかへて見た、それから今日まで、同じく一年餘を經た、如何に學力が進んだかは別問題としても、少く

も自分の天職を解しないものはないやうである、産婆を門地の高い所から出したい、立派な學術と技能を以て居るものにしたい、と云ふた所で、それは理想で、さういふ工合にも行くまい、併し産婆が獨逸あたりに比較すると、お話にならぬ拙劣な物でも數と技能に於て、獨逸の産婆の域にまで進むと我同胞中より年々十萬の人を救ふ事が出來る、戰爭などで人の死ぬるのは一時だけのことであるが、産婆が其技能の拙劣なる爲に、年々十萬の人を失ふに至つては歎かはしきことである、醫學に就て文部省も力瘤を入れ、大學から高等學校、その他醫術には莫大なる費用をかけて、さて醫術が如何に進歩したかと云へば、死亡律に於ては近年あまり大差がないやうである、醫術の發達もとより望む所であるが、よい産婆を多くつくりたいものである、僅か半年や一年の修行で免狀を渡さるゝ産婆の危險さ思へば身の毛も彌立つばかりである、

▽前號に豫告せし　楠田病院長の婦人衞生談は、編輯の都合により次號より連載することゝせり

富士の話

富田　寛

追々富士登山の時期に近づいて來たので、少しばかり富士の事を述べやう、私は富士とは大分親んだもので、靜岡藩政の頃、學生時代で、早くも登山を試みたが、富士は結局見るべき山で苦心するほど登山して愉快なものではない、近年修學旅行とか、富士探險とか種々名をつけて、登山することが流行し、男女學生は申すに及ばず、未だ身體不調なる子供に突飛な登山をさせて、親自身の名を世間に知らせたいなどゝ云ふ、卑劣の行爲をするものさへ出て來たが、それ等は素より話にならず、苟も我國民にして此名山を愛好しないものはあるまい、

私は登山をしての富士より、山の周圍を一巡して見た富士に多大の趣味を感得したもので、さていづれが正面かと云ふに、例の山邊赤人の歌に名高き田子の浦であらう、そこで駿河國富士郡鹿島村は此名

所であるから、同村の豪農松永安彥氏は、上院議員で風流韻事に富んで居る人であるから、此家に杖をとゞめて、富岳四季の實景を探つた、同家の茶室は北向に椽があつて、富士を面前に控えて居る、ある夜、時は四月の末であつた、今夜は雪月花を見すべしとの事であつた、いと面白き事に思うて、彼の北向の椽側に出で見ると、折ふし滿庭の櫻は風なきに散りて、月も醉へるが如く霞める中に、銀色玲瓏たる富士の自ら背景となれる、實に類稀なる雪月花の大觀であつた、

また同國駿東郡原驛に植村與右衛門氏といふ豪農がある、舊幕時代に代々富士牧場の牧司役を務め、植木大盡として界隈に其名を知られて居る、文久年間德川十四代將軍上洛の途次休憩所となり、その際の紀念となれる手植の松がある、又近くは東宮殿下沼津御用邸へ行啓中、氏の庭中に松を御手植あらせられたことがある、斯の如き名家ではあり、庭前より富嶽を望めば、前に愛鷹山を抱へて、風景絶佳である、富主より三世前の園主は、圓山應擧の門人で應令と稱した人である、應擧は富士を描いて其名を揚げたが、其寫生は同家に於て三年の星霜を費したので ある、その他岩駒、岩岱、應瑞、南岳、源琦、吳春、蘆雪等の名家も富士を同家に賞し、其傑作が大分同家に紀念せられて居る、されば東海道を旅行するものは貴賤雅俗を問はず同家に訪づれるといふ有様であるが同家にては庭園を看觀するものは、一吟一詠或は繪畫を書かしむるを例規として居る、左にその二三を記さう、

○　　　　醍醐權大納言忠順卿

歸るさを忘れてけりな此園の
　千草八千草名をばたづねて

○　　　　三條大納言實萬卿

富士の嶺も見えわたるなりさまぐ\の
　花のいろ香にあかぬのみかは

○　　　　大岡越前守

春の花秋のもみぢはそれながら

たえぬながめはこの宿の庭

前述兩家の主人の談話、同地に於ける高齢の農人漁夫の話によつて、實驗したるは、富士と雲との關係である、帽の如き雲、帶の如き雲、吹立雲、笠雲、二段笠雲等、種々の形をなせる雲がかゝつて、白雲が所々に點々として起る時は烈風となり、笠の如き雲が東へ飛行すれば晴、西へ飛行すれば雨、といふ風に雲のかゝり工合にて天氣を豫報することが出來る

雪も一文字に降ることがあり、二段に降ることがあり、白妙に積んで居るのが、嵐に逢うて翌日斑になることもある、その他四季折々、朝夕の景色にも千變萬化し、立春木々の芽の出る頃には、旭の昇る際富士の裏は薄紫色になり、晩秋木々の葉の黄む頃には、日沒の際富士の裏が黄金色を呈する等、昨日見し富士の著飾、今日はいさゝか趣をかへて居るが幾度見ても飽かぬは富士の眺めである、

土地の人の言によれば、陰暦八月十五日の夜、いかなる晴天にても、必ず頂上に雪が薄く降り、翌十六日より二三日經ると一たび消えて、亦九月十三日の夜に、再び雪を見、それから漸々に積るとのことである、

東の方より見るには、乙女峠又函根の湖水逆富士などよろしく、これは夏期箱根宿に滯留して、雨後の風なき日を撰び、午後四五時頃、箱根權現一の鳥居より十丁ほど隔たりたる湖畔で見るので、幽邃の景なか〳〵筆紙に盡し難い趣がある、

北の方よりは、甲州谷村精進が沼からで、こゝは駿州富士郡から見るとは正反對で、全く裏に當つて居る、形は一番美しく見ゆる、それは寶永年間の噴火の傷所が見えない、加之沼の水が鏡の如く、夏期は一層凉しさを感ずるからである、

西の方よりは、甲州鰍澤より乘船して富士川を下る急流倒が鼻といふ所で、船中で僅か二三分時間見るので、描寫することも出來ないが、形が眞直で、絶頂が三つに分れ、全體が非常に高く見ゆる、

二日の遊び（鎌倉の一日）

山岡超舟

正直に言へば借物なれど二個の目醒時計に流石寢坊の我も夢を破られて、珍らしく午前三時と云ふに起出でぬ。明くる空、雲低くいとゞ氣のむすぼるゝ雨催、今日降らなくも降る日は他に幾千もあるべきにと愚痴をこぼしつゝ仕度せる折柄、阿房と叫ぶ曉烏の二こゑ三こゑ。

時は皐月の廿三日なりき。花よりも愛らしき少女四百餘名の一隊は、午前四時半を期して新橋停車場に集り、六時發車鎌倉に向ふ。是れ日本女學校の春季修學旅行にして、予は特に其招きに應じ、二日の清遊を共にしたるなり。

國の名負へる我が校の　同窓八百有餘人
心も晴るゝ朝ばらけ　袖を連ねて睦じく
出立つ此度の遠足に　さして行へはそも何處
若葉しげりてわさ風に　みづ枝波寄るさがみ原
分け行く行程十三里　重なる峰の谷ッ〳〵に
甍つらねしいにしへの　おもかげ消えぬ雪の下
天つ日かげに雲かけて　かまくら山の星月夜
輝きし世の歴史談　實地に就て質さんと
學びの親に從ひて　出でこし今日の心地よや

と唱ふ少女が聲々のやさしさに、かてゝ加へて青葉を渡る朝風の、窓外より入り來りて、心地よく何時しか大船に着き、茲に車を下る。

武藏と相模の國堺は今越えて來し戸塚と程谷の間にて、こゝは早や相州の地域、然も鎌倉への道近ければ、更に横須賀線に乘り換へ行くも煩し、いざさらば足なみ見せん田舍みち

あら、われは苗代よ、これは馬鈴薯の花よと語らひつゝ山の内を過ぐ、左右の民家には珍らし氣に軒に起ち、我一行を送り迎へる人々の多さ、中に五十の坂を五ッ六ッ越えしと覺しき老婆こゑ高らかに向家に起てる四十前後の婦人を呼びかけて「お高・おまさんとこのお孃樣を見そこなつちまつた」と云へば彼れ答へて『一番先へ行きました』とて笑を滿

らせる樣實に我娘の此盛んなる遠足會に加はれるを嬉ぶものの如し。

高嶺に呼ばふ松風の　琴の音のこす鶴が岡
谷間にむせぶさゝ川の　悲鳴絶えせぬ土のむろ
いづれを見ても旅衣　袂におもき花の露
をなごの身にて將軍と　呼ばれし人は今いづこ
心にもなき舞の袖　返しゝ跡はそもいづら
とへど答へもなみの音　峰の山彦にひゞくのみ
いざや尋ねむ諸共に　われら女子の身なりとも
忠勇義烈を骨となし　閑雅優美を肉として
明け暮きたへし眞心の　同窓八百有餘人

唱歌の聲いさましく鎌倉に入りて先づ圓覺寺を見る、降魔橋を渡り山門に至る道の左右には昔ながらの老松枝を交へて、幽邃なること蓋し五山の隨一ならん、驍名千古に芳しく、膽斗の如き相摸太郎が廟所は實に此境内、右大臣實朝を祀れる舍利殿の側、正法眼堂の背後にありて、其後には太郎が昔開山と共に寺を建つべき勝地を探りて此處に至り、鍬を地上にツキサシたるに清水の濆々として湧き出で、遂に寺を創立するに至れりと傳ふ、揷鍬井あり、清冽掬すべく今尚座禪の行者が汲みて飲料とす。彼の有名なる正安年代の巨鐘は山門の右より上りたる山腹にありて、料一錢にて一打せしむ鐘鳴清く鎌倉武士が當年犯したる罪業を消滅せしめんためなりとか。

かまくらや昔ながらの鐘の音に
　寄りつどふらしもの丶ふの靈

と題せる碑石傍にあり、又堂には茶を煮て行旅の渇を醫せしむ、此邊眺望最も佳。

憩くて一行は計らざる澁茶の法施に遇ひ、携帶せる菓子など味ひて堂後の間道を下り、建長寺に至る當寺は佐野の渡しの雪の夕ぐれに、治世の名を博したる最明寺時頼が建立して、宋僧道隆を開山とし鎌倉五山の第一位におきたる道場なり、宋風を模せし山門の結構、宏大彫刻奇なること他に其比を見ず、境内廣く瀟洒にして、寺後の山を勝上嶽と云ひ、岩高く聳え、甚だ嶮けれど、鐵鎖に依りて登るべく、

絶頂よりは遠く相模灘を望み、緑滴る脚下の樹林よりは夏をよそなる黄鳥の聲を聞くべし、近來此山腹に堂を建て、遠州より半僧坊を勸請したれば、祭旗道に翻りて坐に勇ましき白旗の昔を一入深く偲しむ

夫れより鶴ヶ岡八幡宮に至り、幣帛を献じ、校長西澤之助氏生徒總代野村松子は、告文を捧讀し一行懇ろに參拜す、祭神は應神天皇、神功皇后、大仲媛神の三座にて源賴義初めて此處に勸請し、後賴朝大に社殿を起し、益々盛大ならしめたる源氏が代々の氏神なり、其結構壯嚴華麗なること鎌倉第一にして大臣山の半腹に朱欄碧甍巍然として立てるもの即ち是れ、第一第二の華表を過ぎ反橋を渡りて數十歩の處に神樂殿あり、右には仁徳帝を祀れる若宮八幡及び賴朝を祭れる白旗神社あり、頃は文治二年の四月八日なりき、賴朝が再三の請ひ默し難く、白き小袖一重に唐綾を上に重ね、袴踏みしだきて割菱縫ひたる水干に、丈なる髪を高らかに結ひ、薄化粧はしたれども歎きは面を去らず見えたりける義經の妾靜が

今樣の舞を奏して梁塵を翔はしめ貞烈の名を千載に遺したる舞臺あり、然れど今存せるは當時のものに非らざるべく、別當公曉が時政父子に欺かれて、實朝を弑する時匿れし銀杏の大樹は今も昔にかはらねど彼れ無心にして問へど答へず風に青葉のそよぐのみ

我等一行は歷代の忠臣勇士が遺物の寶物を拜觀し樓門下の石階に據りて、紀念の寫眞を撮影したる後芝生に憩ひ、辨當を開く、美味云ふべからず、剩へ東京より態々同窓會が持參せる夏蜜柑に舌鼓を打ち右府が建旗の白旗山、新田勢が足利勢と奮戰せし巨福坂の古事など談り合ひつゝ、鎌倉宮に至る、西校長は例の如く、幣帛を献じ、生徒總代前田美代子告文を捧讀し、一同參拜せり、此地は元二階堂牢獄のありし處、逆臣尊氏の讒に遇ひ、流竄の災を蒙りて土牢に幽閉せられ、遂に弑虐に遇ひ玉ひし兵部卿の宮征夷大將軍護良親王の古跡にて、明治二年創めて宮を建て、親王を奉祀すると共に、傍に小社を建て明辨親王に仕へたる侍女南の方と、吉野落の際畏く

も親王に代りて花と散りたる彥四郎義光の二忠臣を祀れるなり、誰か正史を讀んで元弘建武の條に至らば、親王のために泣かざるものやある、正面の華表には畏くも今上陛下が筆を染めさせ玉へる鎌倉宮の額ありて勿體なく、傍には嘗て行幸ありし行宮ありて、親王が御眞筆、其臣光林坊の書翰其他二三の寶物を藏せり、宮殿新らしく所謂サビなけれど、神々しさ云はん方なく、其背後にある土牢、右側の草茫々たる木間の首塚等、何れ涙の種ならぬはなく、袂をしぼり、夫れ〳〵伏しおがめり、此叢に今より六年の昔、日本女學校生徒が初めて此處に遠足を催し來たれる參拜紀念の献木二松あり、綠濃やかに生ひ茂りて目出度、今年又二本を献じたる可憐さ、親王も必らずや地下に是等の少女が忠誠を嘉し玉ふらん、親王の御陵墓は此處より遙に右の山中にありて、一本の古松高く秀で雨に風に月に花に四時其悲慘の歴史を暗示しつゝあるが如し。史に曰く忠義の臣淵邊義博北條時行の亂に主命を以て土牢に至り、親王を刺さんとす、親王其刀を奪ひ玉へば、御膝を斫つて倒し、御胸に跨り吭を刺さんとす、親王首を縮め其鋒を齧み折り玉ひしより、更に二刀を拔いて心を刺す、其暝せさせ玉はざるを以て、御首を取らずして去ると、然るに宮城縣雄鹿郡湊村日輪山多福院に、吉野先帝御菩提碑あり、延元二年霜月廿四日これを建つと、傳へ云ふ護良親王淵邊義博に奉ぜられて、此地に伏匿し、再擧を謀らんとせしが、御武運拙なく、遂に薨去せられたりと、傳寶に菊花の御旗あり地名に御所曲隈あり、此土地民家に淵邊の姓氏多く明治十五年新らしき此古蹟の碑を建て、杉孫七郎氏篆額な、高辻修長氏撰文拜書せり、又往年伏見宮貞愛親王殿下の北奧に來任し玉ふや、途偶々この地を過ぎて參拜し玉へりしことあり、然れば親王は果して鎌倉を遁れ出でさせられしか、そは他日稿を改めて云ふべし。

夫れより實朝が
宮柱太しく立てゝ萬代に

今を榮えんかまくらのさと

と壽きたる頼朝の屋敷より、頼經以下の將軍屋敷跡を尋ぬれば昔のおもかげ更になく麥秀の嘆なくんばあらず、慝て廉直の士青砥藤綱落錢し滑川、屋形に火をかけて主從八百七十人と共に高時が自殺したる處、又は北條九代の墓所、義朝に其臣鎌田正淸の墓などを此處に彼處に探り山又山を登りつ下りつし足の疲れも思はず驅け廻りたるが、夏草や何れを見ても夢の跡にて、國滅びて山河在り草青みたれど城なく、白旗山頭の松風颯々として千古に盡きざるも、當年汗馬の跡茫として探るべからず、轉今昔の感なき能はず、何れも斯般の憾みに打たるゝ折しも白雨一過し來り天涙を予等に注ぐ。然れど少時にして止みたれば鎌倉武士中血あり涙あり俠骨稜々たりし和田義盛、畠山重忠等の墓を奠し、有名なる星月井を見て極樂寺村より電車に乘り袂を海風に弄ばれつゝ夕月未だくらき頃江の島岩本樓に着き、波を枕に華胥國中の人とはなりぬ。

女子の生活

石川殘月

大都會に居住して、都會の生活に慣るれば、人間一生の處世の狀態は、今我等の耳目に觸るゝ都會風ならざる可らざる如くに感ぜらるべく、久しく田舍に居住して僻遠なる村里の生活に慣れし場合には、生活處世の道は、槪して斯の如きものと想ふに至るべきは、敢て怪むに足らざる次第なり、都會と田舍とは、人々の生活の狀態大に異るものありて、都會の生活は多くは天然を離れて人工に近づき、田舍の生活は萬事人工不自然を離れて天然に近づき居る生活なり、都會と田舍の男子の生活は、其職業を異にするによりて、其狀態大に異るものあるが如くなるも、其異る點は只職業の性質を異にするが故にて、都會と田舍の女子の生活の異るが如くに甚だしからざるなり、都會と田舍の一般の生活狀態を觀察して其最も著しく相違せる點あるを見るは、男子の生活

よりも、女子の生活狀態なるべし。

大都會にては、今日の處世に不自由なく暮し居る一家の妻女ならんには、日夜家庭の間にありて、淸掃炊事の指圖や、縫裁の勞を任ずる位が婦人の勞として見るべきものにて、彼等には殆んど勞力といふほどの勞力を見ざるなり、一家生計不如意の爲に妻子が內職をするが如きは因より例外なるも所謂內職は內職だけの勞にて、本職の勞、田舍の妻女が夫と共に田畑に働く如き勞に比すれば、尙御姬樣の手仕事然たる勞力なり、都會にありては、婦人が內職を爲し、若くは自ら朝夕の炊事の勞に當る如き仕事を以て、婦人の非常の勞と思ひ、甚しきは女子の一大不幸の如くに想像して、女子と生れての一代の出世は身に寸毫の骨折も爲さずに、安閑として樂なる世を送るにあるが如く想ひ居る者あり。



田舍、殊と農村漁家の婦人の生活は殆んど男子と均しき奮鬪的の生活にて、其勞力の如きは、決して都會の貧民の內職や、炊事淸掃の如き類に非ずして、眞面目なる勞力なり、田舍に於て斯の如き生活を爲すは、唯り生活不如意の人々のみにあらずして、多くは皆斯の如き生活をなせり、彼等田舍の婦女子は、其夫と共に或は田畑の耕

作をなし、或は雜役に任ずるを以て、女子生活の自然の狀態と心得て、少しも之を以て不幸とも不自由とも感ぜざるなり。

田舍の妻女は自ら夫と共に山野に出で丶働き、親しく困苦を甞めて、一家米鹽の資を得るが故に、自ら得る所の金錢の貴きを識り居れり、故に彼等は日々田舍に出で丶働くと共に、能く節儉の節を識りて苟にも金錢を浪費せざるなり、彼等は尠からざる資產を有する身分にても、多くは綿服にて甘んじ、絹布の衣服の如きは、假令之を有するものにても、一年間に幾度か指を屈し得る程も着用せざるなり、頭髮の裝飾品の如きは、云ふまでもなく質素なるを貴び、何等かの重大なる儀式にてもあらざる場合には都會婦女子の如き贅澤のものを用ひざるなり。

彼等田舍の婦人の生活は、斯の如くに質素儉約を旨とし居るが故に、彼等の心は常に足ることを知りて、其心甚だ豊かなり、心中に身の着飾りの苦悶なきを以て、其心は何時も洋々として春の如く、長閑にして晴朗なり。

都會の婦人は概して其反對なり、彼等は身の着飾りに資を盡すを以て、婦人の一種の天職なるが如くに心得、寸毫も自ら其身分を顧ることを識らざるなり、彼等都會生活の女子は、自ら勞して金錢を得ざるが故に、金錢の貴き所以を知らず、彼等は勞力の價として其家人の得たる金錢が、生命の代價なることを知らざるが故に、金錢を手にしたる都會の女子は、恰も放蕩息子が金を得たるが如くに、物の必要不必要を問はず、常に一の快樂を買はんとせり、其の買はんとする快樂は、多くは衣飾りの快樂にて、彼等は衣服と裝飾品とを以て、あらゆる婦人を敵として競爭せり、彼等は身裝殆んど意に滿ちて、知己親近の間に競爭の敵なきを見るや、忽ち劇場と慈善會とに於て、其敵を見出して競爭を初め、又は公園と汽車電車の中に於ても、競爭の敵を見出して、意匠の嶄新と流行とを追ひて煩悶せり。

世に百萬の資產を有するものが、千百金の指環一

個を購ふは、左まで難きことに非ず、又之を有したればとて、左まで珍らしき事にも非ず、然るに都會生活の婦女子は、何時も斯の如き偶像を以て自己の理想となし、甲も乙も斯の如き身裝をなし居る故に自分も斯の如き身裝をなさゞる可らざる如く想像せり、彼等の多くは、一身の裝飾の贅澤三昧は、其夫の名譽と品位を社會に示すの方便なるが如くに妄信せり、若し妻女の美服にて漸く其名譽と品位とを保つが如き夫ありとせば、吾人は寧ろ其夫の爲に悲しまざるを得ず、自ら一家の生活に顧み出入を計りて、一身の着飾りを適度にせば、必ずして他人の身裝を顧慮するの要なく、着飾りの理想を心外の偶像に置かずに、內心の安靜の上に置くべきなり。

今や都會の婦女子は恰も綾羅錦繡を纏ひたる偶像の如くなれり、一箇月十金の學費を給せられて、都會に遊學せる女學生が、恰も貴婦人の如き身裝を常とし、小商人、小官吏、小月給取の妻女が、大資產家の奥方と見混ふ如き風をなすに至れり、若し世こ亡國的の行爲なるものありとせば、女子近來の贅澤と奢侈とは、亡國の最も甚しきものなり。

◎孝婦の受賞

昨三十九年中孝婦として諸新聞に掲載せられたる埼玉縣入間郡川越町字宮元町山崎いち子は左記の通褒賞を下賜せられたり

本年二月十八日附官報所載の全文左の如し

埼玉縣川越町　山崎　いち

性資孝順甫めて十二父は壯にして失明し母は產後精神に異狀を生じ爾來母に代て孩兒を鞠育すること十二年不幸夭折するや母慟哭の余病勢頓に重きを加へ日々狂暴橫恣を極むるも敢て意とせす看護最も努め其夫を迎て戮力孝養を盡したるも母は半身不隨と爲り父及夫亦尋て病に罹り駢臥數年前後相踵て歿するの悲境に陷るも毫も厭倦の色なく獨力生計を營み克く病母に仕へ承歡怠らす又妹母子の賴るなきを憐み友愛の道を竭す等洵に奇特とす依て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒賞を賜ひ其善行を表彰せらる

日本赤十字社總會

六月五日午前日比谷公園に開會、參列者約六萬人　皇后陛下には御豫定より少しく後れさせ玉ひ、午前十時廿五分姉小路權典侍御陪乘にて着御、先づ便殿に入らせらる、是より先き總裁閑院宮殿下には、特志看護婦人會總裁なる妃殿下と御同乘にて、御臨場あらせられ、續いて有栖川、東伏見、山階、久邇の各宮妃殿下、幷に竹田宮恒久王殿下の方々御着あり、皇族室にて御休憩御待ち玉ひしが、先驅の通御門に入るや、松方社長、花房副社長、松平理事、及び鍋島侯、土方伯、川村大將、齋藤海相、石本中將、石黑男、實吉軍醫總監、吉原次官、小池醫務局長、本郷人事局長、大久保陸地測量部長、落合足立兩軍醫監、加納子、高木男、松平男、百家男鍋島侯夫人、其他の貴婦人等と共に、御車寄に迎へまつり、便殿に伺候し玉ふ、恁くて　陛下は姉小路權典侍を初め、吉田山川の兩權掌侍、生源寺權命婦を從へ、松方社長の先導にて式壇に臨ませられ、玉座に着き玉へり、此日は御機嫌殊の外麗はしく、玉座に着かせ玉ふの折の如きも、總裁宮殿下を始め、松方社長齋藤海相川村大將等に篤く御會釋あらせ玉ひし御謙德には、參列者等何れも感泣せり、　陛下は御慈悲深き御眼を以て、參列者を遍に見渡し玉ひ、御聲爽かに優渥なる令旨を玉ひ、其書を御手づから閑院宮殿下に授け、次で殿下が答辭を述べさせ玉ふを受けさせられ、終つて松方社長より昨年間に於ける事務會計を報告し、次に常議員故鈴木大亮氏の補缺選舉を、議長の指名にて安達峰一郎氏と決し、之にて式を終へ閉會し　皇后陛下は多數に奉送せられ、奏樂の裡に還啓遊ばされたり。

令旨

本日赤十字社第十五回の總會に臨み、親しく各員を見るを喜ぶ、尚將來本社の事業益す盛大ならんことを望む。

總裁殿下御答詞

玆に日本赤十字社第十五回總會を開くに當り、畏くも　陛下の親臨を辱うし、優渥なる令旨を賜ふ、本社の光榮何者か之に加へん、惟ふに本社の事業逐年發達して、今日の隆盛を見るに至りしは、熱誠なる衆社員協贊の致すと雖も、抑も亦至仁至慈なる　陛下の庇護を蒙るに因らずんばあらず、洵に感激に堪へざるなり、尚將來益す協同奮勉して、以て懿旨に副ひ奉らんことを期す、謹て奉答す。

猶ほ有功章授與者は四十九人、特別社員推薦人員は三百七十六人なりき。

將校婦人會總會

日露戰役に戰死したる陸海軍人の遺兒を教育せん爲め、陸海軍將校婦人相會して設立したる陸海軍將校婦人會は、第一回總會を六月八日午後二時より九段偕行社に開き皇后陛下の行啓を仰ぎ奉れり、當日は正門前に大國旗を交叉して、來賓其他の入口となせる外、九段坂の裏門を開いて會員の道路となし、之より入りし庭内のバラックには、紅白の幔幕を縱横に張渡し、一々札を張つて會員の控席となせり、總裁有栖川宮妃殿下を御始め、閑院宮妃、山階宮妃、久邇宮妃は早くより會場に御出であり、殿下室にて御休憩遊ばされ、會長大山夫人捨松子は、伊藤海軍中將夫人より子と共に、洋裝に人目を惹き、其他副會長伊藤海軍大將夫人美津子名譽幹事東郷大將夫人鐵子以下會員三百餘名は、午前中より續々と式場に詰掛けて、室内の裝飾來賓の接待に忙はし、來賓としては伊東元師、井上、乃木兩大將、石本、宇佐美、福島各中將、長岡少將以下陸海軍人數十人、胸間の勳章燦爛として會議室に居並び、放言談笑時の過ぐるを忘る、軈て午後二時　陛下御出門の頃となりぬ、總裁殿下を御始め、來會者一同門外に出で、將校夫人は門の左側の垣に沿ひ、來賓及び貴婦人會員二百餘名は門の右方より靖國神社前に鍵の手に折曲りて奉迎す、婦人會員は大抵紋付白襟にて、衣服の質は縮緬、紬、木綿殊に絽最も多きを占め色は栗鼠、小豆、藤鼠、御納戸、梅鼠、空色などの處にて髮には廂、丸髷、花月最も多く指環のダイヤモンド根掛の眞珠見る目も文なれど、總體に質素を旨としたるは、此會の名に適しく思はれて嬉しく、將校の遺兒十五歳なるを頭に、絣の筒袖着たる少年六七名を御車寄の側に整列させたるも可哀なり、二時半　陛下の御車は樂隊の樂聲瀏喨たる中に、御瀟端を階行社前に御着あり、直に總裁有栖川宮妃殿下御先導にて、樓上便殿に入御、御少憩の間各宮御息所と御對顔、續いて參會の親任官以下に親しく拜謁仰せ付けらる、斯て來賓及會員は式場定めの席に整列するや、空色無地の御洋服を召されたる　陛下は、總裁殿下御先導にて、臨御各員に御會釋を賜はり乍ら、金屛風を後に、金にて菊桐の御紋章を鏤めたる御椅子に御着あれば、有栖川宮妃は白色、閑院宮妃は桃色、山階宮妃は青色、久邇宮妃は鼠色の御洋服を召されて、右左に御並びあり、會長大山夫人恭しく會務に關する報告ありて、後　陛下には玉音いとも涼やかに、左の令旨を賜はる。

陸海軍將校婦人會の總會に臨み、親しく各員を見るを喜ぶ、各員將校遺族中困難者、子弟の教育監督に盡力せられたるを聞き喜ばしく存す。

之に對し總裁宮は　陛下の御前に進ませられて、奉答申上げ、之にて無事式を終りぬ　陛下には、更に別室に臨御凱旋大觀兵式の活動寫眞を御覽遊ばされ、最御滿足の御模樣にて御氣色麗はしく午後四時半還御あらせられ、各宮妃殿下又た續て御還り遊ばされたり。

園藝の話

水島　透

近來園藝の趣味を感ずるの度が高まつた爲めに、頗る流行の兆を呈して來たが、何に致せ此の園藝と云ふことはチヨツト素人業には困難のことである、が、併しまた其手順を誤まりさへしなければ大して失策を招くものでは無い、今こゝに聊か之が順序方法を述べて見れば、

第一に種子を撰ぶと云ふことが大切である、その良き種子を撰んでも、如何して之を蒔たものであらうかまた如何したなれば最も好く芽を發して生長するであらうか、と云ふことは最も素人の最初に行惱む事であるから、先づ良い種子を撰んだならば、

第二に床蒔を爲さねばなりません、之を作るには成るべくその苗床の地勢は、南の方に向て日光がよく射し、空氣の流通の宜い處を撰ばなければなりません、一體この床蒔と云ふのは、元々本蒔すなはち蒔き生えにしては良くない植物とか、又は時節が早いため床地で保護するの必要があるとか、或は直ぐ蒔き付ける時節ではあるが、その植え場所に差支えて居て、追て植え替る抔と云ふ時に行ふ方法で、植物全體が此の苗床に蒔かねばならぬと云ふ譯では無いのである、と云ふものは、豆や瓜類の點播、大根類菜類の條播または散播のやうに、實際本畑に蒔き生え、即ち本蒔にされて立派に生育して居るのでも分る、然るに近時一般に草花類までも苗床に蒔くのが習慣のやうになつて、一旦此所で育てゝから本畑地又は花壇或は鉢等に植えかへますが、思ふに特別のものは格別として、まづ普通の草花類は直ぐ花壇または鉢に蒔くのが宜からうと思はれる、彼の蔬菜、草花、林樹等總て植物には、大抵蒔き時節と云ふものがあつて、春蒔秋蒔または春秋兩期に適するもの若くは採蒔と云つて、その種子を採ると同時に蒔くのが却つて發芽の爲めに善いこともある、この邊は混じてはなりません、

第三には播種用の土のことですが、之は細かな砂交りの眞土か、又は塵芥土は良い、けれども之に近い性質の畑土でも宜いです、が、孰れにしても粗い竹か籐または針金の篩で透せば結構である、尤も鉢蒔用のものは上中下三段に篩ひ分けて種を蒔くと云ふ手數をかける場合もある、けれ共普通の畑を耕し、土の塊を碎て、長さ二間幅三尺程の部分の上を均したものでも、之で立派な苗床であるから、要は蒔くべきもの丶種類によつて、無駄の出來ぬやうに凡ての用意を爲さねばならぬのである、

第四土地の狹い場所や又は僅かなものを蒔く場合には播種箱を作るが宜い、之は釘と板とあれば誰にも出來るので、縱一尺五寸横一尺位の長方形として、深さは約二寸より二寸五分程の粗末のもので宜いので、底に幾つかの小穴を穿けて置くのである、左れば土の洩らざるやう最初に小砂利樣のものを入れて上に河砂を少しばかり、最後に篩ひ通した細土即ち今の培養土を盛ると云ふ順序にして、その面を均して種子を蒔くのである、これならば若し灌水の必要がある時は、それより太い器の中へ水を入れ、そこへ箱の下方を浸して置けば、穴の底から毛細管引力の作用で水分を吸上げ、箱の內



が一様に濕るから種子の爲にもよく、且つ灌水のために露出されたり或は隣りのものと交る等の心配が無くて至極安全な方法である、

第五播種鉢および播種箱では、何うしても數種の植物を蒔くとゆゑ、若し砂にのみ作らねばならぬもの又は水に付けねばならぬもの、或は日光に照してよくないものなど、性質のそれ〴〵異なつたものを蒔くに不始末なばかりでなく、それが異つた種類の植物のためにも宜くない、であるから、斯様な場合には播種鉢を用意し、一個に一種づゝ蒔き、そのまゝ生え立ちにしてもよく、また移植してもよく、實に輕便無難に目的を達せられるのである、それに如露などで灌水しても、決して隣りの種子と交る心配も無いから、この點については至極安全である、之に加ふるに僅かな種子や、珍らしい植物や、培養困難なのは、それ〴〵その者に適するやうな培養土を拵へ、或は普通のものなれば、前の培養土を播種箱に盛りて行りさへすれば十分です、

第六右の如く用意が出來たならば、種子を蒔かねばならぬ、それは幾何の厚さにすれば佳いかと云ふに之は先づ種子の發芽歩合を知り、それから蒔くと、右種子、生え難い種子類のやうに發芽歩合の少いものは、それに准じて厚蒔にせねばならず、新しくて精選した種子は發芽歩合が多いから薄蒔にしても可いとになります、併し草花などのやうに僅かづゝの種子を蒔くのなら、特別の場合を除く外、薄蒔にする方が良いのである、もし厚蒔にして間引くなどすれば、その時他の僅少な苗にも幾分障つたりなどして傷めるばかりでない、其間引いた苗は移植用とするまでに、上手に拔き取れずして、遂には捨てねばならぬ始末に至るから最も注意を要するのである、

第七細い種子を蒔くのは誠に面倒なもので、一様に蒔かうと思つても、指の間から漏れ出て思ふやうに行くものでない、また假りに上手に蒔き得たとしても、土をかけるときに浮き上つたりなどして、深く土を被つたものもあれば、顔を出したものもあると

云ふやうな不始末を來たすから、種子によりては、細砂または木灰か、さなくば米糠などの中へ交せてそれと共に床面へ蒔き散らすと云ふのが最も宜いのである、而して土をかけないで、平手または板片で輕く床面を壓し、後籾殼か灰の類をかけても宜し、または細かな土を振りかけても、最早浮き上る心配は無い、

第八植物の種子にも、カンナやダンドクのやうに石より硬いと思はれる樣な外表を被つて居るのがある之等は普通の蒔方では可かぬ、斯樣なものは外皮の一方をヤスリか又は砥石で磨つてから蒔くので、時としては兩面やらぬと、時々根が出たれど、葉に被つた種の殼を退け出ることが出來んで、その儘腐つて仕まうことがある、彼の夜會草の如きも外皮の硬いものなれば、やはり此の方法に依ると發芽し易い、まだ逬いやうなものは、肉の傷まぬやうに削つても宜い、梅や桃は霜に遇はせると自然に外皮が裂けるから其所を應用して蒔くも宜し、或は温湯に浸してから蒔ても宜いのである、

第九水生植物の蒔き方、これは案外簡易なもので、まづ鉢に三分の二ぐらゐ肥土を盛り、之に適度の水を加へて拌き交せ、面を均らして種を蒔き、次に水を鉢の面に傳はらせて少し土の上に溜るやうに入れるも宜い、が、また最初に蒔かずして、右の如く水を加へてから蒔くのもよろしい、併し一度に沈まぬ種子だと、後の方法は浮て良くないゆゑに、前の方法に依るが安全である、サテ種子を蒔き終つたならば、動搖せぬやうな場所へ据えおき、また夏の炎天に水が湯の樣に熱くなつて蒸發が烈しいから、土が乾燥して干割れなどせぬやうに心がけ、絶えず注意を怠つてはならぬ、勿論斯樣の時は暫時日陰へ廻すか、又は日蔽ひをして暑を避けて行つたり、或は水分を補給することを忘れてはならぬ、

第十播種後の注意を一言しやう、種子は幾らよくても、夕ゞ蒔た儘にして置ては、直ぐ土が乾いて、折角濕氣を與へる爲めに被せた効力を爲さない、であ

るから、地床に蒔たのは藁または蓆の類にて覆ふか籾糠を一面に撒布して置くが宜い、箱蒔、鉢蒔のものは何か適當なもので覆ふてやらねばならぬのである、それでも時々灌水するのであるが、この時に種子が浮き上つたり、隣りの區劃へ流れて行つたりして、遂には種子が混交するものであれば、餘程注意に注意を要するのである、よつて之には二重鉢や箱蒔の方が工合が良く行くとは、已に前に逐一述べた如くである、なほ種子が發芽して二葉に代つて見えるやうに爲つたならば、覆は一切除き、厚く生えた所を間引き、時々淡き水肥料を施し、水も灌て行らねばならぬのである。

珍しき老夫婦

牛込區市ケ谷加賀町一丁目二十四番地照山秀範氏と云ふは、昨年九月七十歳にて物故し、今は未亡人と共に嫡孫秀太郎氏家を襲ぎ居れるが、此照山家に千葉縣香取郡神代村伊藤國松(五十)及び其妻茨城縣鹿島郡汲上村出生の飯塚ハル(四十)と云へる夫婦の婢僕あり、共に照山家の父子二代に仕へて、茲に四十有五年間一日の如く忠勤怠りなきは、近頃珍らしき美談なれば、聞けるが儘に報ぜんに、忠僕國松が始めて此照山家へ住み込みたるは、文久三年同人が十一歳の時なり、性質朴にして温順に、何事にもまめ〳〵しく立働けば、秀範夫婦は、又なきものと慈しみ、同人も又た主人夫婦の恩義に感じて、一生涯を主家に仕へ果んと覺悟したり、然るに月日も次第に經に付けて、追々同人も成長するにぞ、秀範夫婦は其行末を思ひ、相應の處もあらば、世話して獨立せしめやらんと言ひ出しも、同人の心は固く動かず、世は維新明治の御代となりたれば、其頃まで鄕里茨城縣鹿島町に棲みし照山一家も、東京に移住することゝなり、國松も供を請ひて止ざる儘、携へて上京し、秀範氏は警視廳に奉職したりしが、其後氏の友人なる故川路大警視は、親しく國松の忠勤を傳へ聞て、斯る心掛美しきものならば、我手許へ引取りて、

相應なる出世をさせ度と言ひ出したるも、國松は此時も頑として動かず、斯る中に國松も早や廿六の男盛りとなりたれば、夫婦は夫々協議して、國松も承知の上是も我子の如く我家に育てし飯塚ハル（當時二十歳）と夫婦にしたるが、此のハルは照山家の郷里汲上村の者にて、夙く兩親を失ひ、賴り少なき孤兒なれば、秀範夫婦が不愍に思ひ、遂に引取りて養ひたるなり、之れより國松夫婦は前よりも一層忠實々々しく、四十年間一日の如く仕へ居る中、去三十六年五月中旬主人秀範氏が中風症にて、半身不隨の床に就くに至り、持病の疳癖に看護の二人を叱り飛ばすこと日毎なれど、二人は露程も心に留めず、身を棄てゝ日夜看護に力めたれど、其甲斐なく遂に三十九年の九月黄泉の客となりたれば、未亡人の愁歎は更にも云はず、國松夫婦の歎きは譬へんに物なく、泣く〳〵野邊の送りを濟ましたり、之より嫡孫秀太郎氏の代となりたれば、或時未亡人は國松夫婦を膝近く招き、篤く今日までの忠義を感謝し、今は夫秀範も此の世を去りたれば、是より何れへか世帶を持ち、何なりと世渡りの業に就きてはと勸めたれど、夫婦は尙此上奧樣が百年の後を見屆けたしと述べて、暇を申請けん樣子もなきより、未亡人も去らばとて其の心に任せ、遂に二代の秀太郎氏に仕ふることゝなれり、然るに昨年十二月に當主秀太郎氏は、仙臺なる高等學校に入學したるが、本年二月頸部に腫物を生じ、大に苦痛を感じ居る旨報じ來りたれば、忠義一圖の國松は大に心配し、直に未亡人に請て仙臺に赴き、日夜心を盡して看護したれば、秀太郎の腫物も同月末全癒せしに、同人も打喜び歸京せしが、國松は此看護の爲め風邪に罹りしと思ひ居りしに、去月下旬に至り、次第に重り來る樣子なれば、未亡人は内藤新宿の多納ドクトルの診察を受けしめたる處、全く風が嵩じたる肺炎との事に大に驚きて、妻ハルを付添へ、同院に入院せしめたる處、幸にも經過良好にて、遠からず全治すべしと云へるが、世にも珍らしき忠僕忠婢を使ふ身を、心の中で感謝して居りますとは未亡人が涙ながらの物語なりき、

新刊紹介

◉家庭要鑑

大日本淑女學會編
東京國民書院發行

家庭といふ文字近項大流行となつて、いかがはしき小說にも猶家庭の二字を冠して其家に迎へられんとし、家庭の陰にかくれて好ましからぬ新刊の續出する中に、曩には家庭百科事彙の發行あり、多少の批難はありたるも、兎に角一般に重寶せられたるは事實にて、今亦彪大にして家事百般の事を網羅せる本書の發行さるゝに至りたるは亦喜ぶべき現象ならずや、本書は先年大日本女學會より發行したる婦人寶典の如く、材料頗る豐富なり、内容を家政、育兒、裁縫、手藝衞生、文藝、禮法、料理、化粧の諸卷に分ち、說明頗る行屆きたり、生花を禮式欄に入れたる如きはチト解しかぬれど、それ等は本書の價値に關係せず、製本クロースにて頗る美、定價の二圓五十錢は頗る廉なるものなり。

◉家庭口演十種

巖谷小波口演
大倉書店發行

お伽噺を以て有名なる著者が、大日本婦人教育會にて講演したるものより、十種を選びたるものにて、一たび之を繙けば、著者の口吻紙上に彷彿として、自ら耳を欹つに至るべし、題目に曰く、拾ひ兒、素直な妾、慈悲深い少女、孝行岩、薔薇姫、三人王妃、女の耳、女の口女の心、女の意地、就中素直の妾尤もおもしろし、兎に角これが耳に入るといふほどのおもしろき材料も見當らねど、如何にも話上手にて、思はずスラ〳〵と讀まるゝ所、他の人に出來ぬ藝なり、口演の稽古書として高價を拂ふに足る、大和綴美本、定價八十五錢

◉婦人論

大島居弃三
澤田順次郎 共著
光風館書店發行

本書は婦人の文藝、教育等に就て論じたるものに非ず、多く婦人の生理上に關し、詳述したるものにて、桑木博士の序文を借りて、本書を紹介するの尤も當れるを信ず、曰く、人類學、生理學、心理學の基礎に立ち、社會實際の狀態に鑑み、立論の穩健精確を期す、蓋し滔々たる世俗に對する好指南車たるに庶幾らん乎、たゞ其論事實を主とするを以て、理想の思界に於て或は盡さゞる所なきを保せず、是等は恐らく文藝等に就て、更に補ふを要する所なからんか、且夫生理上の研究は尙往々幾微の間に入り、人の言ふを憚る所となるもの多し、子弟教育の基礎實に此に在りて、子弟誘惑の因又實に此に存す、言はざる是か、知らしむる非か、是れ世間幾多の教育家の愼重に考慮すべきことならずんばあらず、此書の流俗に媚ぶるものに非ざること固より疑を容れずと雖、世間猶之に就て一點の惑ふ所あるものあらん、併せ錄して識者の一考を煩はさんとす、定價五十錢

◉志麻帖

織田一磨圖案
瀬川書房發行

本帖は貴婦人令孃方が、衣服類の小切を集めて貼付するものにて、昔より「しま帖」と云ふものあり、佳き衣服切を得る毎に叮嚀に之を貼付け置き、親族知友間に相互貸借して、新衣を調ぶる考案に供したり

しが、而も其帖たるや見る程の物にあらざりしを、一見繪葉書ブックの如く美しく製本し、毎頁悉く意匠圖案を異にして之を諸種の色もて印刷したれば、一の術帖として見るにも適し、應接所の一装飾ともなるべき物なり、卷を处と續の二に分ち、处の卷は百頁綴二圓五十錢五十頁綴一圓五十錢、續の卷は百頁綴一圓五十錢にして、五十頁綴一圓

◉鐵騎隊　米國大統領著　成功雜誌社譯

本書は米國大統領ルーズヴエルト氏が、未だ大統領ならざりし時、偶々米西の戰爭開かれ、氏は鐵騎隊と稱する義勇軍を組織し、之を率ゐて西班牙領フイリッピン群島に航し、奮戰力鬪、遂に敵軍を擊滅して凱旋し、歸來匆々筆を揮ふて本書を草したるものなりと云ふ　その一節を左に抄錄すべし

日の暮るゝや我兵の致ものは　後方にある敵の捨てたる　遺物に趣き食品の殘留物を搜したり、何となれば　我等は十四時間　食物なしに突貫又突貫、絕間なき戰鬪に從事し居りたるを以てなり、彼等は敵の士官の食糧と思しきものを發見せり、而して　既に料理せられたる　御馳走もありき、御馳走の入りたる三個の大壺あり、其一つには飯あり、他の一つにはビフスチユー滿ち、一つには砂糖煮の豆あり、其外にラム酒の入りたる大樽あり、麵包も澤山あり、漬物もあり、鹽魚もありき、彼等は非常なる大手柄をなせしが　如く、愉快に　踊りつゝ之を携へ歸れり、然れどこれ丈を多數の兵士に分ちては、到底十分に行渡る事は六ケ敷かりき、然も尙各兵士其分前を得て悅べり、

著者の得意紙上に躍如たるものあり、兎にも　角にも　戰捷國の人は一讀の感興を深からしむべし、定價三十五錢

◉新刊書目

趣味	第二卷六號	東京	彩雲閣
時好	夏衣裳の卷	同	三越呉服店
東京經濟雜誌	每號	同	同雜誌社
日本の家庭	第六卷六號	同	同文館
新公論	第廿二年六號	同	新公論社
大日本婦人教育會雜誌	第百八十八號	同	同教育會
體育	第百六十二號	同	日本體育會
女學世界	第七卷八號	同	博文館
女子文壇	第三卷八號	同	女子文壇社
教育實驗界	第十九年十一、二號	同	育成會
なてしこ	第七卷第八號	同	大日本女學會
慶應義塾學報	第百十八號	同	慶應義塾
成功	第十一卷第五號	同	同雜誌社
婦人と子供	第七卷六號	同	フレーベル會
日本婦人	第九年六號	同	帝國婦人協會
日本赤十字	每號	同	同發行所
愛國婦人	每號	同	愛國婦人發行所
婦女新聞	每號	同	婦女新聞社
新婦人	每號	同	新婦人社
正教要話	第八卷六號	同	教要社
六合雜誌	第三百十八號	同	日本ゆにてりあん弘道會
婦人世界	第二卷七號	同	實業之日本社
家庭週報	每號	同	櫻楓會
中央公論	第廿二年六號	同	反省社

女鑑投稿規定

今回の本誌より、誌友欄を再び詞藻欄と改め、舊の如く誌友諸君の投稿を歡迎す、

兼題和歌は佐々木信綱君之を選び、各天地人、及秀逸を拔き、天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

短文、新體詩は文學士鹽井雨江君之を選び、各天地人と秀逸を拔き、各天賞二圓、地賞一圓、人賞五十錢を呈す、尚短文は從來百字內外とせしが、廿三字詰三十行以內とす、

雜題和歌は文學博士本居豊穎君之を選び、天地人秀逸を拔き、天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

俳句は內藤鳴雪君之を選び、天地人、秀逸を拔き天賞一圓、地賞五十錢、人賞三十錢を呈す、

賞金は當選者の望みにより現金又は價格相當の物品をおくる、又秀逸の人には繪葉書を呈す、

投稿はすべて婦人に限り、〆切は毎月十日とし、翌月の本誌に掲載す、但し俳句は選者の都合により本月は十五日〆切とし、其の次即ち九月號に掲載すべき分は、本月三十一日を〆切とし、爾後締切を掲載前々月末日迄とす、

本誌詞藻欄に投稿せらるゝ方は、左の書式によりて撰者に便利を與へられんことを望む

兼題和歌（もしくは短文、新體詩等）

題　府縣名　姓　名

歌ならば二行に、短文新體詩等も天地をあけて、字のあまりつまらぬやうに願ひたし

區　郡　町　村　名

右は兼題和歌の甲乙、短文、新體詩、兼題外の短歌俳句それ〲別の用紙に認められたく、又同じ用紙に二人またはそれ以上の名を並べることなきやうに願ひたし。



佐々木信綱先生選

和歌兼題　池蓮

天

朝明うす紫のもやこめて
　かをりみなぎる白蓮の池

韓國　原野みき子

此池のほとりにたゝずまん、神仙のおもひすべし。

地

うすいよりさめしが如く東雲の
　池に笑むなりはちすましろに

東京　堤いく子

下句のいひざまは今一きざみとおほゆれど。

人

池の面に更けゆく月の光り浴ひて

横須賀　柏原みな子

愈々白き花蓮かな

温雅の作。

秀逸

さめし夢のあと追ふ夏の朝ぼらけ
　み池の蓮のさく音のする

東京　林千代子

星殘るあかつきの風こゝちよみ
　池のはちすの花さきにけり

土佐　秋月廣江子

さゝれ波よるたび／＼に宿りたる
　月まろばしぬ池のはちすば

東京　土肥八重子

愛知　木下つる子

詠藻

立さりし鷺の翅やふれつらむ
いけにうかへるはすの花むら
埼玉　横田秋子

上野山物みる人のかへるさに
はちすなかむるしのはすの池
宮城　末永喜恵子

濁にもしまておひぬる心こそ
のりのはななれいけのはちすは
横濱　吉田深芽子

そのかみや池のはちすの裏葉もて
織りつゞられし衣おもふかな
清國　富成梓子

池のおものはすのうきはのすゞしさに
またみぬ花のすかたをそおもふ
甲府　風間千代子

花はちす色も涼しく咲いてゝ
いけのにごりもしらぬかほなる
兵庫　梶原京子

順禮の御堂をめぐる古池に
のりの蓮の白く匂へる
越後　松永繁子

御ほとけおはしますかと花はちす
咲きける池を月にめぐりて
東京　渡邊しん子

白露や夏の女神の睦まじく
圓居するなり池の蓮に
三重　大西くす子

いかばかり清けき池の心より
かゝる蓮の花は咲くらん
三重　山本小里子

甲

蓮葉に月のかげさす夏の夜は濁れる池も清く見えけり
○　東京　佐々木ゆかり子

けがれなく咲くぞうれしき花蓮よし濁江の中に生ふとも
○　東京　佐々木篤子

池水のにごりにしまぬ心とてはちすのたち葉ゝゆふきみたす
○　東京　和田千代子

音もなく池の蓮のつゆ散りて朝風すゞし夏のあけぼの
○　東京　井上こま子

世の塵に染ぬと蓮に契いてし甲斐あらなくに池の鴛鴦戀ふ

松山　上原のぶ子

○
玉とおくはちすの露はにごりたる池の心もきよく見せけり
山口　村上操子

○
池水のにごりにしまぬ心こそはちすの露のひかりなるらめ
和歌山　村田清子

○
にごりなき心を花に咲いでゝ匂ふはちすの清くもあるかな
東京　林　艶子

○
蓮城の玉とも見よとしらつゆをいまゆらぐなるいけのはちす葉
廣島　鈴森きみ子

○
濁りおほき浮世をはかにたゞひとり清げに咲める池の蓮か
神奈川　中島茂子

○
すみよしのすめるみ池のみつかゝみうつすはちすのすかた涼しき
神戸　今西操子

○
法の庭の池のかゞみも見えぬまで風にみたるゝはちす葉の露
佐賀　尾形綾子

○
池水のかゝみにかげをうつしつゝあさひまばゆき花はちすかな
佐賀　尾方八重子

○
玉ちらすあしたの風にほころびて香りもしろき池のはちす葉
常陸　岡田萬子

○
くれなゐも白きも咲けと池の蓮清き心は變らざりけり
埼玉　野中まつ子

○
いけ水のにごりに染まぬ氣高さをはちすの花の露にこそ見れ
大阪　船津勝子

○
風わたる池のはちす葉露をきてやとるも清し夕月の影
鳥取　大塚信子

○
我かやどの池ふりたれど蓮花きよき色香は何にたぐへん
三重　米奥とめ子

○
古寺の池の蓮葉咲にけりこゝろすまして住人やたれ
伯耆　錦織千代子

○
白蓮紅蓮つゆのさま〳〵こほれてはみだれてにほふ池のさゝ波
東京　河合清子

○
かゞみとも見し池水はうづもれて咲きかさなれるはなはちすかな
東京　益子逸子

○
後の世のうてなときゝてなつかしくこゝろも醒る花はちすかな
東京　原三幸子

○
あすもまたとくきて見ましおとたてゝ池のはちすの花ひらく頃
東京　小島榮子

○
池水にすかたうつしてくれなゐもしろきもにほふ花はちすかな
名古屋　木下つる子

○
山寺の池の蓮を來て見ればすゞしきくにの花の香そする
奈良　栗山たか子

○
あかつきの風もかをりて池水のきよきこゝろにさくはちす哉
日向　岸上はる子

○
池水のにごりにしまぬ白蓮のきよき心ぞ我かゝみなる
東京　中村千代子

○
不忍の池ににほへる花はちすことしはいとも色香まさらむ
東京　船津康子

○
朝霧なる君をきませのみ聲とも笑き音たてゝ蓮の花ひらく
新潟　岩本芳子

○
池水のにごりにしまぬ花はちすにほひもきよくいろもうるはし
東京　島村作子

○
蓮葉のおひたつまゝに池の面に月やどるべきひまなかりけり
東京　牧　君子

○
にごりたる池にさけどもけかれなくけだかく咲ける花はちす哉
東京　服部彌惠子

○
にごりにも染まぬこゝろの操をば池のはちすの花にみるかな
東京　菅としこ

○
はちす葉のかげにあそべる魚もみえて朝心地よき池のおもかな

○　埼玉　横田やな子

はちす咲池の中島風もよし舟こきよせよはなを見て来ん

○　宮城　大槻初音子

池水やにごれる中におひながらきよくもさけるはなはちすかな

○　東京　石川薫子

池水のにごりにしまぬ花蓮色もすゞしく匂ふころかな

○　東京　しづ子

池水のよどみにゝほる花はちすきよき心ぞ我かゞみなる

○　東京　松原みれ子

池水のかゝみに花のかげうけてすが〳〵しくも咲く蓮かな

○　松山　木村ひろ子

はちすはの池にうかびしあしたより涼しさこもるかけはみえけり

○　松山　木村芳子

うき出てし池のはちすの卷葉には涼しき風のこもるなるらむ

乙

○　磐城　木幡きよ子

秋はまだ深くも見えぬ池の面に床しさまさる蓮の玉水

○　茨城　高木ひろ子

とり〳〵に咲でたき池の花蓮清きすがたを水にうつして

○　常陸　北垣くは子

人もまたかくやあらなん池水のにごりにしまぬ花はちすかな

○　東京　川合りく子

池の面に今をさかりと咲きにほふ蓮の若葉にやどる白つゆ

○　千葉　中川千鶴子

こぼれても浮葉に結べ蓮の露池のにごりに泡ときゆるな

○　東京　原田まつ子

池の面にかをりもたかくうく蓮の若葉のつゆにやとる月かな

○　東京　平塚白百合子

泥に生ひすみずに咲ける蓮の花の清き心をこゝろともがな

○　神戸　足立あさ子

おのづから御法りの花と水くきにかき流したる池の蓮は

○　神戸　足立ゑい子

あけぼのにかほりも深き池の蓮露の玉しく葉をも添けり

○　松山　田村多豆子

にほひある花をはおきて池水のきよき蓮の露やめつらむ

○　東京　林　艶子

花はちすはら〳〵と咲きいてぬあさもやくらき不忍のいけ

○　福井　岩橋花子

濁り江に生ひいでながらいろもかもきよきはちすの花ぞけだかき

○　東京　青木なほ子

花はちすまつ咲そめしあしたよりひとかたならず匂ふ池水

○　和歌山　植木蕉子

風まつと池のへちかくたゝすめははたなしまるゝはちす葉の露

○　岩代　岸野松子

みじか夜のほの〳〵あくる池の面に蓮こそ清くさきうつりけれ

○　甲府　名取正代子

風わたる池の蓮の葉より葉にまろびあふ露のおもしろきかな

○　伯耆　錦織さち子

水すみし池にほゝ笑む立すがた何にたくへん白蓮のはな

○　下野　井上絅子

池みづの彩りなしゝあさあけやすが〳〵しうもさけるしら蓮

○　神奈川　吉田はな子

いにしへの人こそげにも悟けれ池の蓮にて衣おりしも

○　上野　吉田じつ子

十六夜の月にくもらぬ池蛙蓮の葉かけに水かゝみかな

○　千葉　海上孝子

白玉をやとせる池のはちす葉はきよき心を世にしめすらん

○唐にしき敷はへたりと見えにけりはちす花さくしのはすの池　東京　吉岡愁子

○みどりなる浮葉のひまに花見えてはちすに池もうづもれにけり　東京　西村直子

○みどり葉にさきましりたる紅のはちすの花に池もうもれぬ　東京　高野元子

○我庭の池のはちすの花咲きておさこと人のかとたゝくなり　奈良　栗山俊子

○月かげのやどれる玉もうちみだれ涼しく見ゆる池の蓮は　東京　岸　光子

○はちすはに池のひ鯉のひれふれてつゆおきとむるひまたにもなし　秋田　古瀬惟子

○すが〳〵し夕立雨のはれゆきて池のはちすに露のこぼるゝ　播磨　横田春枝子

○よもすからおきゐし露を朝風のこほしてわたる池のはちす葉　上野　木暮千代子

○はなはちす泥の中よりぬけいでゝ人にしめせり清き色香を　山形　伊藤のぶ子

○橋の上をゆきつもとりつしのはすの池のはちすや人まねくらむ　埼玉　横田　政子

○池の魚おとりてみづはにごれどもきよけかりけりはちすはの花　秋田　長田せつ子

○ありあけの月のむすびし白露を玉とみがくは池のはちすは　秋田　細矢はる子

和歌兼題　納涼

天

甲府　名取正代子

評　睬

簷の間のあつさに堪へて業をへて
　すゝむゆふべのまとゐたのしも

うつくしき乳児のゑまひに妻も笑みて月もさし入れる端居の夕すゞみ楽しみいかばかりならむ。

地

越後　松永しげ子

夏の神もこゝにすゝみておはしませ
　柳木かけのすゝしき所

着想の奇抜なるを以て採る。

人

越後　水野やすゑ子

雲折々月をかすめておはしまの
　はなしときるゝ夕涼みかな

たくみに俳句を取所ひられたり。

秀透

横須賀　柏原美奈子

月影に宿直の人の涼むらむ
　まだしめやらぬ官廳の窓

結句の調はいかゞなられど着想新らし。

より集ふ野もつきて嫁ほむる
話しきゝよき夕納涼哉
東京 花柳子

夕すゞみしなとの風の神さちは
世のあつさをふきはらひけり
松山 木村芳子

紀の川や夏をわするゝすゞみ舟
月もまどゐのむれにのせ行く
和歌山 村田清子

たちそよる並木の影の夕すずみ
隣のをみな脊戸のをのこも
東京 土田八重子

山風のまとにわまれる我宿は
すゞみもよそに求めさりけり
松山 田村多豆子

浴をへ書讀む窓の竹の葉に
涼しくかゝる三日月のかげ
大坂 船津勝子

ほたるさへ風のふきいれて北みなみ
わきたる庵そすゞしかりける
東京 原三幸子

涼まんとやとをばひとりいてしかど
おもへばさして行くかたもなし
秋田 古瀬惟子

水鷄啼く里川堤雨はれて
涼しき月に成にけるかな
埼玉 横田やな子

雨とみし雲はなかれてさす月と
ともゝつとへるかとすゝみかな
秋田 細矢はる子

川面をゆく涼風にまそで任せ
ふなべりにたつうらわかき人
東京 堤いく子

甲

月すみて風ふき入るゝ高どのになつも消えゆくこゝ地こそすれ
千葉 中川千鶴子

○三重　大西くすよ子
涼しくも流れ行くかな桂川瀬の月のさすにまかせて

○東京　原田まつ子
谷川の清きながれの音たかくゆめも涼しきそま人のやと

○東京　しづ子
おばしまをはらふ若葉の香に匂ひていつしかふくる月のすゞしさ

○松山　上原のぶ子
夏をしも吹やりにけむゆふ風はあきをや軒にさそひきにけむ

○神戸　足立あさ子
鳴くせみの聲のしぐれて洩らねども青葉すゞしき杜の下蔭

○福井　岩梧花子
静かなるこゝろだにさへ涼しきに岩をしたゝる山水の音

○廣島　鈴森きみ子
涼しさに夏くるも知らで過しけり屋かげ青き空をながめつゝ

○兵庫　梶原京子
我庵のいさゝむら竹風そよき端居すゞしき夏の夕ぐれ

○和歌山　植木撫子
川柳に吹きくる風のすゞしくてしばしやすらふ橋の上かな

○岩代　岸野常子
川柳にひかけはくれてゆあかりの袂にすゞしのきのまつかぜ

○兵庫　寺内ちく子
夕風に袂ふかせて橋の上に水のながれを聞くか涼しさ

○佐賀　尾方綾子
浪のはなたつ岩かけにたすめは夏もわするゝこゝちこそすれ

○佐賀　尾方やゑ子
せゝらきにくたくる月や超るらんすそふきかへす加茂の川かせ

○甲府　風間千代子
月のすむ隅田河原に舟うけてさをさし居れば夏としもなし

○武州　野中まつ子
月もすむいさゝ小河の涼風に夏もなかれてゆく心地かな

○常陸　岡田萬子
旅人もしはし暑さを忘るらん清水流るゝ松の下蔭

○伯耆　錦織さち子
おもしろき閑居のすゞみ夜は更けて妹のうたのふしのすゞしさ

○伯耆　錦織千代子
涼みする袂はなかしおもひ出の柳のかせにしはし吹かれむ

○神奈川　吉田はな子
思ふにもしのばるゝかないつく島夏のあつさもよそに見るらん

○東京　吉岡龜子
花はちす風にかをれる池とのにつきとふたりのよはのすゞしさ

○東京　小島榮子
ゆあみして風まちをれは潮きぬに月もやとれるよはのすゞしさ

○奈良　栗山たか子
ひもときし文ふきかへすゆふかぜにあつさわすれしまとのうち哉

○奈良　栗山俊子
ふく風にゆられゆられて池水にすゞしくやどるゆふつきのかけ

○宮城　大槻慶子
打よするなみ立ほどにふかれともすゞしさあまるそでのうらかせ

○日向　岸上はる子
川風にそてひるがへし橋の上すゞみする夜はもの思ひなし

○東京　中村千代子
はしゐして月まちをれば青桐のひまもる夜かせ夏としもなし

○横濱　錦戸れを子
夕くれを讃美うたひつもろ共にすゞみするかな清きまとゐや

○播磨　織田春枝子
衣手に吹く風すゞし夏のよも明けかたちかき川添のやと

○上野　木暮千代子
願なき身にはあれども今日もまたすゞみに來たりうぶすなの杜

乙

○　磐城　木幡きよ子
歸るさは暑さと共に忘られて夕べ涼しき松川のつき
○　東京　林千代子
秋の來し心地こそすれ思どち月見がてらに涼む夕へは
○　三重　山[illegible]小里子
涼しさをよそには問はず我宿の松の下陰庭のやり水
○　常陸　北垣くは子
ふく風は軒ばの竹におとつれて夕へ涼しき山の下いほ
○　東京　川合りく子
木のかげをかよふ涼風音づれて夏をわするゝみ山べの里
○　東京　佐々木ゆかり子
端居してをり〳〵もろゝ螢火をながむる時ぞ夏は涼しき
○　東京　佐々木[illegible]子
風きよき木の下陰にすゞむ間は秋をおほめくこゝちこそすれ
○　東京　和田千代子
來て見れば秋涼しき浦風に夏をよそなる心地こそすれ
○　愛媛　木村ひろ子
はしゐしてすゞむ夕に吹風は晝のあつさも忘れはてけり
○　東京　松原みれ子
あつけさを不忍いけのはしに來てはださむきまで涼みけるかな
○　東京　石川薫子
はしゐして風まつ竹の月かげにはやくも秋の心地こそすれ
○　茨城　高木ひろ子
涼人の影もきえ行く夏の夜に笛の音ゆかし川の下上み
○　山口　村上操子
ひるのまは風もなけれとすゝみにはまつ木かげにて立よられぬる
○　東京　井上こま子

なつかしみ須磨の旅寢の夕涼み青葉の笛の君思ふかな
○　福井　岩橋花子
なつの夜の光さやけきつきかげを木立のはこしあふぐすゝしさ
○　東京　青木たま子
夕風の身にしむはかりすゝしけれ袖に秋ある衣手のもり
○　神奈川　中島茂子
契りおきしすゝみにけふも玉たれの瀧のしらいとむすひつゝけて
○　神戸　今西操子
たへかねしまひるのあつさいつこそとたつねつふくる夕顔のやと
○　鳥取　大塚信子
しばしとて松かげちかく船よせてすゝみにつとふ人もありけり
○　三重　米奥とめ子
月影もうかふ川邊のすゝみ舟なつをよそなる波の上かな
○　下野　井上絢子
月ふけて笛のねたかし涼しさをひとりしめたるはしの上かな
○　清國　宮成梓子
月よゝしあまの河原のあきかぜにうすきをうらむせみのはころも
○　上野　吉田しづ子
河鹿なく谷の川風袖にみちあふきをたゝむ青柳のもと
○　土佐　秋月廣江子
綠よりみどりくゝりて涼みする夏の夕はたのしかりけり
○　千葉　湖上峯子
夕さればなくせみのねもしつまりてすゝしさまさるたきの糸水
○　東京　河合濟子
夏ぬれと友にすゞみし月影をおきてはれやにいられさりけり
○　東京　金子逸子
しみつくむちひろの松の下陰はなつにしられぬかせかよふなり
○　東京　西村直子
あけおきて入たる月の影ふけてさむさおほゆるうたゝねのゆめ

○うたゝねの風しすゝしくさよふけて夏は夢とも思ひけるかな　東京　高野元子

○夕立のなこり涼しきおはしまにふくろも知らてうたゝねそする　兵庫　田淵ふじ子

○涼みしてうたふ少女の糸竹のしらへにかよふかものかは風　名古屋　木下鶴子

○池の面にうつる月かけむすひつゝすゝむ夕へそたのしかりける　新潟　岩本芳子

○たそかれに門邊につとふさなとめの袂涼しく夕風そふく　兵庫　田淵みき子

○夕まくれ川岸づたひ吹く風に柳みたるゝ音のすゝしさ　東京　島村作子

○月見つゝ小椽に出てゝはらからと語り語らふ夕へ樂しき　韓國　みき子

○すゝしさにまくらだにせぬうたゝねの夢ちにひゝくなちの琴の音　東京　岸光惠子

○たそかれて吹く風清みはし居して川にうたよむ夕すゝみ哉　東京　牧君子

○たちよりてむすふ谷間の岩しみづなつもなかれてすゝしかりけり　東京　服部繝惠子

○せの君と木かけさまよふ涼しさはげにも樂しき夏にもある哉　山形　伊藤のぶ子

○あつしとてひろはうとみし賤か家の麥ほす庭の月をみるかな　埼玉　桜田秋子

○大江山おろす夜嵐を身にしめて鳥羽の里人すゝむころかな　埼玉　横田政子

○橋杭にともつなつなく涼ふねあつさなかるゝすたの川みつ　秋田　長田せつ子

○墨田川青葉にそよく風よりもすゝしきものはみつのおとかな　秋田　細矢はる子

○ほたる火の影もみだれてすゝしさはさとの小川のなつのゆふ風　陸前　大槻初音子

短文

文學士　塩井雨江先生選

天

夕立

常陸　堀光子

涼し塵を巻きて吹き立つと、空は忽ち搔き曇り、篠つく雨は軒の筧をつたひて瀧の樣。それ雨戸をと言ふ間も、ピカ〳〵、ガラ〳〵、恐ろしい雷の響。猫は障子の陰に縮まつてしまふ。祖母樣は火鉢に線香を焚て、桑原〳〵と一生懸命。弟の良ちやんは、僕は雷鳴なんかこはくない、大きくなつたら軍人になるんだからと、一人威張てゐる。暫時が程に、空は拭うた樣に晴れ渡り、夕日がキラ〳〵と。名殘りの露を帶びて、紫陽花は一層涼しう美しく見え、植木棚の石竹も、露の白玉を飾りて、得意げに美を誇つてゐる。

（雨評）寸隙なき筆、夕立のけしきは、慥に見え申して候。

地

橋の上より

東京　吉村まき子

小川の向うの方は、見渡す限りの麥畑があつて、畑の遙ヵ彼方は、古く傾きかけた家が三四軒、不規則に並んで居る。又此方は川づたひの田舍道で、農夫らしき男の二人三人、各鋤鍬を肩にして、樂しげに行くもあれば、草刈る婆の、薪背負ひて家路をたどるもゐる。又家々の屋根からは、夕餉の仕度の白煙、チラ〳〵と長閑にあがつてゐるなど、實に心地がいゝ。橋の下を見れば、靑々とした草におほはれた小川の、ゆるく淸く、底なるさゞれ石を洗ひつゝ、小波うたせて流れてゐる。今西の端山に落ちやうとしてゐる太陽は、オレンヂの色を呈して、小川の水を美くしく彩つてゐる。我は只一人、恍然として丸木橋の上に佇み、今しも暮れゆくあたりの景色を眺めてゐたが、ふと氣がつけば、日は全く西山にかくれて、追々黑き湖ぎぬにでも包まれたやうなのに、驚きて川の向ひを見れば、二羽のからす、友にでも殘されたやうに、淋げに綠の梢にとまつてゐたが、やがて打連れだちて、かあ〳〵と彼方の山に飛び去つてしまつた。

（雨評）今一層想像の眼を活かして欲しき想に候へど、橋上のながめ、取り來たれる題も一寸面白く、何となうすてがたき風情をおぼえ候。

人

菖蒲にそへて

岩代　岸野常子

雲かとばかり咲き匂ひし花の梢も、やゝに綠の色に染めかへしつゝ、恨みつる風のおとなひも、そゞろに懷しう覺えそむる今日此の頃を、いかに渡らせ給ふやらむと、日々御噂さ致し居り候ふ。さて、二三年このかた、小家の祖父が手すさびにとて、閑地に培養致し候ふ花菖蒲、今年もやう〳〵笑みそめ候ふに、（小さき花も、眼鏡越には、大きうも見え候ものか。）祖父は大得意にて、君にはかねて風流の道を好ませられ、殊に活花の技に巧みの由、二枝三枝差し上げ申さばや、且つ、此

の程は、玉の如き御うひ兒の御誕生も在したれば、菖蒲の幸千代かけて幾久しく御祝ひ申したらむにはと存ずるが、いかゞ思ふぞと申し候まゝ、明日は幸ひ端午の節句にも相當り候へば、取り急ぎてお目にかけ候。七十餘齡の老人が手入れせし菖蒲に候へば、御愛子の御ことほぎとのみをめでさせたまはるべく、さては、優しき御歌の材料ともならば、ひとり此の花のさちのみには。かしこ

（雨評）書簡文として、先づ整ひたりと申すべし。老くて作りの菖蒲に初兒の初節句の取り合はせも思ひつきと申すべし。

秀逸

たそがれ　　三重　大西　くすよ子

西の空華やかに夕暮の雲の色の黄紫紅と染めつらねたる、極彩色の繪卷物のそれに似て、美しき眺めなれや。三五の月、今小山を三尋五尋はなれつゝ、川上は朦朧として霧につゝまれたり。堤の上の青葉繁り合ふ中に、白雲の如く咲きみだれたる卯の花、妙なる香氣微かに、紺紫の水に影を宿して、一片二片月光を受けて薄絹に漂ふ、げに詩的なるかな。霞の如く流るゝ水は、調もゆるく、岩にせゝらき、石にさゝやき、眠れる如く、かすかにきこゆるバイオリンの音と曲を和しつゝ、さても靜なる黄昏よ。

（雨評）ホンに詩的の黄昏とは存じ候へど、鮮に氣の弱しきを惜しむ。

夏の夕　　東京　平塚　白百合子

やけるやうな日を、小笠によけても、猶しとゞに流るゝ汗。ゑりやら顏やら、赤くそまつた手拭でふきながら、一生懸命。それもこれも、たのしい夕をまちこがれての事。ほんに私は夕がすきですの。丁度养の牧場の小羊が、綠かけきよき夏のレーズンをまちこがれてゐるかのやう……皆さま笑うて下さるな。私は此の夕ぐれを最もたのしい時といたします。一家の和合といふたのしい時ですもの。葡萄棚の下にたてられた湯で、あせを流して、とけるやうな月の光りをあびながら語りあふのですもの……あゝ夕、私は毎日日が山の端にし

づみかけますと、いつも天に謝すのです。今、私は紅にそまつた山の端の雲を仰いで、心からお祈りをいたしました。

（雨評）可憐なる情誠に愛すべし。されど、筆未だ練熟を欠くところあるをなしむ。

夏の夜　　和歌山　植木撫子

長しと思ふ夏の日も、いつしか西にかたむく頃、柴の折戸を出づるに、氣もそゞろになりて、日頃親しき友垣を尋ねて、野外にさまよひぬ。花やかなりし夕日も、いつのまにか、西の海に沈みて力なく、四方の山々はやうやく暗うなりゆきて、何處よりか聞ゆる入相の鐘の音、細う長く響きを殘し、み空の星影は、次第に奇しき光を放ちつゝ、恰も我等を神のゐませる樂園に導くが如し。野路には、夏草ところ得顔に生ひ茂りて、そよそよと吹く風に、はらはらとこぼるゝ露、衣の裾のぬるゝをも覺えで、語りつゝ心にまかせて、とある、いさら川のほとりに至りぬ。すみ渡る月は清き流れに、影をうつし、葉毎における白露も、光りをうけて、みだれ飛ぶ螢の、しばしやすらふかとまがひ、吹く風にゆられて落つるは、玉のくだくるかと、あやまたれぬ。やゝたゝずむほどに、夜目にはさだかにわかねども、四五人の小兒、手に手にものを携へ、高く低く飛びちかふ螢を追ひつゝ、ホヽ螢コイ、アッチの水はニガイゾ、コッチの水はアマイゾ、と高らかに叫びあへり。わゝ思へば、去年になりにけるかな、夜毎に螢狩せしは此川端なり。はた姉上の都に立ち給ふを送りて、別れを惜しみしも、此ほとりなり。あはれ、姉上は今如何におはすらんなど、思ひめぐらすに、友のいとたへかたきひるの暑さも、そらごとの如く袂ふく風ひやゝかに、興はつきざれども、またの夕をとそゝのかせば、歸路をたどりぬ。夜はいたくふけぬらし、音するものは、たゞせんせんたる小川の流れのみ。

（雨評）げにおかしな夏の夜のけしきとはなし候へど、筆の少しくたるきところあるを惜しむ。

日本男兒　　日向　垂水　かをる子

學校から歸るさ、受持の生徒の武雄さんとお雪さんとが唱歌をうたつて居るのを見た。すると、二

人は同時に「先生」と叫びて馳せ出す途端、武雄さんはつまづいた。お雪さんは先きに來て袂に縋る。武雄さんは泣いて打伏して居る。「武雄さんは日本男兒でせう」と云ひつゝ手を添ふれば、ムクリ起きて、涙一ぱいの顔に早笑を見する可愛さ美しさ。

（雨評）可愛さは其の先生の心のみにあらず。

春夜　　大分　佐藤家子

春の夜には珍らしくはれた月、あだに見過すも本意なしと、柴の折戸をくゞり出でつ、いつしか月影清き谷川のほとりにたゝずみぬ。向ひの岸邊に、六分咲き初めし山櫻、朝日に匂ふ眺めもにくからねども、月にはぢらふ艶なる此の風情は、なかなかにあはれ深うおぼえて、丸木の橋を行きつ戻りつ打眺むるに、そこはかとなく、蛙のころころの音さへ打ちそひて、ゆかしさ云はん方なく、なほも立ち去りかたうおもほゆる折しも、サッと吹き下す嵐に、梢の花はハラハラと、水の面にやどれる月影はふと浮草の下にかくれぬ。

（雨評）風情はすてがたき春夜と存じ候へど、すべて文は今一入の工夫を要するものに候。

姉の子を預りし一時間　　東京　船津康子

すぐ歸るとて、二つになる富美子を、私に預けて出て行つた姉樣は、まだ歸つていらつしやらぬ。母振り眞似た子守うたでやうやう寢せつけてから、一時間。ピクリと小さな物怯えをして、富美は、ぱつちりと大きな眸を開いた。母に抱れての寢起きならば、櫻色のむつくりとした頬に、ぽつちりと笑窪を見せるのが、例なのだけれど、どうしてか今日は、につこりともせずに、鼻ばかりならして居る。

とうとう富美は乳ほしいとて泣き出した。すかしても、なだめても、少しも泣きやでん呉れないので、ふと私の胸を探つて見た。乳はある！　けれど、あゝ、のますにはまだ、小さいものであつた。富美はまだ泣きやまぬ。

（雨評）今一入の文に候。

蚊遣火　　東京　土田八重子

やうやう日影かたぶきて、青葉を渡る風のいと涼しきに、そこともわかず立ち出づれば、ほのめく月の末遠くかゝるうす雲は、彼の山里の里人がたく蚊やりにやあらむ。いでかしこまでとて、そぞろ歩くに、こゝらあたり、いづくの宿も、蚊やりくゆらぬ家とてはなし。さらでだに賤が伏屋は住みうきを、かの里人は、春のみかは、夏もまた澄みたる月をば見すして暮らすなるべし。まいてや、ふすぶる烟の中に、乳兒などの泣く聲さへもきこゆなる。なかなかにいぶせき限りなり。されども、また軒によつはる夕顔の花白う咲きたるにかやりの烟なびきたる、よそ目には涼しうも見ゆるなれ。あるはまた、そがふすぶりに堪へかれてか、蚊より

も先きに走り出でたる小女等のさまなど、賤が家の夕ぐれのけしき、なか〳〵にすてがたきなどゝおもほゆる折りから、かはほりの三つふたつとびかひて、歸路促し顏なるにもときし道をたどりつゝし、すぎし彼方を顧れば、立ちのぼるけぶりの、松の梢にたなびきたる、霞おぼえていとなかしければ、

　春ならで蚊やりのかすみ打なびき、
　　おぼろにしろし、をちの一村。

（附評）其のこゝろはきこえたれど、筆になほ鍊熟の足らぬふし多きををしむ。

海邊の朝

東京　川合りく子

朝とくおき出でゝ、海原見渡せば、今しも水の面をはなれて、大空に照りのぼる朝日の光りまばゆく、折りしも吹きくる朝風に、こがれの波をうちよせつゝ、沖の方へとはしりゆく白帆の影、心はいつかそれに乘るをおぼえて。

寂しき夕べ

播磨　横田春枝子

日は名殘なく影消えて、淋しき空に星の光り微に、吹き下す風は、袂を拂ひて海寒き夕、思ひあまりてたゝずむ田圃道、寂としてし人もなく、あたりに見ゆる物とては、風にひらめく苗代の螢火のみ、あゝ靜なるかな、小さき我が胸に入りし蛙の聲、いかに哀れに聞えし。

夕ぐれ

東京　牧　君子

雨の夕暮くまなくはれて、庭の若葉に露しげく、梅の實は熟して、枝たれむばかり。若楓にわたる風も。何となう昔し忍ばるゝ心地してなつかしう、まがきの撫子における露、折柄の月に玉とてりつゝ。

水み

日向　岸上はる子

水桶かたてに葉櫻の下、草葉にやどる白露ふみしだきつゝ、淸泉の邊にいたりつ。井側を掩へる若木の下より迸出する玉水、あふれむばかり汲みて、東の空より華かにさしいでたる朝日うち仰ぐ時、白き胡蝶二つ、ひら〳〵と舞ひ來りぬ。

電車中觀察

東京　石川薫子

池水溶々として鏡の如く、見渡す岡の若葉影暗く、初夏の淸風に水面は小波涼しき赤坂見付より昇つた我れは、漸くあたりの景色に倦きて、車中の人の觀察を初めた、やせて色白き三十許の丸まげの女、福やかな慈姑の取手のはじけた可愛ゆき五つばかりの子、美しき八字髭の若紳士、禿頭りしき漆で固めた樣なハイカラ、高利貸の樣な目の丸るい人の惡る相な人、前額出でしは智者、前頭部高きは慮深く、鼻大なるは情厚しと、今來りし商人ていの男は、全く其れに符合して居た。あはれ世に識者あらば、我れはかくむなしくあらざるをと恨みしならんに、紀の國坂から下婢を連れた束髮の美しき人、車中の視線は一齊に此人に集まつた。年の頃は二十前後、身に鐵納戶の紺格子絹セルの袖長く、絽縮緬無雙羽織、仕立の衿から下駄迄、我れには分らぬ凝つたもの。口元のしまつた、鼻の高い、氣高い、情を含む眼、其の風采のあでやかさ、引力の有る樣な、如何にも見過し難き人で有つた。いかなる人の夫人か、將た令孃か。恐らく車中の人の心も我と同じ思ひならむと、今も尙ほ我が腦裡よりかの美しき人の面影は去りもえやらぬ。

梅雨の頃

和歌山　村田淸子

雨降りて止み、止みて又降る。鴉聲と蛙聲と交々晴雨を爭ふ雨の絕間に出でゝ、深泥を踏みつゝ村を過ぐれば、棘くらき家に人あり

て、梅の實を落しぬ。畑には甘藷を植うる女あり。田は大方植ゑられぬ。燃苗出々、秧禾疎にして、水多く、蛙聲よもに滿つ。田より田に落つ水は、音も濁りて鳴る。まさに梅雨の頃は水聲なり、氣重くして濕やかなり。村より出づる煙の濕うて立ちも上らず、靄となりて這へる、山の藍深く緑重くして、水滴を落さば、色融けて流れん樣なり。山に梟の聲あり。雨はらはらとまた降りいでぬ。

新體詩

文學士　鹽井雨江先生選

天

村の夕べ　　土佐　秋月廣江子

みどり涼しき下かげに、　洩れ來る月を浴びながら、
靜かに獨りたゝすめば、　心すみ行くながめ哉。
墨繪に似たる一村は、　月の光にいや榮えて、
豐かに生ひし稻靑く、　秋の快樂ぞあふれたる。
家毎に上る夕けぶり、　鎭守の杜をかすめつゝ、
折々もるゝさゝやきの、　あゝ長閑なる我が村よ。
思へば、夢か、一年を、　若き希望にわくかれて、
雲のあなたの塵の世を　慕ひし事のはづかしや。
今宵靜にひとり立ちて、　自然の神のみさとしに、
迷ひの雲を拂ひては、　えますには、我れ幸の子と。

（雨評）心も筆も整ひたるをよしとす。

地

逢ひ　　東京　船津康子

風和き朝、袴ぬぎて　うなじ洗へる椽近う、
足音小さく、隣り家　の五つの君の來たまへる。
わらはに出でし我が胸の乳を見つめて目を去らず、
何見たまふとほゝ笑めば、「誰れのむ乳？」と稚な問ひ。
「我が子の」とくも答へしが、人や聞きしと面ほてり、
急ぎて衣に乳おへば、奇しくも高き胸の響よ。

（雨評）調は未だなれど、面白き詩情を取り來たれるを愛す。

人

夕顔　　和歌山　植木撫子

柴の折戸を結びても　いともあはれにすむ賤の
ふせやの軒も、さみだれに　くちて、なかばゝ傾きつ。

くづれしまゝの袖がきに、はひまつはるゝ夕顔の、
白露白き花の上に、弓はり月の光さへ、
そへてあはれのいやまさる、庭のながめの今宵哉。

（雨評）やさしげなるを愛す。

我身　日向　岸上はる子

身に錦繍をまとはずば、二度と此の地をふむまじと、
かたく定めて旅立ちし　人の子、あはれ、今いづこ、
希望の光末遠く、理想のほのほ高けれど、
よせては返す運命の　浪にもまれてやるせなく、
只すご／＼と古里の　母がみもとに歸りしか。
それより後は、朝夕に　只煩悶の子となりて、
やつれ果にし我が面を、をかしと人に見しならむ。
されども、されど、母君が、心盡しの慰めに、
米とぎ水汲む其のわざの　樂しと思ふ身となりぬ。
世の浪風をよそにする、我家のうちに、我れはかく
老いし母君慰めて、暮らさむこはに樂しくて。

（雨評）其の情の可憐なるものあるをよしとす。

白薔薇　下野　井上倘子

別れに泣きし夜の袖の　涙をつゆか、かろう吐く
息は、くすしき香りあり。優しすがたのしほらしや。

緣ぎぬきて、野のあした、ゆめみる如くしら薔薇、
世のうさしらぬ少女子の　清きこゝろの姿かも。
はなの幸皆しめたりと　ほこり姿のしら薔薇、
したひてめぐる小さき蝶、香りにゑひて去りわへず。
つきぬ想のさびしさを、胸に包みてさまよへば、
ゆふ月しろき小川べに、君のひとみと光るなり。

（雨評）詩才は見ゆれど、少しくまとまりのあしきををしむ。

春の曉　新潟　岩本翠浪子

明星山の端に光りて、殘んの月稲荷の松にかゝり、
百鳥しきりに鳴きて、みる／＼月影星の光り
うすらぎ行くと共に、かすみたなびく。
がご負うて來る乙女、もすそかゝげて、何處へ行く。
くしき歌のこゑ彼方に聞え、こなたに來るは馬曳く男子。
兵營の喇叭きこゆるとき、日は輝きぬ。

（雨評）情に詩はあれど、調に詩のなきををしむ。

短夜　常陸　岡田萬子

水うちし庭の面に、ゆら／＼と、枝ゆれて、
月見草咲き初ぬ。何處より、飛びて來し、
ユッカホベット（蛾）花にむつれて。夕月は、笹の葉の
露分けて、今しのぼりつ。里の子が手すさびか、

面白き笛の音や、
端居してたく蚊火に、
田吾作のいくさ談し、
興つきず。今はとて
柴の戸などざす折り、
寢ろなと水鷄は叩く。
まどろめば夢うつゝ、
手枕に聲のころ
ほとゝぎす、明けぬるよ、
有明の月白う、
朝顔の花の上。
短夜をせはしなや、
あはれ、その花と鳥。

夏は來にけり
愛知　不破きみ子

夏は來にけり、うちわたす
山は綠にしげりつゝ、
麓の河も色ふかく、
小田の早苗も青々と、
蛙の聲にぎはしく。
出て友垣訪ぬれば、
はや咲き初むる卯の花の
白きが中に花菖蒲
常夏かしき撫子の
厚き情に日も暮れて、
いざとて歸る道もせは、
草露わけて飛ぶ螢
おひゆく子等が袖がろく。
狩りて歸りて我が庭の
泉のほとり放ちかひ、
小すのひまより眺むれば、
心もすみていと涼し。
折りしも、月は久方の
雲間をもれて清らかに、
聲高く時鳥
鳴く音ぞゆかし、夏のきて。

折にふれて
東京　松下萬里子

朝七時より日暮まで、
馴れぬ仕業に我が夫の
いそしみ給ふ御心に
届かぬ姿の悲しさよ。
針持つ手にも、今頃は
如何に勞働きますらんと、
思へばいとゞいたはしや、
妾ある爲めに、君はしも。

雨後の時鳥
播磨　横田春枝子

五月雨晴れしゆふ月夜、
たもと涼しく風すぎて、
露ちる庭の木のまより、
一聲もらすほとゝぎす、
軒のしのぶに音をとめて、
あとなく入りぬ、雲の峯。

夕顏
同

夕がほの種貰ひ來て、
吾背がまきし背戸の內、
其の下涼み待つ程に、
糸瓜の咲くぞをかしけれ。

友をしのびて
大分　佐藤家子

流れも清きやぶ川の
みぎはに咲けるあやめ草、
共にかざして、思ふどち
遊びし昔ぞしのばるゝ。

友の病
神奈川　鈴木まつ子

ほとゝぎす血になくころを、
かなしくも、友は病になやむなり。
とほきつくしに居る友の
なやめるかほの、ありありと
みゆる思ひのせつなさよ。
くすしにあらぬ身はたゞに、
こゝろばかりを苦しめて、
せめてとゞぶらふ文さへに、
淚に亂るゝかひなさよ。

短歌

文學博士　本居豊穎先生選

天

時鳥　東京　豊田とよ子

今宵だに一聲もらせ時鳥
松の葉ごしのありあけの月

地

若竹　　常陸　岡田萬子

親に似て心も直に生ひ立ちぬ
庭の影になびく若竹

人

梅雨　　伊豫　巽　秀子

くもまもる月かけみえし芭蕉葉に
またも音してさみだれのふる

佳調

首夏旅　　甲府　名取正代子

汗あゆるほとにもあらて荷もかろき
なつのはしめそ旅はうれしき

雨後夏月　　東京　島村作子

雨すぎし若葉のこずゑ露見えて
もるかげすゞしみしか夜の月

納涼　　神戸　足立あさ子

涼しさや夏しら糸の瀧津瀬の
水の底にや秋はすむらん

扇　　廣島　鈴森きみ子

松原をわかれてのちも涼しさの
風うとからぬ我あふぎかな

古戦場虫　　埼玉　櫟田やな子

あと〻へは引間の原の草村に
夜はくつわの虫の音ぞする

織工女　　宮城　大槻庭子

織るはたのあやに心もみだれがみいかにくるしくひをおくるらん

折にふれて　　日向　亜水薫子

そよ〳〵と渡る涼風妹がピアノ奏づる髮の毛吹くよ

朝顔　　宮城　末永京恵子

千代ふべき竹なちからによりそへばつゆな命のあさがほのはな

折にふれて　　宮城　大槻初音子

軒ならぶとなりながらもなつ木立しげればとほきものおもひ哉

花火　　埼玉　横田須磨子

打あぐる空にとぶ火の數見えて雲に横ぎる音ぞはげしき

野菊に猟の歯かけるかたに　　埼玉　横田秋子

うづら鳴く野べの秋風身にしめて花の香寒し千代のむら菊

梅雨　　東京　中村千代子

なきな干に語らひくさもつきはてゝそらをながむる梅雨の頃

螢　山形　伊藤のぶ子
晴の夜に消えつ光りつ螢火のかけおもしろし玉川の里

折にふれて　上野　木暮千代子
螢の來てとまる花かけ乳母の脊にねむれる乳子の夢ものとけし

小野小町　山口　村上操子
まさかりの秋野の小野の女郎花世にぬけ出し匂ひなりけり

小野小町　松山　上原のぶ子
さく花のそればかりかは世はなへてながめせしまの色香なりけり

深山春　神戸　足立ゑい子
世の外の春のあはれは奥ふかき山さくら戸のあけぼのゝ空

時鳥　神戸　足立あさ子
小夜ふけて月と我との中空をおとつれて行くほとゝぎすかな

夏月　神奈川　吉田はな子
夏の夜にひとりさひしくさまよへはかなたの山に月かけのさす

撲螢　三重　木上秋子
をさな子がきそふ團扇をのがれ來てうはがたもとに入るほたる哉

新婚を祝して　東京　服部彌惠子
鶴かめのよはひをあまた重ぬとも盡ぬをけふの祝ひともがな

閑庭青葉　播磨　横田春枝子
おのづから憂世をよそのわひすまひ庭のこたちに夏をわすれぬ

土佐　秋月廣江子
うつし世に満足のゑみ殘し置きて天にかへりし沖のしま守

撫子　東京　牧君子
よへふりし雨の名殘かおく露に床しく香ふ撫子の花

夏朝　韓國　原野みき子
手をつなき青葉の雨の朝晴を小女等歌ひ學ひやに行く

黑髪　橫濱　吉田深芳子
ふとあけてむかし乙女の黑髪に世をすて衣の袖ぬらしける

朝顔　日向　岸上はる子
あさがほの花咲き初しあしたより兒等もいそきて起きいつるなり

夕立　兵庫　田淵みき子
かとのへにほせる衣をぬらさしとさわくもおかし夕立の雨

折にふれて　東京　中村千代子
たゆみなく進む時計をみるにつけいかて月日をあたにすこさん

鏡　東京　松下爲里子
髪結ひて若世給ひし母の面影の今も鏡に殘りけるかな

東京　船津康子
雨の滌離いちりの君すれてすかしあくみし母の若さよ

橘　千葉　田淵ふじ子
鈴の音も風にかをれり軒端なる花たちはなの咲きそめしより

名所夕立　東京　原三幸子
見るかうちにやなか坂本ふりすきて雲の上野にかゝる夕立

辨慶　東京　河合清子
もゝ人のゆるさぬ關をこえにしは君をうちつゝるちからなりけむ

小督琴をひくかた　東京　吉岡[illegible]子
琴のねの高くきこえて雲ゐよりつきけのこまやむかへにけむ

薔薇　千葉　海上孝子
うばら垣雲かとまかふよそほひに賤か伏屋もにほひぬるかな

手向花　上野　吉田しづ子
香の煙ゆろくめぐりて亡人の心にいたる白牡丹かな

郭公　下野　井上なほ子
奥津城に回向をはりておん僧とわかれてきゝぬ山ほとゝきす

待郭公　橫濱　鈴木まつ子
あまりにもまちにしものか郭公ゆめにきくまてなりにけるかな

螢　東京　吉村まさ子
なつされはみとりもふかき木のもとを玉とみたれて螢とふなり

折にふれて　伯耆　錦織幸子

いそがしくつはめとふなり川端の夕立晴れてやなきみたれて　三　重　米　奥　と　め　子

梅花入園

梅の花たなろと見しはゆめなりきわが手枕に香は殘りつゝ　伯　耆　錦　織　幸　子

皇太子殿下の行啓をかしこみて

みくろまのわたちのみあと三千歳のこのやまかけにひかり輝く　奈　良　栗　山　俊　子

川そひはすゝしかろらむかけわたすなすにも風のなみたちにけり　常　陸　岡　田　萬　子

都時鳥

ほとゝきす都の空に名のろなり谷のうつ木も花やちりけむ　甲　府　風　間　千　代　子

三島の富士をよめる

ふもとより富士の高ねを仰き見れどいよ〳〵高しうきし神山　越　後　水野　やすゑ子

歸　省

歸りきて姉が御琴をおとなへはこみちすたれてれむの花ちろ　三　重　大　西　く　す　子

折にふれて

月膝長持五つ燭五つ四條に登ろ芙蓉の君や　東　京　花　家　い　せ　子

漁夫想家

荒波に心は千々にくたくれと待つ子思はぬひまなかりけり　千　葉　中　川　千　鶴　子

父君の還歴をことほきまつりて

むそとせにあまろひとつもふもとにて千歳の坂もやすくこえませ　和歌山　植　木　雛　子

夕　立

遠ち方は夕立するか我が里はゐなのさゝ原かせさわくなり　長　野　上　條　つ　れ　子

蟬時雨

蓑笠を着けて雨乞ふ人つどふ鎭守の森の蟬時雨かな　横須賀　柏　原　美　奈　子

夏の日ざかり

朝夕は軒のしのふにおとつれて日中を風のいつこ吹くらむ　福　井　岩　橋　花　子

常磐御前

なてしこの咲きいてん世をたのみつゝ仇し庭面にはるをそへしか　愛　知　山　根　し　げ　子

垣撫子

世にあらはわか撫子もかゝらんとかきれの花の露にぬれつゝ

梅　雨

梅雨にのきもいふせくむすほれて人の心もとけぬなりけり　松　山　木　村　ひ　ろ　子

谷餘花

谷かけにひとむら雲のかゝれろは春を殘せろさくらなりけり　松　山　田　村　多　豆　子

蛙

あやめ草色に心の底見えて淺き淸水に蛙なくなり　磐　城　木　幡　き　よ　子

夏の月

お月樣いくつととへろをさな子に笑みてそ答ふ夏の夜の月　埼　玉　安　部　と　み　子

想　戀

三度まて打たんとすれとしかすかに子故に迷ふ親心かな　東　京　木　下　元　子

子を思ふ親の心になにことも言はぬは言ふにいやまさりけり　東　京　渡　部　芳　子

◎和歌兼題

八　月　初秋露　常磐御前

九　月　秋夕　行路海

十　月　海上雁　女子讀書

十一月　水鳥　石讒婦

十二月　落葉　歲暮

俳句

内藤鳴雪先生選

天

新緑や風に吹かるゝ小提灯　横須賀　高橋つね子

地

懐かしき故郷の夢や桃の花　金澤　國井芳惠子

人

押入れに隠れん坊や五月雨　相模　吉岡登志子

○

提げてゆ、苗の架やあぜの人　播磨　横田春枝子

○

夕顔に蜘の巣つくる夕かな　東京　本橋つや子

○

衣更て月の磯邊をありきけり　相模　藤野雲子

○

時鳥月なき夜の智恩院　東京　岩瀬ゆき子

調　編

○

涼しさや月を明りに馬洗ふ　東京　高野みち子

○

草暗く螢飛ふなり小督塚　同　中川ゑい子

○

藤散て雀一羽の嵐かな　同　花蝶女史

○

音立て池の鯉とぶ若葉かな　大坂　船津かつ子

○

木の下に煙草休みや田植人　新潟　岩本芳子

○

夏の夜を時俗と語り明しけり　東京　松下萬里子

○

草紙干す窓に蟬なく眞晝哉　同　土岐ゆき子

○

風呂の中に冗してひく清水かな　相模　柏原みな子

○

涼しさや船より船へ渡る風　神奈川　山下照子

○

草庵に訪れ顔の螢かな　横須賀　渡邊久子

○

青梅や庇に落つる夜の音　東京　橋本千代子

○

温泉の宿の蚊帳の裾這ふ螢かな　同　中川惠子

○

草夏の中や小萩のはしり咲　神戸　足立ゑい子

○

夕顔の露となりけり根なし雨　同　足立あさ子

○

常陸　岡田萬子

旅人の鞋に雨の螢哉　三重　大西くすよ子

○涼しさや月に枕のかゞり船　岩代　岸野常子

○雨に來る螢還ふなり青簾　東京　川合りく子

○波の上にこかれたゝよふ磯の月　紀伊　早川常子

○衣更へて唯ぶら〳〵と歩みけり　兵庫　梶原京子

○青梅の落つゝるや杜の石疊　長野　上條つれ子

○炎天の水にとゞかぬ釣瓶哉　越後　水野やす子

○みやしろの樫木高し蟬の聲　磐城　木幡きよ子

○夕立や軒端に餘るむぎ俵　東京　井上こま子

○蜜蜂の聲やいばらの散る夕べ　松山　上原のぶ子

○物足らぬ心や今朝の衣かへ　東京　花柳子

○傘さして物賣る人や五月雨　東京　服部もと子

○舟に夢ゆられて涼し淀の川　横須賀　藤原すみ子

○跳す巫女が秋や風かをる　東京　彌津梅子

○涼しさの月夜を君と濟つたひ

定價

一册	前金	貳拾錢
三册	前金	五拾七錢
六册	前金	壹圓拾錢
拾貳册	前金	貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

行	五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁	三十二行	金八圓
一頁	六十四行	金拾貳圓
表紙一頁		金拾六圓

（色刷は特に御相談に應ず）

御注文規定

一切前金の事（但郵券代用一割増の事）●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替受取人は東京市京橋區築地二丁目貳拾壹番地國光社と御認ありたし●振込局は東京築地郵便局へ●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十年六月廿八日印刷

明治四十年七月一日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社

右代表者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　橋本忠次郎

印刷人　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助

發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社　國光社（電話新橋二六九三番）（電話新橋特八八番）

◉女學校用教科書

文部省檢定濟

阿多廣介
園田竹熊 先生編纂

●女子補習讀本

菊判和綴美本

正價 上二十五錢 下三十錢 送料 各四錢

本書は高等小學校卒業後更に補習科を修むる女子及び修業年限二ヶ年の高等女學校技藝專修科生の使用に供せん爲め編纂せられたるものにして力めて國定の小學讀本に連絡を求め其材料は家事、家政、女工等を始め實業に關する事項。國家公衆に對する必要なる心得、美文和歌等の趣味を涵養するに足るべきものを撰擇したれば實用的並に文學的興味を兼有せる完全の讀本として學校は勿論家庭に於ても必須のものなり

川村理助先生著

●高等女學校用 生理衛生新教科書

全（文部省檢定濟） 正價 五十錢 送料 六錢

東京府第一高等女學校教諭 市川源三先生著

●高等女學校用 教育學教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

市川源三、利根川與作兩先生共著

●高等女學校用 國史教科書

全二冊（同） 正價 各五十錢 送料 各六錢

川村理助先生著

●高等女學校用 動物學新教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

川村理助先生著

●高等女學校用 植物學新教科書

全（同） 正價 五十錢 送料 六錢

理學博士　坪井正五郎先生講述

人類學講義

總クロース製　菊判
全一冊
正價金壹圓拾錢
送料拾錢

坪井博士が人類學の泰斗たるは普く世人の知る所本書は同先生が極めて平易なる言文一致にて講述せられたるものにして創世紀の人類說、人類一種論と人類多種論諸種族系統探り方、人類の大別小別、日本種族論等あらゆる人類に關する要件を網羅せられたれば歷史及人類を研究する人には勿論普通人士も之れを一讀せば無限の趣味を感ずべき座右必須の良書たるを疑はず

東京高等師範學校教授　文學士　松本孝次郎著

家庭に於ける兒童教育

總クロース
菊版二百頁
定價五拾五錢
郵稅八錢

本書は**兒童教育專攻家**として教育界に名聲隱なき著者が多年研究せられたる**學說**と**實驗**とに基き**實地家庭**に行ひ得らるゝやう極めて**平易且切實**に談話體を以て**兒童教育法**を說述せられたる者にして世にありふれたる家庭教育書類と全く其の**選**を**異**にせり而も何人にも解り易く容易に**育兒**の**妙訣**を了得するを得べしされば世の父母たる人は子女將來の爲**是非熟讀**せざる可らざるものなり

此書は亦**兒童教育**の任にある**學校教師等**には必缺く可らざる**良參考書**なり

重要目次

發行所　東京市京橋區築地二丁目　電話新橋八八、二六九三　株式會社　**國光社**
關西大賣捌　大阪市南本町　**積文社**

女鑑

明治四十年七月一日發行　毎月一回一日發行　第拾七年第七號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可



東京築地株式會社國光社印刷